児玉町文化財調査報告書　第32集

雷電下Ⅲ・南ノ前遺跡

県営ほ場整備事業児玉南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書７

埼玉県児玉町教育委員会

児玉町文化財調査報告書　第32集

雷電下Ⅲ・南ノ前遺跡

（らいでんした・みなみのまえ）

県営ほ場整備事業児玉南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書７

１９９９

埼玉県児玉町教育委員会

序

埼玉県の北西部に位置する児玉町は、数多くの埋蔵文化財が所在する地域として知られています。特に町の北半を占める女堀川に沿った低地部では、県内最古の古墳の一つである鷲山古墳を始め、大集落の後張遺跡や将監塚・古井戸遺跡など著名な遺跡も多く、古墳時代以降の遺跡の数とその密度の高さは県内随一とも言われています。この女堀川の中流域に広がる水田地帯に、大規模な県営ほ場整備事業が計画され、工事に着手したのは昭和60年からで、全対象地域の面工事が完了するにはその後10年の歳月を要しました。それに伴って、対象地域内に所在する多くの遺跡が現状変更を余儀なくされましたが、それらについては事前に関係機関で協議と調整を行い、やむを得ず工事によって遺跡が破壊される箇所については、発掘調査を実施して記録保存の措置をとってまいりました。

今回報告する雷電下遺跡と南ノ前遺跡は、県営ほ場整備事業児玉南部地区の最後の工区となった平成６年度工区の工事に伴って、児玉町教育委員会が発掘調査を実施したものです。雷電下遺跡は、すでに昭和49年に関越自動車道建設に伴って埼玉県が実施した第１次調査、昭和62年に県営ほ場整備事業児玉南部地区に伴って児玉町が実施した第２次調査が行われており、今回の調査は本遺跡の第３次調査に当たります。本遺跡は、これらの調査により古墳時代から中世の室町時代にわたって営まれた集落であることが明らかになっていますが、今回の調査で新たに平安時代前期には比較的規模の大きな庇付の総柱建物が検出され、平安時代中期には羽口や鉄滓の出土から鍛治関連の施設の存在が予想されるなど、本遺跡の性格を考える上で多くの注目すべき貴重な成果を上げることができました。

これも一重に児玉南部土地改良区をはじめとする地元の方々や埼玉県本庄土地改良事務所をはじめとする関係機関から受けた様々なご協力やご教示の賜であり、ここに改めて厚くお礼申し上げ、感謝の意を表します。

最後に、本書が学術的な資料としてはもとより、我々の住む郷土の歴史や遺跡に対する理解を深めるために、様々な教育活動や生涯学習の場に広く活用いただければ幸甚の至りに存じます。

平成11年３月１日

児玉町教育委員会
教育長　冨　丘　文　雄

例　　言

1．　本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字下浅見字雷電下・中ノ畑・東畑に所在する雷電下遺跡（D・E・F・G地点）と、同じく大字下浅見字南ノ前に所在する南ノ前遺跡の発掘調査報告書である。

2．　雷電下遺跡については、すでに1979年に埼玉県教育委員会によりA地点の報告書が、1990年に児玉町教育委員会によりB地点とC地点の報告書が刊行されている。そのため、本書は本遺跡に関する3冊目の報告書になるため、「雷電下Ⅲ」とした。

3．　発掘調査は、県営ほ場整備事業(児玉南部地区)の工事に伴う事前の記録保存を目的として、平成6年度に児玉町教育委員会が実施し、その調査担当には恋河内昭彦があたった。

4．　本書刊行に要した経費は、国庫補助金・県費補助金・町費及び県費委託金である。

5．　本書の執筆及び編集は、恋河内が行った。

6．　本書の写真は、遺構を恋河内が、遺物については増田久江と中里広子の協力を得た。

7．　雷電下遺跡D～G地点の遺構番号については、現地調査では各地点ごとに便宜的に付けていたが、本書刊行に際してA～C地点の続き番号に変更した(新旧遺構番号対比表参照)。

8．　出土遺物観察表に示した記号は、以下のとおりである。
A－法量、B－成形、C－整形・調整手法、D－胎土、E－色調、F－残存度、G－出土層位、H－備考、

9．　本書中で使用した地図は、国土地理院発行の2万5千分の1、児玉町役場発行の1万分の1、児玉町教育委員会の児玉条里現況測量図(千分の1)である。

10．　現地発掘調査から本書刊行にあたって、下記の方々や機関より様々なご教示やご協力を賜った。記して感謝いたします。

赤熊浩一、浅野晴樹、荒川正夫、伊丹　徹、岩瀬　譲、梅沢太久夫、太田博之、岡本幸男、金子彰男、小林康幸、駒宮史朗、坂本和俊、篠崎　潔、須田英一、外尾常人、田村　誠、富田和夫、中沢良一、中村倉司、長瀧歳康、野口泰宣、原　廣志、平田重之、福田　誠、増田一裕、丸山　修、矢内　勲、

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、埼玉県本庄土地改良事務所、児玉南部土地改良区、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、早稲田大学本庄校地文化財調査室

目　　次

序

例　言

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の歴史的環境 …… 3

第Ⅲ章　雷電下遺跡（D～G地点）の発掘調査 …… 7
　第1節　遺跡の概要 …… 7
　第2節　検出された遺構と遺物 …… 15
　　1．住　居　跡 …… 15
　　2．掘立柱建物跡 …… 37
　　3．井　戸　跡 …… 48
　　4．土　　壙 …… 55
　　5．円形周溝遺構 …… 75
　　6．溝　　跡 …… 76
　　7．埋没河川跡 …… 85
　　8．埋　没　谷 …… 96
　　9．その他の出土遺物 …… 100

第Ⅳ章　南ノ前遺跡の発掘調査 …… 105
　第1節　遺跡の概要 …… 105
　第2節　検出された遺構と遺物 …… 107
　　1．掘立柱建物跡 …… 107
　　2．井　戸　跡 …… 108
　　3．土　　壙 …… 109
　　4．溝　　跡 …… 115
　　5．その他の出土遺物 …… 122

第Ⅴ章　ま　と　め　―雷電下遺跡の古代集落の変遷― …… 123

参考文献 …… 128

《写真図版》

雷電下遺跡D～G地点新旧遺構番号対比表

＜掘立柱建物跡＞

新番号	旧番号	新番号	旧番号
第7号掘立柱建物跡	第1号掘立柱建物跡	第11号掘立柱建物跡	第5号掘立柱建物跡
第8号掘立柱建物跡	第2号掘立柱建物跡	第12号掘立柱建物跡	第6号掘立柱建物跡
第9号掘立柱建物跡	第3号掘立柱建物跡	第13号掘立柱建物跡	第7号掘立柱建物跡
第10号掘立柱建物跡	第4号掘立柱建物跡	第14号掘立柱建物跡	第8号掘立柱建物跡

＜土　　壙＞

新番号	旧番号	新番号	旧番号
第31号土壙	第1号土壙	第51号土壙	第21号土壙
第32号土壙	第2号土壙	第52号土壙	第22号土壙
第33号土壙	第3号土壙	第53号土壙	第23号土壙
第34号土壙	第4号土壙	第54号土壙	第24号土壙
第35号土壙	第5号土壙	第55号土壙	第25号土壙
第36号土壙	第6号土壙	第56号土壙	第26号土壙
第37号土壙	第7号土壙	第57号土壙	第27号土壙
第38号土壙	第8号土壙	第58号土壙	第28号土壙
第39号土壙	第9号土壙	第59号土壙	第29号土壙
第40号土壙	第10号土壙	第60号土壙	第30号土壙
第41号土壙	第11号土壙	第61号土壙	第31号土壙
第42号土壙	第12号土壙	第62号土壙	第32号土壙
第43号土壙	第13号土壙	第63号土壙	第33号土壙
第44号土壙	第14号土壙	第64号土壙	第34号土壙
第45号土壙	第15号土壙	第65号土壙	第35号土壙
第46号土壙	第16号土壙	第66号土壙	第36号土壙
第47号土壙	第17号土壙	第67号土壙	第37号土壙
第48号土壙	第18号土壙	第68号土壙	第38号土壙
第49号土壙	第19号土壙	第69号土壙	第39号土壙
第50号土壙	第20号土壙	第70号土壙	第40号土壙

＜溝　　跡＞

新番号	旧番号	新番号	旧番号
第6号溝跡	第D1号溝跡	第13号溝跡	第EⅢ3号溝跡
第7号溝跡	第D3号溝跡	第14号溝跡	第FⅠ7号溝跡
第8号溝跡	第EⅠ6号溝跡	第15号溝跡	第FⅡ8号溝跡
第9号溝跡	第EⅠ7号溝跡	第16号溝跡	第FⅡ11号溝跡
第10号溝跡	第EⅠ8号溝跡	第17号溝跡	第FⅡ9号溝跡
第11号溝跡	第EⅡ4号溝跡	第18号溝跡	第G1号溝跡
第12号溝跡	第EⅢ4号溝跡	第19号溝跡	第G2号溝跡

＜そ　の　他＞

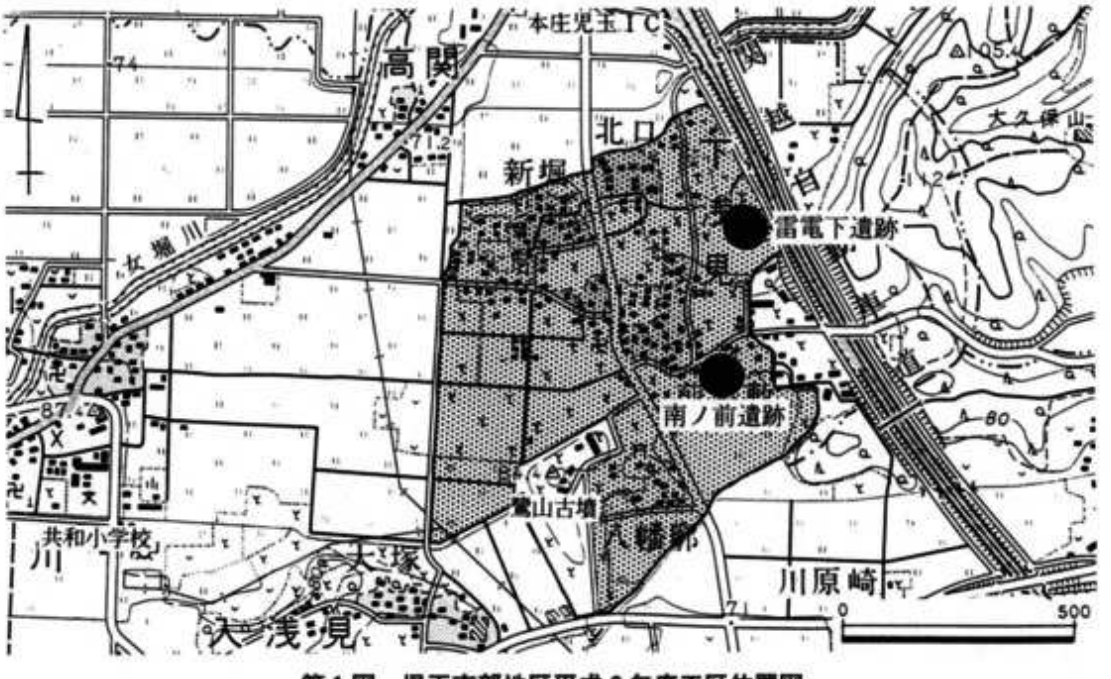
新番号	旧番号	新番号	旧番号
埋没河川	D大溝	北側埋没谷	第D2号溝跡

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯

県営ほ場整備事業児玉南部地区の平成６年度工区は、大久保山(浅見山)の西側斜面下に広がる比較的広い低台地にあたり、関越自動車道の西側から現下浅見の集落周辺の約30haを対象にしている。この工区内の南側と西側の耕地については、すでに昭和40年代に共和南部土地改良事業が実施されているため、今回のほ場整備に伴う面工事は、主に関越自動車道に隣接した東側の約10haである。

この平成６年度工区の面工事対象区域内には、雷電下遺跡(No54-002)と南ノ前遺跡(No54-005)が所在していた。そのため、これらの遺跡の取り扱いについて、担当機関の埼玉県本庄土地改良事務所と児玉町教育委員会の間で協議を重ね、それをもとに平成５年12月20日に県文化財保護課・県耕地課・埼玉県本庄土地改良事務所・児玉町教育委員会の四者による調整会議が行われた。その結果、工事によってやむを得ず遺跡が破壊される部分については、事前に発掘調査を実施して記録保存の措置をとることになった。

発掘調査に関する届出は、埼玉県本庄土地改良事務所より平成６年７月11日付け本地第510号による「埋蔵文化財発掘の通知」が、児玉町教育委員会より平成６年７月18日付け児教社第116-1号(雷電下遺跡)と第117-1号(南ノ前遺跡)による「埋蔵文化財発掘調査の通知」が、それぞれ埼玉県教育委員会を経て文化庁に提出された。なお、文化庁からは、教文第１-100号(雷電下遺跡)・教文第１-101号(南ノ前遺跡)により、発掘調査通知の受理について、埼玉県教育委員会を通じて児玉町教育委員会に通知があり、埼玉県教育委員会からは、平成６年９月５日付けの教文第３-294号(雷電下遺跡)・教文第３-295号(南ノ前遺跡)による「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の指示が、埼玉県本庄土地改良事務所に対して通知されている。



第１図　児玉南部地区平成６年度工区位置図

第2図　女堀川中流域周辺の古代遺跡

第Ⅱ章　遺跡の歴史的環境

本遺跡が所在する女堀川の中流域は、古くは武蔵国と上野国の国境で、現在は埼玉県と群馬県の県境である神流川によって形成された神流川扇状地の東端部にあたる。この女堀川に沿ってその両岸に帯状に広がる沖積低地を中心にして、その西側には上武山地から八王子－高崎構造線の断層により分離された児玉丘陵の下に広がる広大な本庄台地があり、東側には児玉丘陵から分離独立した大久保山(112m)・鷺山(84m)・生野山(139m)の３つの残丘が北東方向に向かって列状に並んでいる。

本遺跡は、東側の残丘下に広がる比較的広い低台地上に立地しているが、女堀川中流域の遺跡は、残丘上やその周辺の狭い低台地はもとより、沖積低地に面する西側の本庄台地の縁辺部や、低地内の自然堤防と微高地上を主体に立地している。また、低地内の水田部には、一町四方の方格地割りが連続する条里形地割り(児玉条里)がほぼ全域に広がっている。

先土器時代の遺跡は、南側の丘陵部では層位的に確認された遺跡もあるが、低地部の中流域周辺では、現在まで層位的に確認された遺跡はない。しかしながら、西側の本庄台地縁辺部に位置する将監塚遺跡(石塚1986)・古井戸遺跡(宮井1989)・塚畠遺跡(増田1992)や、東側の大久保山残丘上の大久保山遺跡(荒川他1980)・宥勝寺北裏遺跡(浅野1980)と、生野山残丘下の低台地上の城の内遺跡(鈴木1981)では、ナイフ形石器・削器・石核・剥片などの遺物が少量出土しており、今後先土器時代の遺跡が低地部の本庄台地や残丘上でも検出される可能性があろう。

縄文時代の遺跡は、時期によって立地傾向に差異が見られるが、低地部では概して中期以外の時期の遺跡は比較的少ない。草創期は、遺構の検出された遺跡はないが、本庄台地上の将監塚遺跡・今井条里遺跡(岩田1998)などで尖頭器が、大久保山残丘上の大久保山Ａ遺跡(本庄市1976)や宥勝寺北裏遺跡(本庄市1976、浅野1980)などで、爪形文土器や多縄文系土器が数片出土している。早期は、小山川右岸の自然堤防上に立地する村後遺跡(細田1984)で、条痕文系土器の破片を出土した土壙が１基検出されているが、女堀川中流域では残丘上やその周辺の低台地上の遺跡が主体で、大久保山Ａ遺跡・宥勝寺北裏遺跡・前山２号墳(小久保1978)・城の内遺跡(鈴木1981、恋河内1997)から土器片が少量出土している。前期は、上流域の山地や丘陵部では小規模な集落が増加するのに比べると、低地部の中流域では該期の遺跡がかなり希薄で、大久保山遺跡・塚本山古墳群(増田1977)・将監塚東遺跡(鈴木1997)・深町遺跡(鈴木1981)・城の内遺跡・今井川越田遺跡(瀧瀬1997)などで、黒浜式～諸磯ｃ式の土器片が少量出土している程度である。中期は、五領ケ台式や阿玉台式は、塚本山古墳群や古川端遺跡(小久保1978)で土器片が少量出土しているだけであるが、勝坂式終末段階になると本庄台地縁辺部の至近距離に位置する将監塚遺跡・古井戸遺跡・新宮遺跡(恋河内1995)などで、小規模な集落が形成されるようになる。この３遺跡は、その後加曽利Ｅ式期になってそれぞれが大規模な環状集落に発展し、中期後半における当地方の中心的地域を形成する。これらの大規模集落群は、いずれも加曽利ＥⅢ式～ＥⅣ式の間に規模を縮小しながら解体し、加曽利ＥⅢ式期には周辺の低地内に、中下田遺跡(鈴木1991)・平塚遺跡(鈴木1998)・石橋遺跡(恋河内1995)・前田遺跡(増田1989)など、小規模集落が出現する。後・晩期は、中期に比べると遺跡数が少なく再び希薄な状況となる。女池遺跡(1995～1997年調査)では堀ノ内Ⅱ式期の住居跡が３軒、藤塚遺跡(鈴木1997)では晩期前半の可能性

がある住居跡が1軒、南街道遺跡では称名寺式期の土壙が1基検出されており、いずれも小規模な遺跡と考えられるものである。この他では、塚本山古墳群・阿知越遺跡・柿島遺跡(鈴木1998)・向田A遺跡(恋河内1998)・村後遺跡・雌濠遺跡(本庄市1986)・古川端遺跡などで、土器片が少量出土している。

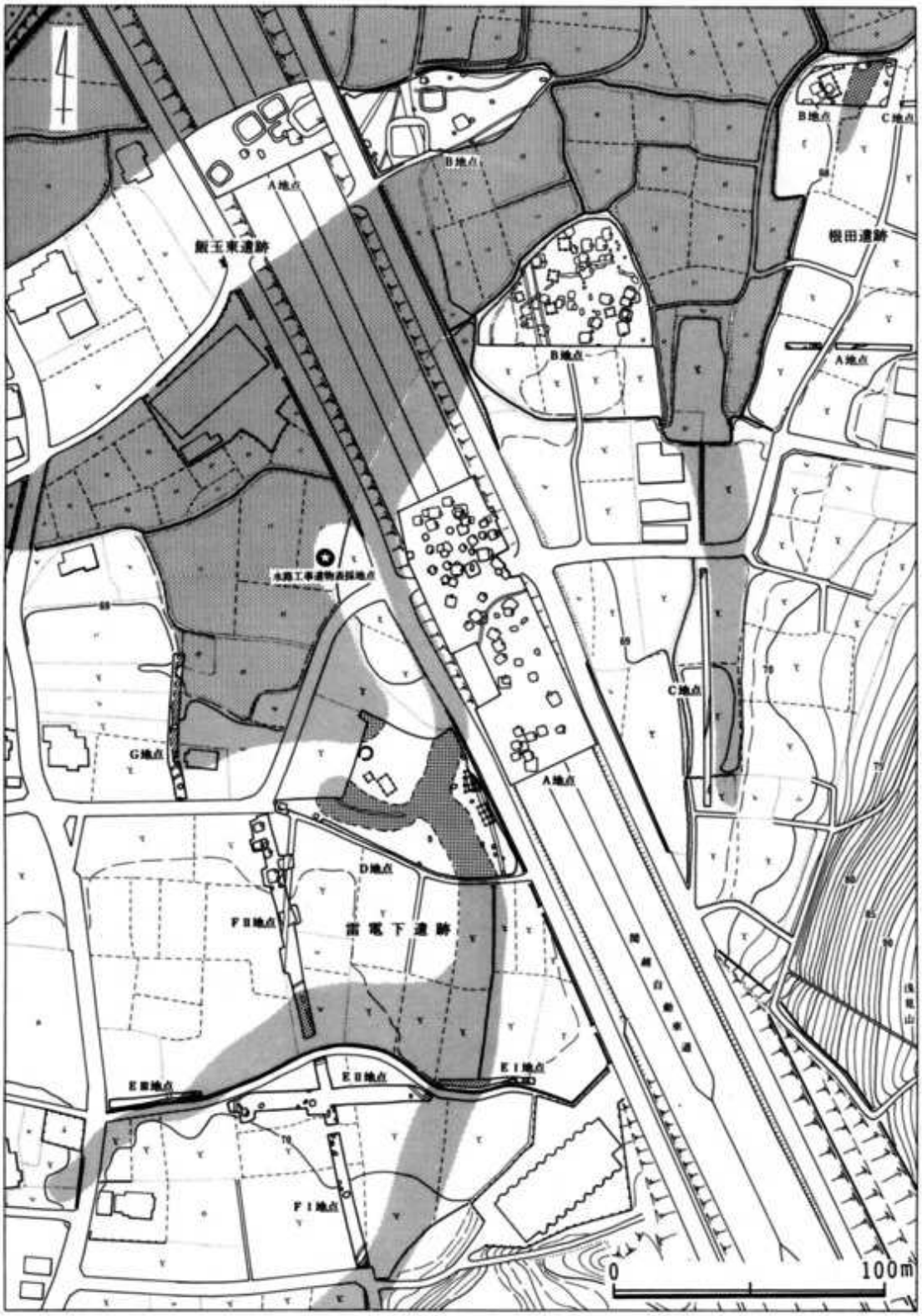
弥生時代の遺跡は、当地方では丘陵部に立地するものが主体で、女堀川流域の低地内では概して希薄な状況である。中期までの遺跡は、残丘上の大久保山遺跡(本庄市1986)で土壙群が、本庄台地上の夏目西遺跡や低地内の今井条里遺跡(岩田1998)で土壙が検出されているだけである。低地内への集落の進出は不明確であるが、小山川沿いの自然堤防上に立地する村後遺跡に集落が形成されていることや、今井条里遺跡で複数の石鏃が出土していることからすると、中期中葉段階には低地内での小規模な地点的開発が行われていたことが伺える。後期は、後半～終末段階になって残丘上の大久保山遺跡(小澤1996)や生野山遺跡(埼玉県1982)に吉ケ谷式系の集落が、大久保山残丘西側斜面下の低台地上の飯玉東遺跡(駒宮1979、恋河内1995)や山根遺跡(増田1990)に樽式系の集落が形成される。これらの集落は、いずれも数棟の住居からなる単一時期の小規模な集落と推測されることや、沖積低地内において該期に水路等を掘削して積極的に開発していたような痕跡もまったく認められないことから、残丘内の谷や台地内の開析谷を対象とした小規模な谷田の開発を主な基盤にしていたものと考えられる(恋河内1992)。

古墳時代の遺跡は、前時代までの状況に比べると、その数は非常に多くなる。特に低地内への集落の進出が顕著になり、各時期にわたって水路等の溝の掘削も見られることから、古墳時代になって女堀川沖積低地内の本格的な開発が始まったと言ってよい。女堀川沖積低地内へは、日延遺跡(恋河内1999)・浅見境北遺跡(恋河内1997)・川越田遺跡(富田・赤熊1985、恋河内1993)などのように、在地化した東海西部系とともに畿内系や北陸系の外来系土器をもつ集落が、現状では前期の中頃から後半になって進出する。これらの集落は、出現当初はいずれも小規模な集落であったと推測されるが、単発的ではなく、その後もある程度継続的に集落が営まれるようである。そして、終末段階には川越田遺跡から発展したと思われる大規模集落の後張遺跡(立石1982・1983)を中心にして、中流域のほぼ全域に小規模な集落が拡散する。中期は、これらの前期集落の進展を基盤にして、低地内やその周辺に集落がさらに展開し、その様相は後期においても継続する。特に中期では、当地方において布留式(新段階)甕を出土した、二本松遺跡(長谷川1983)・夏目遺跡(長谷川1985)・夏目西遺跡・雌濠遺跡に代表される西富田遺跡群が、本庄台地上からその縁辺部の広範囲に近接して集落群を構成し、低地内の伝統的な大規模集落とは別に、新しく核的地域を形成することは注目される。また当地域では、中期の前半段階には住居にカマドをもつものが出現し、後半段階にはほとんどの集落の住居に普及している。このように古墳時代には、女堀川流域の中でも中流域が集落密度の点でも中心的な地域となり、首長墓級の古墳も中流域に集中し、前期には全長60mの前方後方墳の鷺山古墳(菅谷1984、坂本他1986)が、中期には直径60mの県北部最大級の円墳で、格子目叩きの埴輪をもつ金鑽神社古墳(坂本他1986)・生野山将軍塚古墳(柳田1964)・公卿塚古墳(坂本他1986、太田1991)の3古墳が、鷺山や生野山の残丘上に築造されている。また、後期には同じく残丘上に全長60m級の前方後円墳である生野山銚子塚古墳(菅谷1984)が中流域の低地を見下ろすように築造されるが、その後これらの残丘上には生野山古墳群(菅谷他1973)や塚本山古墳群の大規模な群集墳が形成される。

後期鬼高式の須恵器模倣坏に代わって、内屈口縁坏が主体となる７世紀中頃～後半になると、下田遺跡(柿沼1979)や東牧西分遺跡(恋河内1995)など低地内に立地する集落も一部に見られるが、当地域の低地内のほとんどの集落は廃絶され、西側の本庄台地縁辺部や東側の残丘斜面下の低台地上に移動する。このような当地域における集落の大規模な再編成は、律令国家体制の形成期における地方組織の編成過程と関係するものと思われ、恐らくこの段階から８世紀の前半頃には低地内の水田部に条里形地割りが施工されたものと推測される。これらの集落は、奈良時代の８世紀から平安時代の９世紀にかけて、低地を取り囲むようにさらに周辺部に拡散し、特に本庄台地縁辺部では本庄市西富田(西富田遺跡群)から神川町八日市(反り町遺跡)にかけて、連綿と集落群が続くような広大な居住域を形成する。９世紀後半になると、これらの本庄台地縁辺部の集落群は規模を縮小しながら衰退し始め、10世紀にかけて低地内の自然堤防や微高地上に小規模な集落が再び形成されるようになる。これに対して、東側の残丘周辺の集落は、本遺跡のように10世紀以降まで継続的に営まれるものも多く、居住域としては伝統的に比較的安定した場所であったことが伺える。

女堀川中流域周辺の古代遺跡

No	遺跡名	所在地	備考・参考文献
1	雷電下遺跡	児玉町	駒宮1979、恋河内1990、本報告。
2	南ノ前遺跡	〃	本報告。
3	天神裏地・中畑遺跡	〃	児玉町が1996年調査。
4	後張遺跡	〃	立石1982・1983。
5	根田遺跡	〃	恋河内1990。
6	東牧西分遺跡	〃	恋河内1995。
7	鷺山南遺跡	〃	児玉町が1983年調査。
8	新屋敷遺跡	〃	児玉町が1989年調査。
9	向田Ａ遺跡	〃	恋河内1998。
10	蛭川坊田遺跡	〃	児玉町遺跡調査会が1990年調査。
11	南街道遺跡	〃	恋河内1996。
12	生野山割山遺跡	〃	児玉町遺跡調査会が1990年調査。
13	阿知越遺跡	〃	鈴木1983・1984。
14	御林下遺跡	〃	駒宮1977、利根川1998。
15	柿島遺跡	〃	徳山1995。
16	藤塚遺跡	〃	徳山1996。
17	将監塚・古井戸遺跡	本庄・児玉	井上1986、赤熊1989。
18	南共和遺跡	児玉町	恋河内1995。
19	坊田遺跡	〃	鈴木1991。
20	新宮遺跡	〃	恋河内1995。
21	上真下東遺跡	〃	児玉町が1987年に確認調査。
22	辻ノ内遺跡	〃	鈴木1991。
23	樋越遺跡	〃	恋河内1995。
24	金佐奈遺跡	〃	徳山1997・1998。
25	真下境東遺跡	〃	鈴木1989。
26	真下境西遺跡	神川町	篠崎1995。
27	反り町遺跡	〃	篠崎1995。
28	八荒神南遺跡	〃	篠崎1995。
29	息栽原・桧下遺跡	神川・上里	篠崎1990・1991・1992。
30	立野南遺跡	上里町	富田・赤熊1985。
31	八幡太神南遺跡	〃	富田・赤熊1985。
32	熊野太神南遺跡	〃	富田・赤熊1985。
33	今井遺跡群G地点	本庄市	富田・赤熊1985。
34	今井遺跡群F地点	〃	富田・赤熊1985。
35	今井遺跡群D地点	〃	富田・赤熊1985。
36	今井遺跡群C地点	〃	富田・赤熊1985。
37	今井遺跡群B地点	〃	富田・赤熊1985。
38	北廓遺跡	〃	富田・赤熊1985。
39	往来北遺跡	上里町	丸山1991。
40	前田甲遺跡	本庄市	増田1992・1995。
41	今井川越田遺跡	〃	磯崎1995、伴瀬1996、瀧瀬1997。
42	地神・塔頭遺跡	〃	岩瀬1998。
43	久城前遺跡	〃	駒宮1978、増田1989・1990。
44	諏訪遺跡	〃	柿沼1979、増田1989・1992。
45	社具路遺跡	〃	長谷川1987、増田1996。
46	山根遺跡	〃	増田1990。
47	観音塚遺跡	〃	増田1987。
48	下田遺跡	〃	柿沼1979、増田1987。
49	元富遺跡	〃	増田1987。
50	七色塚遺跡	〃	増田1987。
51	久下東遺跡	〃	増田1985。
52	東谷遺跡	〃	小久保1978。
53	大久保山遺跡	〃	荒川他1980、1993、1995、小澤1996。
54	向田遺跡	美里町	細田1984。
55	村後遺跡	〃	細田1984。
56	宮ケ谷戸遺跡	〃	美里町が1983年調査。



第3図　雷電下遺跡調査位置図

第Ⅲ章　雷電下遺跡(D～G地点)の発掘調査

第1節　遺跡の概要

雷電下遺跡は、児玉町大字下浅見に所在し、標高112mの大久保山(浅見山)残丘の西側斜面下に広がる比較的広い低台地上に立地している。本遺跡の周辺には、小支谷を挟んで北東側に古墳時代から平安時代の集落である根田遺跡(恋河内1990)と山根遺跡(増田1990)が、開析谷を挟んだ北側の半島状の低台地上に古墳時代前期の方形周溝墓群が検出された飯玉東遺跡(駒宮1979)がある。また、西側には中世と古代の溝跡が検出された中畑遺跡(鈴木1988)が、南側には本報告の南ノ前遺跡が近接しており、いずれも本遺跡と密接な関係をもつ遺跡として注目される。

本遺跡が立地するこの低台地は、標高が68m～70mを測り、現状では緩やかであまり起伏のない平坦な地形のように見えるが、周辺の発掘調査では、この台地上から小規模な埋没谷が多く検出され、古くは大久保山残丘の西側斜面下の湧水による開析谷が幾筋も発達して台地を細かく分断し、現在よりも起伏のある複雑な地形を呈していたようである。また、この台地は現在も水田や畑として積極的に利用されており、その耕作による削平が著しく、遺構の遺存状態はほとんどの地点であまり良好とは言えない状況であった。

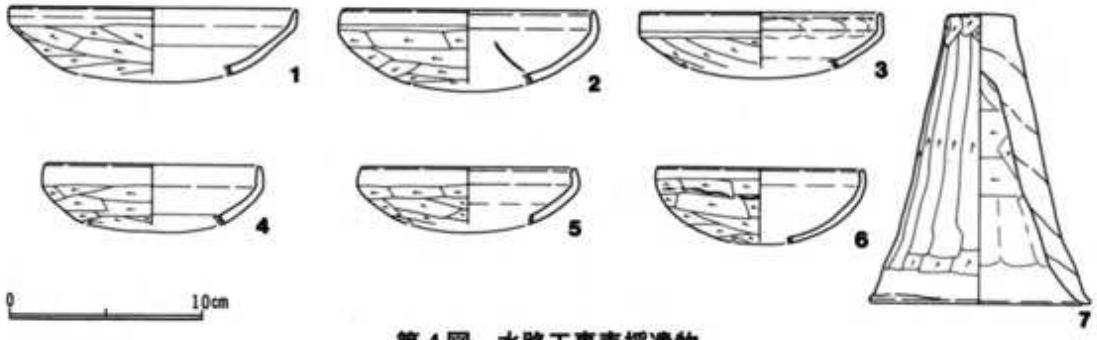
本遺跡は、すでに遺跡の中央付近を縦断する関越自動車道建設に伴うA地点(駒宮1979)と、その東側の県営ほ場整備事業児玉南部地区の昭和62年度工区に伴うB地点とC地点(恋河内1990)の発掘調査が実施されている。これらの調査で検出された遺構は、A地点が住居跡63軒・土壙8基・井戸跡1基・溝跡1条、B地点が住居跡34軒・掘立柱建物跡6棟・井戸跡3基・土壙22基・溝跡5条、C地点が住居跡2軒・井戸跡1基・溝跡10条であり、本遺跡が古墳時代前期の4世紀から室町時代後期の16世紀までの長期にわたって営まれた集落を主体とする遺跡であることが明らかになっている。

今回のD～G地点の発掘調査は、本遺跡の第3次調査にあたり、関越自動車道(A地点)の西側に広がる低台地上を対象にしている(第3図)。D地点(第5図)は、ほぼA地点の西側隣接地にあたり、調査区内からは、住居跡1軒・掘立柱建物跡8棟・井戸跡1基・土壙11基・円形周溝遺構1基・溝跡10条と、埋没河川跡及び埋没谷が検出されている。これらの遺構は、古代～近現代のものが見られるが、主体は7世紀中頃から10世紀の古代のものである。遺構の分布は、調査区中央部の埋没河川跡を境にして東西に分かれ、東側の建物群はA地点の住居群と、西側の建物と住居や井戸はFⅡ地点の住居群と関係するものと考えられる。この両者を分ける埋没河川跡は、残丘山裾の湧水によって開析された小規模な自然流路である。古墳時代前期～中期前半には河川の最深部に溝を掘り返して人為的に管理されていたが、その後しばらく放置され、7世紀後半頃になって一気に埋没が進行したようで、この埋没河川跡の覆土上層や埋没谷からは、7世紀後半以降の土器片が多量に出土している。また、調査区の北西端に位置する第1号円形周溝遺構は、覆土中から7世紀後半の内屈坏の破片が出土しており、その時期の可能性があるものとして注目される。

E地点(第6図)とF地点(第7図)は、D地点の南側に位置し、十文字に交差する道路部分の調査区域である。検出された遺構は、E地点が住居跡1軒・井戸跡1基・土壙10基・溝跡17条と埋没河川跡及び埋没谷で、F地点が住居跡8軒・井戸跡1基・土壙15基・溝跡10条である。D地点と同様に古代～

近現代のものが見られるが、７世紀中頃から11世紀の古代と、15世紀～16世紀頃の中世のものが主体である。古代の遺構は、ＦⅡ地点の北側とＥⅡ地点の西端で住居が検出されている。このうち、７世紀後半の第106号住居跡からは銅地銀貼りの耳環が、10世紀後半～末頃の第105号住居跡からは比較的大きな鉄滓が１点出土している。また、ＦⅠ地点の第61号土壙は、その形態や土器の出土状況から、土壙墓と考えられるものである。中世の遺構は、井戸と溝と土壙がある。調査範囲が狭いため建物等は明確ではないが、大形や小形の井戸が見られることは、それを伴う屋敷が形成されていたことを推測させる。また、ＥⅡ地点の第11号溝跡やＦⅡ地点の第17号溝跡などは、現在の地表面に見られるやや幅広の道状を呈する地割り区画と一致するもので、本台地上の地割り形態の一部が中世に溯ることは注目されよう。

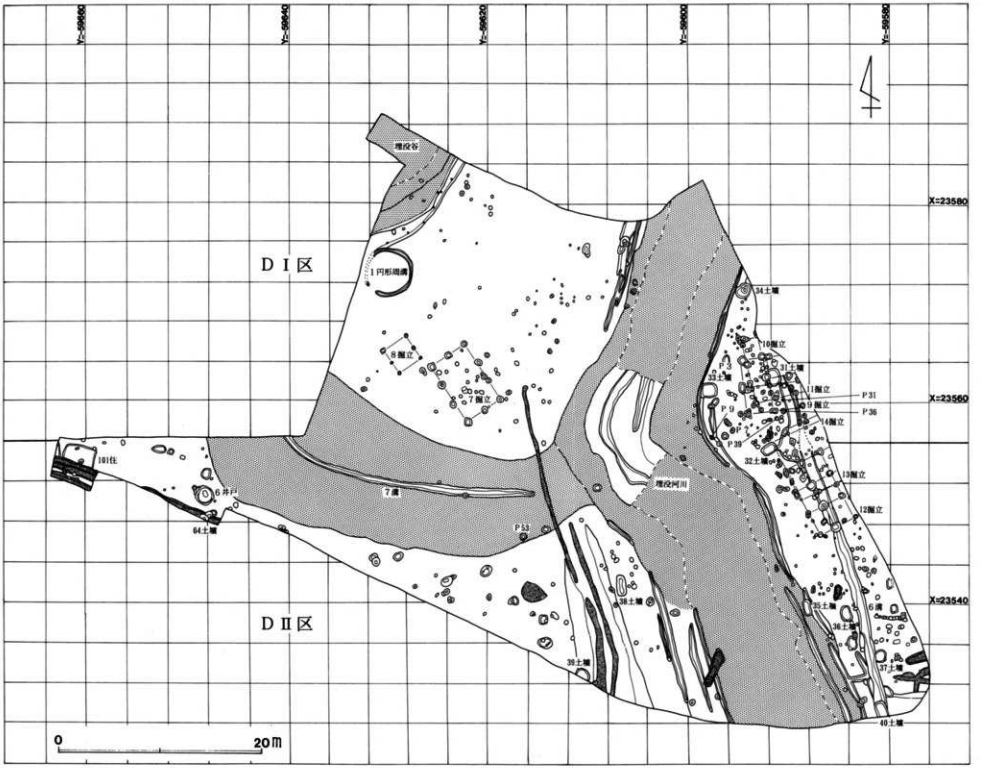
Ｇ地点(第６図)は、Ｄ地点の西側に位置し、比較的規模の大きな谷状地形に面する低台地の西側縁辺部にあたる。検出された遺構は、井戸跡４基･土壙３基･溝跡２条で、10世紀後半の古代のものと、15世紀～16世紀頃の中世のものが主体である。古代の遺構は、井戸と土壙があるが、規模が大きく細長い長方形を呈する第67号土壙からは羽口の破片が、近接する第11号井戸跡からは椀型の鉄滓が出土しており、本地点の近くに鍛治関連の施設の存在が推測される。中世の遺構は、井戸が２基検出されており、Ｅ地点と同様にそれを伴う屋敷が形成されていたことが伺える。



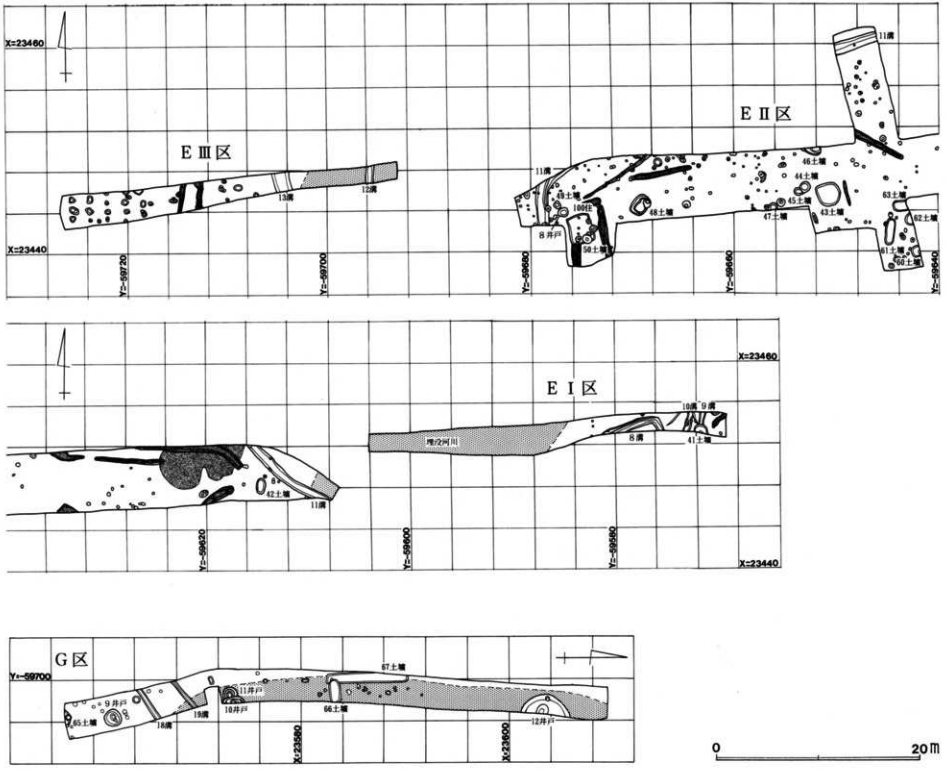
第４図　水路工事表採遺物

水路工事表採遺物観察表

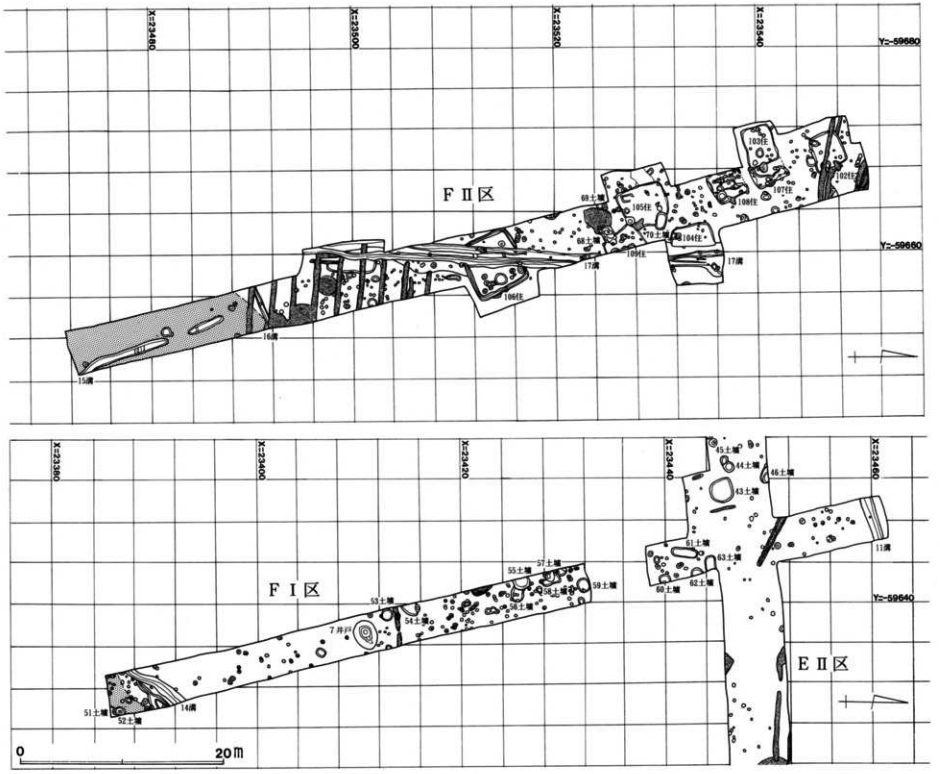
1	坏	A.口縁部径（15.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒､白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.1/6。
2	坏	A.口縁部径（13.0)。C.口縁部外面及び内面ヨコナデ。体部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.1/6。
3	坏	A.口縁部径（12.6)。C.口縁部外面及び内面ヨコナデ。体部外面ケズリ。D.白色粒。E.内外－暗橙褐色。F.1/6。
4	坏	A.口縁部径（11.2)。C.口縁部外面及び内面ヨコナデ。体部外面ケズリ。D.白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.1/5。
5	坏	A.口縁部径（11.0)。C.口縁部外面及び内面ヨコナデ。体部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.1/6。
6	坏	A.口縁部径（10.8)．器高（3.9)。C.口縁部外面及び内面ヨコナデ。体部外面ケズリ。D.赤色粒。E.内外－淡橙褐色。F.1/3。
7	土製支脚	A.高さ14.9、上端部径3.4、下端部径（11.4)。B.粘土紐積み上げ。C.外面ケズリ、内面ナデの後上半ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－明茶褐色。F.1/3。



第５図　雷電下遺跡Ｄ地点全体図



第6図　雷電下遺跡E・G地点全体図



第７図　雷電下遺跡Ｆ地点全体図

第２節　検出された遺構と遺物

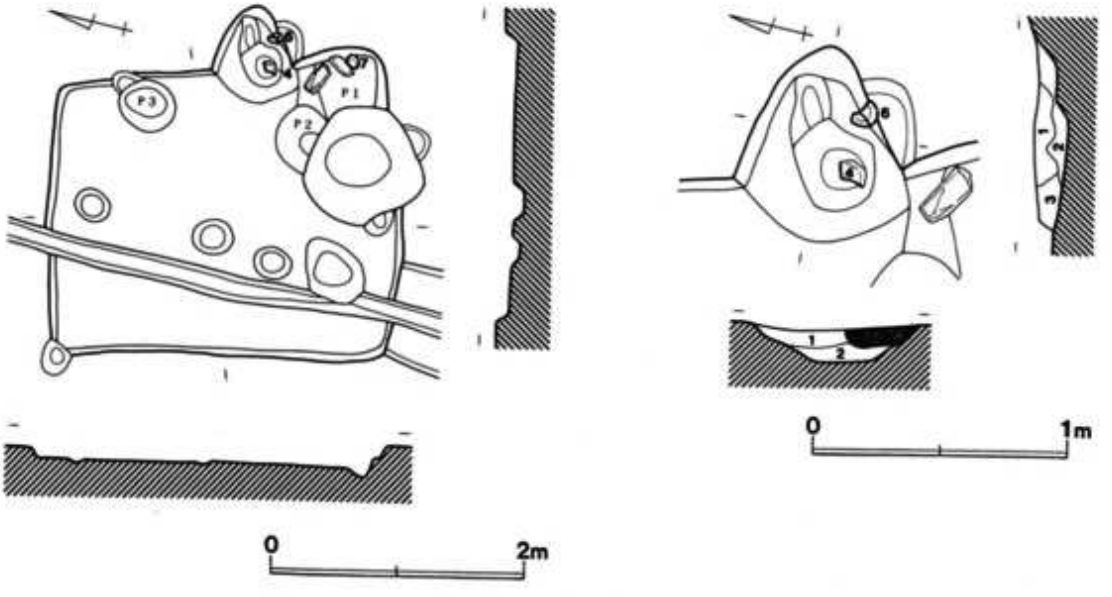
１．住　居　跡

第100号住居跡（第８図）

ＥⅡ区の西端部に位置する。本住居跡の周辺は、耕作による削平が著しく、また第50号土壙や後世の溝及びピットなどにも切られており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、南北方向に長い長方形を基本にしているが、南側壁に比べて北側壁がやや短く、厳密には台形に近い形態である。規模は、南北方向2.78m・東西方向2.40mで、かなり小規模な住居である。住居の主軸方位は、Ｎ－78°－Ｅをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは10cm程度である。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦に作られているが、やや軟弱である。

ピットは、多くが後世の攪乱で、覆土の状態から本住居跡に関係すると考えられるものは、Ｐ１～Ｐ３の３箇所である。Ｐ１は、カマド右側の住居南東コーナー部にあり、その位置や形態から貯蔵穴と考えられるものである。西側を第50号土壙に切られているため全容は不明であるが、規模が70cm×60cm程度の長方形ぎみの形態を呈していたものと思われる。床面からの深さは25cm程度で、底面は広く平坦である。Ｐ２は、Ｐ１の貯蔵穴と重複し、第50号土壙に切られている。直径45cm程度の円形ぎみの形態を呈していたものと思われ、深さは25cmを測る。Ｐ３は、住居東側壁際の中央に位置する。44cm×38cmの楕円形ぎみの形態を呈し、深さは16cmある。



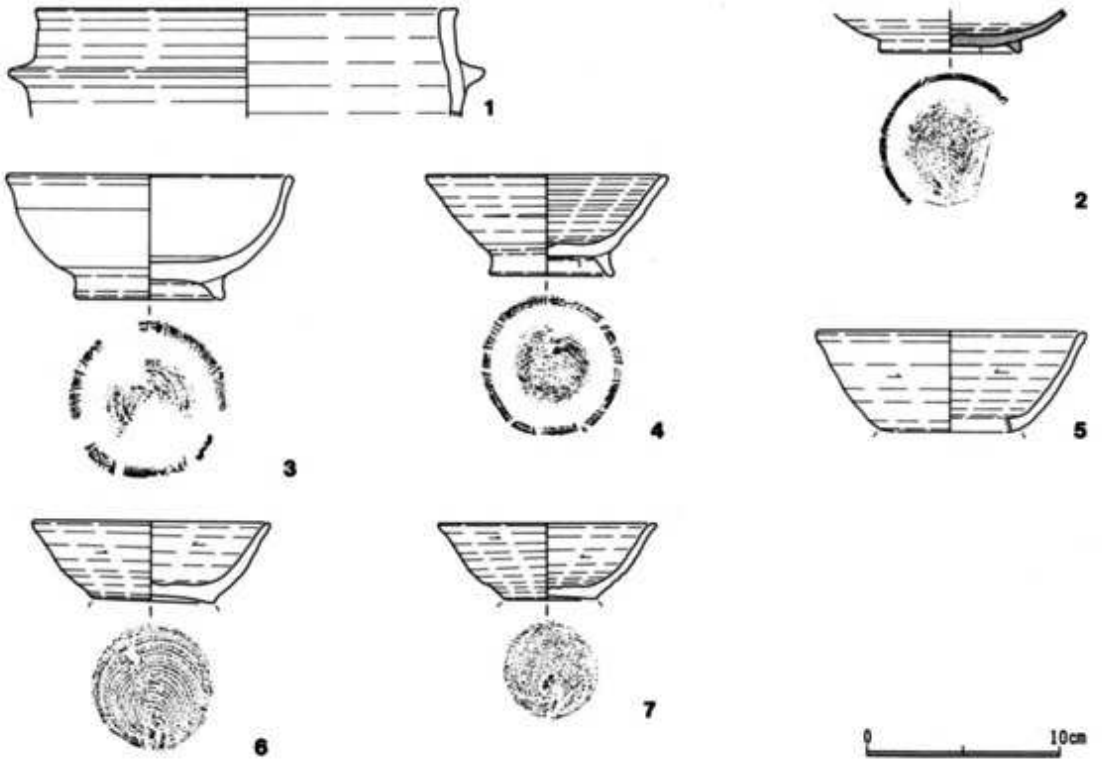
第８図　第100号住居跡

第100号住居跡カマド土層説明

第１層：黒褐色土層（焼土粒子を多量に、焼土ブロック・ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第２層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第３層：淡灰褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）

カマドは、住居東側壁中央のやや南寄りにあり、壁に対してほぼ直角に向いて構築されている。規模は、長さ75cm・最大幅68cmを測る。住居内に袖の痕跡は見られない。燃焼部は壁を掘り込んでおり、全体に住居壁外に位置している。燃焼面は床面よりも若干低く、あまり焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、カマド内からNo 4 の高台付坏やNo 6 の坏が、Ｐ１の貯蔵穴内からNo 7 の坏が出土している。この他では、覆土中より出土した灰釉陶器(No 2)・羽釜(No 1)・高台付椀(No 3)・椀(No 5)などがある。土器以外では、貯蔵穴内から長さ25cm前後の自然石が２個出土している。



第９図　第100号住居跡出土遺物

第100号住居跡出土遺物観察表

1	羽　釜	A.口縁部径(22.0)。B.粘土紐積み上げ。鍔貼り付け。C.内外面ともナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－暗灰色、内－淡灰色、肉－淡褐色。F.口縁部1/8。G.覆土中。
2	灰釉陶器 高台付椀	A.高台部径7.4。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。底部外面回転糸切り。C.体部及び高台部内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外－淡灰褐色。F.1/2。G.覆土中。
3	高台付椀	A.口縁部径(15.0)、器高6.4、高台部径7.8。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.口縁部外面及び体部内面回転ナデ。体部外面ナデ。高台部内外面回転ナデ。底部外面ナデ。D.片岩粒、赤色粒。E.内外－淡灰色。F.1/2。G.覆土中。
4	高台付坏	A.口縁部径12.6、器高5.2、高台部径6.5。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.ほぼ完形。G.カマド内。

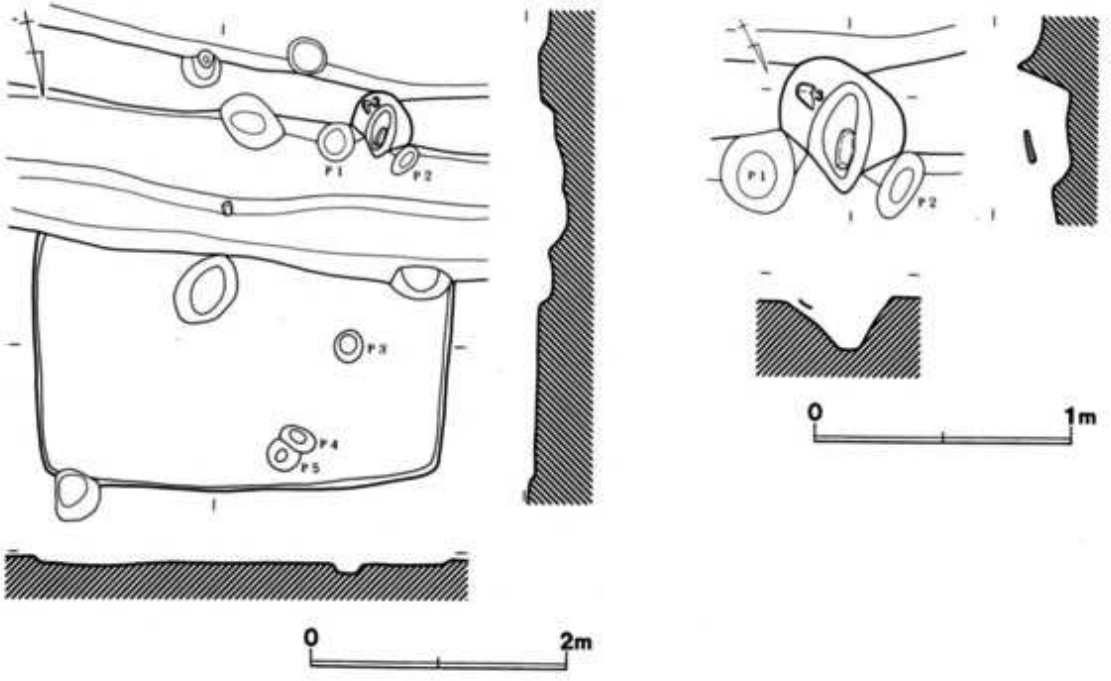
5	椀	A.口縁部径(14.0)、器高5.2、高台部径(7.2)。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.白色粒、黒色粒。E.外－淡灰色、内－黒灰色。F.1/3。G.覆土中。
6	坏	A.口縁部径12.4、器高4.2、高台部径6.5。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.片岩粒、赤色粒。E.外－淡灰褐色、内－暗褐色。F.3/4。G.カマド内。H.内外面に黒斑あり。
7	坏	A.口縁部径11.4、器高3.9、高台部径4.8。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.片岩粒、赤色粒。E.内外－明茶褐色。F.4/5。G.P１(貯蔵穴)内。H.内外面に黒斑あり。

第101号住居跡(第10図)

ＤⅡ区の西端部に位置し、西側にはＦⅡ区の第102号住居跡が近接している。本住居跡の周辺は、耕作による削平が著しく、また住居跡の南側を後世の溝に切られており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、東西方向に長い長方形を呈していたものと思われる。規模は、東西方向が3.24m、南北方向は1.81mまで測れる。住居の主軸方位は、N－165°－Wを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で14cmである。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で比較的堅緻である。

ピットは、住居跡内に８箇所見られるが、覆土の状態からＰ１～Ｐ５の５箇所が本住居跡に関係する可能性が高いものと思われる。Ｐ１とＰ２は、カマドの両脇に位置し、その形態からカマド袖の補強材の据え穴ではないかと考えられる。Ｐ３～Ｐ５は、いずれも直径20～30cm程度の円形か楕

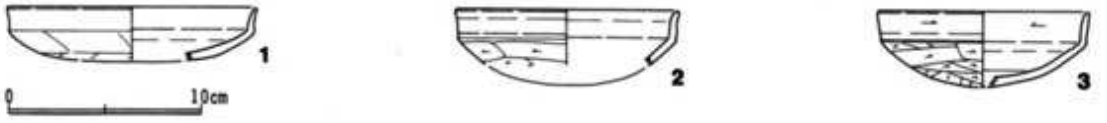


第10図　第101号住居跡

円形を呈し、床面からの深さが10cm程度の小規模なもので、その性格は不明である。

カマドは、住居南側壁の南西コーナー部にかなり寄った位置にある。北側を後世の溝に切られているため全容は不明であるが、規模は幅が48cm、長さは51cmまで測れる。燃焼部は、床面よりやや低く、壁の一部が若干焼けている程度である。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、カマド内や覆土中から坏や甕の破片が少量出土しただけである。時期は、いずれの破片も７世紀代のものであるが、住居跡の平面形は横長の長方形を呈し、カマドがコーナー部にかなり寄った10世紀以降の住居形態に類似していることから、本住居跡に直接伴う土器か疑問である。



第11図　第101号住居跡出土遺物

第101号住居跡出土遺物観察表

1	坏	A.口縁部径(13.0)、器高(2.8)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－明橙褐色。F.1/6。G.覆土中。
2	坏	A.口縁部径(11.6)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外－茶褐色。F.1/6。G.覆土中。
3	坏	A.口縁部径(11.0)、器高3.9。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－茶褐色。F.1/3。G.カマド内。

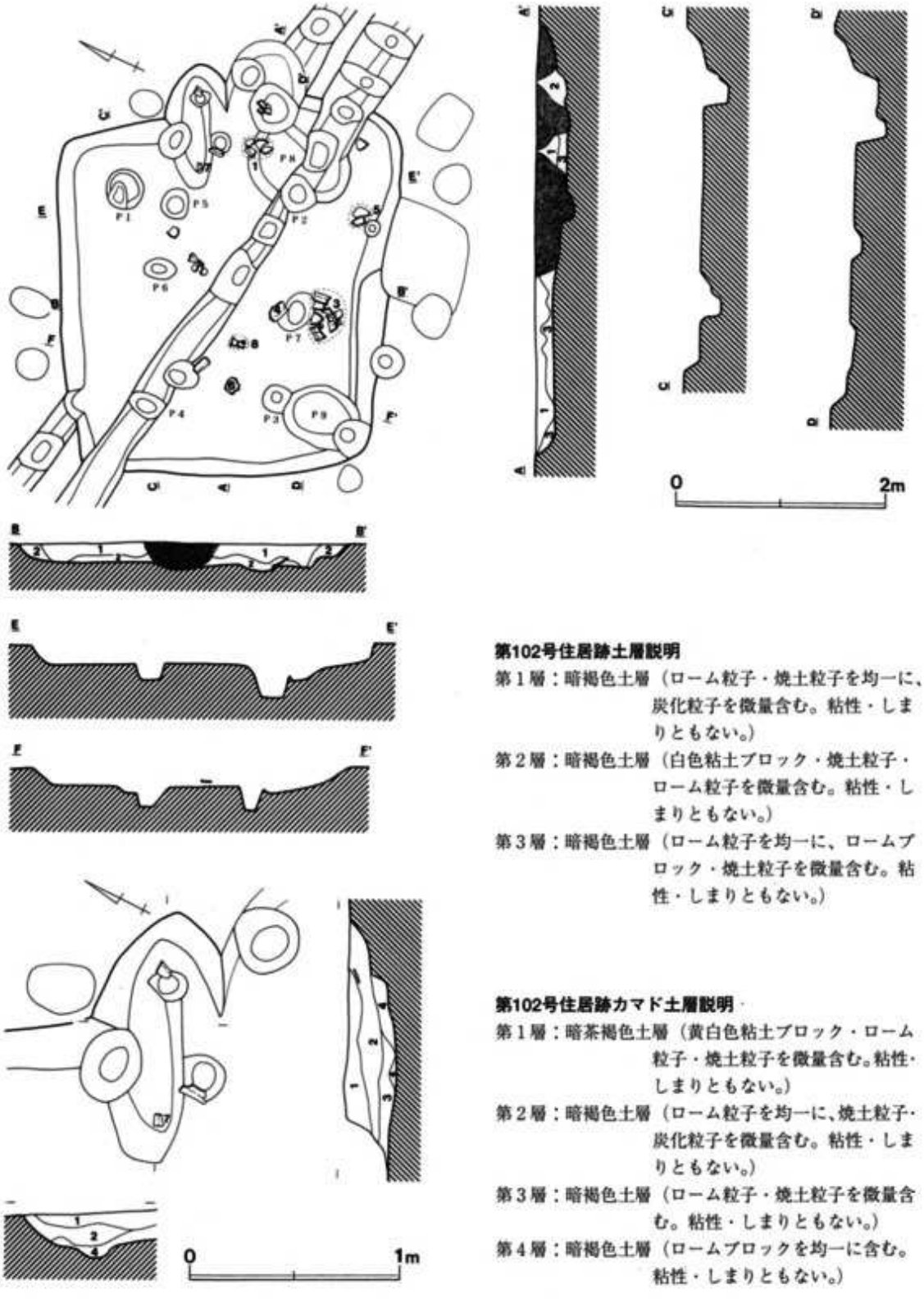
第102号住居跡(第12図)

ＦⅡ区の北端部に位置し、南側には第103号住居跡が、東側にはＤⅡ区の第101号住居跡が近接している。住居跡内は、後世の溝やピット等の攪乱を受けており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、北東から南西方向に長い長方形を基本にしているが、北東側壁に比べて南西側壁がやや短く、厳密にはやや台形に近い形態である。規模は、北東から南西方向が3.56m・北西から南東方向が3.26mを測る。住居の主軸方位は、Ｎ－69°－Ｅを向いている。壁は、緩やかにやや湾曲しながら立ち上がり、確認面からの深さは18cmある。また、南東側壁の一部には、壁の崩壊によるものか、壁の中位に段が見られる箇所がある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式であるが、緩やかな起伏が見られる。住居中央部は堅緻であるが、壁際の周辺部はやや軟弱である。

ピットは、住居内から比較的多く検出されているが、その性格が推測できるものは少ない。この内のＰ２～Ｐ５は、その配置から見て、４本主柱穴を構成する可能性も考えられる。いずれも直径30cm前後の円形か楕円形ぎみの形態を呈し、床面からの深さは20cm前後である。

カマドは、住居北東側壁の中央やや北寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に掘り込まれている。カマドの南側には一部攪乱を受けているため、全容は不明であるが、規模は長さが1.17m、幅は60cmまで測れる。袖や天井部はすでに崩壊してその痕跡は見られないが、カマド第１層中には黄白色



第102号住居跡土層説明

第１層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第２層：暗褐色土層（白色粘土ブロック・焼土粒子・ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第３層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第102号住居跡カマド土層説明

第１層：暗茶褐色土層（黄白色粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第２層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

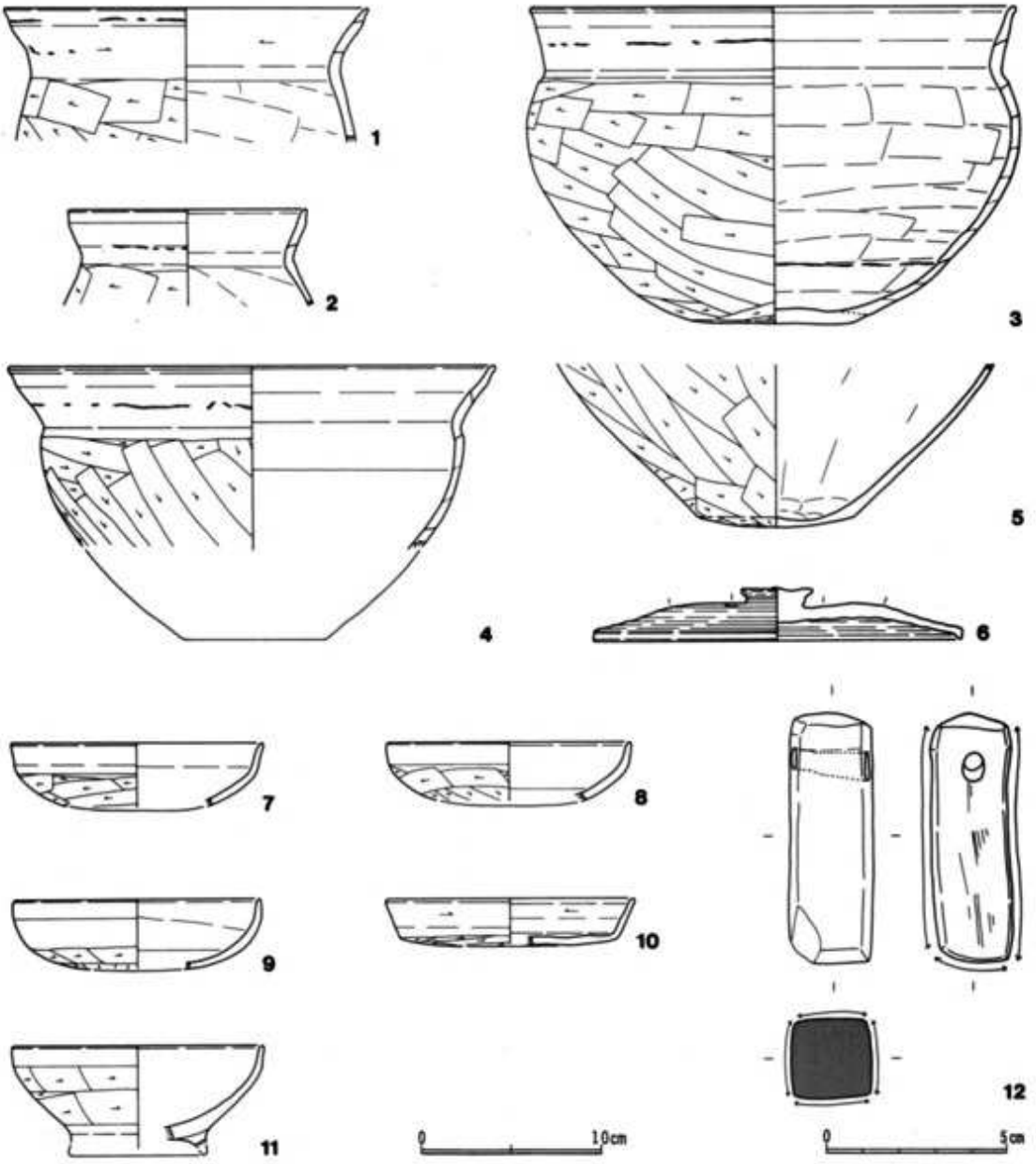
第３層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第４層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）

第12図　第102号住居跡

粘土ブロックが見られることから、黄白色粘土によって構築されていたものと思われる。燃焼部は、床面とほぼ同じであるが、左側半分が一段低くなっている。全体的にあまり焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、土器が比較的多く出土しているが、完形品は少なくほとんどが破片である。器種は、甕(No 1)・小形甕(No 2)・大形鉢(No 3 ～ 5)・坏(No 7 ～ 9)・皿(No10)・高台付椀(No11)・須恵器蓋(No 6) などがあり、器種構成の中で大形鉢が比較的多く見られる点は注目される。土器以外では、覆土中より穿孔をもつ完形の柱状砥石(No12)が1点出土している。



第13図　第102号住居跡出土遺物

第102号住居跡出土遺物観察表

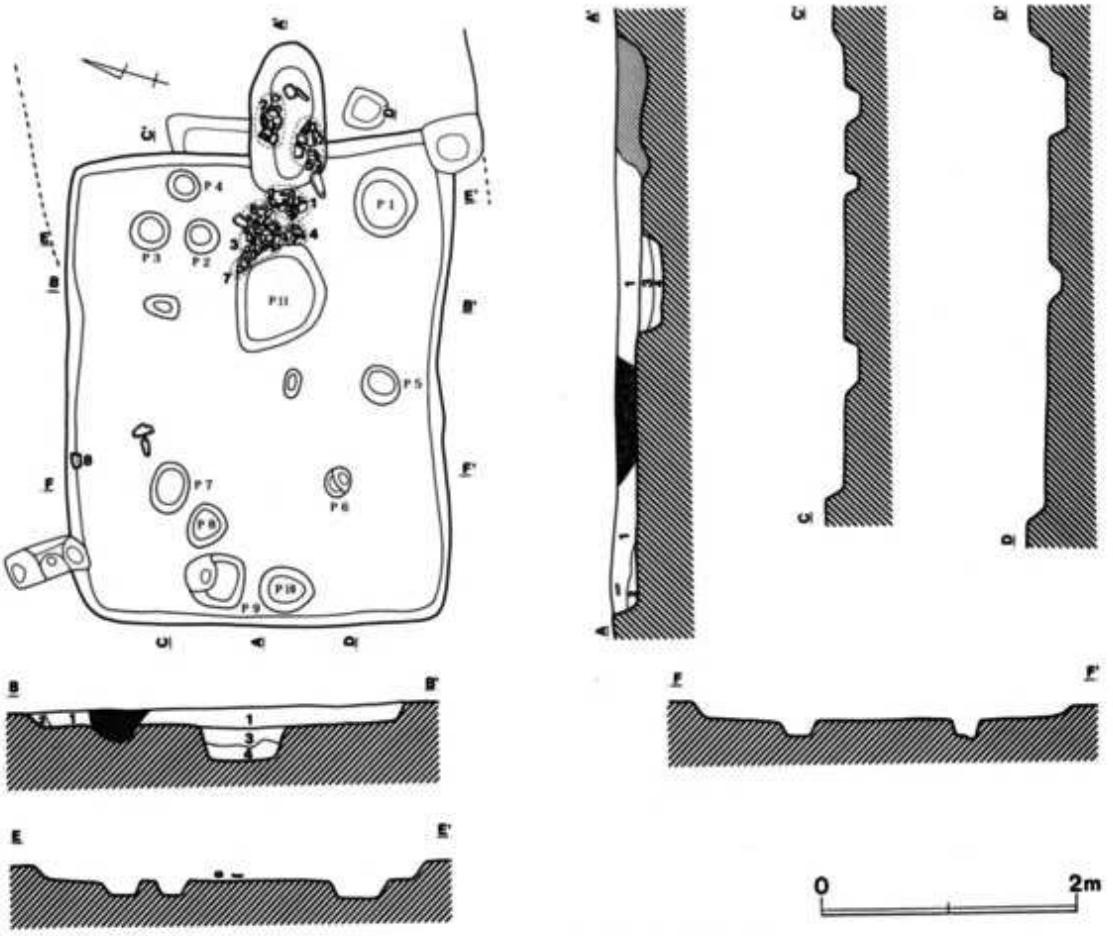
1	甕	A.口縁部径(20.2)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.口縁部1/3破片。G.覆土中。
2	小形甕	A.口縁部径(13.2)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.白色粒。E.内外-淡褐色。F.口縁部1/3破片。G.覆土中。H.外面に黒斑あり。内外面とも煤付着。
3	大形鉢	A.口縁部径(26.8)、器高17.4、底径8.9。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.白色粒。E.外－淡茶褐色、内－明茶褐色。F.1/2。G.床面付近。H.口縁部外面に黒斑あり。
4	大形鉢	A.口縁部径(27.0)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－淡褐色、内－暗茶褐色。F.1/3。G.床面付近。H.外面に黒斑あり。
5	大形鉢	A.底径8.6。B.粘土紐積み上げ。C.胴部外面ケズリ、内面丁寧なナデ。底部外面ケズリ、内面指ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－暗茶褐色、内－明茶褐色。F.1/2。G.床面付近。H.底部外面に黒斑あり。
6	須恵器蓋	A.口縁部径(20.3)、器高2.9。B.ロクロ成形。つまみ貼り付け。C.体部内外面回転ナデ。天井部外面回転篦ケズリ。D.白色針状物質。E.外－茶褐色、内－暗灰色。F.1/4。G.覆土中。
7	坏	A.口縁部径(14.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－明茶褐色。F.1/3。G．カマド内。
8	坏	A.口縁部径(13.6)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.1/4。G.覆土中。
9	坏	A.口縁部径(13.6)、器高3.8。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.1/4。G.覆土中。
10	坏	A.口縁部径13.8、器高2.6。C.口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－明茶褐色。F.1/2。G.床面付近。
11	高台付椀	A.口縁部径(14.0)、残存高5.6。B.高台部貼り付け。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。高台部内外面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－橙褐色。F.1/4。G.覆土中。H.器表面は二次焼成を受けて荒れている。
12	砥石	A.長さ6.9、幅2.3、厚さ2.1、重さ68g。C.柱状を呈し、側面に穿孔をもつ。D.凝灰岩。F.完形。G.覆土中。H.両面穿孔。全面とも良く擦れている。

第103号住居跡（第14図）

ＦⅡ区の北側に位置し、北側には第102号住居跡が、南側には第108号住居跡が近接している。本住居跡は、東側が第107号住居跡と重複し、それを切っている。

平面形は、東西方向に長い長方形を呈している。規模は、東西方向3.73m・南北方向3.00mを測る。住居の主軸方位は、N－74°－Eを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは16cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅緻である。

ピットは、住居内から多数検出されているが、その性格が推測できるものは少ない。直径30cm～40cmの円形や楕円形を呈するものが多く、深さはいずれも10cm前後で浅い。Ｐ１は、住居の南東コーナー部に位置し、直径50cmの円形を呈している。その位置や規模から貯蔵穴の可能性も考えられるが、深さは15cm程度で比較的浅い。床下土壙のＰ11は、カマド前の住居中央部に位置する。76cm×72cmの不整形を呈し、底面は平坦で深さは25cmある。ロームブロックを含む黒褐色土(第３層)で



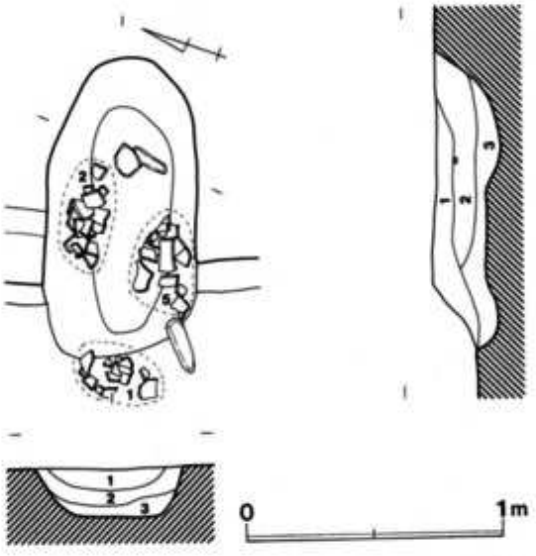
第103号住居跡土層説明

第１層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性･しまりともない。）

第２層：暗黄褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性･しまりともない。）

第３層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）

第４層：暗褐色土層（白色粘土ブロックを微量含む。粘性･しまりともない。）



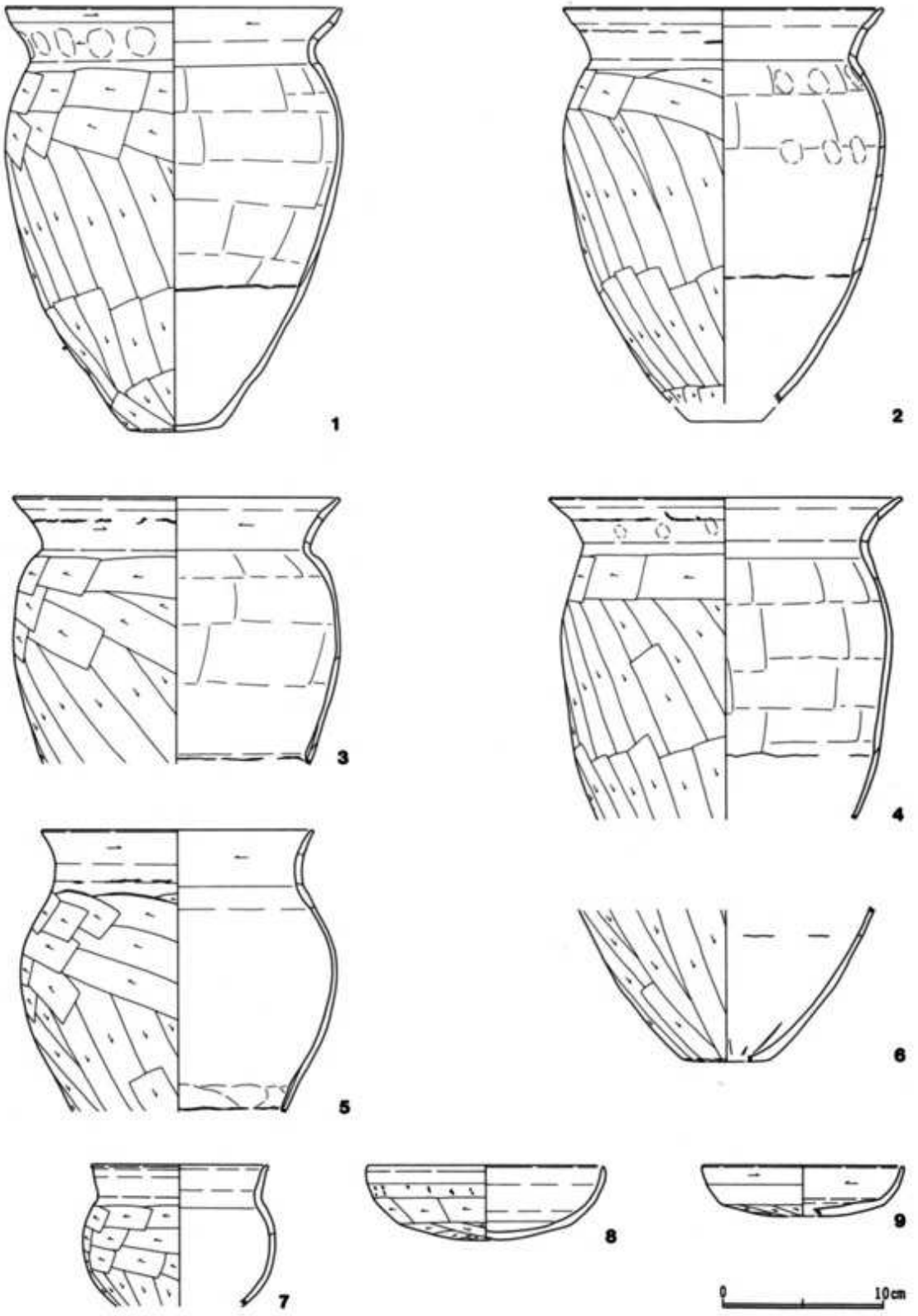
第103号住居跡カマド土層説明

第１層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性･しまりともない。）

第２層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量に、焼土ブロック・ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）

第３層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第14図　第103号住居跡



第15図　第103号住居跡出土遺物

埋め戻されているが、底面付近の第４層中には白色粘土ブロックが少量見られる。

カマドは、住居東側壁の中央やや南側寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に掘り込まれて構築されている。規模は、長さ1.15m・幅60cmを測る。燃焼部は、住居床面よりも若干低く、内面はあまり焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、甕と坏が見られる。甕(No１～No７)は、カマド内やカマド焚き口付近にまとまって出土しており、坏(No８・No９)は覆土中から出土している。

第103号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径21.0、器高26.2、底径5.7。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面上半篦ナデ・下半ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.2/3。G.床面付近。
2	甕	A.口縁部径(20.0)、残存高24.5。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面上半篦ナデ・下半ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.1/4。G.カマド内。
3	甕	A.口縁部径20.4、残存高16.5。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－明橙褐色。F.1/2。G.床面付近。
4	甕	A.口縁部径(22.0)、残存高20.0。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面上半篦ナデ・下半丁寧なナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.1/4。G.覆土中。H.胴部外面に煤付着。
5	甕	A.口縁部径17.0、残存高17.5。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.1/2。G.カマド内。
6	甕	A.底径(5.4)。B.粘土紐積み上げ。C.胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－茶褐色。F.1/4。G.床面付近。
7	小形甕	A.口縁部径11.0、残存高8.8。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.1/2。G.床面付近。H.口縁部内面に煤付着。
8	坏	A.口縁部径(14.8)、器高4.6。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上半ナデ・下半ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.1/3。G.覆土中。
9	坏	A.口縁部径(12.6)、器高3.1。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.2/3。G.覆土中。

第104号住居跡(第16図)

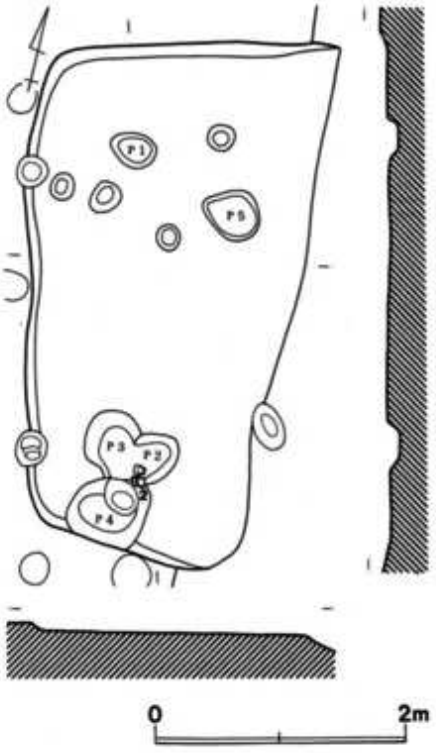
ＦⅡ区の北側に位置し、北西側には第108号住居跡が、南西側には第105号住居跡が近接している。住居跡の上面は耕作による削平が強く及んでおり、また住居の東側半分を中世と近世以降の溝に切られているため、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、長方形を基本にするものと思われるが、北側壁や西側壁に対して南側壁がやや開いており、おそらく台形に近い形態を呈していた可能性が高い。規模は、南北方向が最高4.10m、東西方向は2.28mまで測れる。住居の南北方向は、N－13°－Wを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がるが、確認面からの深さは最高でも８cmしか残存していない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅緻である。

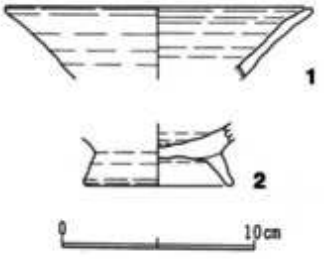
ピットは、住居内からＰ１～Ｐ５の５箇所が検出されている。Ｐ１とＰ２もしくはＰ３は、長さが40cm前後の楕円形や円形に近い形態を呈し、その位置から主柱穴の可能性も考えられるが、深さ

はいずれも10cm程度の浅いものである。Ｐ４は、住居の南西コーナー部付近に位置し、あるいは貯蔵穴であった可能性も推測される。平面形は、60cm×51cmの比較的規模の大きな不整形を呈している。底面はやや丸みをもち深さは25cmある。住居中央部に位置するＰ５は、46cm×41cmの楕円形ぎみの形態を呈している。底面は広く平坦で、深さは５cm程度である。

遺物は、遺構の依存状態が悪いため、土器片がごく少量であるが、Ｐ２の上面より同一個体の可能性もあるNo１とNo２の高台付椀の破片が出土している。



第16図　第104号住居跡



第17図　第104号住居跡出土遺物

第104号住居跡出土遺物観察表

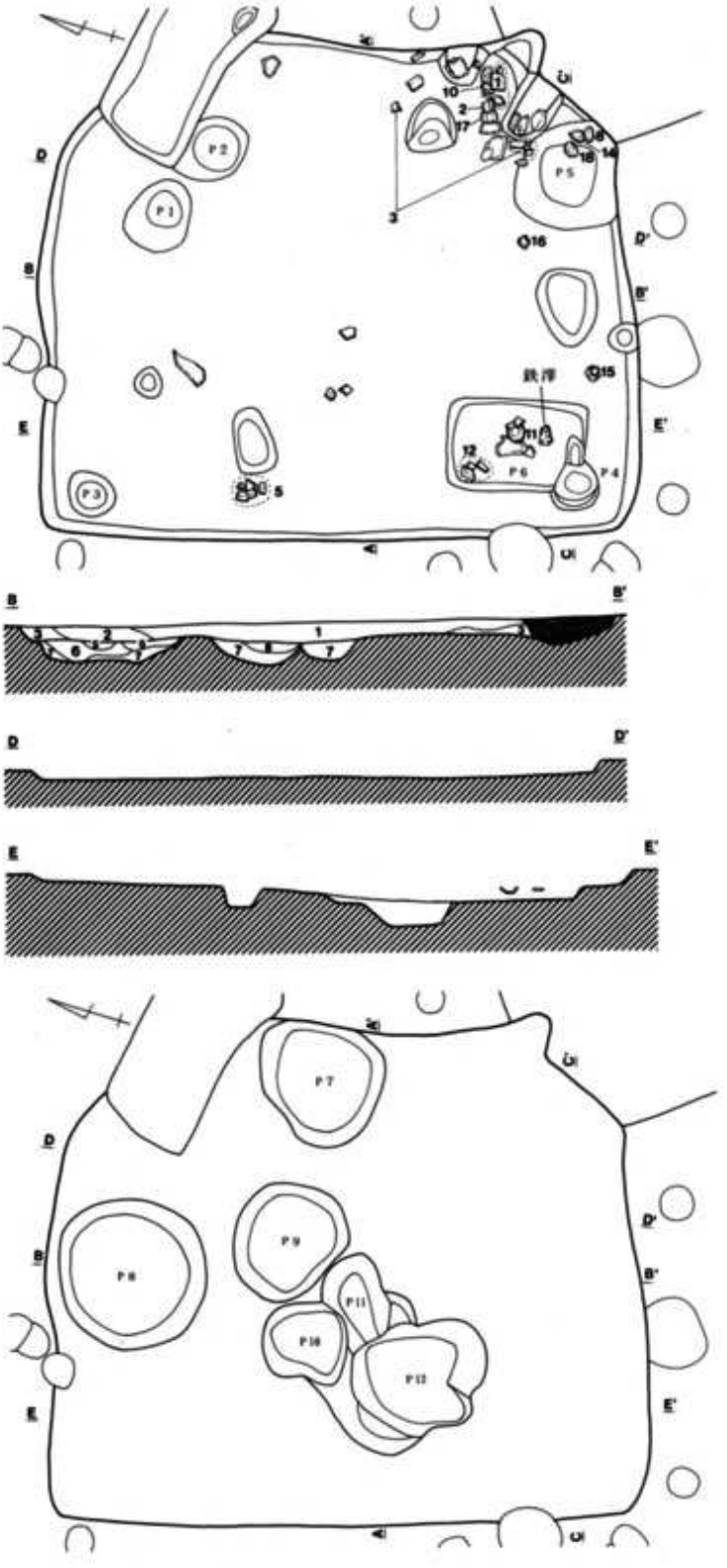
1	高台付椀	A.口縁部径(16.0)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－淡橙褐色、内－淡褐色。F.口縁部1/6破片。G.覆土中。
2	高台付椀	A.高台部径(7.8)。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.内外面とも回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.高台部1/2破片。G.Ｐ２上面。

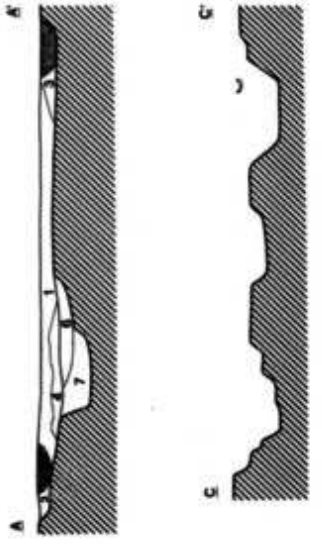
第105号住居跡(第18図)

ＦⅡ区の北側寄りに位置し、北東側には第104号住居跡が近接している。本住居跡は、第109号住居跡や第70号土壙と重複し、それらを切っている。

平面形は、南北方向に長い長方形を呈しているが、北東側と南東側のコーナー部はかなり丸みが強い。規模は、南北方向が4.70m、東西方向が3.88mを測る。住居の主軸方位は、Ｎ－70°－Ｅを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは14cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦である。住居中央部は比較的堅緻であるが、壁際の周辺部はやや軟弱である。

ピットは、撹乱によるものが多いが、覆土の状態から本住居跡に関係すると考えられるものは、Ｐ１～Ｐ６の６箇所である。Ｐ１とＰ２は、住居内の北東側にあり、いずれも規模が60cm程度の円形ぎみの形態を呈している。深さは、Ｐ１が25cm、Ｐ２が15cmある。Ｐ３とＰ４は、それぞれ住居の北西コーナー部と南西コーナー部に位置し、いずれも規模が40cm弱の円形に近い形態を呈してい





第105号住居跡土層説明

第１層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性･しまりともない。）

第２層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に、ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性･しまりともない。）

第３層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）

第４層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

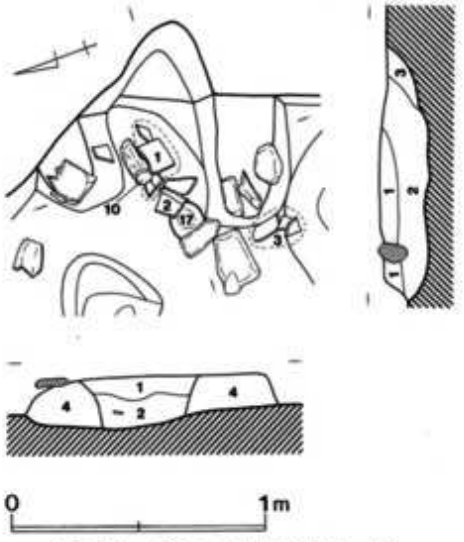
第５層：暗褐色土層（焼土粒子・ローム粒子を多量含む。粘性･しまりともない。）

第６層：暗褐色土層（焼土粒子・ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第７層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

0　2m

第18図　第105号住居跡



第105号住居跡カマド土層説明

第１層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第２層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）

第３層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第４層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロック・白色粘土ブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第19図　第105号住居跡カマド

る。深さは、Ｐ３が８㎝と浅く、Ｐ４は20㎝ある。Ｐ５は、カマド右側の住居南東コーナー部に位置し、貯蔵穴と考えられる。平面形は、コーナー部の丸みが強い方形ぎみの形態で、規模は80㎝×80㎝を測る。深さは23㎝あり、底面は広く平坦である。上面からは椀･高台付坏･皿等の土器が出土している。Ｐ６は、住居南西コーナー部付近に位置し、Ｐ４と一部重複している。108㎝×72㎝の長方形を呈し、ピットと言うよりは土壙状の形態を呈している。深さは10㎝程度で浅く、底面は広く平坦である。Ｐ６内や上面からは比較的大きな自然石や高台付椀などの土器が出土している。

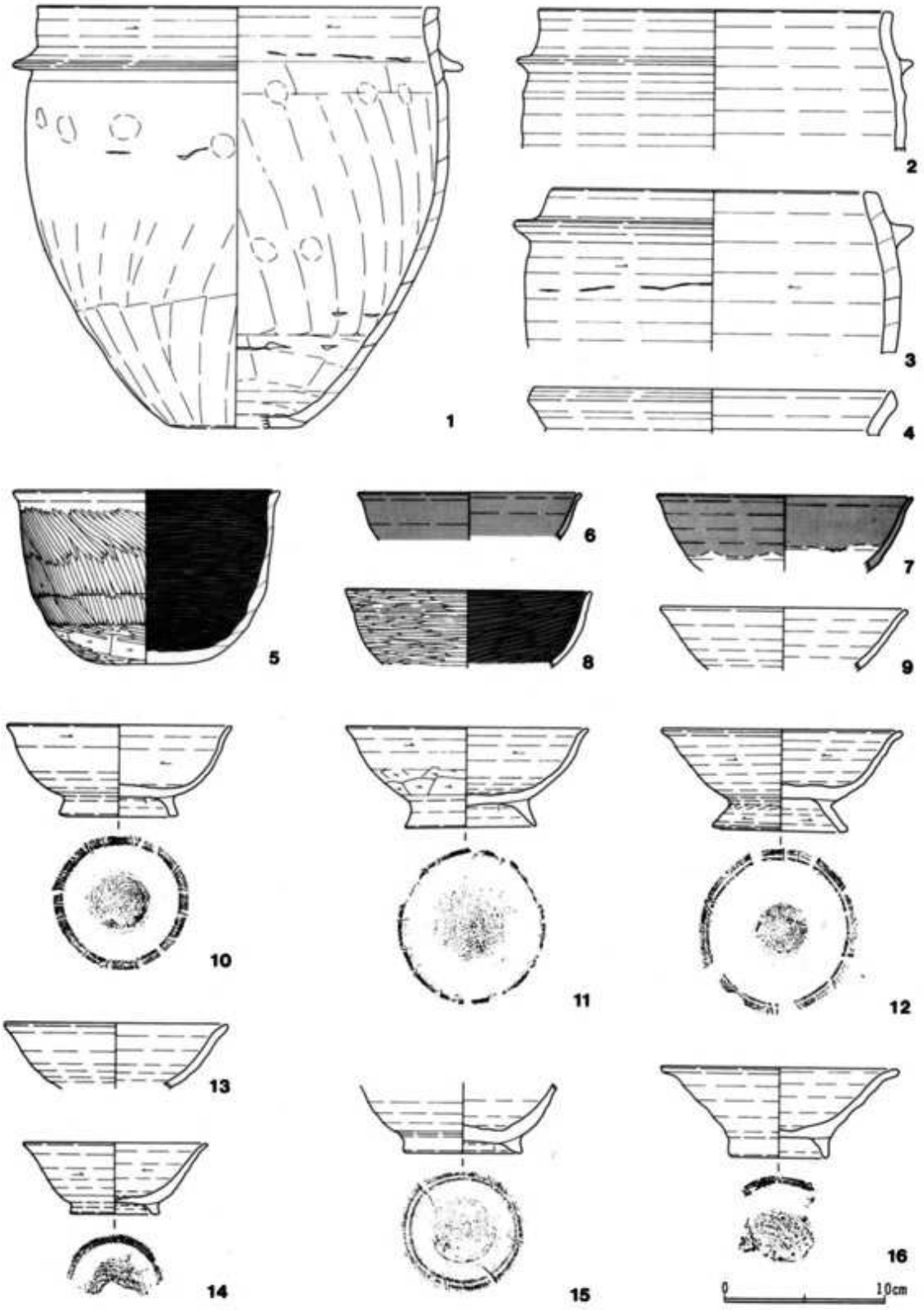
カマドは、住居東側壁の南東コーナー部寄りに位置し、コーナー部の丸みに規制されて、壁に対して斜めに付設されている。規模は、長さ78㎝・幅１ｍを測る。袖は、ロームブロックや白色粘土ブロックを含む暗褐色土(カマド第４層)を、壁に直接貼り付けて作っており、その補強に自然石を使用している。燃焼部は、住居壁を掘り込まず、燃焼面は床面よりも低い。全体にあまり焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

本住居跡は、住居の中央部から北東側を中心に、Ｐ７～Ｐ12の床下土壙が検出されている。これらは、いずれも焼土粒子や炭化粒子を含んでおり、Ｐ７～Ｐ９の規模の大きなものは単独で存在するが、Ｐ10～Ｐ12の規模の小さいものは相互に重複している。

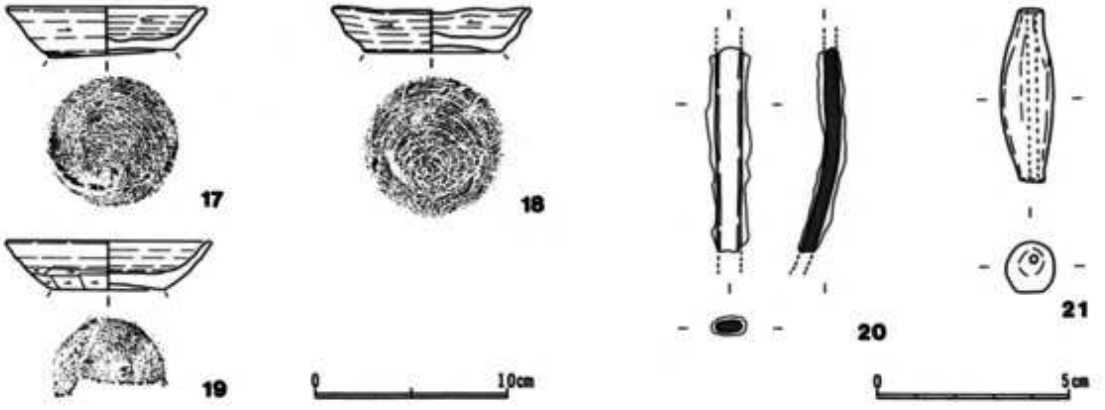
遺物は、カマドや貯蔵穴内から土器が比較的多く出土しており、カマド内からは羽釜が、貯蔵穴のＰ５やＰ６内や上面からは高台付椀や皿などが出土し、住居跡西側壁際の床面上には内黒の鉢が見られる。また、覆土中からはNo６の緑釉陶器やNo７の灰釉陶器なども出土している。土器以外では、覆土中よりNo20の鉄器片やNo21の土錘が出土し、Ｐ６上面からは大形の鉄滓も出土している。

第105号住居跡出土遺物観察表

1	羽　釜	A.口縁部径(25.0)、器高26.2、底径(8.2)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半分ナデ･下半ケズリの後ナデ、内面篦ナデ。底部外面ナデ。D.白色粒。E.外上半－暗灰色・外下半－暗茶褐色、内－黒褐色。F.1/4。G.カマド内。H.外面に煤付着。
2	羽　釜	A.口縁部径(22.0)。B.粘土紐積み上げ後、ロクロ整形。C.内外面とも回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－明茶褐色。F.口縁部1/6破片。G.カマド内。



第20図　第105号住居跡出土遺物（1）



第21図　第105号住居跡出土遺物（2）

3	羽　釜	A.口縁部径(20.3)。B.粘土紐積み上げ後、ロクロ整形。C.内外面とも回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗褐色。F.口縁部1/4破片。G.床面付近。
4	甕	A.口縁部径(22.2)。B.粘土紐積み上げ。C.内外面ともヨコナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.口縁部1/8破片。G.覆土中。
5	鉢	A.口縁部径(16.6)、器高10.8、底径7.5。B.粘土紐積み上げ後、ロクロ整形。C.外面上半ミガキ・下半ケズリの後、雑なミガキ。内面ミガキ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外－淡茶褐色、内－黒色。F.1/2強。G.覆土中。H.外面に黒斑あり。内面黒色処理。
6	緑釉陶器 椀	A.口縁部径(14.0)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデの後、緑釉を施す。D.白色粒。E.内外－暗緑色、肉－暗灰色。F.口縁部1/6破片。G.覆土中。
7	灰釉陶器 椀	A.口縁部径(16.0)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデの後、刷毛塗りにより灰釉を施す。D.褐色粒、白色粒。E.内外－暗緑色、肉－暗灰色。F.口縁部1/6破片。G.覆土中。
8	椀	A.口縁部径15.4。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデの後ミガキ。D.赤色粒、白色粒。E.外－淡茶褐色、内－黒色。F.1/2。G.P 5(貯蔵穴内)。H.内面黒色処理。
9	椀	A.口縁部径(15.4)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土中。
10	高台付椀	A.口縁部径(14.0)、器高5.7、高台部径7.4。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.片岩粒、白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.1/3。G.カマド内。
11	高台付椀	A.口縁部径15.2、器高6.3、高台部径8.2。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.体部内外面回転ナデの後外面下半ケズリ。高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－明茶褐色。F.ほぼ完形。G.P 6内。
12	高台付椀	A.口縁部径15.0、器高6.3、高台部径8.4。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り後ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.ほぼ完形。G.P 6上面。H.外面に黒斑あり。
13	坏	A.口縁部径(14.0)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－暗褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土中。
14	高台付坏	A.口縁部径(11.6)、器高4.4、高台部径5.6。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.1/3。G.P 5 (貯蔵穴内)。
15	高台付椀	A.高台部径7.4。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.底部のみ。G.覆土中。

16	高台付坏	A.口縁部径(14.8)、器高5.6、高台部径(6.1)。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り後ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡灰色。F.1/3。G.床面付近。
17	皿	A.口縁部径10.4、器高2.6、底径6.8。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.完形。G.カマド内。
18	皿	A.口縁部径10.4、器高2.3、底径7.2。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.完形。G.P５（貯蔵穴内）。
19	皿	A.口縁部径(10.6)、器高2.5、底径(5.8)。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデの後、外面下半ケズリ。底部外面回転糸切り。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.1/3。G.覆土中。H.外面黒斑あり。
20	鉄製品	A.残存長5.3、幅0.7、厚さ0.3。C.偏平で断面は長方形を呈する。錆は地金部分にまで及び、安定している。F.両端部欠失。G.覆土中。
21	土　錘	A.長さ4.5、幅1.4、重さ７g。C.外面ナデ。D.白色粒。E.外－黒褐色。F.完形。G.覆土中。

第106号住居跡（第22図）

ＦⅡ区の中央部に位置する。住居の中央を南北方向の溝に切られているため、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、比較的整った方形を呈している。規模は、北西から南東方向が5.48m・北東から南西方向が5.65mを測る。住居の主軸方位は、N－26°－Wを向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で24cmある。各壁下には、幅20cm～30cm・深さ10cm弱の壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦である。住居中央部は比較的堅緻であるが、壁際の周辺部はやや軟弱である。

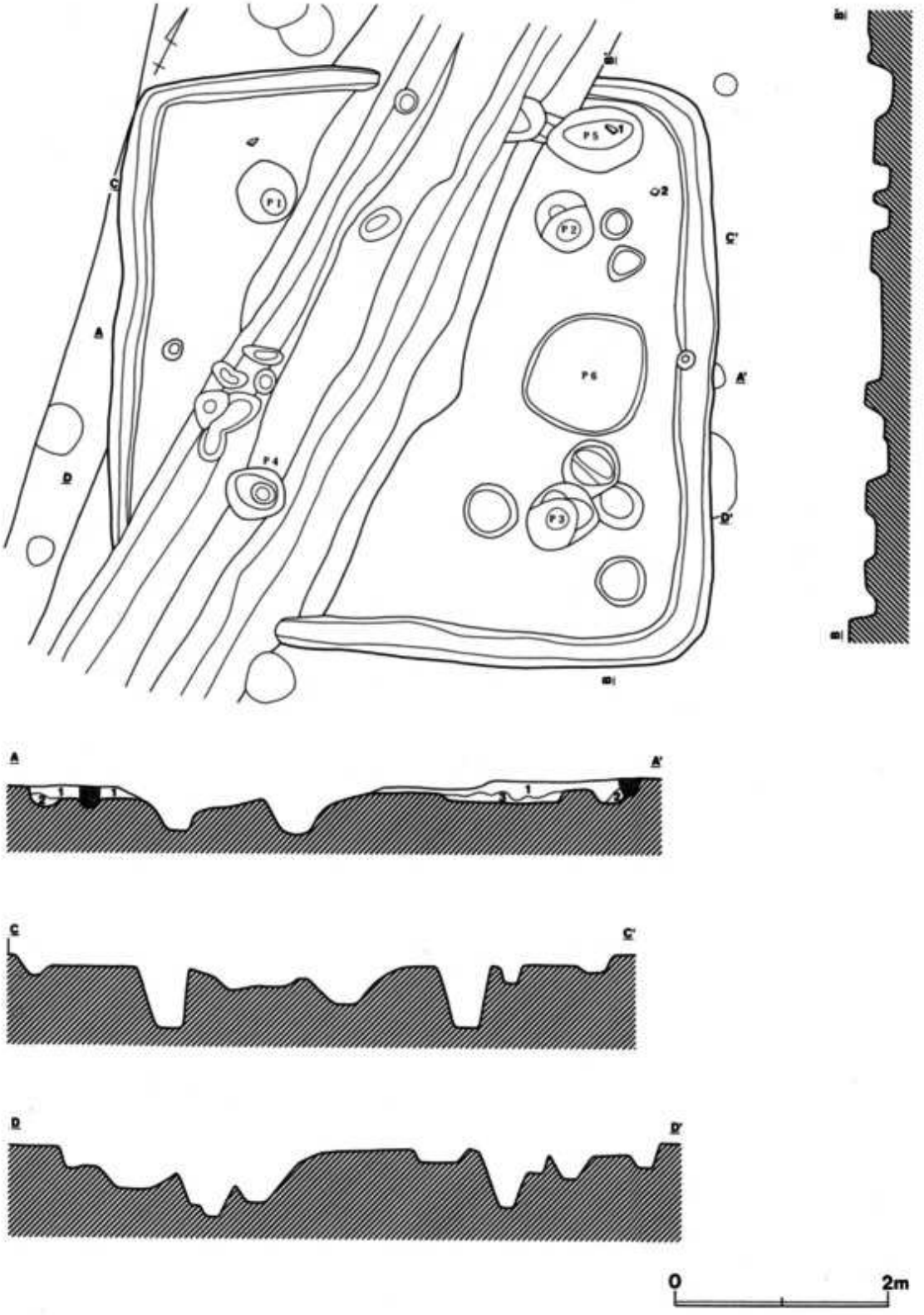
本住居跡に関係すると考えられるピットは、Ｐ１～Ｐ６の６箇所であがある。Ｐ１～Ｐ４は、主柱穴と考えられるもので、住居の対角線上に配置されている。いずれも長さが60cm前後の円形か楕円形ぎみの形態を呈し、床面からの深さはいずれも50cm前後で揃っている。Ｐ５は、おそらく貯蔵穴と推測されるもので、住居の北側コーナー部に位置し、92cm×60cmの楕円形を呈している。底面はやや丸みをもち、深さは20cm程度で浅い。Ｐ６は、直径111cmの規模の大きな不整円形を呈している。底面は広く平坦で、床面からの深さは10cm程度である。覆土は、焼土粒子や炭化粒子を含む黒褐色土（第３層）で、明確な貼床は施されていないが、床下土壙の可能性もある。

カマドは、検出された住居内では確認されなかったが、貯蔵穴と推測されるＰ５の位置から、溝によって切られている北西側壁の中央部付近に付設されていたものと思われる。

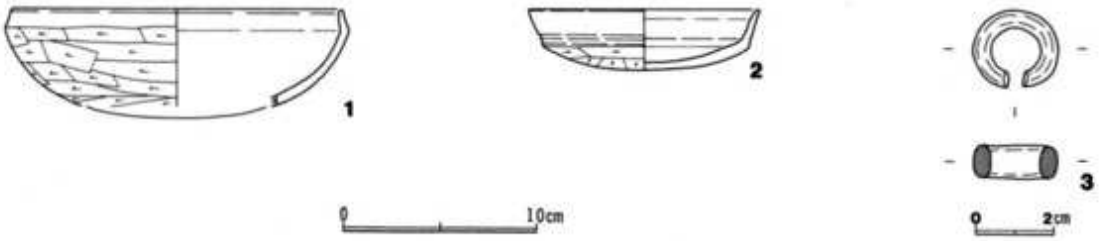
遺物は、比較的少ない。No１はＰ５上面の覆土中から出土したやや大ぶりの内屈口縁坏で、No２は住居北側コーナー部付近の覆土中から出土した鬼高系模倣坏である。土器以外では、住居の北東側壁溝内より、No３の銅地銀貼りの耳環が１個出土している。

第106号住居跡土層説明

第１層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第２層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）
第３層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）



第22図　第106号住居跡



第23図　第106号住居跡出土遺物

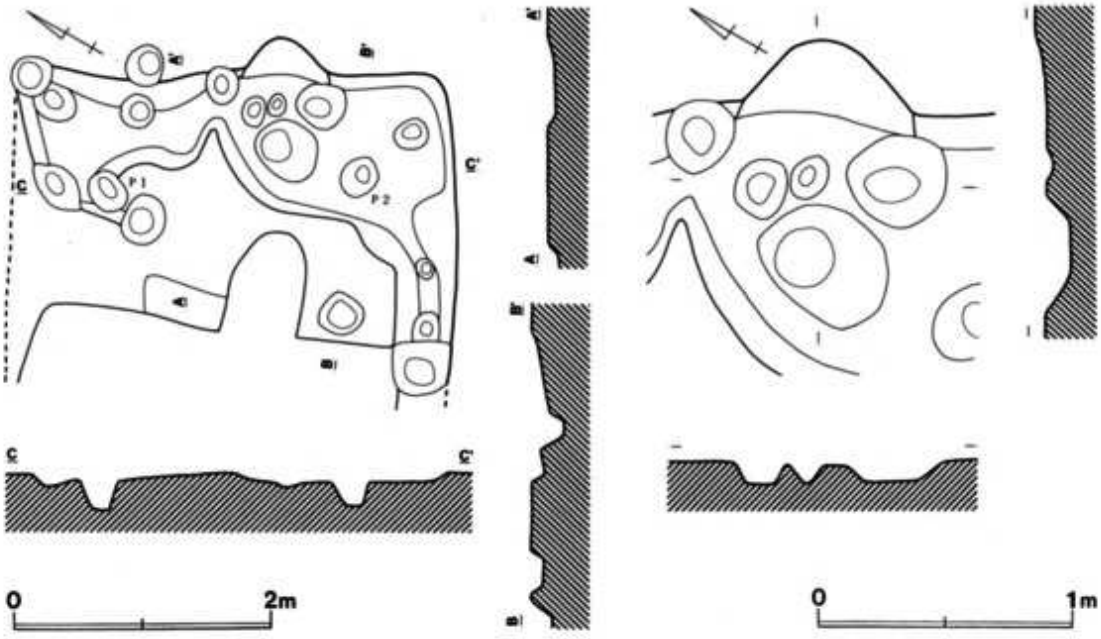
第106号住居跡出土遺物観察表

1	坏	A.口縁部径(17.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外－明橙褐色。F.1/3。G.覆土中。
2	坏	A.口縁部径12.0、器高3.1。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.1/2。G.覆土中。
3	耳　環	A.長さ2.0、幅2.2、厚さ0.8、重さ９ｇ。D.銅製。F.完形。G.北東側壁溝内。H.銅地銀貼り。

第107号住居跡(第24図)

ＦⅡ区の北側に位置し、北側には第102号住居跡が、南側には第108号住居跡が近接している。本住居跡は、すでに耕作によって住居の床面下まで削平され、住居の掘り方のみ残存している状態で、遺構の遺存状態は極めて劣悪である。また、住居跡の西側は、重複する第103号住居跡に切られているため、住居跡の全容は不明である。

平面形は、掘り方の範囲から推測すると方形もしくは東西方向に長い長方形を呈していたものと思われる。規模は、東西方向が約3.40m、南北方向は2.10mまで測れる。住居の主軸方位は、N－



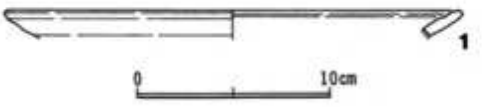
第24図　第107号住居跡

58°－Ｅを向いている。住居跡の掘り方は、住居中央部を掘り残し、壁際の周辺部を幅広の周溝状に掘る形態で、確認面からの深さは５㎝～10㎝程度ある。埋土は、ロームブロックを均一に含む暗茶褐色土である。

ピットは、小規模で浅いものが多数見られるが、この中のＰ１とＰ２は、その位置から主柱穴の可能性もある。両方とも直径35㎝前後の円形を呈し、確認面からの深さは約30㎝ある。

カマドは、住居東側壁の中央やや南側寄りに位置しているが、燃焼部の壁への掘り込みと掘り方内での焼土粒子の分布が見られた程度である。

遺物は、掘り方埋土中から土器片が少量出土しただけである。



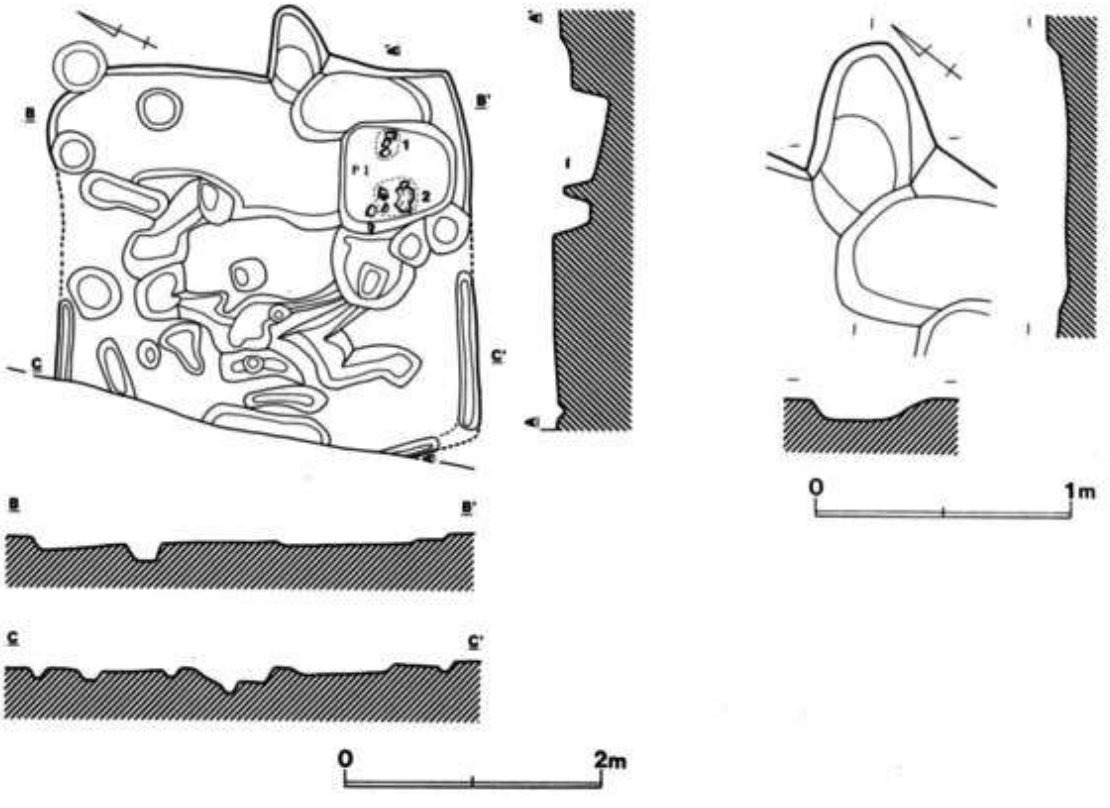
第25図　第107号住居跡出土遺物

第107号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径(23.8)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.口縁部1/8破片。G.掘り方埋土中。

第108号住居跡(第26図)

ＦⅡ区の北側に位置し、北側には第103号住居跡と第107号住居跡が、南東側には第104号住居跡が近接している。本住居跡は、すでに耕作によって住居の床面下まで削平され、住居の掘り方のみ残



第26図　第108号住居跡

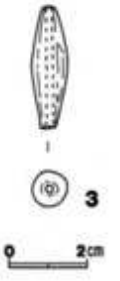
存している状態で、遺構の遺存状態は極めて劣悪である。また、住居跡の西側の一部は調査区外に位置するため、住居跡の全容は不明である。

平面形は、検出された掘り方の形態から推測すると、方形を基本にしていると思われるが、東西両側の壁はやや開きぎみであり、おそらく台形に近い形態を呈していたと思われる。規模は、南北方向が3.28m・東西方向は2.98mまで測れる。住居の主軸方位は、N－60°－Eを向いている。壁や床面の状態については、耕作によってすでに削平されているため不明であるが、南北両側の壁下と西側壁下には、一部に壁溝の痕跡が見られる。住居跡の掘り方は、住居中央部を掘り残し、壁際の周辺部を幅広く周溝状に掘る形態で、確認面からの深さは5㎝程度である。埋土は、ロームブロックを均一に含む暗褐色土である。

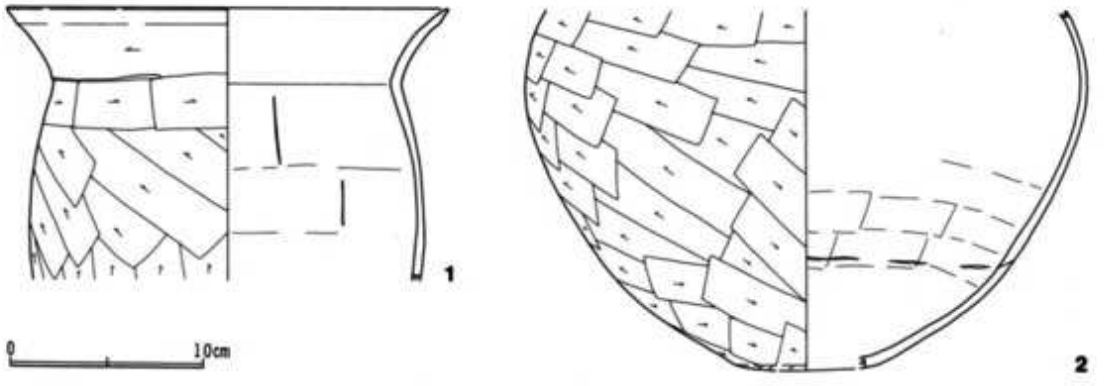
ピット状の形態を呈するものは、掘り方内に多数見られるが、いずれも5㎝～10㎝程度の浅いものであり、掘り方の段階で形成されたものがほとんどであろう。P1は、貯蔵穴と考えられるもので、住居の南東コーナー部に位置し、91㎝×86㎝のコーナー部が丸みをもつ方形ぎみの形態を呈している。底面は広く、確認面からの深さは38㎝ある。

カマドは、住居東側壁の中央やや南側寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に掘り込まれている。規模は、長さ76㎝・幅46㎝程度である。燃焼部は、住居の床面より低く、ほぼ平坦である。

遺物は、P1の貯蔵穴内からNo1やNo2の甕が出土している。土器以外では、掘り方埋土中からNo3の土錘が1個出土している。



第27図　第108号住居跡出土土錘



第28図　第108号住居跡出土遺物

第108号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径(23.0)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－淡茶褐色、内－黒褐色。F.口縁部1/4。G.P1(貯蔵穴)上面。
2	甕	A.底径7.4。B.粘土紐積み上げ。C.胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.外－黒褐色、内－淡褐色。F.1/3。G.P1(貯蔵穴)上面。H.外面に煤の付着あり。
3	土　錘	A.長さ3.2、幅0.9、重さ5g。C.外面ナデ。D.白色粒。E.外－黒褐色。F.完形。G.掘り方埋土中。

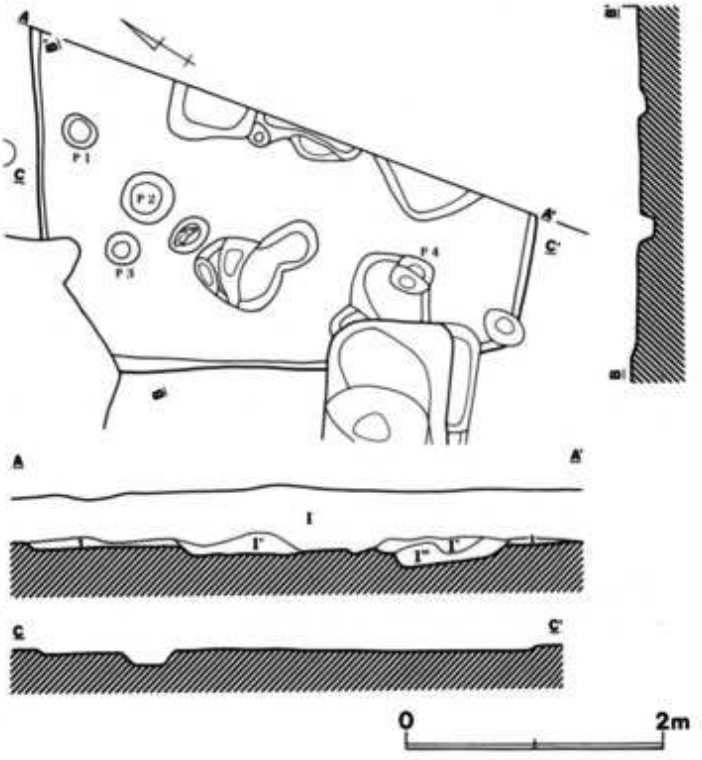
第109号住居跡(第29図)

ＦⅡ区の北側に位置し、北側には第104号住居跡が、南側には第106号住居跡がある。本住居跡は、第105号住居跡や第68号土壙と重複し、それらに住居跡の一部を切られている。また、住居跡の東側半分は調査区外に位置するため、住居跡の全容は不明である。耕作による削平は、住居跡の床面近くに及んでおり、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、方形もしくは長方形を呈するものと思われるが、南東側壁はやや開きぎみである。規模は、北西から南東方向が3.88m・南西から北東方向は2.42mまで測れる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは６㎝程度である。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅緻である。

ピットは、撹乱によるものが多く、覆土の状態から本住居跡に関係すると考えられるものは、Ｐ１～Ｐ４の４箇所である。Ｐ１とＰ２は、直径25㎝と40㎝の円形を呈し、深さはいずれも10㎝程度の浅いものである。Ｐ３とＰ４は、その位置から主柱穴の可能性も考えられるものである。いずれも直径30㎝程度の円形を呈し、深さはＰ３が15㎝・Ｐ４が30㎝ある。

遺物は、覆土中から土器の小破片が少量出土しただけである。



第29図　第109号住居跡

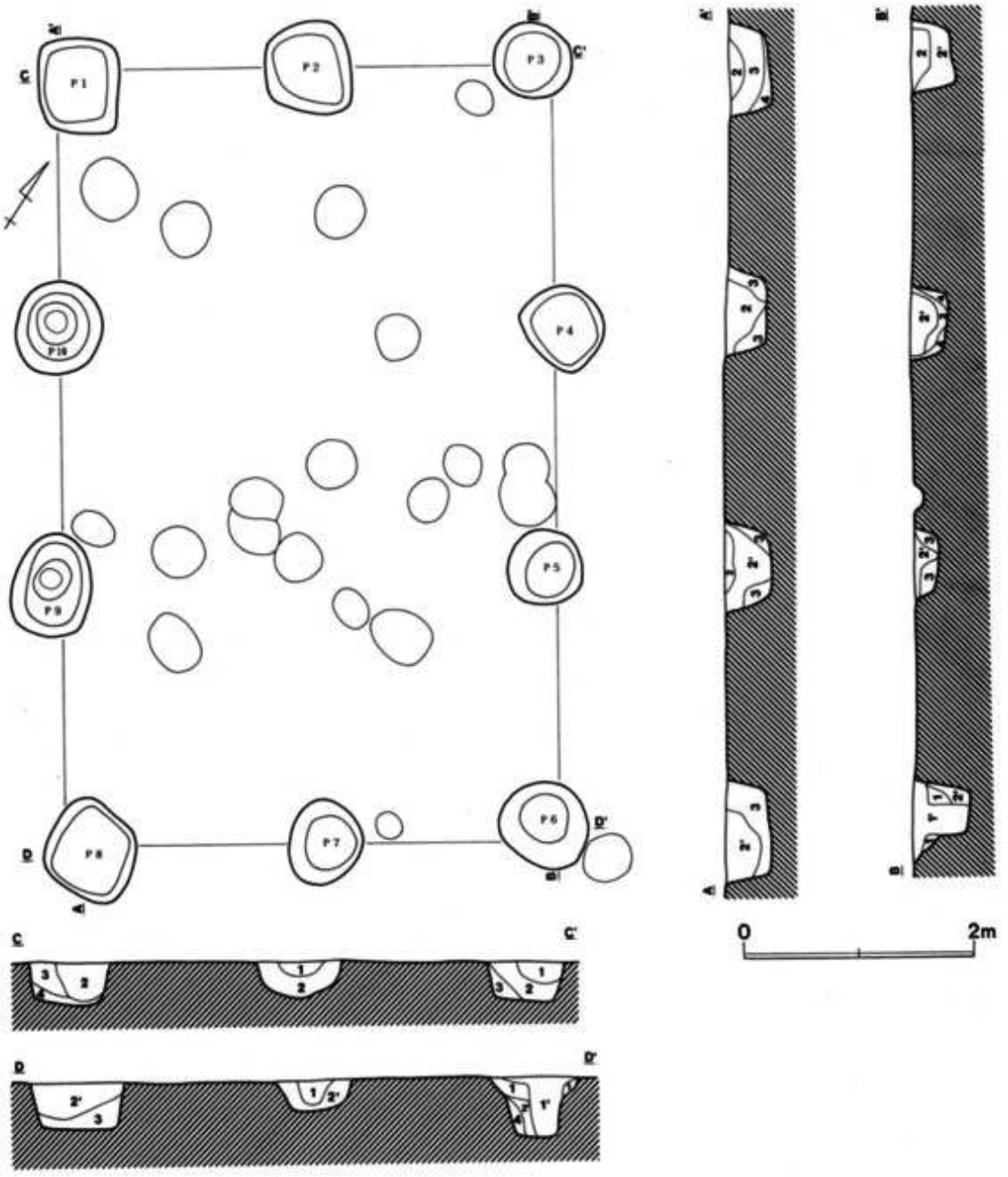
第109号住居跡土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。

第Ⅰ'層：耕作土(A軽石混入)。

第Ⅰ"層：耕作土(A軽石多量混入)。

第１層：黒褐色土層（ローム粒子･ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）



第30図　第７号掘立柱建物跡

第７号掘立柱建物跡土層説明

第１層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第１'層：暗灰褐色土層（鉄斑・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：黒灰褐色土層（鉄斑・ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２'層：黒灰褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗灰褐色土層（鉄斑・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：淡褐色土層　（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

2．掘立柱建物跡

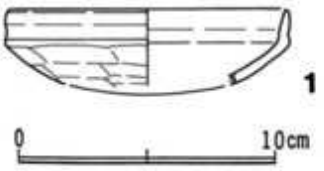
第７号掘立柱建物跡(第30図)

Ｄ区の北西側に位置し、北西側には第８号掘立柱建物跡が近接し、さらにその北側には第１号円形周溝遺構がある。

建物跡の形態は、北西から南東方向が３間、北東から南西方向が２間の長方形を呈する側柱式である。規模は、桁行6.60m・梁行4.20mを測る。柱心間は、桁行側が１間2.20m・梁行側が１間2.10mの等間隔である。建物の桁行方向は、N－34°－Wを向いている。

柱通りは比較的良く、桁行側と梁行側の柱穴列ともほぼ直線上に並んで配列され、相互に良く対応している。柱穴は、比較的規模が大きく、長さ80cm前後の円形や楕円形を呈するものが多いが、コーナー部のＰ１やＰ８は方形ぎみの形態を呈している。確認面からの深さは、最低20cm～最高50cmまであるが、40cm程度のものが主体である。Ｐ２とＰ７の棟持柱は、深さがそれぞれ30cmと27cmで、側柱穴に比べてやや浅くなっている。覆土は、黒灰褐色土によって埋め戻されているが、中には柱痕の見られるものもある。

遺物は、柱穴覆土中から甕や坏の破片が少量出土しただけである。



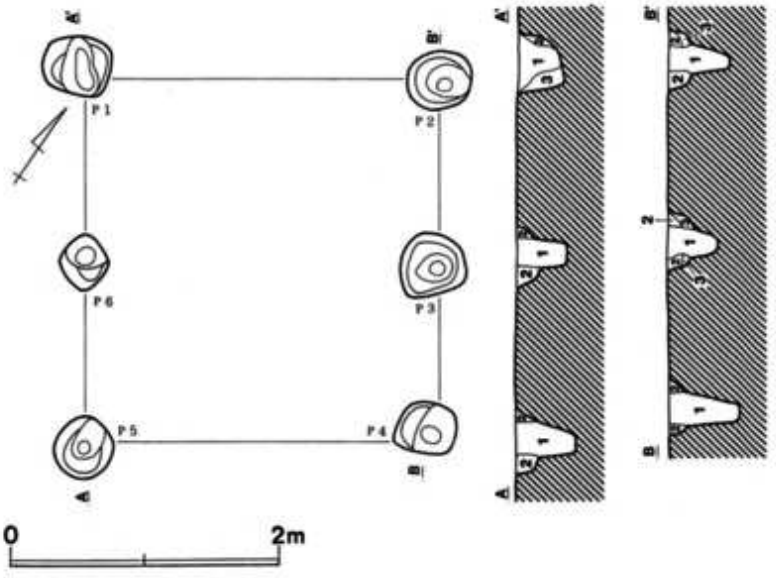
第31図　第７号掘立柱建物跡出土遺物

第７号掘立柱建物跡出土遺物観察表

1	坏	A.口縁部径(11.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－茶褐色。F.1/4破片。G.Ｐ５内。

第８号掘立柱建物跡(第32図)

Ｄ区の北西側に位置し、南東側には第７号掘立柱建物跡が近接し、北側には第１号円形周溝遺構



第８号掘立柱建物跡土層説明

第１層：黒褐色土層（鉄斑・白色粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第２層：暗灰色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第32図　第８号掘立柱建物跡

がある。建物跡の形態は、北西から南東方向が２間、北東から南西方向は中間柱の柱穴がないため明確ではないが、おそらく北西から南東方向の側柱穴と同じく２間の方形を呈する側柱式と考えられる。規模は、両方向とも2.60mを測る。北西から南東方向の側柱穴の柱心間は、１間1.30mの等間隔である。建物の北西から南東方向の側柱穴の方向は、第７号掘立柱建物跡の桁行方向と同じく、N－34°－Wを向いている。

柱穴は、比較的規模が小さく、いずれも長さ45cm前後の円形か楕円形ぎみの形態を呈している。いずれの柱穴も直径25cm程度の円形の柱痕(第１層)が見られる。確認面からの深さは32cm～52cmあり、柱を立てたかあるいは柱を打ち込んだ後、暗灰色土(第２層)とロームブロックを均一に含む暗黄褐色土(第３層)によって埋められている。遺物は、何も出土しなかった。

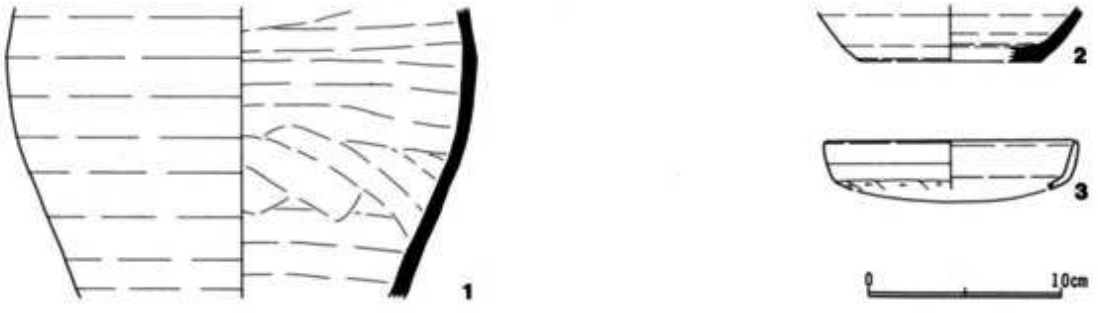
第９号掘立柱建物跡(第34図)

Ｄ区の東端に位置し、重複する第10号掘立柱建物跡と第31号土壙に切られ、第11号掘立柱建物跡を切っている。本建物跡は、調査区内で検出された側柱穴の形態から見ると、建物の東側が調査区外に延びる可能性もあるため、現状では建物の全容は不明確である。

建物跡の形態は、南北方向が２間、東西方向は２間かそれ以上の方形もしくは長方形を呈し、建物内部に束柱をもつ総柱式である。規模は、南北方向が5.40mあり、東西方向は5.40mかそれ以上である。柱心間は、東西･南北両方向とも１間2.70mの等間隔である。建物の南北方向は、N－7°－Wを向いている。

柱穴は、建物内部の束柱の柱穴に比べて側柱穴の規模が大きくなっている。側柱穴は、コーナー部の柱穴は直径80cmの円形ぎみの形態であるが、中間の柱穴は90cm×60cm程度の長方形ぎみの形態を呈している。側柱穴の深さは、いずれも60cm前後で比較的揃っている。束柱の柱穴は、直径60cm前後の円形ぎみの形態を呈し、深さは50cm程度で、側柱穴に比べて若干浅くなっている。

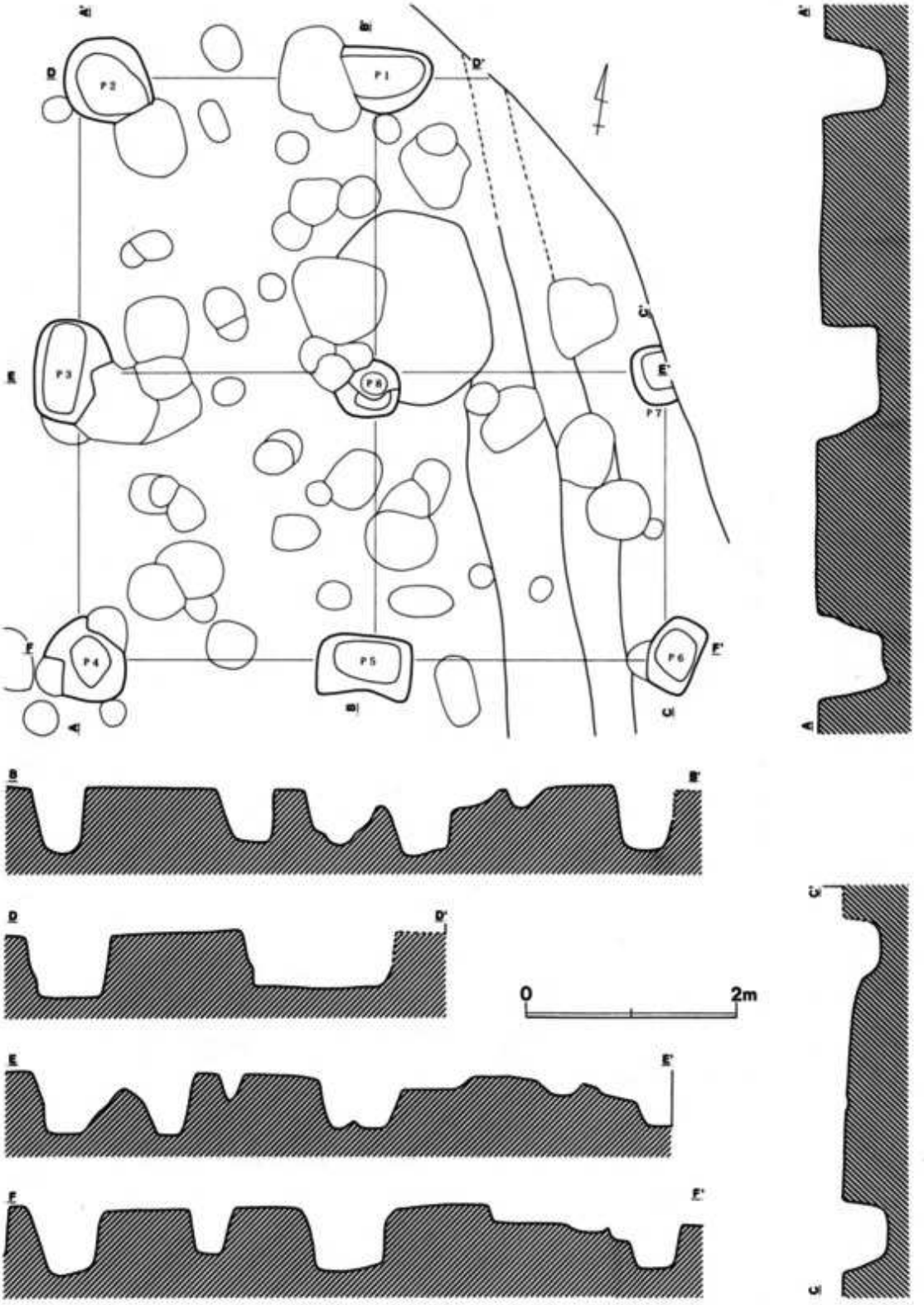
遺物は、柱穴覆土中から須恵器の壷と坏や土師器の甕と坏の土器片が少量出土しただけである。



第33図　第９号掘立柱建物跡出土遺物

第９号掘立柱建物跡出土遺物観察表

1	須恵器 壷	A.最大径(24.4)。B.粘土紐積み上げ後ロクロ整形。C.胴部外面回転ナデの後ナデ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡灰色。F.胴部1/4破片。G.Ｐ２内。
2	須恵器 坏	A.底部径(9.4)。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転篦ケズリ。D.白色粒。E.内外－淡灰褐色。F.底部1/4破片。G.Ｐ１内。



第34図　第９号掘立柱建物跡

3	坏	A.口縁部径(13.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。D.白色粒。E.外－暗橙褐色、内－淡褐色。F.口縁部1/6破片。G.P５内。

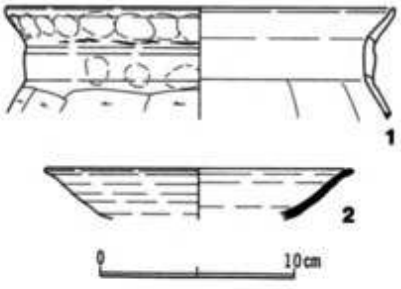
第10号掘立柱建物跡(第36図)

D区の東端に位置し、重複する第９号掘立柱建物跡・第11号掘立柱建物跡・第31号土壙を切っている。調査区内で検出されたのは建物跡の西端だけであるため、本建物跡の全容は不明である。

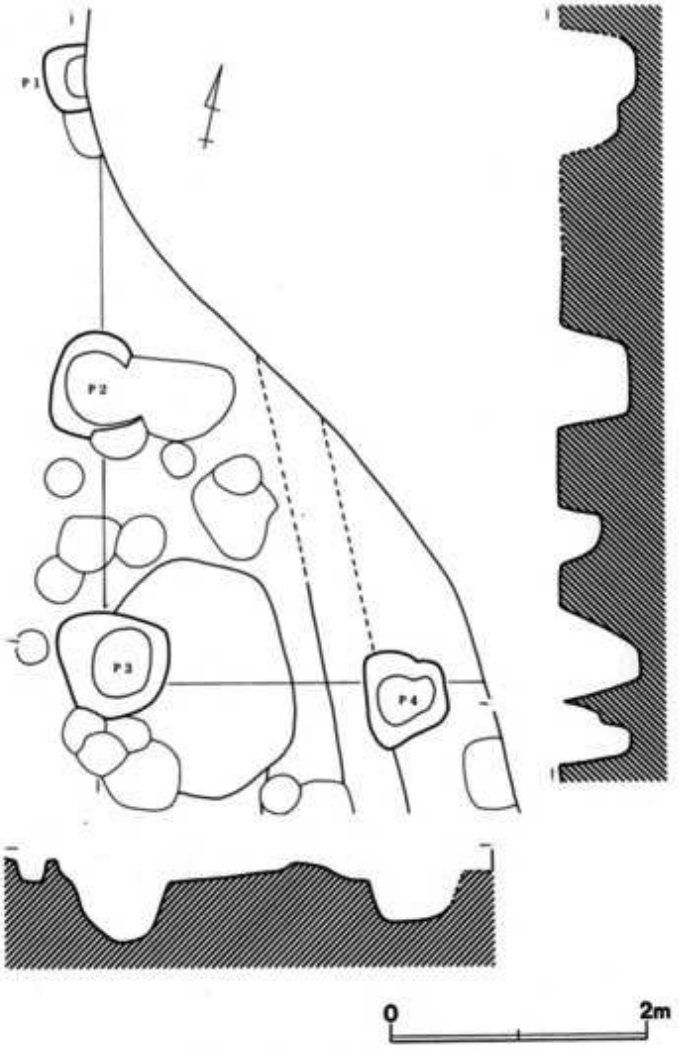
建物跡の形態は、南北方向が２間・東西方向は１間以上の方形か長方形を呈するものと思われるが、総柱式か側柱式かは分からない。規模は南北方向が4.60mで、柱心間は、南北・東西両方向とも１間が2.30mである。建物跡の南北方向は、N－11°－Wを向いている。

柱穴は、やや不整ながら長さ50cm～80cmの方形ぎみの形態を呈するものが多い。確認面からの深さは、50cm～60cmで比較的深く揃っている。

遺物は、柱穴覆土中から須恵器や土師器の破片が少量出土しただけである。



第35図　第10号掘立柱建物跡出土遺物



第36図　第10号掘立柱建物跡

第10号掘立柱建物跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径(20.2)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－明橙褐色。F.口縁部1/4破片。G.P３内。
2	須恵器坏	A.口縁部径(16.0)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外-暗灰色。F.口縁部1/8破片。G.P２内。

第37図　第11号掘立柱建物跡

第11号掘立柱建物跡(第37図)

D区の東端に位置し、重複する第９号掘立柱建物跡と第10号掘立柱建物跡に切られている。調査区内で検出されたのは建物跡の西側だけであり、東側はさらに調査区外に延びる可能性もあるため、本建物跡の全容は現状では不明確である。

建物跡の形態は、南北方向が３間、東西方向は２間以上の方形か長方形を呈する側柱式と考えられる。規模は、南北方向が6.40m・東西方向は４m以上ある。柱心間は、建物の南北方向と東西方向では１間の間隔が異なっている。南北方向は、北から１間2.20m・2.00m・2.20mで、両端の１間に比べて中間の１間がやや短くなっている。東西方向は、検出された範囲では１間２mの等間隔である。建物跡の南北方向は、N－15°－Wを向いている。

柱通りは、比較的良く、南北・東西両方向とも直線上に整然と配列されている。柱穴は、比較的規模が大きく、いずれも長さ70cm前後の円形か楕円形の形態を呈している。確認面からの深さは、45cm～60cmあり、底面は広く平坦である。

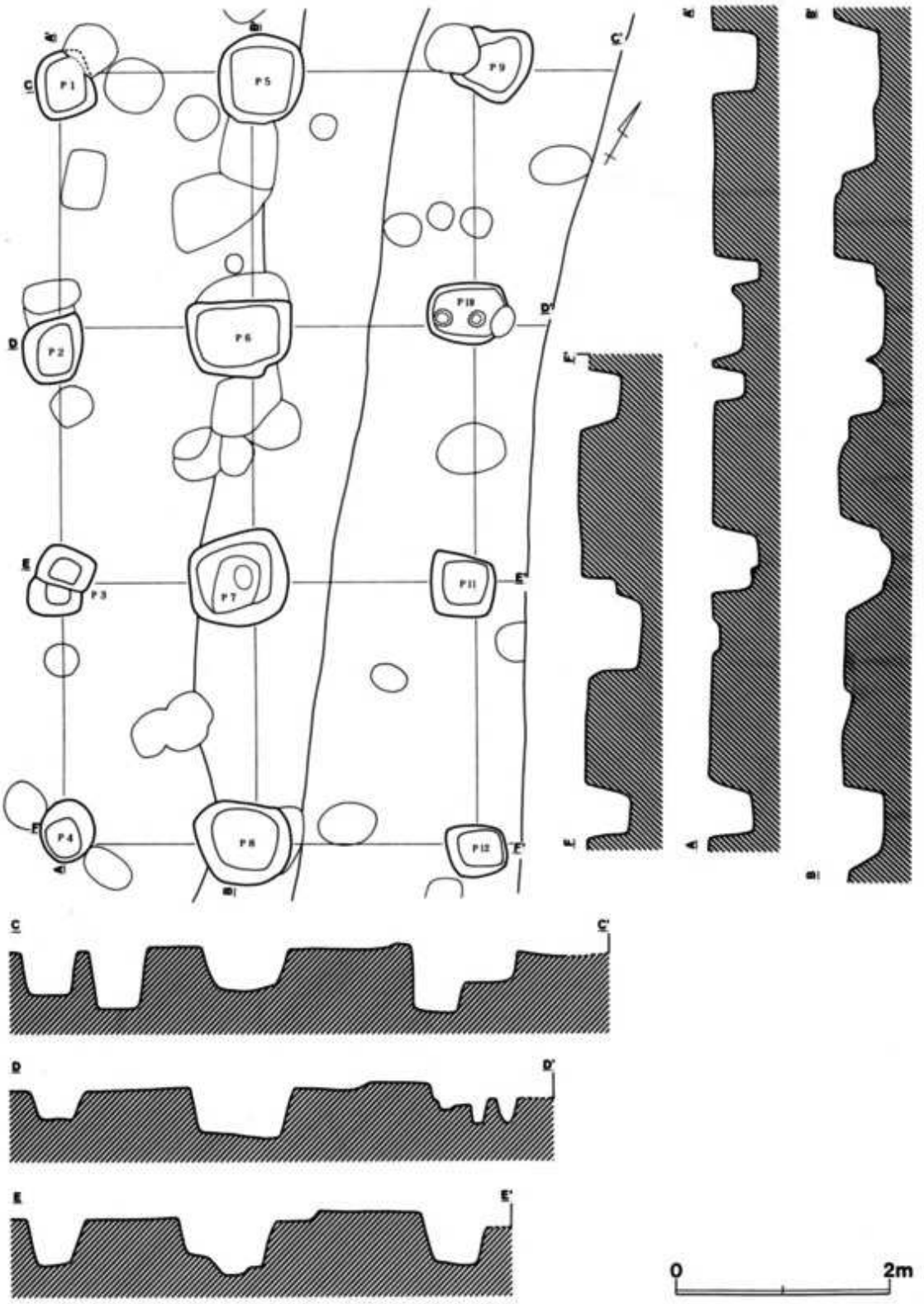
遺物は、柱穴覆土中から土師器や須恵器の小破片が少量出土しただけである。

第12号掘立柱建物跡(第38図)

D区の東端に位置し、重複する第13号掘立柱建物跡を切っている。調査区内で検出された建物を構成する柱穴形態の関係から見ると、本建物跡はさらに東側の調査区外に延びる可能性あるため、建物跡の全容は明確ではない。

建物跡の形態は、北西から南東方向が３間、北東から南西方向は１間以上で、建物内部に束柱をもつ総柱式と推測され、南西端の１間は庇(縁)と考えられる。規模は、北西から南東方向が7.20m、北東から南西方向は庇部分を含めると５m以上はあるものと思われる。柱心間は、建物の梁行側と桁行側では若干異なっており、北西から南東方向が１間2.40mの等間隔で、北東から南西方向は１間2.00m程度である。庇(縁)部分の柱心間は、1.80mでやや短くなっている。建物跡の北西から南東方向は、N－30°－Wを向いている。

柱通りは、比較的良く、いずれの柱穴列とも直線上に配列されている。柱穴は、いずれも方形か長方形ぎみの形態を呈しているが、Ｐ５～９とＰ12の側柱、Ｐ10とＰ11束柱、Ｐ１～Ｐ４の庇(縁)では、柱穴掘り方の規模が異なっている。側柱穴(Ｐ５～９とＰ12)は、建物南西側の側柱穴(Ｐ５～Ｐ８)と北西側(Ｐ９)及び南東側(Ｐ12)の側柱穴では、その規模が明確に異なっている。南西側の側柱穴(Ｐ５～Ｐ８)は、建物のコーナー部に当たるＰ５とＰ８は長さ80cm程度の方形ぎみの形態であり、中間のＰ６とＰ７はほぼ90cm×80cmの長方形を呈している。確認面からの深さは、40cm～50cmで揃っている。このＰ５～Ｐ８は、建物の他の柱穴に比べて規模が大きく整った形態であることから、建物の桁行側の側柱穴である可能性が考えられる。北西側(Ｐ９)及び南東側(Ｐ12)の側柱穴は、長さ50cm～60cm・深さ30cm～40cmで、他の柱穴と大差ない形態であることから、あるいは建物の梁行側の棟持柱の柱穴の可能性もあろう。束柱の柱穴(Ｐ10・Ｐ11)は、長さ60cm～70cmで、確認面からの深さは30cm～50cmある。庇(縁)の柱穴(Ｐ１～Ｐ４)は、いずれも長さ50cm～60cmの長方形ぎみの形態で、柱穴の長軸方向を建物の北西から南東方向に合わせているものが多い。確認面からの深



第38図　第12号掘立柱建物跡

さは、30cm～40cmで比較的揃っている。覆土は、いずれもロームブロックを均一に含む黒褐色土で、覆土中には柱痕は見られなかった。

遺物は、柱穴覆土中より須恵器の高坏(No１)と蓋の破片や、土師器の甕・鉢(No２)・坏(No３)の破片が少量出土しただけである。

第39図　第12号掘立柱建物跡出土遺物

第12号掘立柱建物跡出土遺物観察表

1	須恵器 高坏	A.口縁部径(19.4)。B.ロクロ成形。C.口縁部外面及び体部内面回転ナデ。体部外面ナデの後一部ケズリ(回転篦ケズリの可能性あり)。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外-淡灰褐色、肉－淡灰色。F.口縁部1/3破片。G.Ｐ９内。
2	大形鉢	A.底部径(9.0)。B.粘土紐積み上げ。C.胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D.白色粒。E.内外－暗褐色。F.底部1/4破片。G.Ｐ２内。
3	坏	A.口縁部径(13.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ。D.白色粒。E.外－暗橙褐色、内－淡褐色。F.1/4破片。G.Ｐ３内。

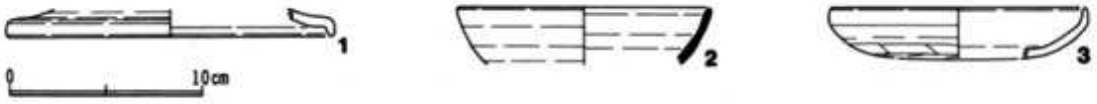
第13号掘立柱建物跡(第41図)

Ｄ区の東端に位置し、重複する第12号掘立柱建物跡に切られている。建物跡の北東側半分は、調査区外に位置するため、建物跡の全容は不明である。

建物跡の形態は、北西から南東方向が３間・北東から南西方向が２間以上の側柱式である。規模は、北西から南東方向が6.90m、北東から南西方向は3.50m以上と思われる。柱心間は、北西から南東方向が１間2.30mの等間隔で、北東から南西方向も調査区内で検出された１間は約2.30mである。建物跡の北西から南東方向は、Ｎ－24°－Ｗを向いている。

柱通りは、比較的良く、いずれの柱穴列とも直線上に配列されている。柱穴は、長さ70cm前後・幅50cm前後の長方形ぎみの形態を呈するものが多いが、建物跡西側コーナー部のＰ２だけは、長さ105cm・幅65cmを測り、他に比べて規模が大きくなっている。確認面からの深さは、40cm～55cmで比較的揃っている。

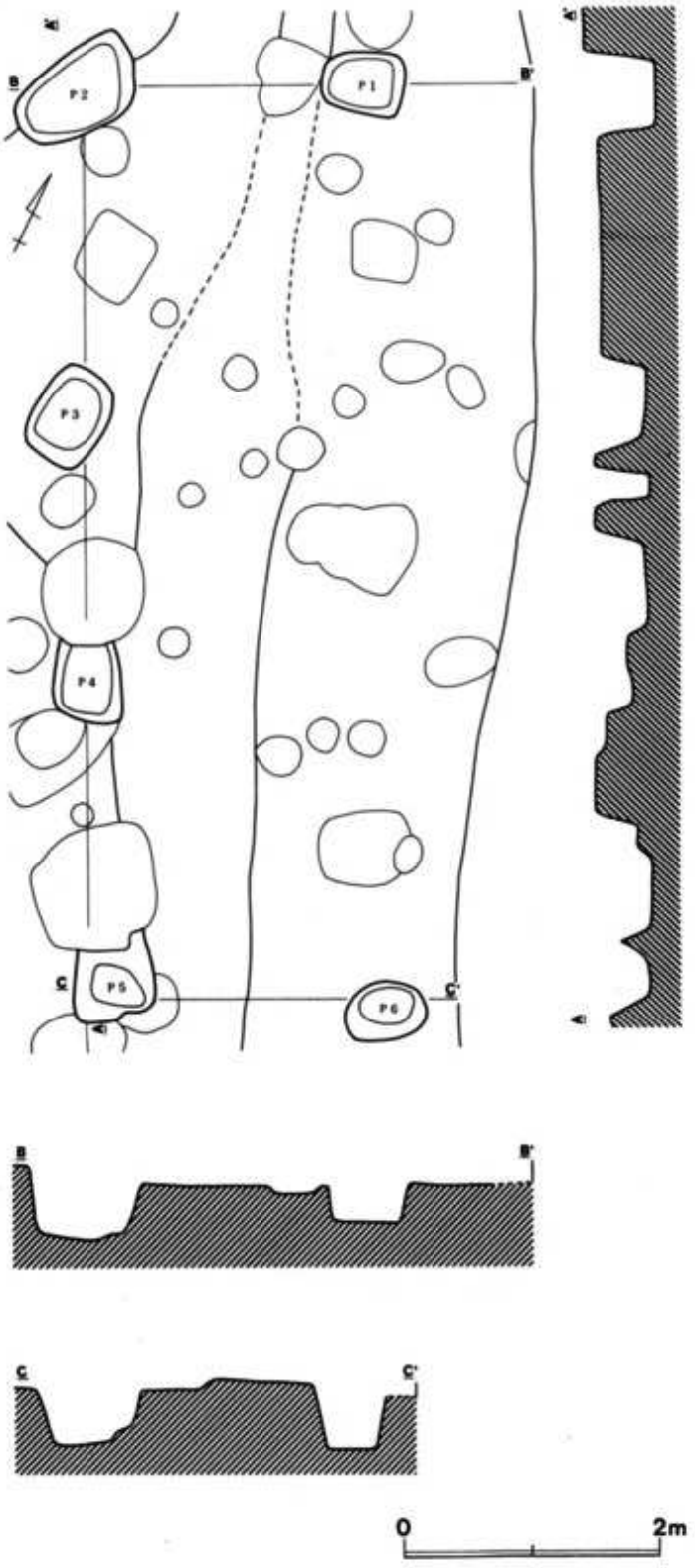
遺物は、柱穴覆土中より須恵器や土師器の小破片が少量出土しただけである。



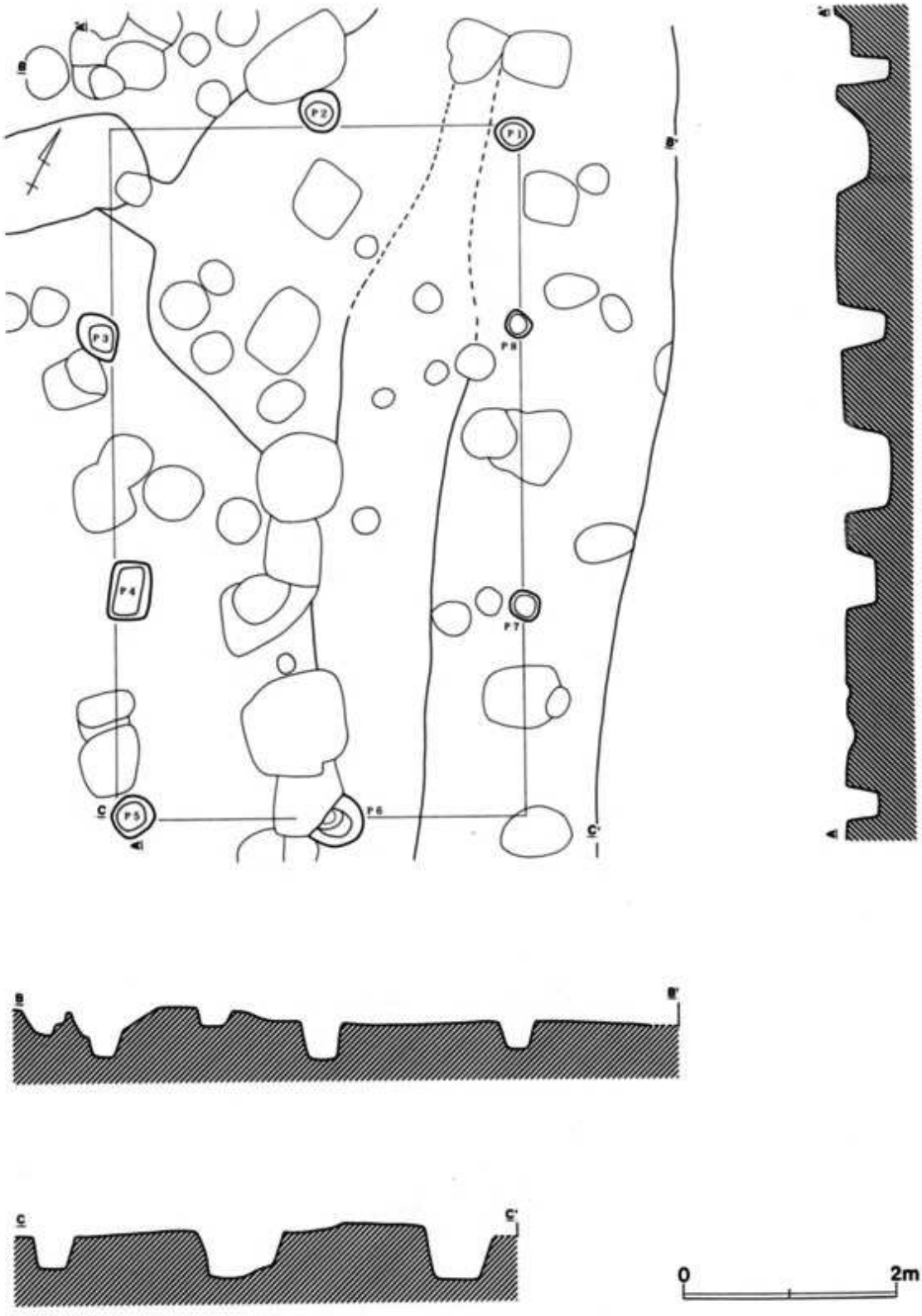
第40図　第13号掘立柱建物跡出土遺物

第13号掘立柱建物跡出土遺物観察表

1	蓋	A.口縁部径(17.0)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.口縁部1/12破片。G.Ｐ１内。



第41図　第13号掘立柱建物跡



第42図　第14号掘立柱建物跡

2	須恵器坏	A.口縁部径(13.0)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。D.白色針状物質。E.内外－淡灰白色。F.1/10破片。G.P 1内。
3	坏	A.口縁部径(13.2)、器高(2.7)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.1/8破片。G.P 1内。

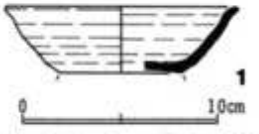
第14号掘立柱建物跡(第42図)

D区の東端に位置する。第12号掘立柱建物跡や第13号掘立柱建物跡及び第32号土壙と重複しているが、本建物跡との切り合い関係は把握できなかった。

建物跡の形態は、北西から南東方向が3間・北東から南西方向が2間の側柱式である。規模は、桁行6.50m・梁行3.80mを測る。柱心間は、桁行側は間隔が不揃いで、両端の1間はいずれも2.00mで、中間の1間はやや広く2.50mある。梁行側は1間1.90mの等間隔である。建物跡の桁行方向は、N－27°－Wを向いている。

柱通りは、あまり良くなくやや蛇行ぎみであるが、桁行・梁行両側とも柱穴列の直線上を完全に外れるものはない。柱穴は、直径20cm～45cmの円形の形態が主体であるが、P 4だけは54cm×38cmの長方形を呈している。確認面からの深さは、P 7の最低15cm～P 3とP 6の最高45cmまで、全体にやや不揃いである。

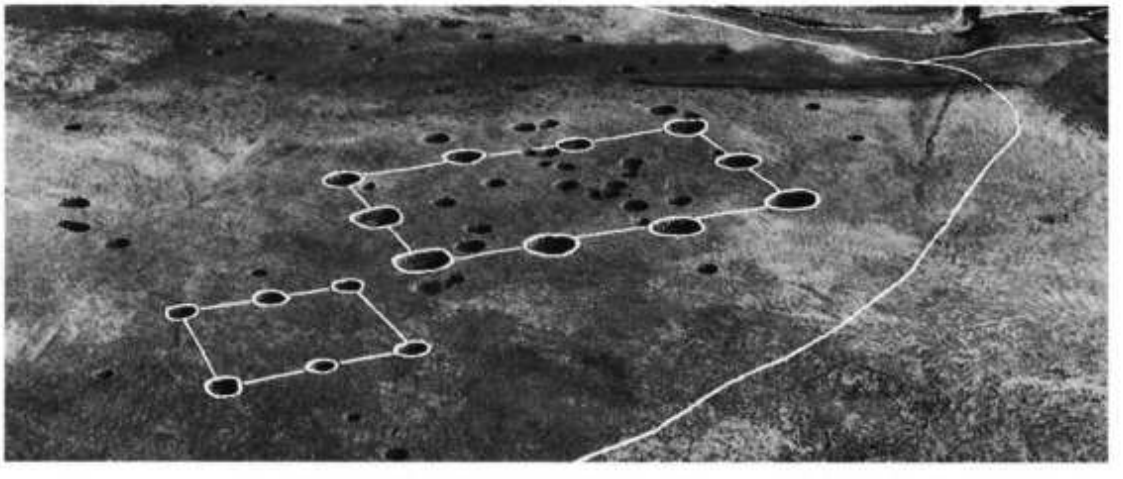
遺物は、P 5の覆土中から須恵器坏の破片やP 6の覆土中から土師器の小破片が少量出土しているが、本建物跡の時期に関係するものか明確ではない。本建物跡は、その形態から見ると、中世以降の可能性も考えられる。



第43図　第14号掘立柱建物跡出土遺物

第14号掘立柱建物跡出土遺物観察表

1	須恵器坏	A.口縁部径(12.0)、器高3.4、底径(6.4)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.白色粒。E.内外－暗灰色。F.1/3破片。G.P 5内。

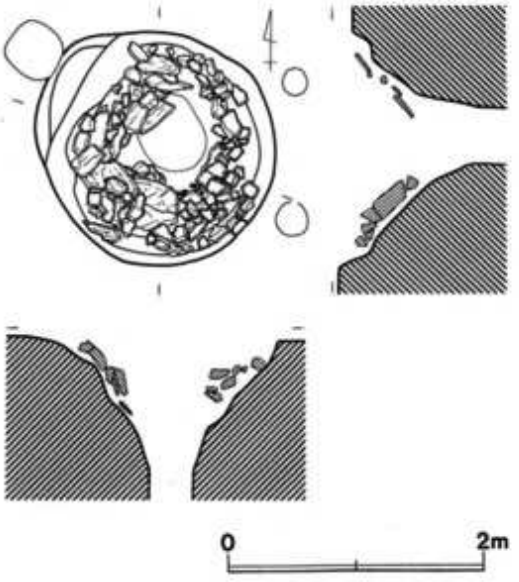


3．井　戸　跡

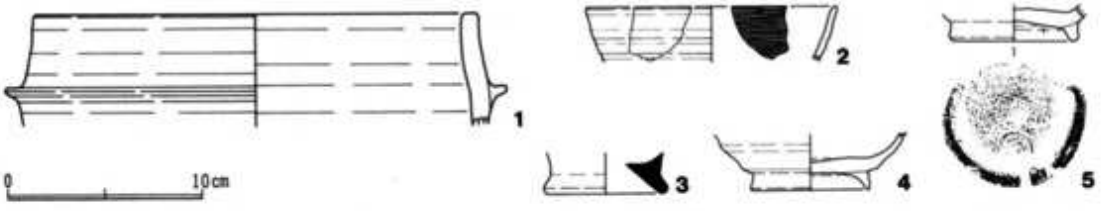
第６号井戸跡（第44図）

Ｄ区の西側に位置し、西側には第101号住居跡がある。井戸掘り方の平面形は、2.00m×1.80mの比較的整った円形を呈し、北西側に若干浅い張り出しを伴っている。断面の形態は、上半が緩やかで内湾ぎみに傾斜して窄まり、中位で直径60cm程度の円形の井筒状に、傾斜が急になって直線的に落ち込んでいる。確認面からの深さは、完掘できなかったため不明であるが、1.50m以上はあると思われる。上半部からは、井筒を取り囲むように片岩を主体とした多量の自然石が出土しているが、石の平坦面を揃えた小口積みや横積み等によって丁寧に石組されたような形跡は見られない。これらの石は、その形状や大きさも様々であり、意識的に積んだような様相が窺えないことや、井戸下半部に井筒構造物の痕跡も見られないことから、井筒の裏込めに使用されたものである可能性が高いと考えられ、木枠か木組等の井筒構造物は本井戸の廃棄に伴って抜き取られたものと思われる。

遺物は、覆土中から羽釜や内面黒色処理の椀や高台付坏などの10世紀代の土器片が少量出土しただけである。



第44図　第６号井戸跡



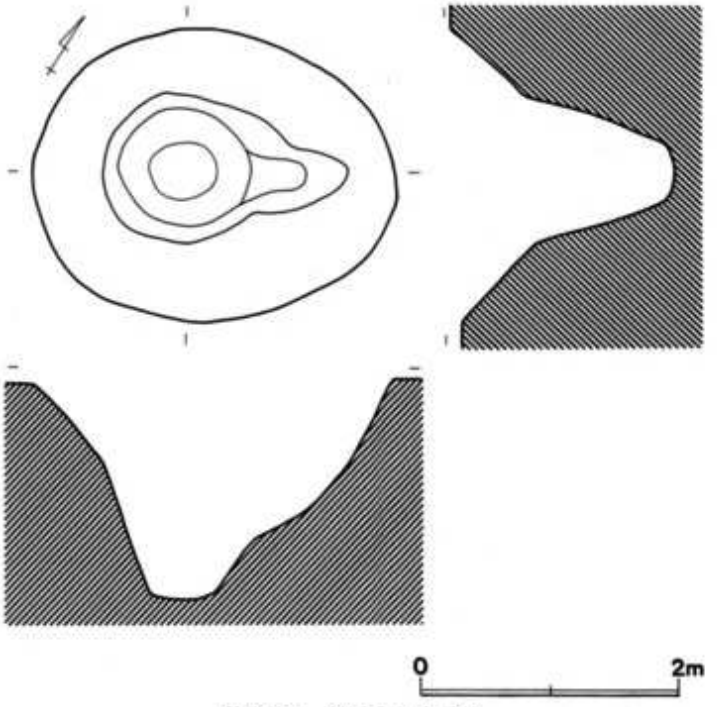
第45図　第６号井戸跡出土遺物

第６号井戸跡出土遺物観察表

1	羽　釜	A.口縁部径(23.0)。B.粘土紐積み上げ。鍔貼り付け。C.口縁部内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.口縁部1/8破片。G.覆土中。
2	椀	A.口縁部径(13.0)。B.ロクロ成形。C.外面回転ナデ、内面ミガキ。回転ナデ。D.白色粒。E.外－淡茶褐色、内－黒色。F.小破片。G.覆土中。H.内面黒色処理。
3	須恵器高台付	A.高台部径(6.4)。B.高台部貼り付け。C.高台部内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外-暗灰色。F.高台部1/2破片。G.覆土中。
4	高台付坏	A.高台部径6.0。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－明茶褐色。F.底部のみ。G.覆土中。
5	高台付坏	A.高台部径6.6。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗褐色。F.底部のみ。G.覆土中。

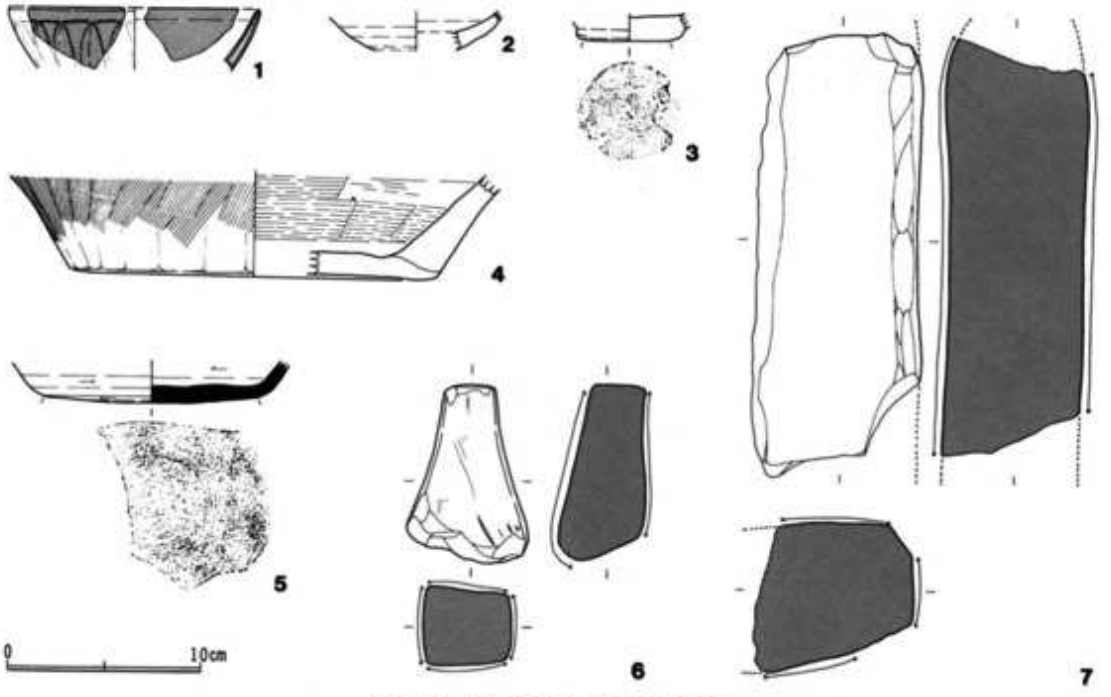
第７号井戸跡(第46図)

ＦＩ区の中央部に位置する。本井戸跡の周辺には長さ40cm～50cm・深さ10cm～20cmのピットがいくつか見られるが、本井戸跡に伴うものかは不明である。井戸掘り方の平面形は、2.85m×2.24mの南西から北東方向に長い楕円形を呈している。断面の形態は、上半が内湾ぎみに緩やかに傾斜して窄まるが、北西側に比べて北東側は長く深くなっている。下半は1.02m×92cmの楕円形を呈し、壁は直線的で傾斜が急になっている。確認面からの深さは1.70mあり、底面はやや狭く平坦である。



第46図　第７号井戸跡

遺物は、中世の青磁椀(No１)・山茶碗窯系の皿(No２)・常滑窯系甕(No４)や在地産の土師器皿(No３)などの陶磁器や土器の破片が、覆土中から出土している。この他では、砥石が２点出土しているが、No７はNo６のような一般的な柱状の小形品と違ってかなり大形品であり注目される。



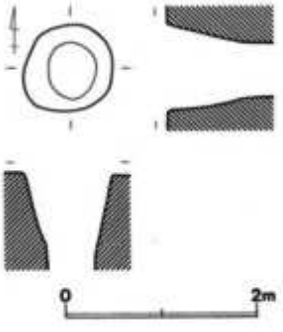
第47図　第７号井戸跡出土遺物

第７号井戸跡出土遺物観察表

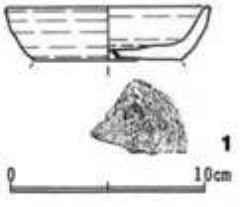
1	龍泉窯系青磁碗	A.口縁部径(3.0)。B.ロクロ成形。C.体部外面鎬蓮弁文、内面ナデ。D.白色粒。E.内外－淡緑色、肉－淡灰色。F.口縁部1/6破片。G.覆土中。H.内外面とも淡緑色釉を施す。
2	山茶碗窯皿	B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。D.白色粒、黒色粒。E.内外－淡灰色。F.体部1/4破片。G.覆土中
3	土師器皿	A.底径5.6。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.底部のみ。G.覆土中。
4	常滑窯系甕	A.底径(19.0)。B.粘土紐積み上げ後ロクロ整形。C.胴部外面篦ナデ後ハケ、内面ハケ。底部内外面ナデ。D.橙褐色粒、白色粒。E.内外－暗褐色、内－暗灰色。F.底部1/8破片。G.覆土中。
5	須恵器坏	A.底径(12.6)。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転篦ケズリ。D.白色粒。E.内外－暗灰色、肉－暗茶褐色。F.底部1/3破片。G.覆土中。H.混入品。
6	砥石	A.長さ8.2、最大幅6.4、厚さ4.5。C.平面は撥形、断面は長方形。D.凝灰岩。F.完形。G.覆土中。H.一部被熱により変色。
7	砥石	A.残存長22.7、残存幅8.7、厚さ7.0。C.柱状を呈し、一部角を剥離調整。D.砂岩。F.破損品。G.覆土中。H.表面には鉄分が多く付着している。

第８号井戸跡(第48図)

ＥⅡ区の西側に位置し、南側には第100号住居跡が、西側には第49号土壙がある。井戸掘り方の平面形は、直径90cmの比較的小規模な円形に近い形態を呈している。断面の形態は、壁はやや急で直線的に傾斜し、中位からはさらに急傾斜して垂直ぎみに落ち込んでいる。確認面からの深さは、井戸が狭く完掘できなかったため不明であるが、１m以上はあるものと思われる。井戸内には井筒に関係するようなものは見られなかった。



第48図　第８号井戸跡



第49図　第８号井戸跡出土遺物

遺物は、覆土中から土師器甕の小破片１片と、中世以降の土師器皿(No１)が出土しただけである。

第８号井戸跡出土遺物観察表

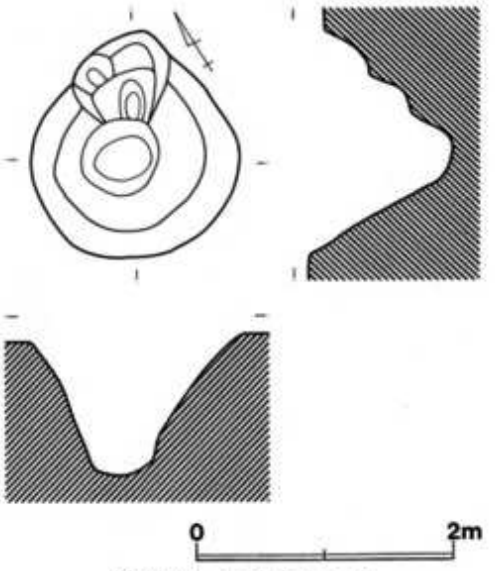
1	土師器皿	A.口縁部径(10.6)、器高2.8、底径(7.6)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.白色粒。E.内外－黒褐色。F.1/2弱。G.覆土中。

第９号井戸跡(第50図)

Ｇ区の南側に位置する。本井戸跡の周囲には、直径40cm・深さ10cm～15cm程度の類似したピットが不規則的に見られるが、本井戸跡の上屋と関係するものかは不明である。井戸掘り方の平面形は、直径1.55mの比較的整った円形を呈しているが、北東側に若干張り出している。断面の形態は、全体に直線的ではあるが緩やかに傾斜して窄まり、下端の底面近くで直径60cmの円形状の形態になっ

て垂直ぎみに落ち込んでいる。井戸北東側の張り出し部は、壁面の上半が3段の階段状に狭く掘り込まれており、おそらく井戸掘削時に足場として利用されたものと思われる。確認面からの深さは1.10mで比較的浅いが、井戸底面はローム層下の白色粘土層に達している。底面は、狭くやや丸みをもっている。井戸内からは片岩を主体とした自然石がいくつか出土したが、井筒に関係するようなものは見られなかった。

遺物は、覆土中から古代の土師器や須恵器や埴輪の小破片とともに、中世の内耳鍋の破片が出土している。



第50図　第9号井戸跡

第51図　第9号井戸跡出土遺物

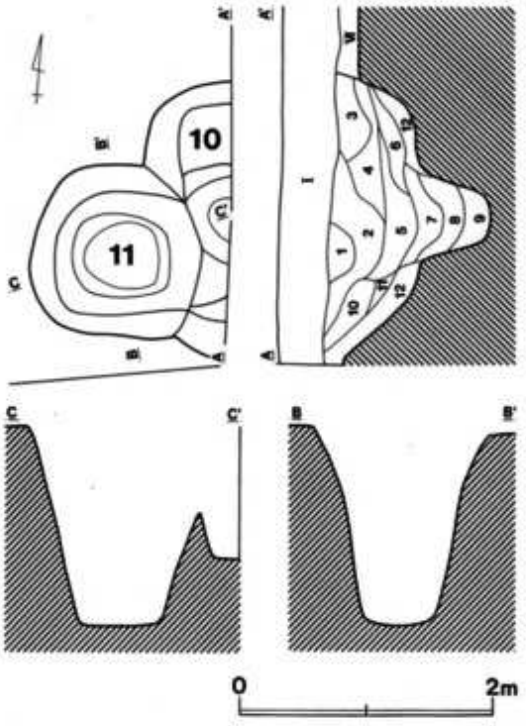
第9号井戸跡出土遺物観察表

1	須恵器 甕	B.粘土紐積み上げ後ロクロ整形。C.口縁部内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外－黒灰色、肉－暗茶褐色。F.破片。G.覆土中。H.外面に櫛描(3本歯以上)波状文を施す。
2	須恵器 甕	B.粘土紐積み上げ後叩き。C.胴部外面平行叩きの後ハケ及びナデ、内面青海波文の当道具痕を残す。D.白色粒。E.内外－暗灰色。F.破片。G.覆土中。
3	埴輪	B.粘土紐積み上げ。C.外面ハケ、内面ナデ。D.赤色粒、白色針状物質。E.内外－淡茶褐色。F.破片。G.覆土中。

第10号井戸跡(第52図)

G区中央部の南側寄りに位置し、北側には第66号土壙と第67号土壙がある。本井戸跡は、西側が第11号井戸跡と重複し、それを切っている。調査区内で検出されたのは、井戸跡の西側半分だけであるため、本井戸跡の全容は不明である。井戸掘り方の平面形は、検出された部分から推測すると、南北方向が2.20mで東西方向が1.50m程度の楕円形に近い形態を呈するものと思われる。断面の形態は、上半部が緩やかに傾斜し、中位に狭いテラス状の平場をもっている。下半は直径70cmの円形を呈し、直線的に急傾斜して落ち込んでいるが、土層断面の観察では、掘り直しの可能性も考えられる。確認面からの深さは1.26mあり、底面は狭くやや丸みをもっている。

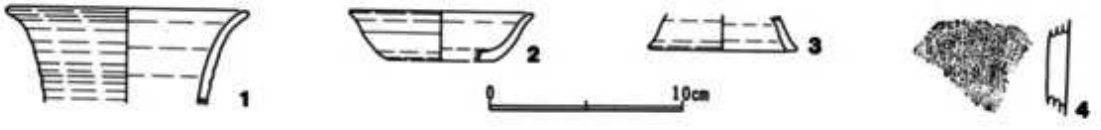
遺物は、覆土中からロクロ成形の壺・坏・高台付椀や甕の破片が少量出土しただけであり、土器以外では埴輪の小破片が1片出土している。



第52図　第10·11号井戸跡

第10号井戸跡土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅳ層：黒色土層。
第1層：暗褐色土層（細砂を均一に、鉄斑・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：暗褐色土層（細砂を多量に、鉄斑を均一に、焼土粒子を微量む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：暗褐色土層（鉄斑を均一に、ロームブロック・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第4層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、褐色粘土ブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第5層：黒褐色土層（鉄斑を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第6層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第7層：黒褐色土層（鉄斑・ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第8層：黒色土層（鉄斑・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第9層：黒色土層（ロームブロックを均一に、鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第10層：暗褐色土層（鉄斑・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第11層：暗褐色土層（鉄斑を多量に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第12層：黒褐色土層（鉄斑・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第53図　第10号井戸跡出土遺物

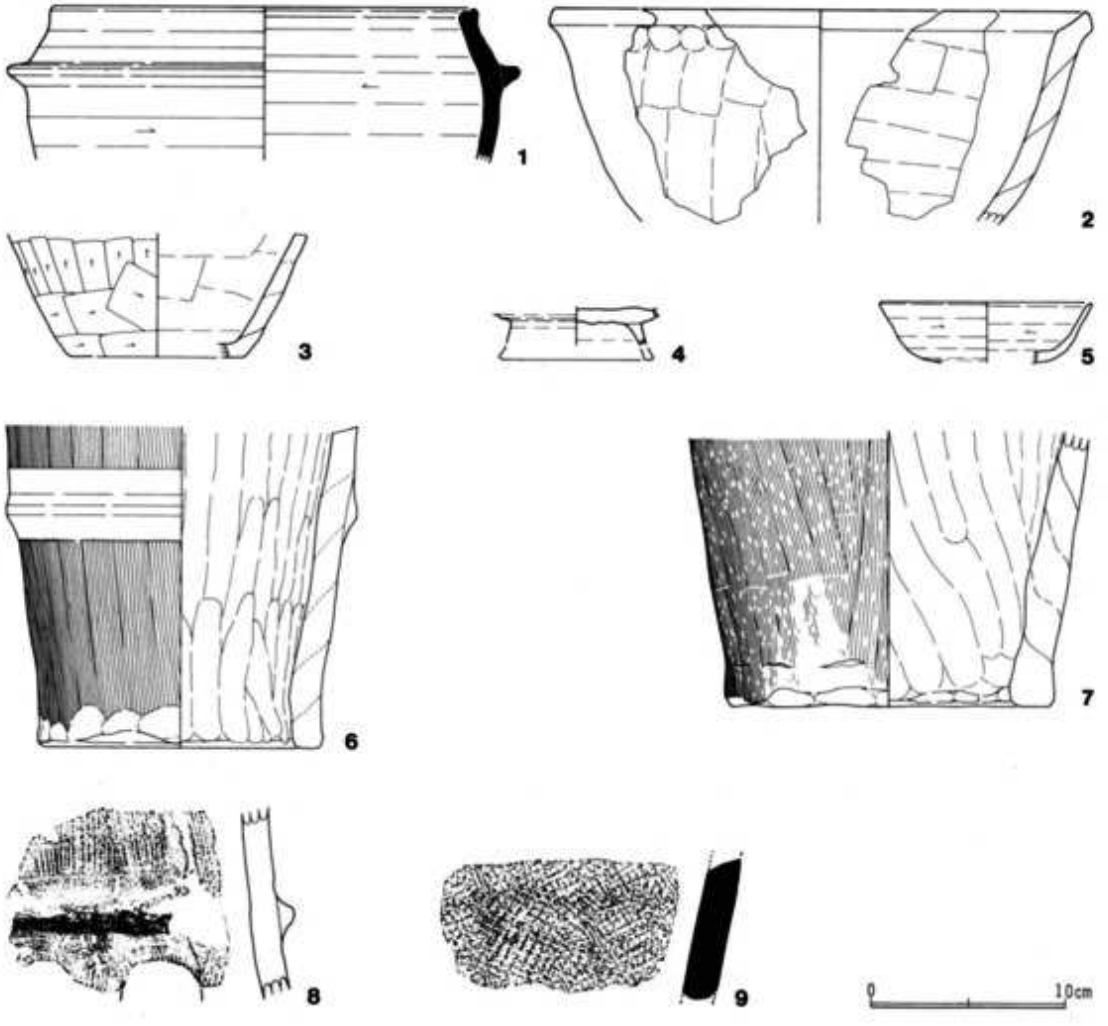
第10号井戸跡出土遺物観察表

1	壺	A.口縁部径(12.6)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡灰褐色。F.口縁部1/6破片。G.覆土中。
2	坏	A.口縁部径(9.6)、器高2.5、底径(5.6)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面不明。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.1/8。G.覆土中。
3	高台付	A.高台部径(7.8)。B.高台部貼り付け。C.高台部内外面回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗褐色。F.高台部1/4。G.覆土中。
4	埴輪	B.粘土紐積み上げ。C.外面ハケ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－茶褐色。F.破片。G.覆土中。

第11号井戸跡(第52図)

G区中央部の南側寄りに位置し、北側には第66号土壙と第67号土壙がある。本井戸跡は、第10号井戸跡と重複し、それによって東側の一部を切られている。井戸掘り方の平面形は、直径1.42mのやや角張った不整円形を呈している。断面の形態は、上半が直線的にやや傾斜し、中位では75cm×64cmの楕円形の形態を呈し、さらに傾斜が強くなって筒状に落ち込んでいる。確認面からの深さは1.55mあり、底面は狭くやや丸みをもっている。井戸内からは自然石がいくつか出土したが、井筒に関係するようなものは見られなかった。

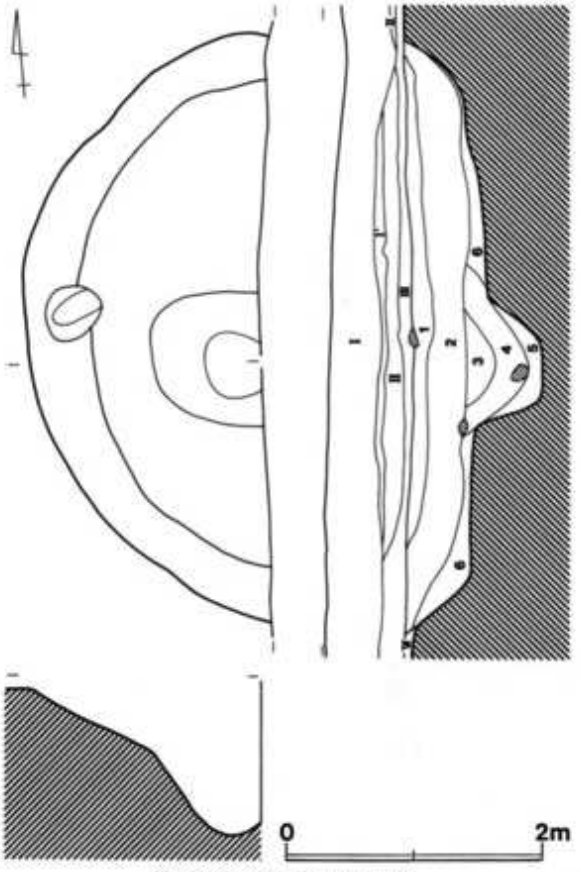
遺物は、羽釜・鉢・坏等の10世紀代を主体とする土器の破片が覆土中から出土しているが、それらに混じって古墳時代の円筒埴輪(No 6・7)や形象埴輪(No 8)の大形破片と、格子目叩きの須恵器甕の破片(No 9)なども見られる。また、椀型の鉄滓も出土しており注目される。



第54図　第11号井戸跡出土遺物

第11号井戸跡出土遺物観察表

1	羽　釜	A.口縁部径(22.0)。B.粘土紐積み上げ後ロクロ整形。鍔貼り付け。C.口縁部及び胴部内外とも回転ナデ。D.白色粒。E.内外－暗灰色。F.口縁部1/6破片。G.覆土中。
2	鉢	A.口縁部径(28.0)。B.粘土紐積み上げ。C.口唇部ヨコナデ。胴部内外面ナデ。D.白色粒。E.外－黒褐色、内－淡褐色。F.1/8破片。G.覆土中。H.外面煤付着。
3	羽　釜	A.底径(9.0)。B.粘土紐積み上げ後ロクロ整形。C.胴部外面ナデの後ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.1/4破片。G.覆土中。
4	高台付	B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.高台部内外面回転ナデ。底部外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗褐色。F.底部のみ。G.覆土中。
5	坏	A.口縁部径(11.0)、器高3.1。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外－暗橙褐色。F.体部1/4破片。G.覆土中。
6	円筒埴輪	A.底径(14.6)。B.粘土紐積み上げ。凸帯貼り付け。C.外面ハケ、内面指ナデ。凸帯ヨコナデ。D.片岩粒、白色針状物質。E.内外－明橙褐色。F.1/4破片。G.覆土中。H.外面黒斑あり。
7	円筒埴輪	A.底径(16.8)。B.粘土紐積み上げ。C.外面ハケ、内面指ナデ。D.片岩粒、白色粒、白色針状物質。E.外－暗褐色、内－明橙褐色。F.1/5破片。G.覆土中。
8	器財埴輪	B.粘土紐積み上げ。凸帯貼り付け。C.外面ハケ、内面指ナデ。凸帯ヨコナデ。D.片岩粒、白色粒。E.外－暗橙褐色、内－暗褐色。F.破片。G.覆土中。H.破片下端に円孔。外面右端に縦方向の凸帯の剥離痕あり。
9	須恵器甕	B.粘土紐積み上げ後叩き。C.胴部外面格子目叩き、内面篦ナデ。D.白色粒。E.内外－暗灰色。F.破片。G.覆土中。H.破片割れ口は摩滅して丸みを帯びている。



第55図　第12号井戸跡

第12号井戸跡土層説明

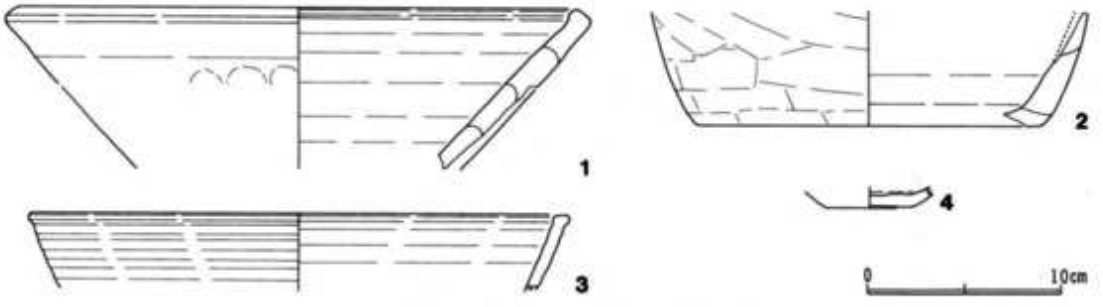
第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅰ'層：A軽石純層。
第Ⅱ層：淡褐色土層（近世耕作土。）
第Ⅲ層：淡褐色土層（近世耕作土。）
第Ⅳ層：黒色土層。

第1層：黒灰色土層（細砂を多量に、B軽石・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第2層：黒灰色土層（鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第3層：黒色土層（ローム粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第4層：黒色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第5層：黒色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第6層：黒灰色土層（鉄斑・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第12号井戸跡(第55図)

G区の北側に位置し、南側には第66号土壙と第67号土壙がある。調査区内で検出されたのは、井戸跡の西側半分だけであるため、本井戸跡の全容は不明である。井戸掘り方の平面形は、検出された部分から推測すると、直径4.60m位の規模の大きな円形を呈するものと思われる。断面の形態は、上半部が深さ50cm位の竪穴状の形態で、壁は緩やかに傾斜して、底面は広い平坦面になっており、中央部に長さ1m以上の楕円形を呈する深さが50cm程の井筒状の掘り込みが見られる。この掘り込みは、井戸下半の井筒としてはやや浅く、掘り方の中心からやや西にずれているため、井筒に伴う張り出しの可能性もあり、本井戸跡の井筒部分は東側の調査区外に位置していることも推測される。

遺物は、中世の在地産片口鉢(No1)・内耳鍋(No2・3)・土師器皿(No4)などの破片が、覆土中から少量出土している。



第56図　第12号井戸跡出土遺物

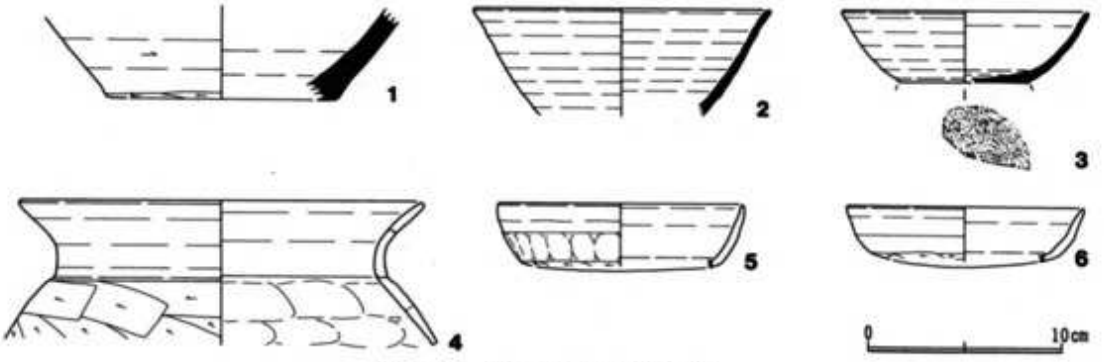
第12号井戸跡出土遺物観察表

1	片口鉢	A.口縁部径(30.4)。B.粘土紐積み上げ。C.内外面ヨコナデ。D.白色粒、黒色粒。E.内外－黒灰色、肉－暗灰色。F.口縁部1/5破片。G.覆土中。H.内面は良く擦れている。在地産瓦質。
2	内耳鍋	A.底径(18.0)。B.粘土紐積み上げ。C.胴部内外面ナデ。底部外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－黒褐色、肉－淡茶褐色。F.底部1/6破片。G.覆土中。
3	内耳鍋	A.口縁部径(28.0)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－黒褐色、肉－淡茶褐色。F.口縁部小破片。G.覆土中。
4	土師器皿	A.底径(4.4)。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面不明瞭。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.底部2/3。G.覆土中。

4．土　　壙

第31号土壙(第61図)

DI区の東端付近に位置し、重複する第9号掘立柱建物跡を切り、第10号掘立柱建物跡に切られている。平面形は、やや不整の楕円形に近い形態を呈している。規模は、南北方向が1.80m、東西方向が1.50mを測る。壁は、緩やかでやや内湾ぎみに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で18cmある。底面は、広くほぼ平坦である。覆土は、ロームブロックを均一に、焼土粒子とローム粒子を微量含む暗褐色土の単一土層である。遺物は、覆土中から須恵器や土師器の破片が比較的多く出土しているが、完形品や器形の全容が伺えるようなものは見られない。時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土遺物から、古代の所産と考えられる。



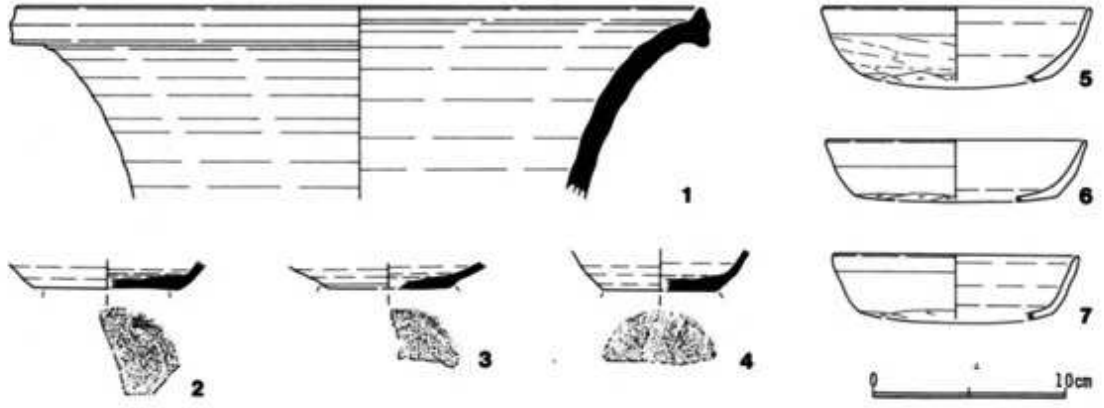
第57図　第31号土壙出土遺物

第31号土壙出土遺物観察表

1	須恵器 甕	A.底径(12.2)。B.粘土紐積み上げ。C.体部内外面回転ナデ。底部外面篦ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.外ー暗灰色、内ー淡茶褐色。F.底部1/4破片。G.覆土中。
2	須恵器 椀	A.口縁部径(15.4)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外ー淡灰色。F.体部1/6破片。G.覆土中。
3	須恵器 坏	A.口縁部径(12.8)、器高3.7、底径(6.8)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外-淡灰褐色。F.1/3破片。G.覆土中。
4	甕	A.口縁部径(21.0)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面指ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外ー暗橙褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土中。
5	坏	A.口縁部径(12.8)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外ー明茶褐色。F.口縁部1/8破片。G.覆土中。
6	坏	A.口縁部径(12.2)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外ー淡茶褐色。F.口縁部1/8破片。G.覆土中。

第32号土壙(第61図)

ＤＩ区の東端付近に位置する。第14号掘立柱建物跡と重複しているが、切合関係は把握できなかった。平面形は、コーナー部の丸みが強い長方形ぎみの形態を呈している。規模は、南西から北東方向が1.64m、南東から北西方向が90cmを測る。壁は、緩やかに傾斜してやや内湾ぎみに立ち上がり、確認面からの深さは26cmある。底面は、広くほぼ平坦である。覆土は、第31号土壙の覆土と類似し



第58図　第32号土壙出土遺物

た暗褐色土であるが、第31号土壙に比べて鉄斑やマンガン塊を多く含んでいる。遺物は、覆土中から須恵器や土師器の破片が比較的多く出土しているが、完形品や器形の全容が分かるものはない。時期は、覆土の状態や出土遺物から、古代の所産と考えられる。

第32号土壙出土遺物観察表

1	須恵器 甕	A.口縁部径(35.4)。B.粘土紐積み上げ後、ロクロ整形。C.口縁部内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外－暗灰色。F.口縁部1/4破片。G.覆土中。
2	須恵器 坏	A.底径(7.6)。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.白色粒。E.外－灰色、内－暗灰色。F.底部1/4破片。G.覆土中。
3	須恵器 坏	A.底径(6.2)。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.白色粒、黒色粒。E.内外－暗灰色。F.底部1/4破片。G.覆土中。
4	須恵器 坏	A.底径(6.0)。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.片岩粒、白色粒。E.内外－淡灰白色。F.底部1/2破片。G.覆土中。
5	坏	A.口縁部径(14.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－茶褐色。F.体部1/4破片。G.覆土中。
6	坏	A.口縁部径(13.6)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.体部1/4破片。G.覆土中。
7	坏	A.口縁部径(12.8)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。D.黒色粒、白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.体部1/4破片。G.覆土中。

第33号土壙(第61図)

ＤＩ区の東側に位置し、遺構の西端を小規模な溝に切られている。平面形は、コーナー部の丸みが強い長方形ぎみの形態を呈している。規模は、南北方向が1.43m、東西方向は1.70mまで測れる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは22cmある。底面は、広く平坦で、中央部には長さ20cmの自然石が１個見られる。覆土は、上半が鉄斑やローム粒子を均一に含む暗茶褐色土で、下半はロームブロックや鉄斑を均一に含む暗褐色土である。遺物は、覆土中から９世紀代を主体とする土師器の小破片が少量出土しただけである。時期は、覆土の状態や出土遺物から古代の所産と考えられる。

第34号土壙(第61図)

ＤＩ区の東端付近に位置する。平面形は、不整の円形か楕円形ぎみの形態を呈している。規模は、南西から北東方向が1.64m、北西から南東方向が1.34mを測る。壁は、緩やかで内湾ぎみに立ち上がり、確認面からの深さは最高で22cmある。底面は、広く平坦であるが、北東側寄りは不整円形状に一段深くなっている。覆土は、ロームブロックを微量含む暗灰褐色土である。遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から古代の所産と思われる。

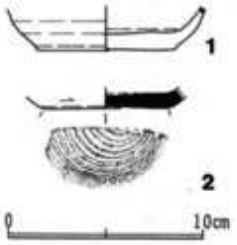
第35号土壙(第61図)

ＤⅡ区の南東側に位置し、上面を小規模な溝に切られている。平面形は、コーナー部が丸みをもつ長方形ぎみの形態を呈している。規模は南北方向が1.68m、東西方向が72cmを測る。壁は、直線的で緩やかに傾斜し、確認面からの深さは21cmある。底面は、やや起伏と傾斜をもつ。覆土は、鉄

斑とマンガン塊を均一に、ローム粒子を微量含む黒褐色土である。遺物は、覆土中から古墳時代後期と平安時代頃の土師器の小破片が数片出土しただけである。時期は、覆土の状態から古代の所産と思われる。

第36号土壙(第61図)

DⅡ区の南東側に位置する。平面形は、長方形を基調にしたものと思われるが、西側はかなり歪んだ形態になっている。規模は、南北方向が1.60m、東西方向が1.12mある。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは10cm程度である。底面は、広く平坦である。遺物は、覆土中から須恵器や土師器の小破片とともに中世以降の土師器皿の破片(No 1)が出土している。時期は、遺構の遺存状態が悪いため明確ではないが、出土遺物から中世以降の所産と推測される。



第59図　第36号土壙出土遺物

第36号土壙出土遺物観察表

1	土師器皿	A.底径(7.2)。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面不明瞭。D.白色粒。E.外ー黒褐色、内ー淡白色。F.底部1/4破片。G.覆土中。
2	須恵器坏	A.底径(6.8)。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.白色粒。E.内外ー暗灰色。F.底部1/2破片。G.覆土中。

第37号土壙(第61図)

DⅡ区の南東側に位置し、西側の一部を第6号溝跡に切られている。平面形は、楕円形ぎみの形態を呈していたものと思われる。規模は、南北方向が1.24mで、東西方向は1.12mまで測れる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは10cm程度である。底面は、広く平坦である。覆土は、ローム粒子を含む黒褐色土である。時期は、遺物が何も出土しなかったため明確ではないが、覆土の状態から古代のものと思われる。

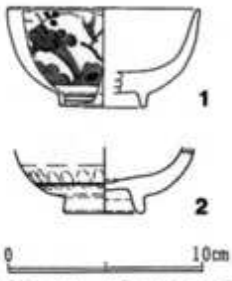
第38号土壙(第61図)

DⅡ区の中央部付近に位置する。平面形は、コーナー部の丸みが強い長方形を呈している。規模は、南北方向が2.05m、東西方向が1.01mある。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは51cmある。底面は、やや狭く起伏が見られる。覆土は、鉄斑とマンガン塊を均一に、ローム粒子を微量含む黒褐色土である。時期は、遺物が何も出土しなかったため明確ではないが、形態や覆土が第35号土壙と類似していることから、古代の所産と思われる。

第39号土壙(第61図)

DⅡ区中央部付近の南端に位置する。調査区内で検出されたのは遺構の北側半分だけであるため、本土壙の全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、比較的整った円形を呈するものと思われる。規模は、東西方向が1.34mで、南北方向は84cmまで測れる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは51cmある。底面は、広く平坦である。底面

の中央には、直径90cm程度の円形を呈する底抜けの桶を水平に置いて埋設していたようで、桶は側板が倒れて形はすでに崩れていたが、桶の底部付近を巻いていた竹が土壙底面に密着していた。また、桶内部からは長さ15cm程度の自然石が5個出土している。遺物は、覆土中から18世紀頃の染付碗の破片が2片出土しただけである。時期は、出土遺物や覆土の状態から、近世後半以降の所産と考えられる。本土壙のような大形の底抜け桶を埋設した土壙は、壱丁田遺跡(恋河内1998)でも検出されているが、その性格についてはいずれも明らかにできなかった。



第60図　第39号土壙出土遺物

第39号土壙出土遺物観察表

1	染付碗	A.口縁部径(10.0)、器高5.1、高台部径(4.4)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外－淡白色。F.1/4破片。G.覆土中。H.コバルトの発色は薄く灰色がかる。
2	碗	A.高台部径(4.2)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外－淡緑灰色、肉－淡灰色。F.1/2破片。G.覆土中。H.畳付は無釉で砂付着。

第40号土壙(第61図)

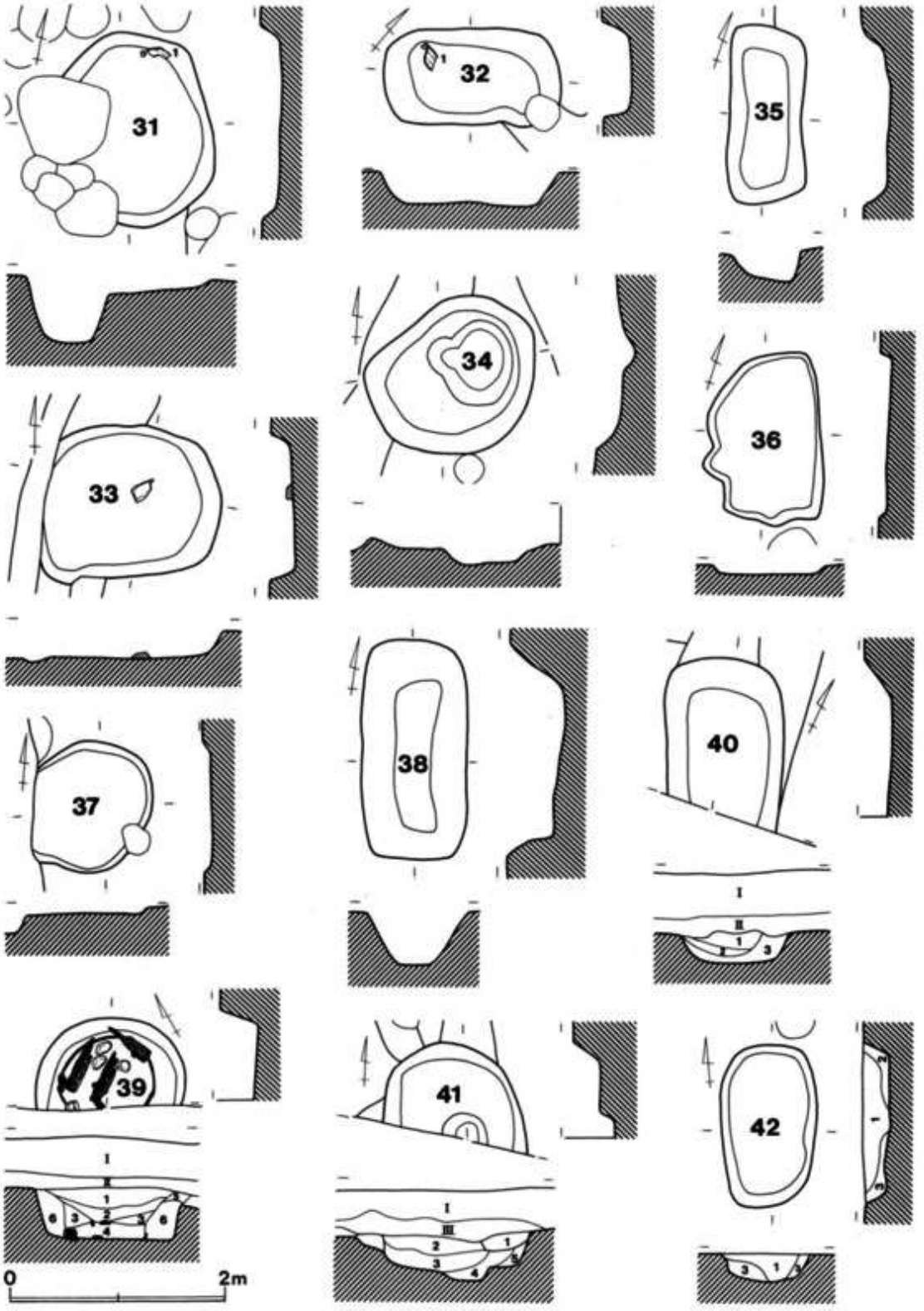
DⅡ区中央部付近の南東端に位置し、重複する第6号溝跡に切られている。調査区内で検出されたのは遺構の北側半分だけであるため、本土壙の全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部の丸みが強い長方形ぎみの形態を呈するものと思われる。規模は、東西方向が1.10mで、南北方向は1.58mまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは39cmある。底面は、広くほぼ平坦である。遺物は、覆土中から平安時代頃の須恵器と土師器の小破片が数片出土しただけである。時期は、遺構の重複関係や覆土の状態から、古代の所産と考えられる。

第41号土壙(第61図)

EⅠ区の東端部付近に位置する。調査区内で検出されたのは遺構の北側半分だけであるため、本土壙の全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部分の丸みの強い長方形かあるいは楕円形ぎみの形態を呈するものと思われる。規模は、東西方向が1.32mで、南北方向は88cmまで測れる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは34cmある。底面は、広く平坦で、中央部にはピット状の落ち込みが見られる。遺物は、覆土中から10世紀代を主体とする須恵器や土師器の小破片が少量出土しただけである。時期は、覆土の状態や出土遺物から古代の所産と思われる。

第42号土壙(第61図)

EⅡ区の東側に位置する。平面形は、コーナー部の丸みが強い長方形ぎみの形態を呈している。規模は、南北方向が1.52m、東西方向が91cmを測る。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは24cmある。底面は、広く平坦である。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から古代のものと思われる。



第61図　土　　壙（1）

第39号土壙土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅱ層：旧耕作土（A軽石混入。）
第1層：淡灰褐色土層（A軽石を多量に、ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第2層：暗灰色土層（A軽石を均一に、ローム粒子・鉄斑を微量含む。粘性・しまりともない。）
第3層：淡灰褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）
第4層：暗灰色土層（A軽石・炭化粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第5層：暗黄褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第6層：淡黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第40号土壙土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅱ層：旧耕作土（A軽石混入。）
第1層：淡灰色土層（溝覆土。）
第2層：淡灰色土層（溝覆土。）
第3層：暗灰色土層（鉄斑・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第41号土壙土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅲ層：暗褐色土層（B軽石を含む。）
第1層：黒灰色土層（鉄斑・マンガン塊・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：暗灰色土層（鉄斑・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：暗灰色土層（鉄斑・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第4層：黒褐色土層（鉄斑・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第5層：暗灰色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第42号土壙土層説明

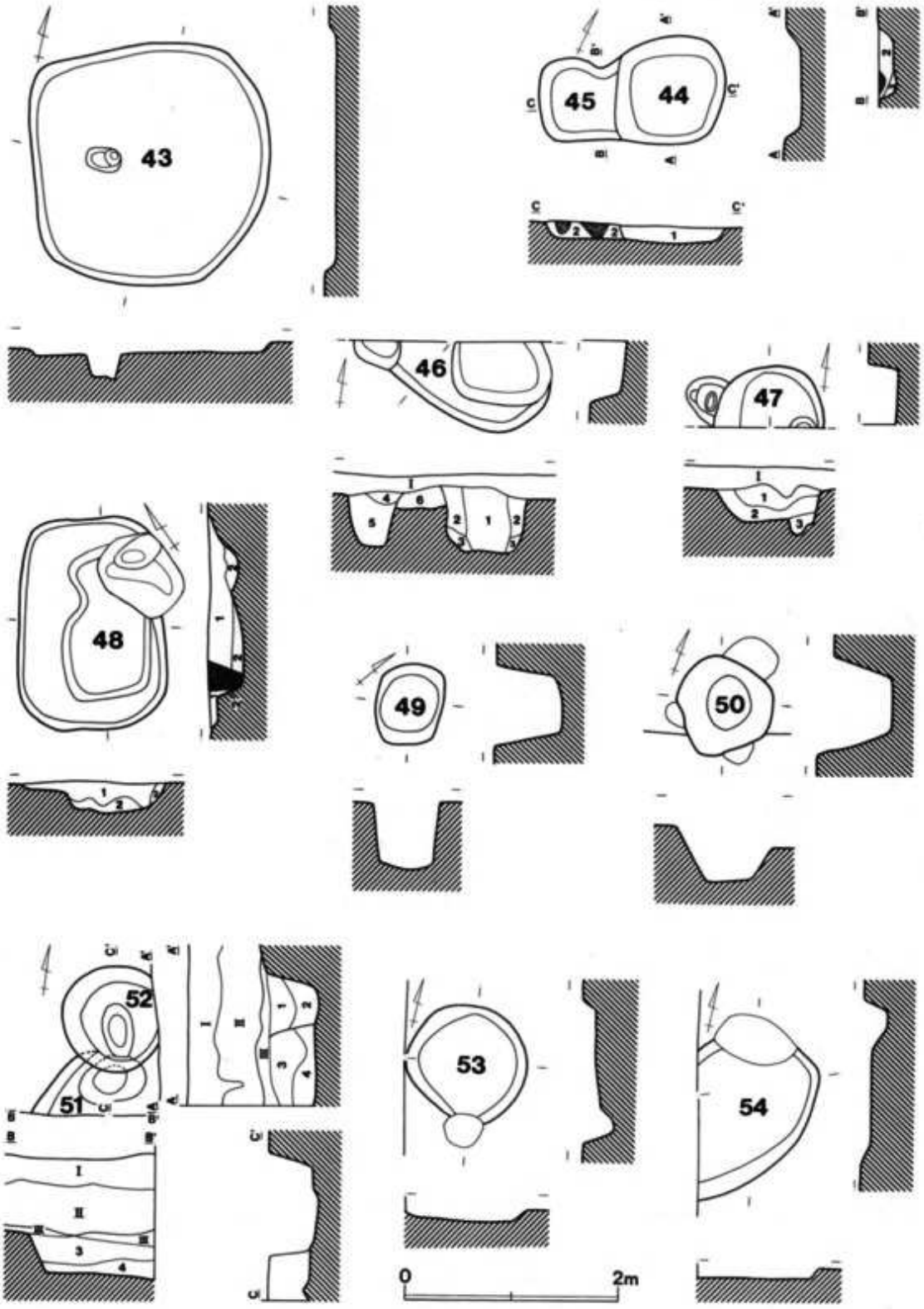
第1層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第2層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第3層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）

第44・45号土壙土層説明

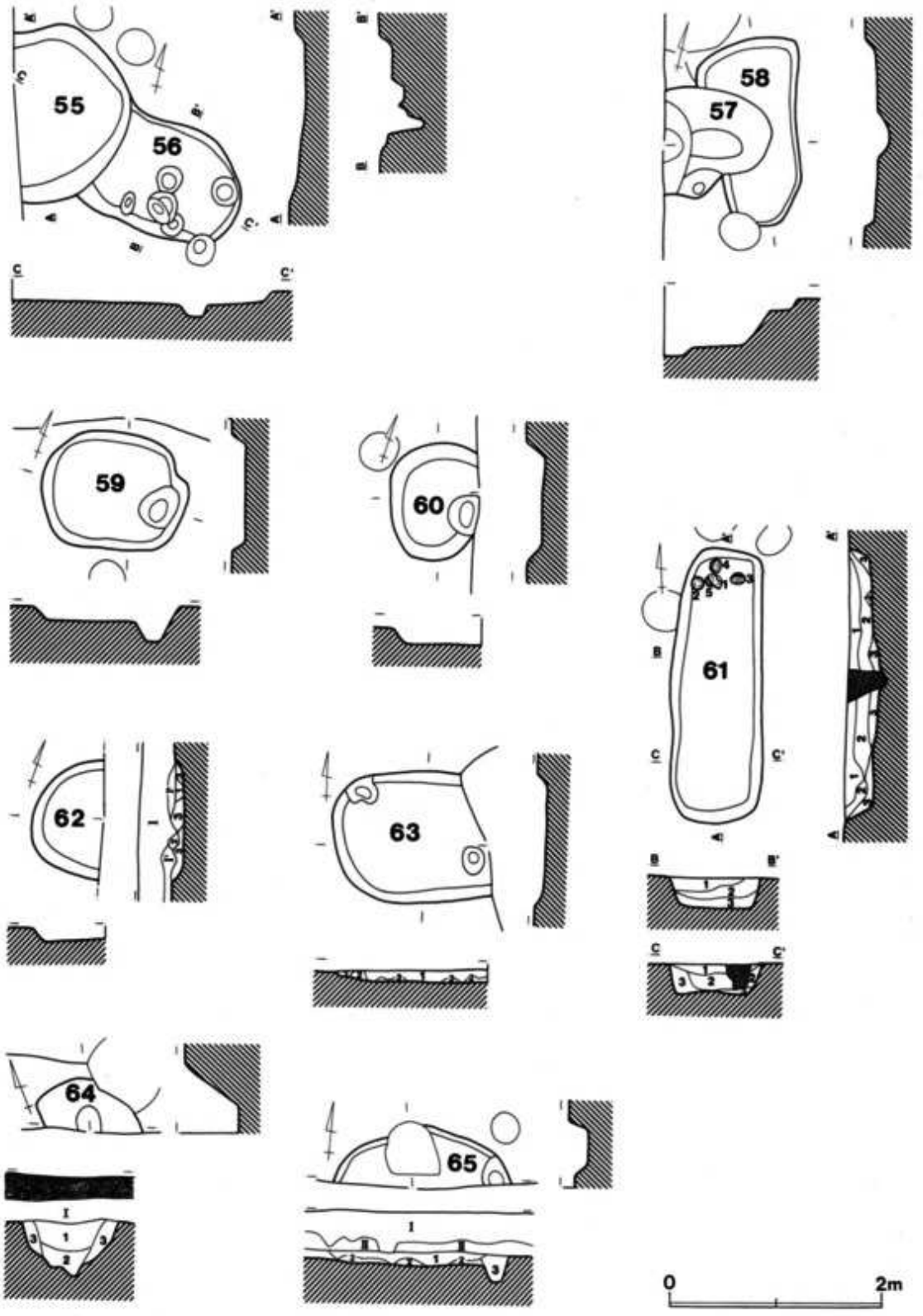
第1層：暗褐色土層（B軽石・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第2層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第3層：暗黄褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）

第46号土壙土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第1層：黒褐色土層（ローム粒子・白色粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第3層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第4層：黒褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第5層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第6層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）



第62図　土　　壙（2）



第63図　土　　壙（3）

第47号土壙土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第1層：黒褐色土層（B軽石・ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第2層：黒褐色土層（B軽石・ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第3層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）

第48号土壙土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第2層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）

第51・52号土壙土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅱ層：暗褐色土層（鉄斑を多量に、A軽石を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第Ⅲ層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロック・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第1層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：暗褐色土層（ローム粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第4層：黒褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第61号土壙土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）
第2層：黒褐色土層（ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第3層：暗黄褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）

第62号土壙土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第1層：黒褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第2層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）
第3層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）

第63号土壙土層説明

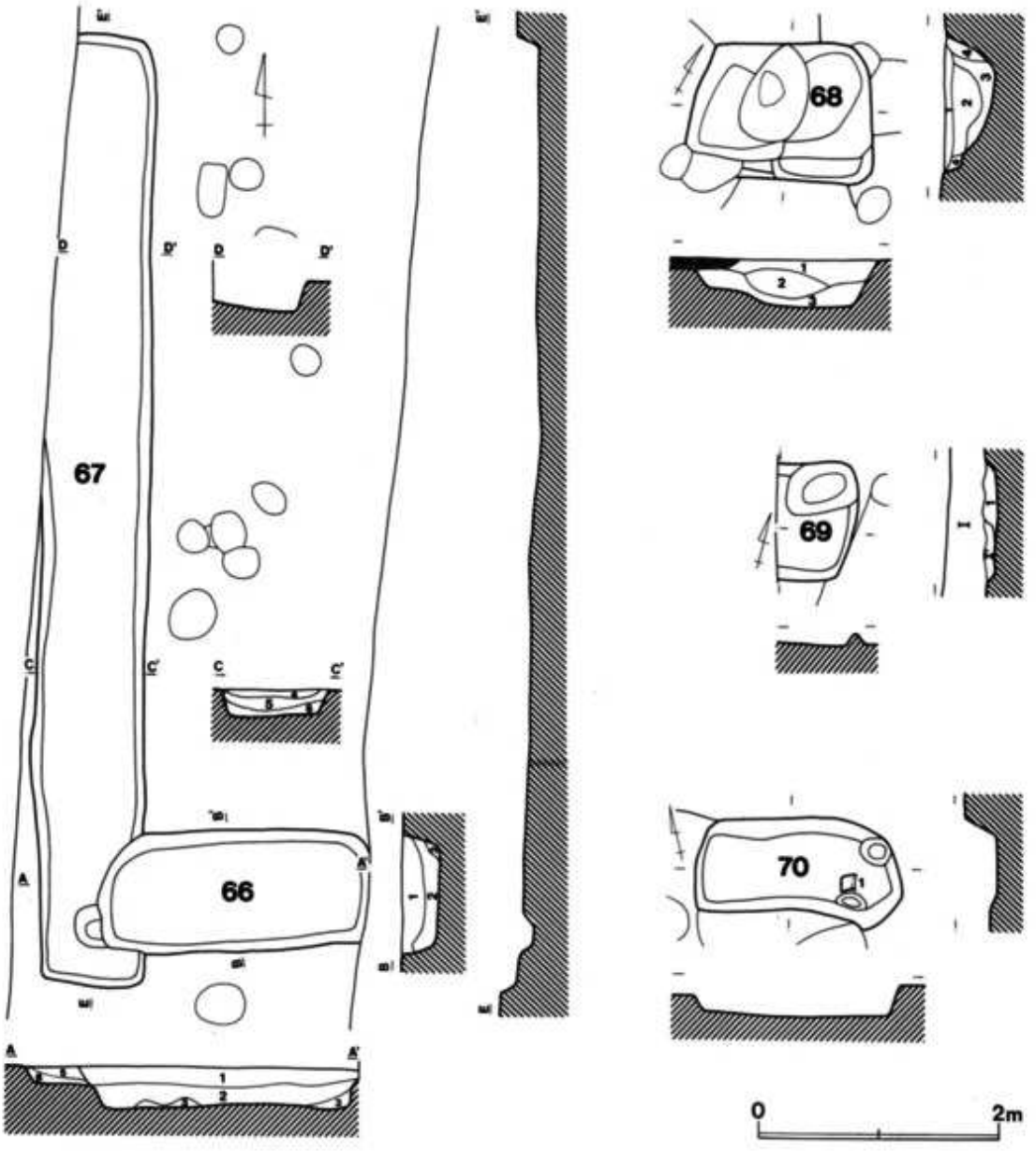
第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第2層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）

第64号土壙土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第1層：暗褐色土層（白色粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第2層：黒褐色土層（鉄斑・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第3層：暗茶褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第65号土壙土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅱ層：旧耕作土（A軽石混入。）
第1層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）



第64図　土　　壙（4）

第66・67号土壙土層説明

第1層：黒褐色土層（細砂を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第2層：黒褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第4層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第5層：黒褐色土層（ロームブロックを均一に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第6層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第68号土壙土層説明

第1層：黒褐色土層（B軽石・ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第2層：黒　色　土　層（B軽石・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：黒　色　土　層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第4層：暗黄褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第69号土壙土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第1層：暗褐色土層（B軽石・ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）

第43号土壙（第62図）

ＥⅡ区の中央部に位置する。平面形は、ややコーナー部が丸みをもつ方形ぎみの形態を呈しているが、土壙の東側と南側壁は丸く弓状に張って歪んでいる。規模は、南北方向が2.28m、東西方向が2.26mを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面の深さは14cmある。底面は広く平坦である。覆土は、ローム粒子とロームブロックを微量含む暗茶褐色土である。遺物は、覆土中から9世紀頃の土師器坏の小破片が1片出土しただけである。時期は、覆土の状態や出土遺物から、古代の所産と考えられる。

第44号土壙（第62図）

ＥⅡ区の中央部に位置し、重複する第45号土壙を切っている。平面形は、コーナー部の丸みが強い方形ぎみの形態を呈している。規模は、東西方向が1.02m、南北方向が1.00mを測る。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは18cm程度ある。底面は、広く平坦である。覆土は、B軽石を微量含む暗褐色土を主体にしている。時期は、遺物が何も出土しなかったため明確ではないが、覆土の状態から中世以降のものと思われる。

第45号土壙（第62図）

ＥⅡ区の中央部に位置し、重複する第44号土壙に切られている。平面形は、コーナー部の丸みが強い長方形ぎみの形態を呈しているが、北側壁はかなり蛇行して歪んでいる。規模は、南北方向が78cm、東西方向は72cmまで測れる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは17cm程度ある。底面は、広く平坦である。覆土は、ローム粒子を均一に含む黒褐色土を主体にしている。時期は、遺物が何も出土しなかったため明確ではないが、覆土の状態から古代のものと思われる。

第46号土壙（第62図）

ＥⅡ区の中央部の北端に位置する。調査区内で検出されたのは、土壙の南側半分だけであり、また土壙の東西両端を柱穴状のピット（第1～5層）に切られているため、本土壙の全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ長方形か楕円形ぎみの形態を呈するものと思われる。規模は、東西方向が1.36mまで、南北方向が85cmまで測れる。

壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で26cmある。底面は、広く平坦であるが、北側に向かってやや傾斜している。覆土は、ローム粒子とロームブロックを微量含む暗褐色土(第6層)を主体にしている。時期は、遺物が何も出土しなかったため明確ではないが、覆土の状態から古代のものと思われる。

第47号土壙(第62図)

EⅡ区の中央部の南端に位置する。調査区内で検出されたのは、土壙の北側半分だけであるため、本土壙の全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、円形か楕円形ぎみの形態を呈するものと思われる。規模は、東西方向が98cm、南北方向が57cmまで測れる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がっているが、西側壁は他に比べて緩やかである。底面は、広く平坦であり、東端に小ピットを伴っている。覆土は、B軽石を含む黒褐色土を主体にしている。時期は、遺物が何も出土しなかったため明確ではないが、覆土の状態から中世以降のものと思われる。

第48号土壙(第62図)

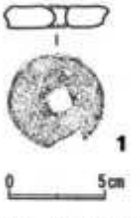
EⅡ区の西側に位置し、土壙西側の一部をピットに切られている。平面形は、コーナー部が丸みをもつ長方形を呈している。規模は、南西から北東方向が1.98m、南東から北西方向が1.38mを測る。壁は、緩やかに内湾しながら立ち上がり、確認面からの深さは8cm程度である。底面は、広く平坦であるが、中央部は不整形状に20cm程度一段深くなっている。覆土は、上半がローム粒子と焼土粒子を微量含む暗褐色土で、下半はロームブロックを微量含む暗黄褐色土である。時期は、遺物が何も出土しなかったため明確ではないが、覆土の状態から古代のものと思われる。

第49号土壙(第62図)

EⅡ区の西側に位置する。平面形は、コーナー部の丸みが強く、若干壁が張った方形ぎみの形態を呈している。規模は、北西から南東方向が75cm、北東から南西方向が62cmを測る。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは64cmある。底面は、広くやや丸みをもっている。覆土は、B軽石とローム粒子を均一に含む黒褐色土を主体にしている。遺物は、覆土中から土師器や須恵器の破片が少量出土しただけである。時期は、覆土の状態から中世以降のものと思われる。

第50号土壙(第62図)

EⅡ区の西側に位置し、重複する第100号住居跡を切っている。平面形は、やや不整の円形ぎみの形態を呈している。規模は、直径90cmを測る。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは70cmある。底面は、やや狭いが平坦である。覆土は、B軽石を均一に含む暗灰色土を主体にしている。遺物は、覆土中から土師器の小破片と、須恵器底部を再利用した紡錘車が1個体出土しているが、これらは重複する第100号住居跡からの混入であろう。時期は、覆土の状態から、中世以降のものと思われる。



第65図　第50号土壙出土遺物

第50号土壙出土遺物観察表

1	土製紡錘車	A.直径5.4、厚さ1.1、重さ34　。B.坏底部を再利用。C.内面ナデ。外面回転糸切り。側面研磨。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.ほぼ完形。G.覆土中。H.底部中央に焼成後穿孔。

第51号土壙(第62図)

ＦＩ区の南端に位置し、重複する第52号土壙に切られている。調査区内で検出されたのは、遺構の一部だけであるため、厳密には土壙かどうか遺構の形態は明確ではない。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは36cmある。底面は、広く平坦であるが、東側に向かってやや傾斜している。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から古代のものと思われる。

第52号土壙(第62図)

ＦＩ区の南端に位置し、重複する第51号土壙を切っている。東側壁の一部は、調査区外に位置しているが、平面形はほぼ直径80cmの円形を呈している。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは44cmある。底面は、広く平坦であるが、中央部はやや窪んでいる。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から古代のものと思われる。

第53号土壙(第62図)

ＦＩ区中央部の西側寄りに位置する。平面形は、直径１ｍ程度の円形に近い形態を呈している。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは15cmある。底面は、広く平坦である。覆土は、Ｂ軽石を均一に含む暗褐色土である。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から中世以降のものと思われる。

第54号土壙(第62図)

ＦＩ区中央部の西端に位置する。調査区内で検出されたのは、土壙の東側半分だけであるため、本土壙の全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、楕円形ぎみの形態を呈するものと思われる。規模は、北西から南東方向が1.27m、北東から南西方向は1.64mまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは15cmある。底面は、広く平坦である。覆土は、Ｂ軽石とローム粒子を微量含む暗褐色土である。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から中世以降のものと思われる。

第55号土壙(第63図)

ＦＩ区北側の西端に位置し、重複する第56号土壙を切っている。調査区内で検出されたのは、土壙の東側半分だけであるため、本土壙の全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、やや不整の円形か楕円形ぎみの形態を呈するものと思われる。規模は、南北方向が1.60m、東西方向は1.10mまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さ

は10cm程度である。底面は、広く平坦である。覆土は、B軽石とロームブロックを微量含む暗褐色土を主体にしている。遺物は、覆土中から16世紀前半頃の土師器皿の破片が1片出土しただけである。時期は、覆土の状態や出土遺物から中世以降のものと思われる。

第56号土壙(第63図)

ＦＩ区の北側に位置し、重複する第55号土壙に切られている。平面形は、楕円形ぎみの形態を呈している。規模は、南北方向が1.07m、東西方向は1.28mまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは10cm程度である。底面は、広く平坦である。土壙内には小ピットが多く見られるが、いずれも新しいものである。覆土は、ローム粒子とロームブロックを微量含む黒褐色土を主体にしている。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から古代のものと思われる。

第57号土壙(第63図)

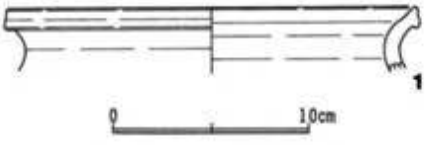
ＦＩ区北側の西端に位置し、重複する第58号土壙を切っている。平面形は、西側を後世の土壙状の攪乱に切られているため明確ではないが、楕円形ぎみの形態を呈するものと思われる。規模は、南北方向が78cm、東西方向は1.05mまで測れる。壁は、緩やかで内湾ぎみに立ち上がり、確認面からの深さは44cmある。底面は、やや狭いが平坦である。覆土は、B軽石とロームブロックを均一に含む暗褐色土を主体にしている。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から中世以降のものと思われる。

第58号土壙(第63図)

ＦＩ区の北側に位置し、重複する第57号土壙に切られている。平面形は、やや不整でコーナー部が丸みをもつ長方形ぎみの形態を呈している。規模は、南北方向が1.76m、東西方向が最高95cmを測る。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは10cm程度である。底面は、広く平坦である。覆土は、ローム粒子とロームブロックを微量含む黒褐色土を主体にしている。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から古代のものと思われる。

第59号土壙(第63図)

ＦＩ区の北端に位置する。平面形は、コーナー部の丸みが強くやや各壁が張った長方形ぎみの形態を呈している。規模は、東西方向が1.40m、南北方向が1.10mを測る。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは14cmある。底面は、広く平坦である。土壙東端にはピットがあるが、本土壙よりも新しいものである。覆土は、ロームブロックを微量含む黒褐色土を主体にしている。遺物は、覆土中から平安時代を主体とする土器の破片が少量出土しただけである。時期は、覆土の状態や出土遺物から、古代のものと考えられる。



第66図 第59号土壙出土遺物

第59号土壙出土遺物観察表

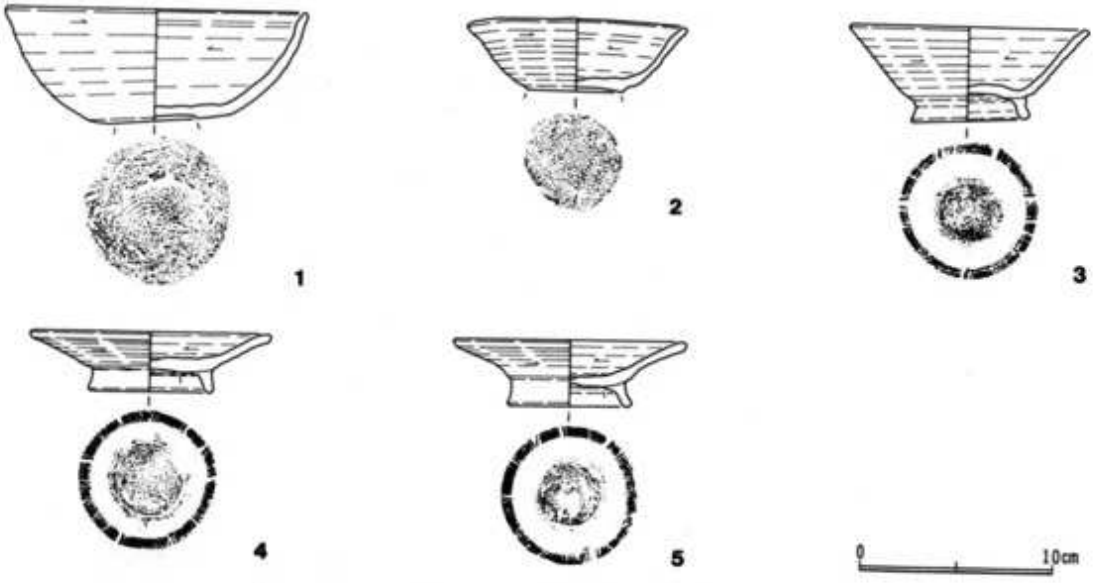
1	甕	A.口縁部径(21.0)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗褐色。F.口縁部1/8破片。G.覆土中。

第60号土壙(第63図)

F区とEⅡ区が交差する部分の南側に位置する。平面形は、楕円形ぎみの形態を呈している。規模は、南北方向が1.08m、東西方向は82cmまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cm程度ある。底面は、広く平坦である。覆土は、ロームブロックを微量含む黒褐色土を主体にしている。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から古代のものと思われる。

第61号土壙(第63図)

F区とEⅡ区が交差する部分の南側に位置する。平面形は、コーナー部が丸みをもつ長方形を呈している。規模は、南北方向が2.56m、東西方向が87cmを測る。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは28cmある。底面は、広くほぼ平坦である。遺物は、北側壁近くの底面付近より、完形の椀(No1)・坏(No2)・高台付坏(No3)・高台付皿(No4・5)がまとまって出土している。人骨等は見られなかったが、これらの土器はその出土状態から埋葬者の頭部付近に置かれた供物の器と思われ、本土壙は埋葬施設の土壙墓であったと考えられる。



第67図　第61号土壙出土遺物

第61号土壙出土遺物観察表

1	椀	A.口縁部径、器高、底径7.4。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。体部外面下半ナデ。底部外面回転糸切り後外周ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.完形。G.底面付近。

2	坏	A.口縁部径10.8～11.5、器高3.8、底径4.3。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－明茶褐色。F.完形。G.底面直上。
3	高台付坏	A.口縁部径12.4、器高5.0、高台部径6.2。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り後ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－明橙褐色。F.完形。G.底面付近。
4	高台付皿	A.口縁部径12.4、器高3.0、高台部径6.4。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.完形。G.底面付近。
5	高台付皿	A.口縁部径12.0、器高3.4、高台部径6.4。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外－明茶褐色。F.完形。G.底面直上。

第62号土壙(第63図)

F区とEⅡ区が交差する部分の南側に位置する。調査区内で検出されたのは、土壙の西側半分だけであるため、本土壙の全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、円形か楕円形ぎみの形態を呈するものと思われる。規模は、南北方向が1.11m、東西方向は68cmまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは14cmある。底面は、広く平坦である。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から古代のものと思われる。

第63号土壙(第63図)

F区とEⅡ区が交差する部分の南側に位置する。調査区内で検出されたのは、土壙の東側は、調査区外にあるため、本土壙の全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部の丸みが強い長方形か楕円形ぎみの形態を呈するものと思われる。規模は、南北方向が1.21m、東西方向は1.45mまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは12cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、覆土中から古墳時代後期の甕と坏の破片がそれぞれ1片ずつ出土しているが、本土壙に伴うものかは不明である。時期は、覆土の状態から古代のものと思われる。

第64号土壙(第63図)

DⅡ区西側の南端付近に位置する。調査区内で検出されたのは、土壙の北側半分だけであり、また、遺構上面は現耕作土と同じ覆土の地境の溝によって削平されているため、本土壙の全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、円形ぎみの形態を呈するものと思われる。規模は、東西方向が1.06m、南北方向は50cmまで測れる。壁は、内湾ぎみに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは50cmある。底面は、やや狭く丸みをもっている。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から古代のものと思われる。

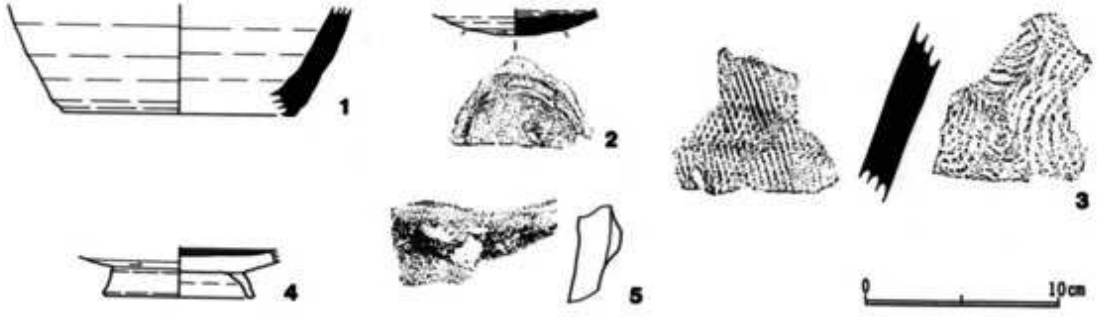
第65号土壙(第63図)

G区の南端に位置する。調査区内で検出されたのは、土壙の北側半分だけであり、また中央北側をピットに切られているため、本土壙の全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分

から推測すると、楕円形ぎみの形態を呈するものと思われる。規模は、東西方向が1.68m、南北方向は60cmまで測れる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは13cmある。底面は、広く平坦である。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から古代のものと思われる。

第66号土壙(第64図)

G区の中央部に位置し、黒色土の第Ⅳ層と重複する第67号土壙を切っている。平面形は、コーナー部の丸みが強い長方形を呈している。規模は、東西方向が約2.30m、南北方向1mを測る。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは36cmある。底面は、広く平坦である。覆土は、ローム粒子や焼土粒子を含む黒褐色土を主体にしている。遺物は、覆土中から10世紀代の須恵器や土師器の破片が多く出土しているが、古墳時代の須恵器や埴輪の破片もそれぞれ1片ずつ見られる。時期は、覆土の状態や出土遺物から、古代のものと考えられる。



第68図　第66号土壙出土遺物

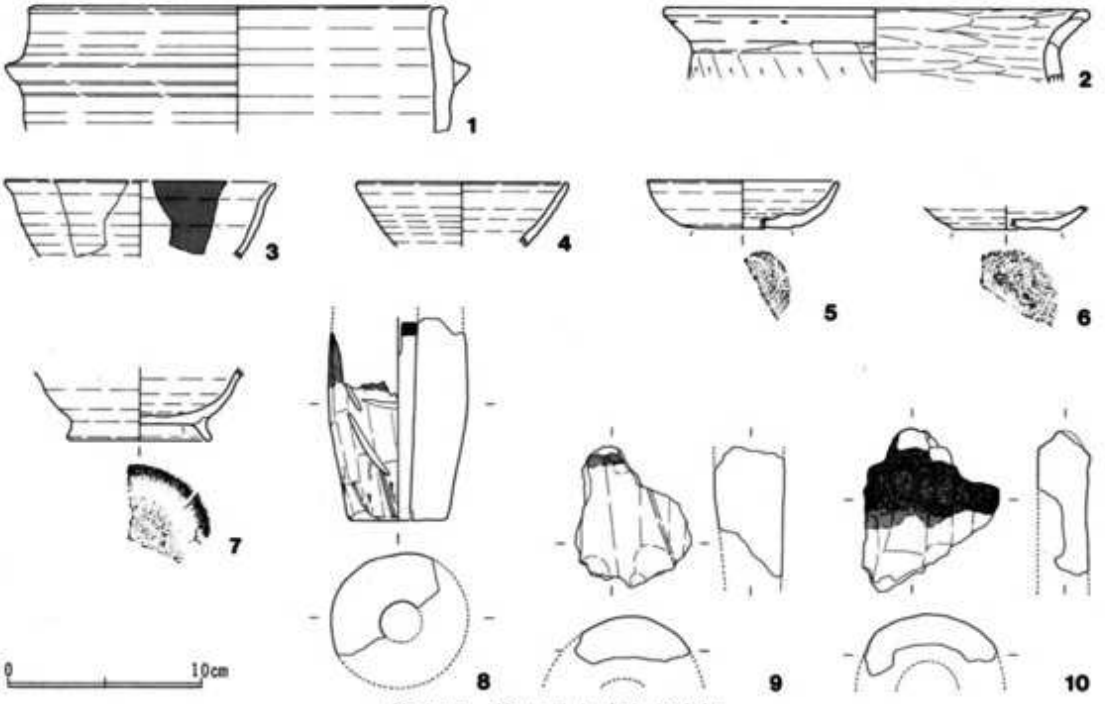
第66号土壙出土遺物観察表

1	須恵器 甕	A.底径(12.0)。B.粘土紐積み上げ後ロクロ整形。C.胴部内外面回転ナデ。D.黒色粒、白色粒。E.内外－暗灰色。F.底部1/5破片。G.覆土中。
2	須恵器 坏	B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転篦ケズリ。D.黒色粒、白色粒。E.内外－暗灰色。F.底部1/2破片。G.覆土中。
3	須恵器 甕	B.粘土紐積み上げ後叩き。C.胴部外面平行叩き、内面青海波文の当道具痕を残す。D.白色粒。E.外－灰色、内－暗茶褐色、肉－黒灰色。F.破片。G.覆土中。
4	高台付椀	A.高台部径7.8。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.体部外面回転ナデ、内面ミガキ。高台部内外面回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－暗茶褐色、内－黒色。F.底部のみ。G.覆土中。H.内面黒色処理。
5	円筒埴輪	B.粘土紐積み上げ。凸帯貼り付け。C.外面凸帯ヨコナデ、内面指ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.外－明橙褐色、内－淡茶褐色。F.破片。G.覆土中。

第67号土壙(第64図)

G区中央部の西端に位置し、黒色土の第Ⅳ層を切り、重複する第66号土壙に切られている。平面形は、非常に細長い溝状の長方形を呈している。規模は、南北方向が7.82m、東西方向が96cmを測る。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは18cmある。底面は、広く平坦で

ある。覆土は、ローム粒子や焼土粒子を含む黒褐色土を主体にしている。遺物は、覆土中から10世紀末頃の土器の破片が多く出土しているが、これらとともに羽口の破片が出土していることは、本土壙の南側8mに位置する第11号井戸跡から出土した鉄滓との関係で注目されよう。土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物から、古代のものと考えられる。



第69図　第67号土壙出土遺物

第67号土壙出土遺物観察表

1	羽　釜	A.口縁部径(21.6)。B.粘土紐積み上げ後ロクロ整形。鍔貼り付け。C.内外面回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外ー暗茶褐色。F.口縁部1/6破片。G.覆土中。
2	甕	A.口縁部径(22.0)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部外面ナデ。胴部外面ケズリ、内面指ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外ー淡褐色、内ー暗褐色。F.口縁部1/5破片。G.覆土中。
3	椀	A.口縁部径(14.0)。B.ロクロ成形。C.外面回転ナデ。内面ミガキ。D.白色粒。E.外ー暗褐色、内ー黒色。F.口縁部1/8破片。G.覆土中。H.内面黒色処理。
4	坏	A.口縁部径(11.0)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外ー暗褐色。F.口縁部1/8破片。G.覆土中。
5	坏	A.口縁部径(10.0)、器高2.4、底径5.0。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外ー淡褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土中。
6	坏	A.底径(5.4)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外ー淡褐色。F.底部1/3破片。G.覆土中。
7	高台付椀	A.高台部径(7.4)。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.外ー暗褐色、内ー黒褐色。F.1/4。G.覆土中。
8	羽　口	A.残存長10.4、最大径(7.2)、穿孔径2.0。B.手捏ね。C.外面篦ナデ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒、繊維混入。E.外上端ー黒灰色、外上半ー灰色、外下半ー淡褐色。内上半ー橙褐色、内下半ー明茶褐色。F.1/2。G.覆土中。
9	羽　口	A.残存長7.3、残存幅6.0。B.手捏ね。C.外面篦ナデ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒、チャート、繊維混入。E.外上半ー淡褐色、外下半ー暗褐色、内ー明茶褐色。F.破片。G.覆土中。

10	羽　　口	A.残存長8.5、残存幅7.0。B.手捏ね。C.外面篦ナデ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外上半－黒色、外下半－淡褐色。F.破片。G.覆土中。

第68号土壙(第64図)

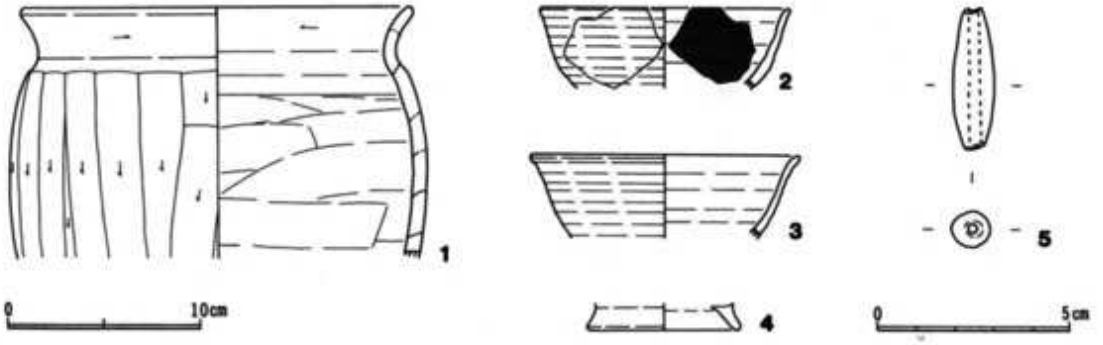
ＦⅡ区の北側寄りに位置し、重複する第109号住居跡を切っている。平面形は、コーナー部が丸みをもつやや不整の長方形を呈している。規模は、東西方向が1.58m、南北方向が1.16mを測る。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、南側壁には狭いテラス状の段がある。確認面からの深さは40cmある。底面は、やや複雑で丸みをもち、中央部は窪んでいる。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から中世以降のものと思われる。

第69号土壙(第64図)

ＦⅡ区の北側寄りに位置する。調査区内で検出されたのは土壙の東側半分だけであるため、本土壙の全容は不明である。平面形は、検出された部分から推測すると、方形か長方形を呈するものと思われる。規模は、南北方向が95cm、東西方向は68cmまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは12cmある。底面は、広く平坦である。覆土は、Ｂ軽石とローム粒子を均一に含む暗褐色土を主体にしている。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から中世以降のものと思われる。

第70号土壙(第64図)

ＦⅡ区の北側寄りに位置し、重複する第105号住居跡を切っている。平面形は、やや不整で東側の壁が張っているが、長方形ぎみの形態を呈している。規模は、東西方向が1.75m、南北方向が94cmを測る。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは26cmある。底面は、広く平坦である。覆土は、ローム粒子や焼土粒子を含む暗褐色土を主体にしている。遺物は、覆土中から10世紀後半の土器片が少量出土しているが、これらは重複する第105号住居跡からの混入の可能性もある。時期は、覆土の状態から古代のものと思われる。



第70図　第70号土壙出土遺物

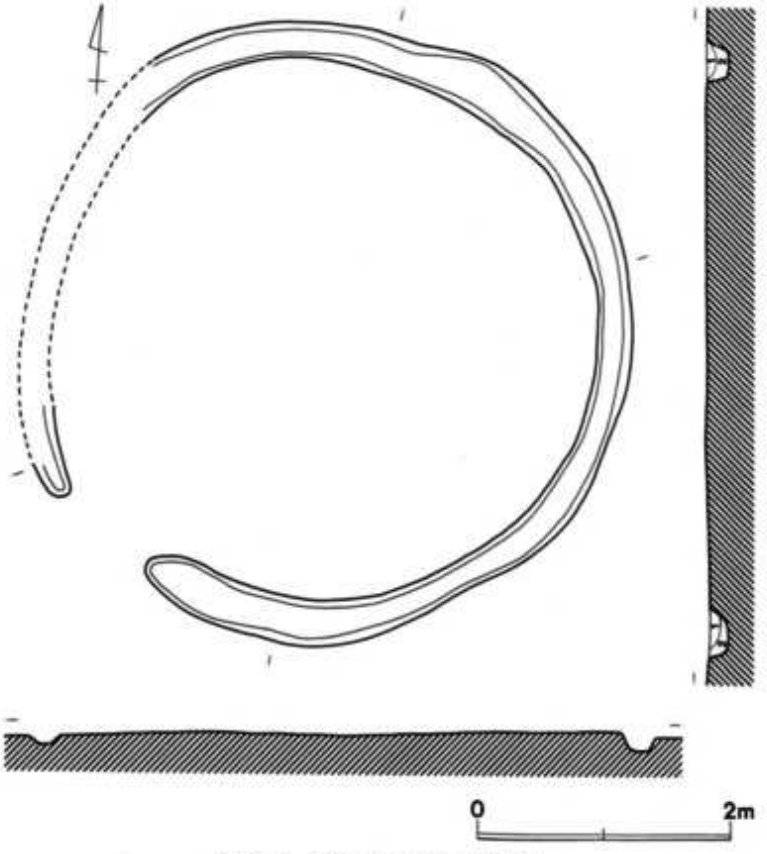
第70号土壙出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径(20.4)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.赤色粒、白色粒（長石多）。E.内外－明茶褐色。F.1/5破片。G.覆土中。
2	椀	A.口縁部径(13.0)。B.ロクロ成形。C.外面回転ナデ、内面ミガキ。D.赤色粒、白色粒。E.外－暗茶褐色、内－黒色。F.1/6破片。G.覆土中。
3	椀	A.口縁部径(14.0)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.1/6破片。G.覆土中。
4	高台付	A.高台部径(8.0)。B.高台部貼り付け。C.内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.高台部1/4。G.覆土中。
5	土錘	A.長さ3.6、幅1.0、重さ4ｇ。B.手捏ね。C.外面ナデ。D.白色粒。E.外－淡茶褐色。F.完形。

5．円形周溝遺構

第１号円形周溝遺構(第71図)

D区の北西端に位置し、南東側には第７号掘立柱建物跡と第８号掘立柱建物跡がある。平面形は、比較的整った円形を呈している。規模は、南北方向が4.74ｍ、東西方向が4.92ｍを測る。周溝は、上幅が30cm前後の比較的均一な幅で巡っているが、南西側で１箇所途切れている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で18cmある。底面は、比較的平坦である。周溝の内外には、本遺構と関係するようなピットはまったく見られない。遺物は、覆土中から７世紀中

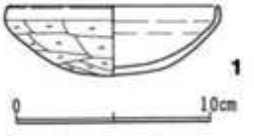


第71図　第１号円形周溝遺構

第１号円形周溝遺構土層説明

第１層：黒褐色土層（白色粒子・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗褐色土層（鉄斑・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第72図　第１号円形周溝遺構出土遺物

頃～後半の土師器甕や坏の小破片が数片出土しただけである。本遺構の時期は、出土遺物が少ないため特定することが困難であるが、その配置からすると、本遺構の遺物とやや近い時期の土器片を出土した第７号掘立柱建物跡やそれと関係する第８号掘立柱建物跡と同時期の可能性もあるのではないかと思われる。

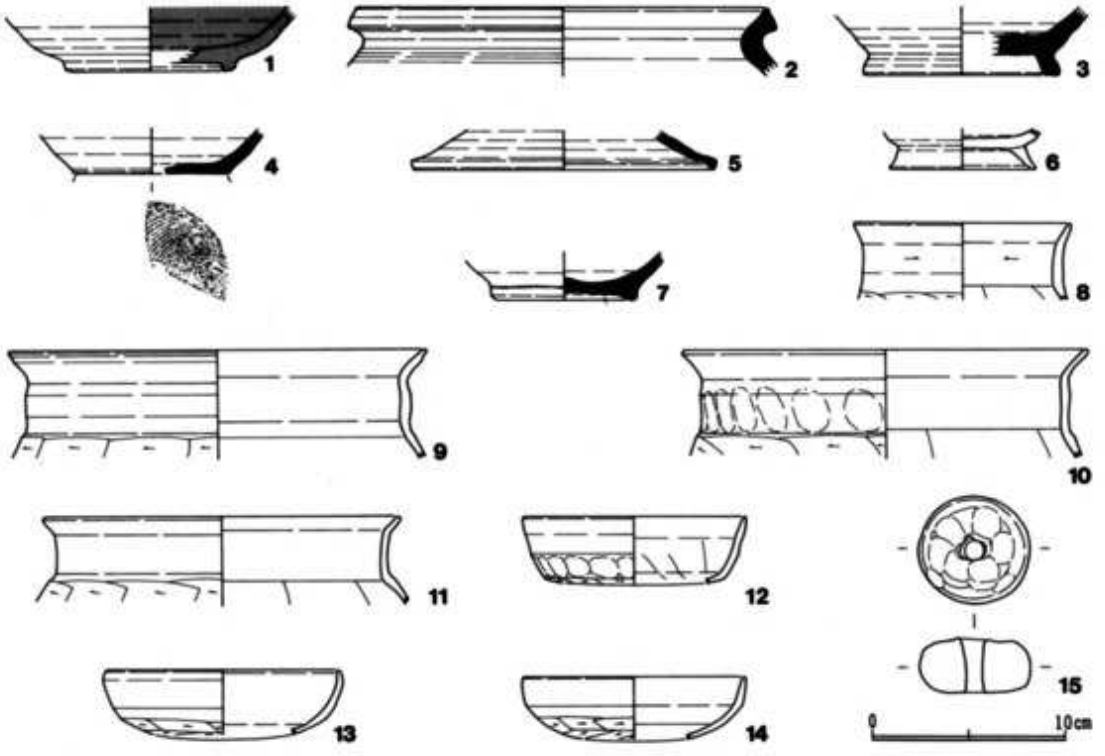
円形周溝遺構出土遺物観察表

1	坏	A.口縁部径(11.0)、器高3.6。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外－明橙褐色。F.1/4。G.覆土中。

6．溝　　跡

第６号溝跡(第５図)

Ｄ区の東側に位置し、重複する第10～12号掘立柱建物跡や第37号土壙と第40号土壙を切っている。溝の方向は、調査区内では西側の開析谷を流れる埋没河川に平行して、ほぼ直線的に南東から北西方向に流路をとっている。その北側延長は、Ａ地点の第１号溝跡と同一の可能性があるが、南側はＥＩ区では検出されていないため、その東側を流れていたものと思われる。規模は、上幅が約80cm～１ｍの比較的均一な幅で、確認面からの深さは最高で28cmを測る。底面は、比較的平坦であるが、北側はその幅がやや狭くなっている。遺物は、覆土中から平安時代の須恵器や土師器の破片が比較的多く出土している。土器以外では、紡錘車状の土製品(No15)が１点見られるだけである。時期は、遺構の重複関係や出土遺物から、９世紀末～10世紀前半頃の間に機能していたものと考えられる。



第73図　第６号溝跡出土遺物

第6号溝跡出土遺物観察表

1	灰釉陶器 椀	A.高台部径(8.8)。B.ロクロ成形。C.内外面とも回転ナデ。D.褐色粒、白色粒。E.内外－淡灰白色。F.底部1/6破片。G.覆土中。H.内面に灰釉を施す。
2	須恵器 鉢	A.口縁部径(21.2)。B.粘土紐積み上げ後ロクロ成形。C.内外面とも回転ナデ。D.黒色粒、白色粒。E.内外－淡灰色。F.口縁部1/6破片。G.覆土中。
3	須恵器 高台付壺	A.高台部径(10.4)。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.内外面とも回転ナデ。D.黒色粒、白色粒。E.外－暗灰色、内－淡灰色。F.底部1/3破片。G.覆土中。
4	須恵器 坏	A.底部径(8.0)。B.ロクロ成形。C.内外面とも回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.黒色粒、白色粒。E.外－暗灰色、内－淡白色。F.底部1/3破片。G.覆土中。
5	須恵器 蓋	A.口縁部径(15.8)。B.ロクロ成形。C.内外面とも回転ナデ。D.黒色粒、白色粒。E.内外－暗灰色。F.口縁部1/4破片。G.覆土中。
6	高台付坏	A.高台部径7.4。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.内外面とも回転ナデ。底部外面回転糸切り後ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.底部のみ。G.覆土中。
7	須恵器 高台付坏	A.高台部径7.4。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.内外面とも回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.白色粒。E.内外－淡灰色。F.底部のみ。G.覆土中。
8	小形甕	A.口縁部径(11.2)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.外－明茶褐色、内－暗褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土中。
9	甕	A.口縁部径(21.6)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.口縁部1/5破片。G.覆土中
10	甕	A.口縁部径(21.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.口縁部1/5破片。G.覆土中。
11	甕	A.口縁部径(18.6)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－淡褐色、内－淡橙褐色。F.口縁部1/6破片。G.覆土中。
12	坏	A.口縁部径(11.6)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ。D.白色粒。E.内外－茶褐色。F.口縁部1/8破片。G.覆土中。
13	坏	A.口縁部径(12.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.口縁部1/6破片。G.覆土中。
14	坏	A.口縁部径(11.4)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。D.白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.口縁部1/6破片。G.覆土中。
15	紡錘車状 土製品	A.直径5.5～5.8、高さ2.8、重さ98g。B.手捏ね。C.上下両面指押さえ。側面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－茶褐色。F.完形。G.覆土中。

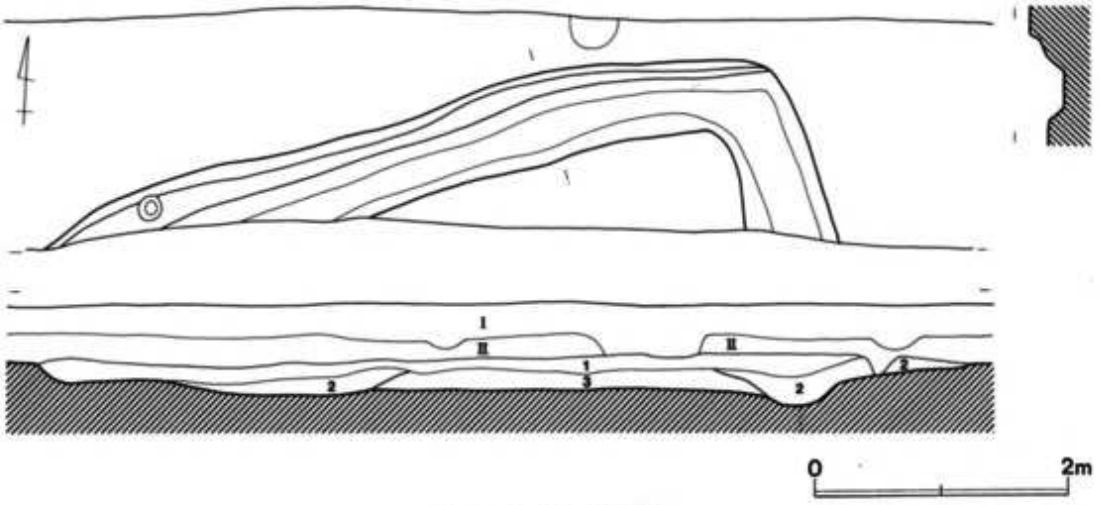
第7号溝跡(第5図)

D区の中央部から西側に位置し、浅い窪地状の埋没谷の中央を、ほぼ西から東に向かって流れる小規模な排水溝である。規模は、上幅が80cm程度の比較的均一な幅で、確認面からの深さは最高で24cmある。壁は緩やかに立ち上がり、底面は広くやや丸みをもっている。遺物は、7世紀代を主体とした土師器甕や坏の破片が少量混入して出土しているが、時期は窪地の埋没後に掘削されていることから、9世紀以降のものと推測される。

第8号溝跡(第74図)

E I区の東側に位置する。溝は、直線的な形態で、東側はほぼ直角に曲がっている。規模は、上幅が70cm前後の比較的均一な幅で、確認面からの深さは18cmある。壁は、緩やかに立ち上がり、底

面は丸みをもっている。本溝跡は、内側の第3層を埋め戻した後に、その縁辺を囲繞するように掘削したようで、何だかの構造物か墓地等の特定の敷地を区画した溝と考えられる。遺物は、覆土中より数片の土師器片とともに、15世紀後半～16世紀初頭頃の内耳鍋の破片が出土しただけである。時期は、覆土の状態や出土遺物から中世の15世紀後半以降と考えられる。



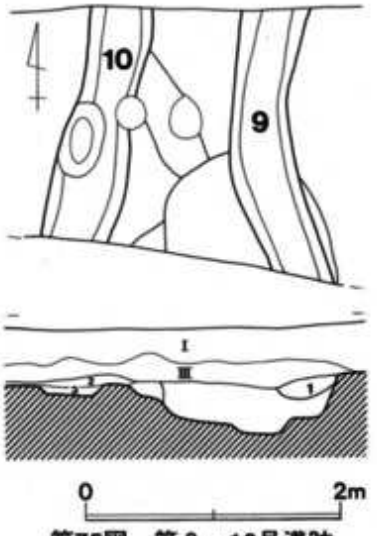
第74図　第8号溝跡

第8号溝跡土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅱ層：旧耕作土（A軽石混入。）
第1層：暗褐色土層（鉄斑を均一に、B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：黒褐色土層（鉄斑を均一に、B軽石・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：暗褐色土層（鉄斑を均一に、B軽石・ロームブロック・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第9・10号溝跡（第75図）

ＥＩ区の東端に位置する。両溝跡とも類似した形態の溝で、調査区内では近接してそれぞれ南北方向に流路をとっている。規模は、上幅が50cm前後の比較的均一な幅で、確認面からの深



第75図　第9・10号溝跡

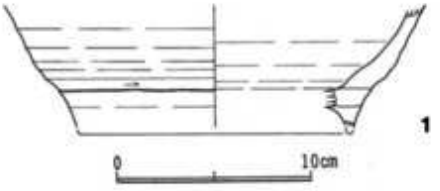
第9・10号溝跡土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅲ層：暗褐色土層（B軽石を含む。）
第1層：黒灰色土層（鉄斑・マンガン塊・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：暗灰色土層（細砂粒を多量に、鉄斑・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：黒灰色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

さは第９号溝跡が15cm、第10号溝跡が８cmある。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。時期は、遺物が何も出土していないため、同時期かどうか明確ではないが、覆土の状態から古代のものと思われる。

第11号溝跡（第77図）

ＥⅡ区の東西両端と北端から同一溝の一部が検出されている。調査区北側に隣接する東西方向の小規模な道にほぼ沿っており、あるいは道の南側を区画する側溝の可能性もあろう。規模は、上幅が１ｍ前後の比較的均一な幅で、確認面からの深さは30cmある。断面は、壁が直線的に傾斜し、底面が広く平坦な逆台形の形態を呈している。覆土は、Ｂ軽石を含む暗褐色土を主体にしているが、恒常的に水が流れていたような形跡は見られない。遺物は、比較的少量で、埴輪・土師器坏・羽釜の小破片とともに、中世の山茶碗窯系片口鉢の破片（No１）が出土しただけである。時期は、覆土の状態や出土遺物から、中世のものと考えられる。



第76図　第11号溝跡出土遺物

第11号溝跡出土遺物観察表

1	山茶碗窯系片口鉢	A.高台部径(14.2)。B.粘土紐積み上げ後ロクロ整形。高台部貼り付け。C.体部及び高台部内外面回転ナデ。体部外面下端ケズリ。D.黒色粒、白色粒。E.内外－暗灰色。F.1/4。G.覆土中。H.内面は良く擦れている。常滑系。

第11号溝跡土層説明

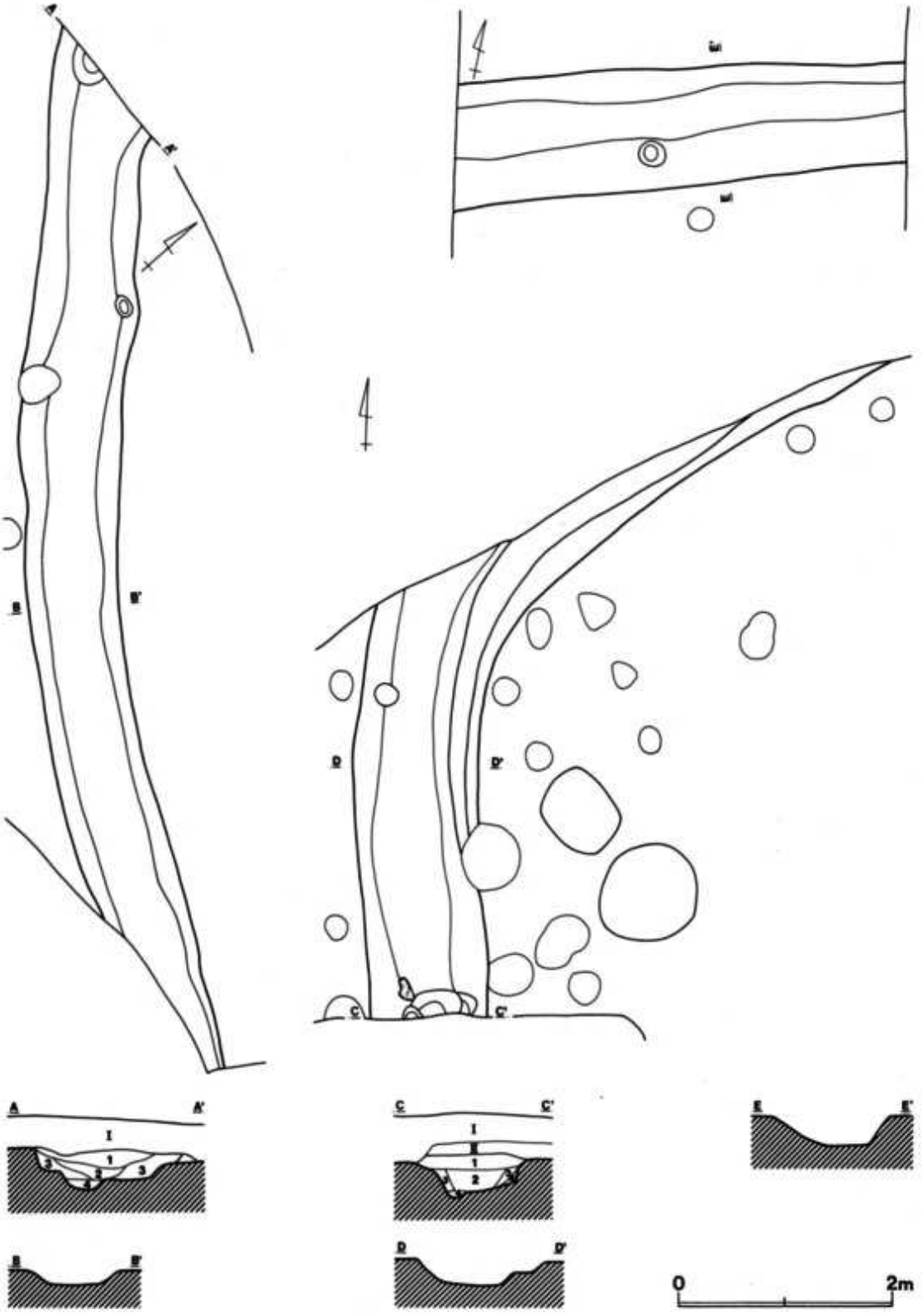
第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅱ層：旧耕作土（Ａ軽石混入。）
第１層：暗褐色土層（Ｂ軽石・ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第２層：暗褐色土層（Ｂ軽石・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第３層：暗褐色土層（Ｂ軽石・ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）
第４層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第12号溝跡（第78図）

ＥⅢ区の東端付近に位置する小規模な排水溝で、調査区内ではほぼ南北方向に向いている。規模は、上幅が60cm前後で、確認面からの深さは18cmある。壁は緩やかに立ち上がり、底面は丸みをもっている。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、Ｂ軽石を含む中世の第Ⅲ層下にあることから、古代のものと考えられる。

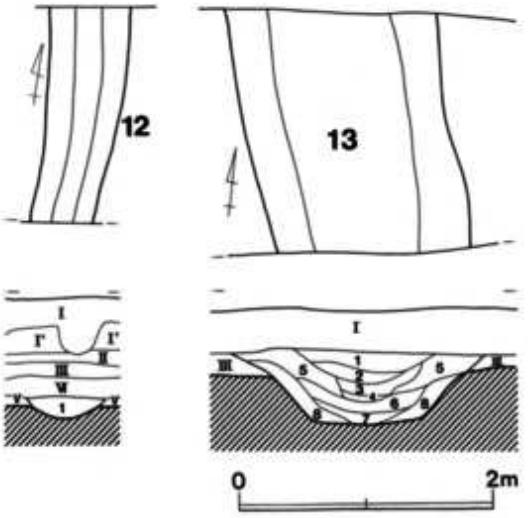
第13号溝跡（第78図）

ＥⅢ区の東側に位置し、調査区内ではほぼ南北方向に向いている。規模は、上幅が調査区南側土層断面で約２ｍあり、確認面からの深さは58cmある。断面は、壁が直線的に傾斜して立ち上がり、底面が広く平坦な逆台形の形態を呈している。覆土中には部分的に細砂が多量に見られ、ある程度水が流れていたことが伺える。また、上半の第１～４層は、本溝跡が埋没した後に、規模を小さくして掘り返した溝の覆土かもしれない。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、



第77図　第11号溝跡

B軽石を含む中世の第Ⅲ層を切って掘削されていることから、中世以降のものと考えられる。形態的には、東側に位置するＥⅡ区の第11号溝跡と類似しており、時期的にもそれと関係する溝である可能性もあろう。



第78図　第12・13号溝跡

第12・13号溝跡土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅰ'層：現耕作土。
第Ⅱ層：淡褐色土層（A軽石混入水田層。）
第Ⅲ層：暗灰褐色土層（B軽石混入。）
第Ⅳ層：黒褐色土層（鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第Ⅴ層：暗灰褐色土層（鉄斑を多量に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

〈第12号溝跡〉
第１層：黒褐色土層（鉄斑・マンガン塊を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

〈第13号溝跡〉
第１層：暗灰色土層（B軽石を均一に、鉄斑を微量含む。粘性・しまりともない。）
第２層：暗灰褐色土層（B軽石・ローム粒子・鉄斑点を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第３層：黒灰色土層（B軽石・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：黒灰色土層（細砂を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第５層：淡灰色土層（B軽石・ローム粒子を均一に、鉄斑を微量含む。粘性・しまりともない。）
第６層：暗灰色土層（細砂を多量に、B軽石を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第７層：黒灰色土層（B軽石・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第８層：暗灰色土層（B軽石・ローム粒子を均一に、ロームブロック・鉄斑を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

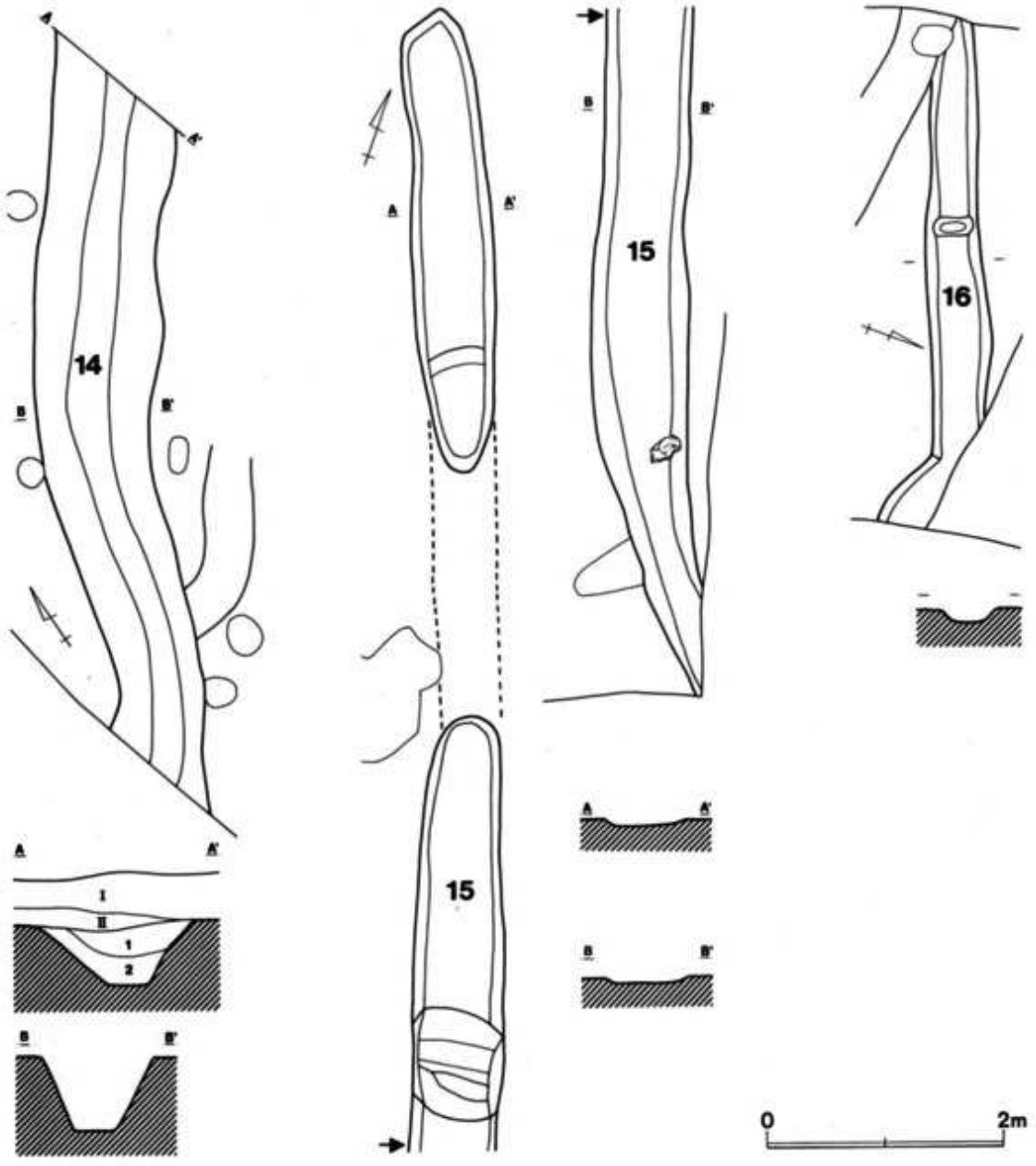
第14号溝跡（第79図）

ＦＩ区の南端付近に位置する。調査区内では南端の埋没河川の北側に沿って、南西から北東方向に向かってやや蛇行ぎみに流路を取っている。規模は、上幅が１ｍ前後あり、確認面からの深さは60cmを測る。断面は、壁が直線的に傾斜して立ち上がり、底面はやや狭いが平坦な逆台形の形態を呈している。覆土は、ローム粒子やＢ軽石を含む黒褐色土を主体にしており、恒常的に水が流れていたような形跡は見られない。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から中世以降のものと思われる。

第15号溝跡（第79図）

ＦⅡ区の南側に位置し、調査区内では開析谷の傾斜に直交して、直線的にほぼ南北方向の流路をとっている。規模は、上幅が80cm前後の比較的均一な幅で、確認面からの深さは10cm程度である。

覆土は、砂粒を多く含む淡灰色土を主体にしており、ある程度流水のあったことが伺える。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態からは中世以降でも比較的新しいものではないかと思われる。



第79図　第14～16号溝跡

第14号溝跡土層説明

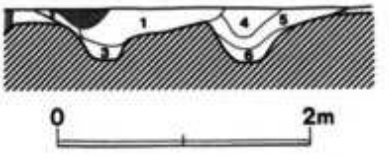
第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅱ層：淡褐色土層（A軽石混入。）
第1層：黒褐色土層（B軽石・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：黒褐色土層（B軽石・ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第16号溝跡(第79図)

ＦⅡ区の南側に位置し、調査区内では南側の開析谷に沿って、南西から北東方向に向いて直線的に延びている。規模は、上幅が50cm前後の比較的均一な幅で、確認面からの深さは10cm程度である。覆土は、ローム粒子を含む暗褐色土を主体にしており、水が流れていたような形跡は見られない。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態からは古代のものと思われる。

第17号溝跡(第７図)

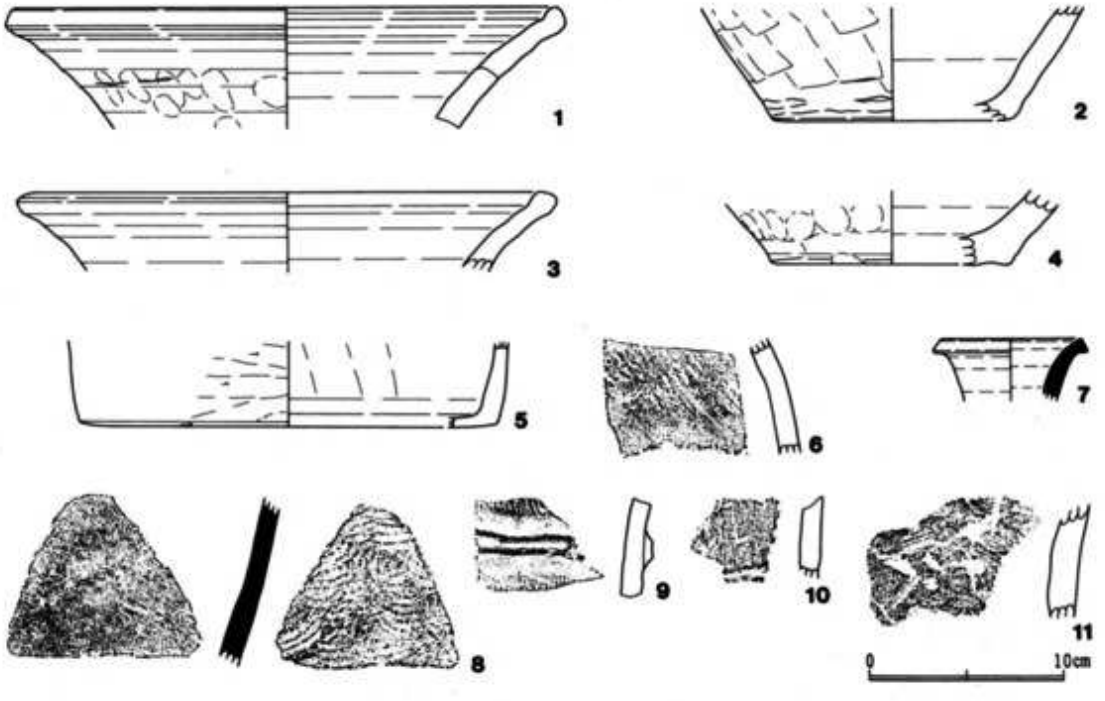
ＦⅡ区の中央部に位置し、その位置と方向は、現地表面に見られる道とほぼ一致している。ほぼ南北方向に向かって直線的に延びているが、その北側延長のＤ区や南側延長のＥⅡ区では検出されていない。本溝跡は、２条の溝が併走しているように見えるが、これらは同時に存在していたものではなく、東側の



第80図　第17号溝跡土層断面図

第17号溝跡土層説明

第１層：暗褐色土層（鉄斑を均一に、Ａ軽石･ローム粒子･焼土粒子･炭化粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第２層：暗褐色土層（Ａ軽石・ローム粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第３層：暗褐色土層（Ａ軽石を均一に、ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第４層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、Ｂ軽石を微量含む。粘性・しまりともない。）
第５層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に、Ｂ軽石を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第６層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）



第81図　第17号溝跡出土遺物

溝が埋没した後に、若干位置をずらせて近世後半以降に西側の溝が掘削されている。規模は、東側の溝が上幅1.30m前後で、確認面から深さは45cmある。西側の溝も東側の溝とほぼ同規模であるが、深さは若干浅くなっている。覆土は、東側の溝がB軽石やローム粒子を含む暗褐色土を、西側の溝がA軽石を含む暗褐色土を主体にしているが、いずれも水が流れていたような形跡は見られない。遺物は、覆土中から古代の土師器や須恵器や埴輪などの小破片が多く、中世の陶器や土器の破片も少量ではあるが出土している。時期は、覆土の状態や出土遺物から、東側の溝は中世後半以降に掘削され、その後近世後半以降に位置を西側に若干ずらせて西側の溝が掘られたものと考えられる。そして、これらの溝が埋没した後に、その敷地は道として利用され、現在に至っている。

第17号溝跡出土遺物観察表

1	片口鉢	A.口縁部径(29.0)。B.粘土紐積み上げ。C.内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外－暗灰色、肉－淡褐色。F.口縁部1/6破片。G.覆土中。H.内面はあまり擦れていない。在地産。
2	片口鉢	A.底部(12.4)。B.粘土紐積み上げ。C.外面篦ナデ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外－淡灰褐色。F.1/4破片。G.覆土中。H.内面は良く擦れている。在地産。
3	片口鉢	A.口縁部径(28.0)。B.粘土紐積み上げ。C.内外面回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡灰褐色。F.口縁部1/8破片。G.覆土中。H.在地産。
4	片口鉢	A.底部(12.6)。B.粘土紐積み上げ。C.内外面ナデ。D.白色針状物質、白色粒。E.内外－暗灰色。F.底部1/4破片。G.覆土中。H.内面は良く擦れている。在地産。
5	内耳鍋	A.底部径(21.8)。B.粘土紐積み上げ。C.胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 白色粒。E.胴部内外－暗灰褐色、底部外－淡橙褐色。F.底部1/8破片。G.覆土中。
6	常滑窯系甕	B.粘土紐積み上げ。C.胴部外面ナデの後部分的に叩き目文様、内面ナデ。D.褐色粒、白色粒。E.外－暗灰色、内－淡灰色。F.破片。G.覆土中。
7	須恵器壺	A.口縁部径(7.2)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。D.白色粒。E.外－黒灰色、内－暗灰色。F.口縁部1/4破片。G.覆土中。
8	須恵器甕	B.粘土紐積み上げ後叩き。C.胴部外面叩きの後ナデ、内面青海波文の当道具痕を残す。D.白色粒。E.外－暗灰色、内－淡灰色。F.破片。G.覆土中。
9	埴輪	B.粘土紐積み上げ。凸帯貼り付け。C.外面ハケの後凸帯ヨコナデ、内面指ナデ。D.白色粒。E.内外－淡褐色。F.破片。G.覆土中。
10	埴輪	B.粘土紐積み上げ。C.外面ハケ、内面ナデ。D.白色粒、黒色粒。E.内外－橙褐色。F.破片。G.覆土中。
11	埴輪	B.粘土紐積み上げ。C.内外面ハケ。D.白色粒。E.内外－暗橙褐色。F.破片。G.覆土中。

第18号溝跡(第6図)

G区の南側に位置し、調査区内では南西から北東方向に向いて直線的に延びている。規模は、上幅が約50cmの比較的均一な幅で、確認面からの深さは15cm程度である。覆土は、ローム粒子を含む黒褐色土を主体にしている。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から中世以前のものと思われる。

第19号溝跡(第6図)

第18号溝跡と約2.80mの間隔を置いてほぼ併走している。規模や形態と覆土が第18号溝跡と類似しており、おそらく第18号溝跡と同時に機能していたものと思われる。

7．埋没河川跡(第82図)

D区の調査区中央部に位置し、南側のＥＩ区やＦＩ区でもその延長の一部が検出されている。調査は、調査区内で検出されたすべてについて調査することは期間的に極めて困難であったため、D区の一部とＦＩ区の検出部分について行っただけである。本埋没河川跡は、大久保山(浅見山)の山裾から湧き出る湧水によって開析された小規模な自然流路で、ＦＩ区南端の残丘山裾から弓状に湾曲しながらＥＩ区の西側を通り、D区で若干東側に蛇行してＡ地点の西側を北流するか、あるいはD区北側の調査区外で西流して本遺跡と飯玉東遺跡の間に位置する比較的規模の大きな谷状の低地に通じるものと思われ、その全長は300m～400m位と推測される。

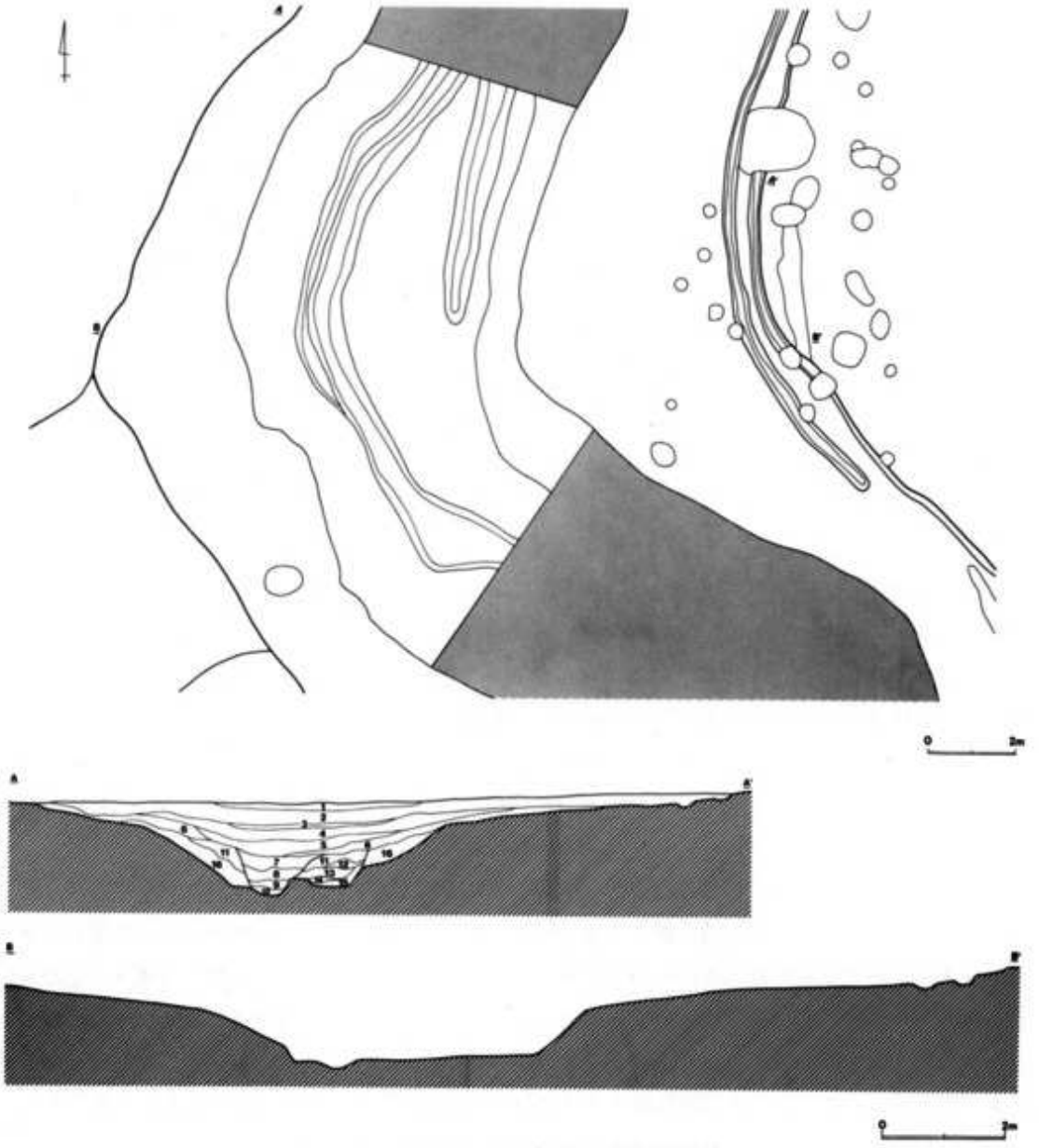
河川跡は、D区内では幅が10m～15mあり、両端には部分的に小規模な溝が掘られている。これらの小溝については掘削時期は明確ではないが、複数の溝が併走する箇所が見られ、継続的に掘り返されていたものと思われる。断面の形態は、両側は非常に浅く緩やで徐々に傾斜し、中央部の幅５m位の間が逆台形状に深くなっている。底面は広く平坦であるが、両側に人為的な数度の掘り返しによる２条の溝跡が見られる。確認面からの深さは、最深部で1.50mを測る。覆土の下層には、細砂を主体とする層や小石等を含む層が見られ、ある程度の水流があったことが伺える。

出土遺物は、覆土中から完形品はないが多量の須恵器や土師器の破片が出土している。その大半は上層(第１～４層)からの出土で、下層(第５～16層)からは少量の土器片が出土しただけであるが、上層と下層ではその出土土器に時期差が見られる。上層出土土器(No１～No80)は、古墳時代前期から平安時代中期にわたるものが見られるが、主体は７世紀中頃(真間期)以降のものである。古墳時代の前期(五領期)と中期(和泉期)の土器片も少量出土しているが、後期(鬼高期)のものはほとんど見られない。下層出土土器(No81～No89)は、少量ではあるが古墳時代の前期(五領期)～中期前半(和泉期)までのものに限られ、それ以降の時期の遺物は含まないようである。

このように本河川跡は、古墳時代前期～中期前半にかけて、自然流路の中央部に溝を掘削することによって、水路として恒常的に維持管理されていたことが伺える。その目的には、本遺跡の北側に形成されていたと思われる谷田への水の供給と、西側Ａ地点に見られる該期集落域への氾濫の防止が考えられよう。その後、この河川の自然流路を利用した水路は、管理されなくなって埋没し、緩やかに窪んだ沢状の地形になり、７世紀中頃から後半にかけて一気に埋没が進行したようである。しかしながら、その後も本埋没河川跡の上に遺構等が形成されないことからすると、少なくとも古代の間は、雨水等の表流水や自然の湧水を集める小規模な沢として機能していたものと思われる。

埋没河川跡Ｄ区出土遺物観察表

1	須恵器 大甕	A.口縁部径(45.4)。B.粘土紐積み上げ後叩き。C.口縁部外面回転ナデの後、５本歯の櫛描波状文を３段施す。内面回転ナデの後ナデ。胴部外面平行叩き目、内面青海波文の当道具痕を残す。D.白色粒。E.内外－暗茶褐色、肉－茶褐色。F.口縁部1/4、胴部破片。G.覆土上層。
2	須恵器 甕	A.口縁部径(27.0)。B.粘土紐積み上げ後ロクロ整形。C.口縁部内外面回転ナデ。D.白色粒。E.外－黒灰色、内肉－暗灰色。F.口縁部1/5破片。G.覆土上層。
3	須恵器 甕	A.口縁部径(22.6)。B.粘土紐積み上げ後ロクロ整形。C.口縁部内外面回転ナデ。D.白色粒、黒色粒。E.外－暗灰色、内－灰色。F.口縁部1/3破片。G.覆土上層。
4	須恵器 甕	A.口縁部径(22.2)。B.粘土紐積み上げ後ロクロ整形。C.内外面回転ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外－淡灰色。F.1/3破片。G.覆土上層。



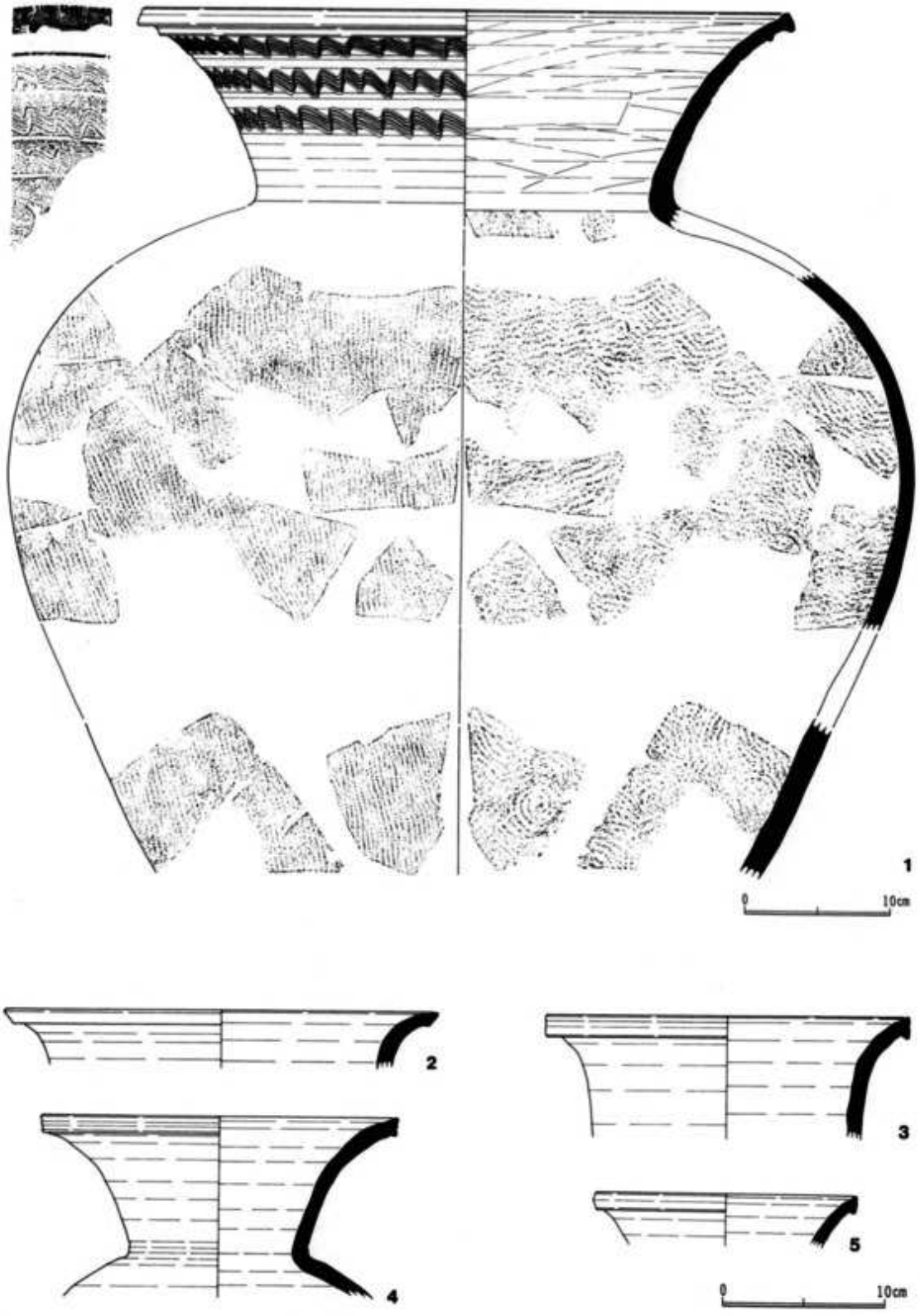
第82図　埋没河川跡Ｄ区中央部調査箇所

埋没河川跡土層説明

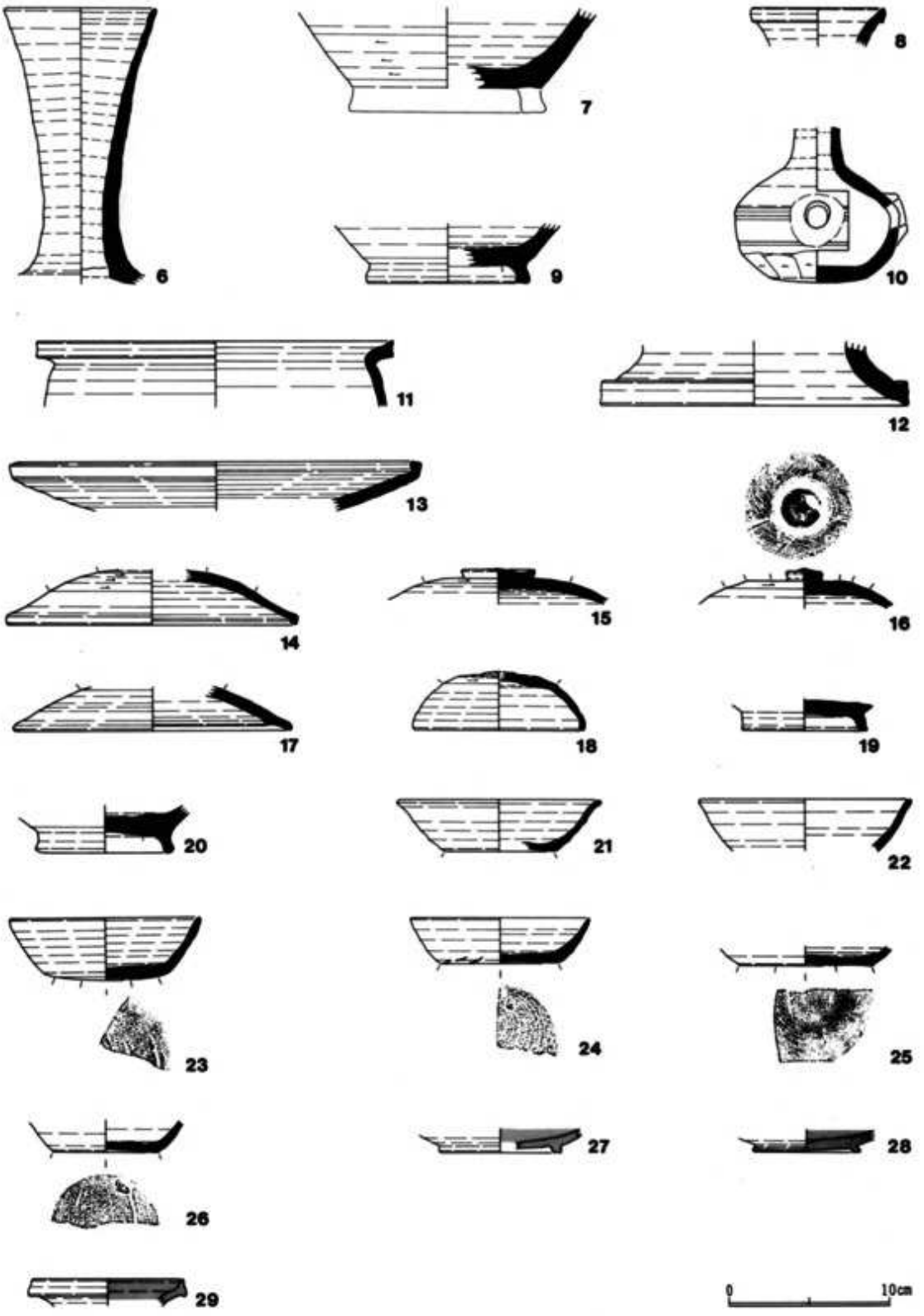
第１層：暗灰褐色粘土層（白色粒子・鉄斑を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗灰色粘土層（鉄斑を均一に、白色粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗灰色粘土層（白色粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：黒色粘土層（白色粒子・淡褐色粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第５層：黒灰色粘土層（淡褐色粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第６層：暗灰色粘土層（淡褐色粒子・ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第７層：黒灰色粘土層（炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第８層：暗灰色粘質土層（細砂を多量に、炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第９層：暗灰色砂層（細砂を主体に、白色粘土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第10層：淡灰白色土層（白色粘土粒子・緑色粘土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第11層：暗灰色粘土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第12層：淡緑色粘質土層（緑色粘土ブロック・小礫を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第13層：淡灰色粘土層（緑色粘土ブロック・炭化粒子・細砂ブロック・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第14層：緑灰色粘質土層（緑色粘土粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第15層：暗灰色粘土層（緑色粘土粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第16層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に、白色粘土ブロック・緑色粘土ブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

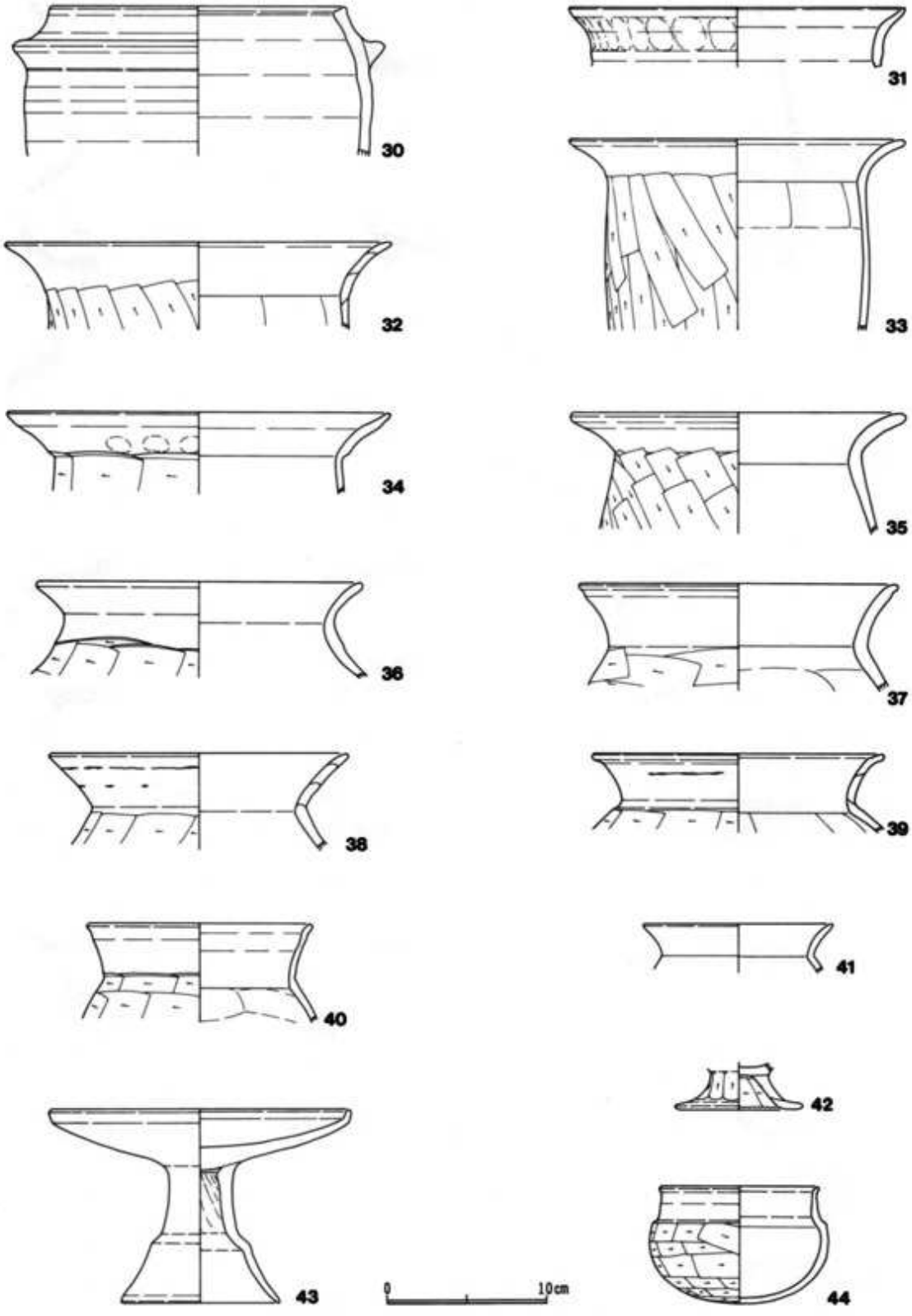
5	須恵器 壺	A.口縁部径(16.2)。B.粘土紐積み上げ後ロクロ整形。C.口縁部内外面回転ナデ。D.黒色粒、白色粒。E.内外－淡灰色。F.口縁部1/3破片。G.覆土上層。
6	須恵器 長頸壺	A.口縁部径(9.6)。B.粘土紐積み上げ後ロクロ整形。頸部と胴部は貼り付け。C.口縁部内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外－暗灰色。F.頸部1/2破片。G.覆土上層。
7	須恵器 高台付壺	A.底部径(11.8)。B.粘土紐積み上げ後ロクロ整形。高台部貼り付け。C.胴部外面上半回転ナデ、下半回転篦ケズリ。胴部内面及び底部外面回転ナデ。D.黒色粒、白色粒。E.内外－暗灰色。F.底部1/2破片。G.覆土上層。
8	須恵器 壺	A.口縁部径(8.2)。B.粘土紐積み上げ後ロクロ整形。C.口縁部内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外－暗灰色。F.口縁部1/4破片。G.覆土上層。
9	須恵器 高台付壺	A.高台部径(10.2)。B.粘土紐積み上げ後ロクロ整形。高台部貼り付け。C.内外面とも回転ナデ。底部外面回転篦ケズリ。D.白色針状物質、白色粒。E.外－暗灰色、内－淡灰色。F.底部1/3破片。G.覆土上層。
10	須恵器 瓦　泉	A.残存長9.6、底部径6.0。B.ロクロ成形。C.外面回転ナデの後、下端手持ち篦ケズリ。内面回転ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－淡灰白色、内－淡橙褐色。F.胴部のみ。G.覆土上層。H.焼成不良。器表面剥落顕著。
11	須恵器 鉢	A.口縁部径(22.4)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外－暗灰色。F.口縁部1/12破片。G.覆土上層。
12	須恵器 甑	A.底部径(19.4)。B.粘土紐積み上げ後ロクロ整形。C.内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外－暗灰色、内－淡灰色。F.端部1/6破片。
13	須恵器 高　坏	A.口縁部径(25.8)。B.ロクロ成形。C.外面回転ナデの後下半回転篦ケズリ、内面回転ナデ。D.白色針状物質、白色粒。E.内外－暗灰色。F.口縁部1/10破片。G.覆土上層。
14	須恵器 蓋	A.口縁部径(18.2)。B.ロクロ成形。C.外面回転ナデの後天井部回転篦ケズリ、内面回転ナデ。D.片岩粒、黒色粒、白色粒。E.内外－暗灰色。F.1/4破片。G.覆土上層。
15	須恵器 蓋	B.ロクロ成形。つまみ部貼り付け。C.外面回転ナデの後天井部回転篦ケズリ、内面回転ナデ。D.白色粒、小石。E.内外－暗灰色。F.1/4破片。G.覆土上層。
16	須恵器 蓋	B.ロクロ成形。C.外面回転ナデの後天井部回転糸切り、内面回転ナデ。D.白色粒、赤色粒。E.内外－暗灰色。F.天井部のみ。G.覆土上層。H．焼成不良。つまみは中心からずれている。
17	須恵器 蓋	A.口縁部径(17.4)。B.ロクロ成形。C.外面回転ナデの後天井部回転篦ケズリ、内面回転ナデ。D.黒色粒、白色粒。E.内外－暗灰色。F.1/6破片。G.覆土上層。
18	須恵器 蓋	A.口縁部径(10.8)。B.ロクロ成形。C.外面回転ナデの後天井部回転篦ケズリ、内面回転ナデ。D.白色粒。E.内外－暗灰色。F.1/4破片。G.覆土上層。
19	須恵器 高台付椀	A.高台部径7.8。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り後ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外－淡茶褐色、内－淡灰色。F.高台部のみ。G.覆土上層。H.焼成不良。
20	須恵器 高台付椀	A.高台部径8.6。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.白色粒。E.内外－淡灰色。F.高台部のみ。G.覆土上層。



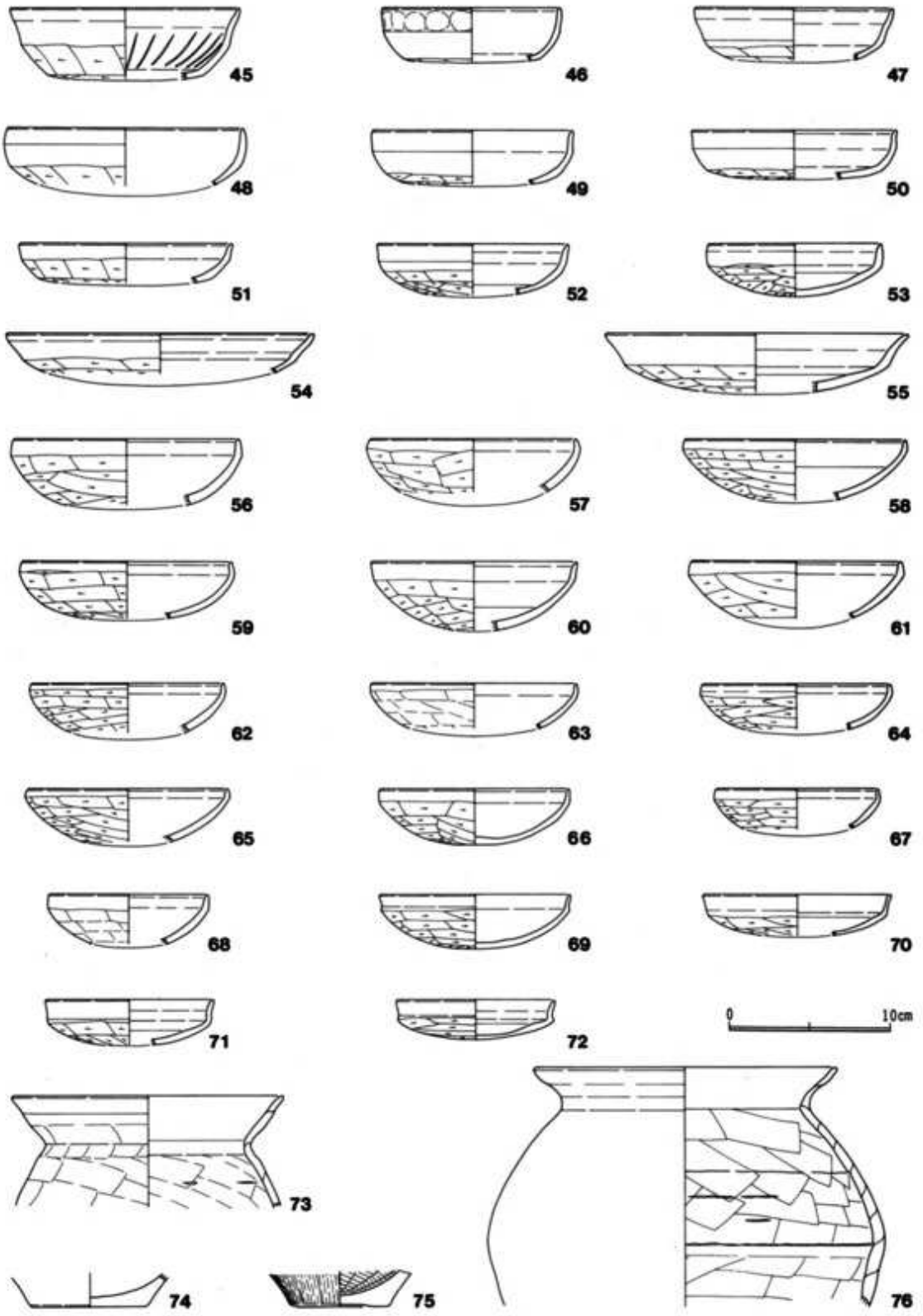
第83図　埋没河川跡D区出土遺物（1）



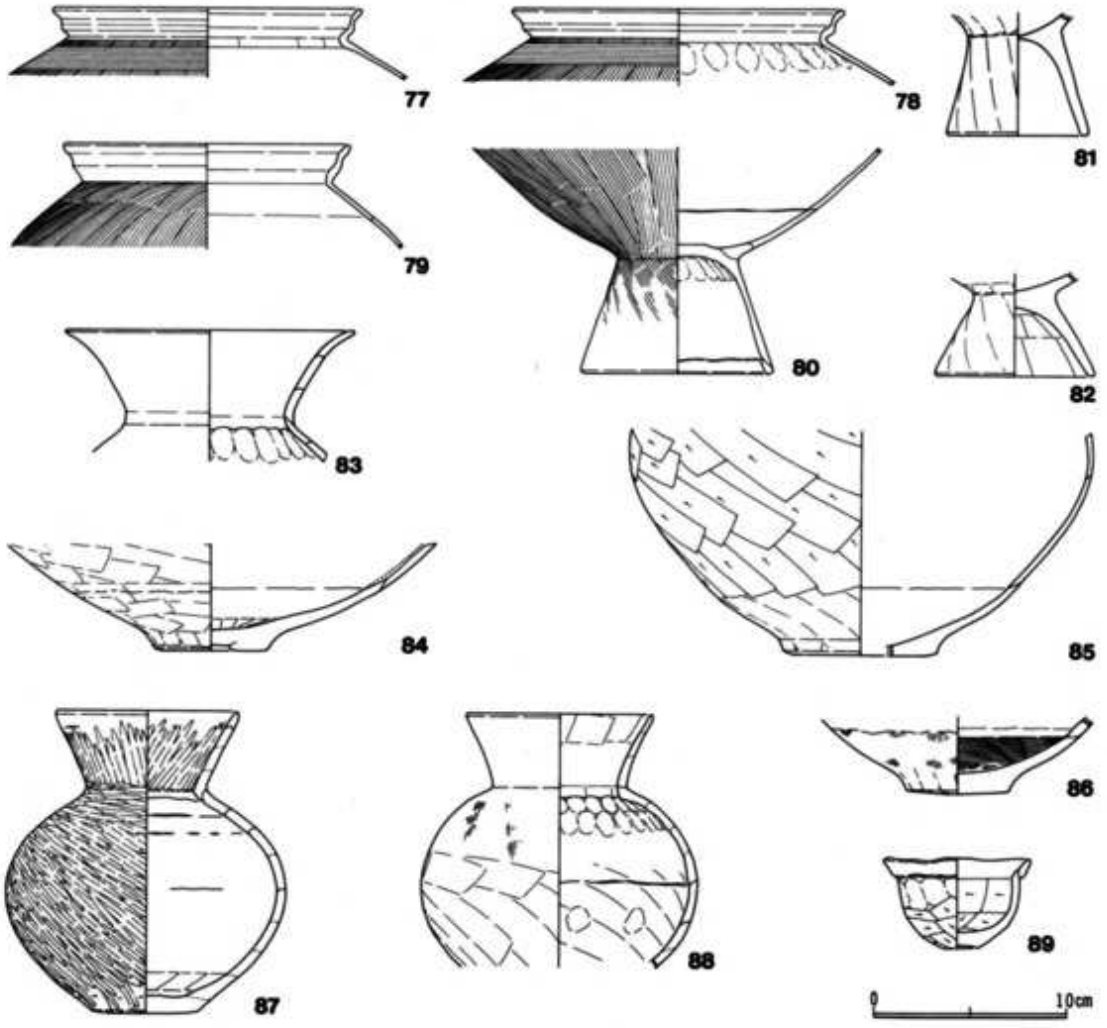
第84図　埋没河川跡D区出土遺物（2）



第85図　埋没河川跡D区出土遺物（3）



第86図　埋没河川跡D区出土遺物（4）



第87図　埋没河川跡D区出土遺物（5）

21	須恵器 坏	A.口縁部径(12.8)、器高3.2、底部径6.8。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.黒色粒、白色粒。E.内外－暗灰色。F.底部1/2破片。G.覆土上層。
22	須恵器 坏	A.口縁部径(13.2)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。D.白色針状物質、白色粒。E.内外－淡灰色。F.口縁部1/6破片。G.覆土上層。
23	須恵器 坏	A.口縁部径(12.0)、器高3.9、底部径(8.0)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り後外周回転施ケズリ。D.白色針状物質、白色粒。E.内外－暗灰色。F.1/4破片。G.覆土上層。
24	須恵器 坏	A.口縁部径(11.2)、器高2.8、底部径(7.2)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.体部内外－暗灰色、底部内外－暗茶褐色。F.1/4破片。G.覆土上層。
25	須恵器 坏	A.底部径(8.2)。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り後外周回転施ケズリ。D.白色針状物質、白色粒。E.内外－淡灰色。F.底部1/4破片。G.覆土上層。
26	須恵器 坏	A.底部径(6.6)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.白色粒。E.内外－暗灰色。F.底部1/2破片。G.覆土上層。

27	灰釉陶器 高台付椀	A.高台部径(7.8)。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.内外面回転ナデ。D.白色粒。E.外－淡灰白色、内－淡緑色。F.底部1/4破片。G.覆土上層。H.内面に淡緑色の灰釉を施す。
28	灰釉陶器 高台付椀	A.高台部径(6.8)。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外－淡灰白色。F.底部1/5破片。G.覆土上層。H.内面に灰釉を施す。
29	灰釉陶器 壺	A.口縁部径(9.4)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外－淡灰色。F.口縁部1/8破片。G.覆土上層。H.内面に灰釉を施す。
30	羽　釜	A.口縁部径(18.6)。B.粘土紐積み上げ成形。C.内外面とも回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－淡灰褐色、内－暗灰色。F.口縁部1/4破片。G.覆土上層。
31	甕	A.口縁部径(21.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ともヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.口縁部1/8破片。G.覆土上層。H.口縁部外面指頭圧痕。
32	甕	A.口縁部径(24.2)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土上層。
33	甕	A.口縁部径(21.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外－淡褐色、内－淡灰褐色。F.1/2。G.覆土上層。
34	甕	A.口縁部径(24.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外－暗橙褐色、内－淡灰褐色。F.口縁部1/6破片。G.覆土上層。
35	甕	A.口縁部径(21.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土上層。
36	甕	A.口縁部径(20.4)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.口縁部1/6破片。G.覆土上層。
37	甕	A.口縁部径(20.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土上層。
38	甕	A.口縁部径(18.8)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗橙褐色。F.口縁部1/6破片。G.覆土上層。
39	甕	A.口縁部径(18.2)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土上層。
40	甕	A.口縁部径(14.2)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－明茶褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土上層。
41	小形甕	A.口縁部径(12.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ともヨコナデ。胴部内外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土上層。
42	台付甕	A.台端部径8.0。B.粘土紐積み上げ成形。台部貼り付け。C.台部内外面ケズリ。端部内外面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗赤褐色。F.台部のみ。G.覆土上層。
43	高　坏	A.口縁部径(19.0)、器高(12.0)、脚端部径(10.0)。B.粘土紐積み上げ成形。脚部貼り付け。C.内外面とも丁寧なナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.1/3破片。G.覆土上層。
44	広口短頸壺	A.口縁部径(10.0)、器高7.3。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－淡茶褐色、内－明橙褐色。F.1/2破片。G.覆土上層
45	坏	A.口縁部径(14.4)、器高(4.5)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、体部内面ナデ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、黒色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.口縁部1/6破片。G.覆土上層。H.体部内面に細かい放射状暗文を施す。
46	坏	A.口縁部径(11.0)。C.口縁部外面及び内面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土上層。
47	坏	A.口縁部径(12.4)。C.口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D.黒色粒、白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.1/4破片。G.覆土上層。
48	坏	A.口縁部径(14.6)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.口縁部1/6破片。G.覆土上層。

49	坏	A.口縁部径(12.4)。C.口縁部外面及び内面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.1/4破片。G.覆土上層。
50	坏	A.口縁部径(12.8)。C.口縁部外面及び内面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.1/4破片。G.覆土上層。
51	坏	A.口縁部径(13.4)。C.口縁部外面及び内面ヨコナデ。体部及び底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.1/5破片。G.覆土上層。
52	坏	A.口縁部径(12.0)。C.口縁部外面及び内面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.外－茶褐色、内－暗茶褐色。F.口縁部1/6破片。G.覆土上層。
53	坏	A.口縁部径(10.8)、器高3.3。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.1/2破片。G.覆土上層。
54	皿	A.口縁部径(19.2)。C.口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－茶褐色。F.口縁部1/8破片。G.覆土上層。
55	皿	A.口縁部径(19.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、白色粒。E.内外－暗灰褐色。F.1/4破片。G.覆土上層。
56	坏	A.口縁部径(14.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.1/5破片。G.覆土上層。
57	坏	A.口縁部径(12.8)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.1/5破片。G.覆土上層。
58	坏	A.口縁部径(13.6)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.1/5破片。G.覆土上層。
59	坏	A.口縁部径(13.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.1/4破片。G.覆土上層。
60	坏	A.口縁部径(13.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－明橙褐色。F.1/2破片。G.覆土上層。
61	坏	A.口縁部径(13.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.黒色粒、白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土上層。
62	坏	A.口縁部径(12.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－明橙褐色、内－淡茶褐色。F.口縁部1/6破片。G.覆土上層。
63	坏	A.口縁部径(12.8)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－明橙褐色。F.1/5破片。G.覆土上層。
64	坏	A.口縁部径(11.6)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土上層。
65	坏	A.口縁部径(12.4)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.1/5破片。G.覆土上層。
66	坏	A.口縁部径(12.0)、器高3.5。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.1/4破片。G.覆土上層。
67	坏	A.口縁部径(10.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－橙褐色。F.1/4破片。G.覆土上層。
68	坏	A.口縁部径(10.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外－橙褐色。F.1/4破片。G.覆土上層。
69	坏	A.口縁部径(12.0)、器高3.4。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外－淡褐色。F.1/5破片。G.覆土上層。
70	坏	A.口縁部径(11.6)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.1/4破片。G.覆土上層。
71	坏	A.口縁部径(10.6)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－茶褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土上層。

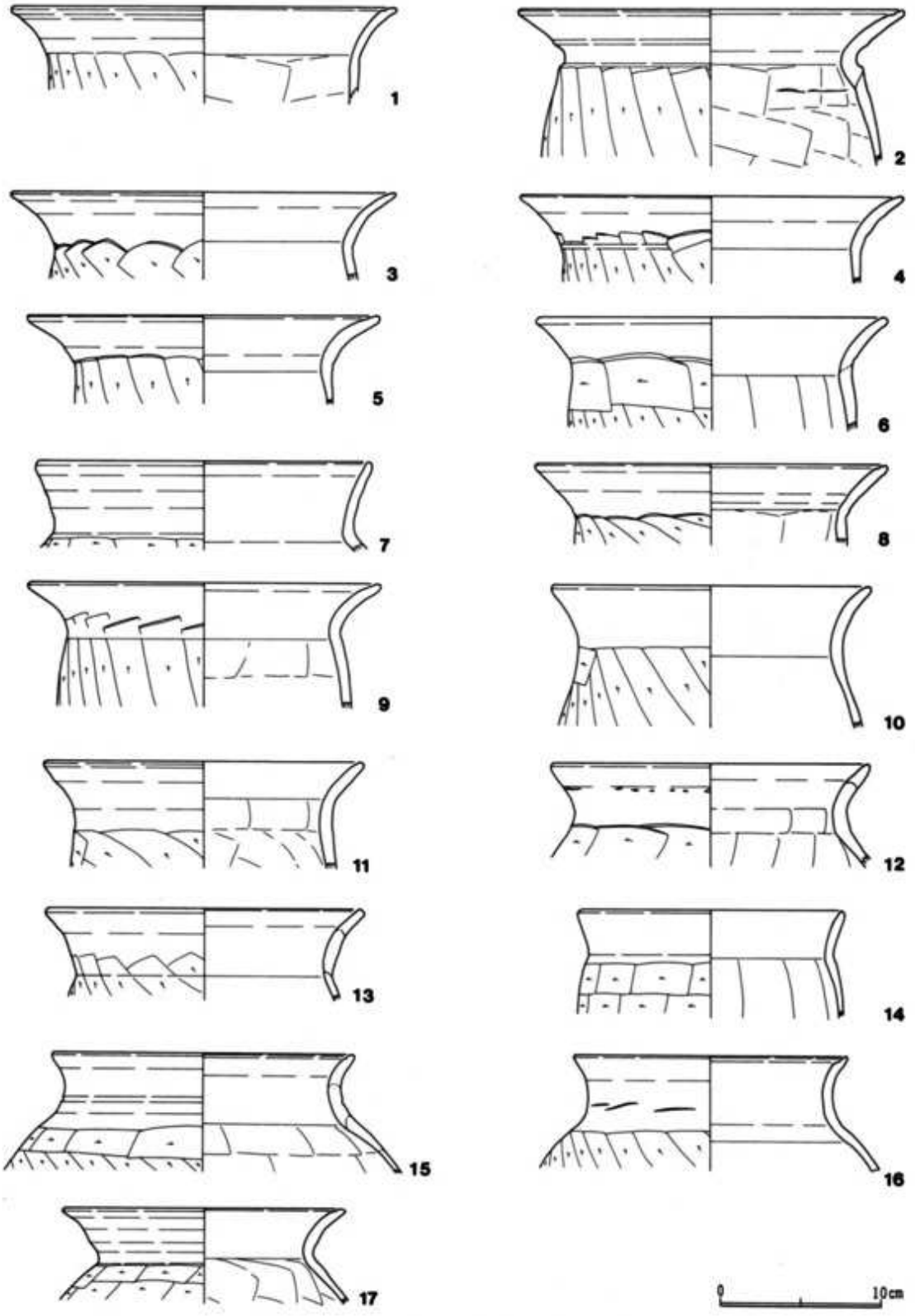
72	坏	A.口縁部径(10.0)、器高2.5。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.3/4破片。G.覆土上層。
73	甕	A.口縁部径(17.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.口縁部1/2破片。G.覆土上層。
74	小形甕	A.底部径7.4。B.粘土紐積み上げ成形。C.胴部内外面ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗赤褐色。F.底部1/2破片。G.覆土上層。
75	小形甕	A.底部径6.4。B.粘土紐積み上げ成形。C.胴部内外面ハケ。底部外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－暗橙褐色、内－淡茶褐色。F.底部のみ。G.覆土上層。
76	甕	A.口縁部径(19.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面篦ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－明茶褐色、内－暗褐色。F.1/3。G.覆土上層。
77	甕	A.口縁部径(16.2)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.口縁部1/3破片。G.覆土上層。
78	甕	A.口縁部径(17.4)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗灰褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土上層。
79	甕	A.口縁部径(14.8)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.口縁部4/5破片。G.覆土上層。
80	台付甕	A.台端部径(10.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.胴部外面ハケ、内面ナデ。台部外面ナデの後部分的にハケ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－淡褐色、内－暗褐色。F.1/4破片。G.覆土上層。
81	台付甕	A.台端部径7.4。B.粘土紐積み上げ成形。C.外面篦ナデ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－明橙褐色。F.台部のみ。G.覆土下層。
82	台付甕	A.台端部径(8.2)。B.粘土紐積み上げ成形。C.内外面篦ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.台部3/4。G.覆土下層。
83	壺	A.口縁部径(15.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ともミガキ？。胴部外面ミガキ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外－明茶褐色、内－暗褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土下層。
84	壺	A.底部径11.0。B.粘土紐積み上げ成形。C.胴部外面篦ナデ、内面ナデ。底部外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－淡茶褐色、内－暗褐色。F.胴下半のみ。G.覆土下層。
85	壺	A.底部径8.0。B.粘土紐積み上げ成形。C.胴部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。底部外面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外－明茶褐色、内－暗灰褐色。F.1/4破片。G.覆土上層。
86	壺	A.底部径5.3。B.粘土紐積み上げ成形。C.胴部外面ハケの後ナデ、内面ハケ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.外－淡茶褐色、内－淡褐色。F.底部のみ。G.覆土上層。
87	直口壺	A.口縁部径(9.6)、器高15.5、底部径5.6。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ミガキ。胴部外面ケズリの後ミガキ、内面ナデ。底部外面ナデの後外周ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.3/4。G.覆土下層。
88	直口壺	A.口縁部径(9.6)、残存高13.0。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ナデ。胴部外面上半ハケの後ナデ、下半ケズリの後ナデ。胴部内面篦ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－赤茶褐色。F.1/2。G.覆土下層。H.胴部外面に黒斑あり。
89	小形鉢	A.口縁部径7.6、器高4.7、底部径1.8。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ケズリ。底部外面ケズリ。D.黒色粒、白色粒。E.外－暗灰色、内－黒灰色。F.ほぼ完形。G.覆土下層。

8．埋　没　谷(第５図)

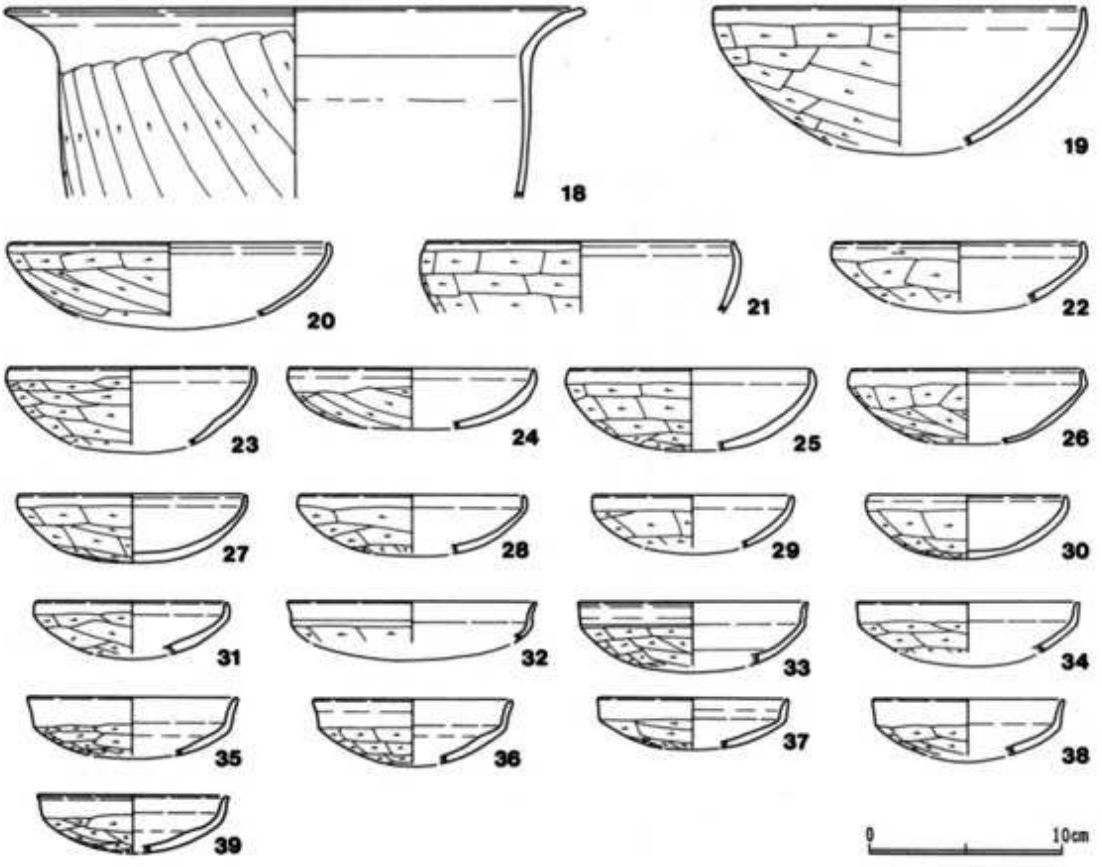
ＤＩ区の北端に位置する。調査区内ではその南東端の一部が検出されただけであるため、その具体的な様相は不明であるが、調査区外の北側には飯玉東遺跡との間に現在水田化された開析谷が広がっているため、恐らくその一部ではないかと思われる。調査区内では、北西方向に向かって緩やかに傾斜しており、深さは北西端で現地表面から２ｍ近くあるものと思われるが、湧水が激しく危険な状況であったため、谷底面まで掘削することができなかった。覆土は、暗灰色の粘質土で、砂利層や砂層は見られず、自然堆積を示していた。遺物は、覆土の上半から比較的多くの土器片が出土している。大半は７世紀中頃～後半の土器片で、古墳時代前期や平安時代中期の土器片も若干出土している。出土土器の主体を占める７世紀中頃～後半の土器片は、土師器の甕や坏が主体で、須恵器は甕の破片が数片見られる程度である。本埋没谷は、覆土の状態や出土遺物の様相から、７世紀中頃～後半に埋没が進行したようであり、東側の埋没河川と同様の埋没状況が伺える。

ＤＩ区埋没谷出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径(24.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外－明茶褐色。F.口縁部1/3破片。G.覆土中。H.口唇部内面に篦状工具による段をもつ。
2	甕	A.口縁部径(24.2)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.1/4破片。G.覆土中。H.口唇部内面に篦状工具による段をもつ。
3	甕	A.口縁部径(24.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土中。
4	甕	A.口縁部径(24.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒、黒色粒。E.内外－淡橙褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土中。
5	甕	A.口縁部径(22.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外-淡橙褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土中。H.口唇部内面にナデによる窪みをもつ。
6	甕	A.口縁部径(22.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.白色粒、黒色粒。E.内外－淡褐色。F.口縁部1/3破片。G.覆土中。H.口縁部内面に黒斑あり。
7	甕	A.口縁部径(21.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒、黒色粒。E.内外－淡褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土中。H.口唇部内面にナデによる窪みをもつ。
8	甕	A.口縁部径(22.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.口縁部1/3破片。G.覆土中。H.口唇部内面に篦状工具による段をもつ。
9	甕	A.口縁部径(22.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.白色粒、黒色粒。E.内外－明橙褐色。F.口縁部1/3破片。G.覆土中。H.口唇部内面にナデによる窪みをもつ。
10	甕	A.口縁部径(20.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒、黒色粒。E.内外－淡橙褐色。F.口縁部1/3破片。G.覆土中。
11	甕	A.口縁部径(20.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.口縁部1/3破片。G.覆土中。



第88図　ＤＩ区埋没谷出土遺物（１）

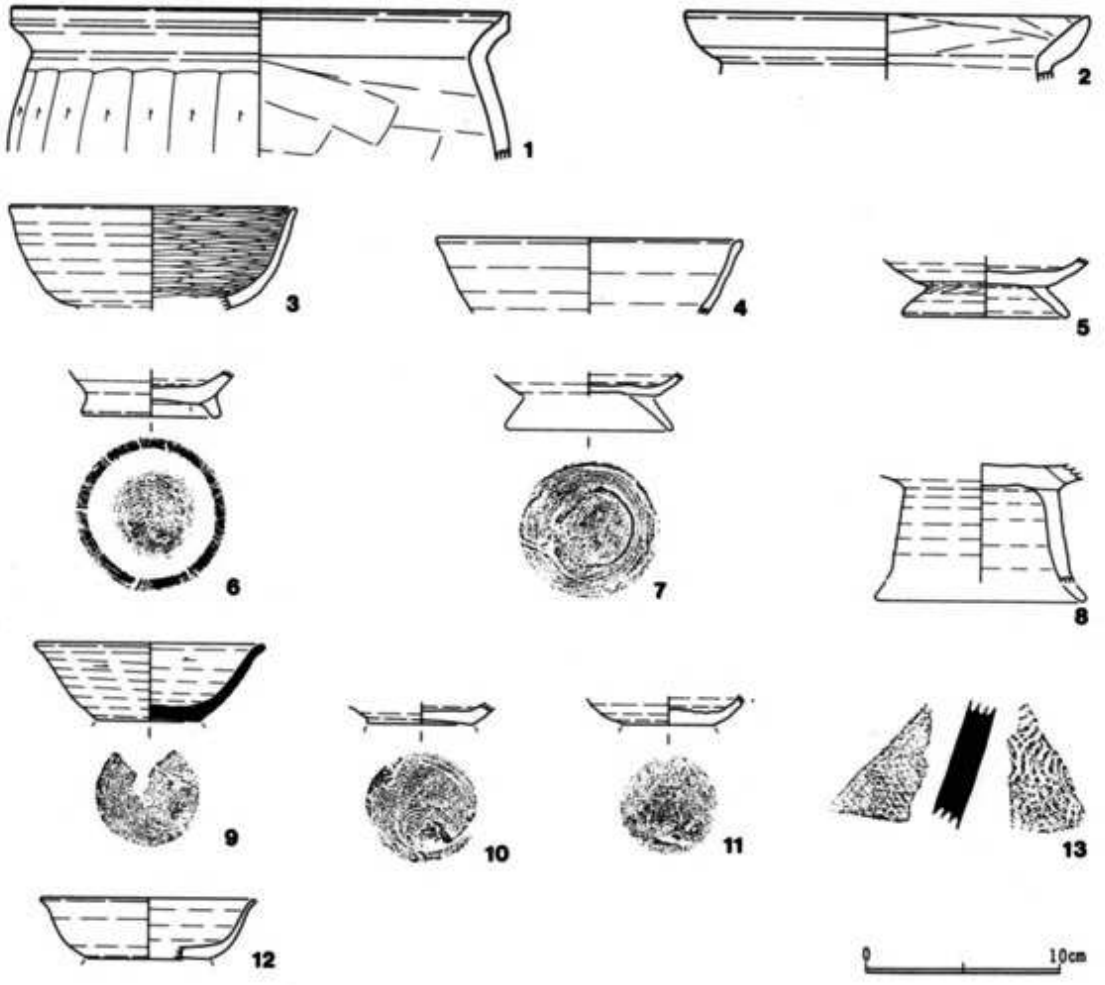


第89図　ＤＩ区埋没谷出土遺物（２）

12	瓷	A.口縁部径(20.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土中。H.口唇部内面にナデによる窪みをもつ。
13	瓷	A.口縁部径(20.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土中。H.口唇部内面はヨコナデにより窪む。
14	瓷	A.口縁部径(16.8)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡橙色。F.口縁部1/4破片。G.覆土中。
15	瓷	A.口縁部径(18.8)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－明橙褐色、内－暗褐色。F.口縁部1/2。G.覆土中。H.口唇部内面に沈線と頸部外面に沈線状の段を施す。
16	瓷	A.口縁部径(17.2)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外－明橙褐色。F.口縁部3/4。G.覆土中。H.口唇部内面に篦状工具による段をもつ。
17	瓷	A.口縁部径17.6。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.胴部上半のみ。G.覆土中。H.口唇部内面に篦状工具による段をもつ。

18	大形甕	A.口縁部径(30.2)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－明橙褐色、内－淡灰褐色。F.口縁部1/2破片。G.覆土中。H.口唇部内面にナデによる窪みをもつ。
19	坏	A.口縁部径(19.2)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.1/4破片。G.覆土中。
20	坏	A.口縁部径(16.8)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.1/5破片。G.覆土中。
21	坏	A.口縁部径(16.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土中。
22	坏	A.口縁部径(12.8)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土中。
23	坏	A.口縁部径(12.8)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－橙褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土中。
24	坏	A.口縁部径(12.8)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－淡茶褐色、内－明橙褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土中。H.体部外面に黒斑あり。
25	坏	A.口縁部径(12.6)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.口縁部1/5破片。G.覆土中。
26	坏	A.口縁部径(12.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ。内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.口縁部1/6破片。G.覆土中。H.体部外面に黒斑あり。
27	坏	A.口縁部径(12.0)、器高3.5。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－明橙褐色。F.1/4破片。G.覆土中。
28	坏	A.口縁部径(11.8)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.外－淡橙褐色、内－明橙褐色。F.1/4破片。G.覆土中。H.体部外面に黒斑あり。
29	坏	A.口縁部径(10.6)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.1/4破片。G.覆土中。
30	坏	A.口縁部径(10.4)、器高3.3。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－明茶褐色。F.1/3破片。G.覆土中。
31	坏	A.口縁部径(10.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.1/4破片。G.覆土中。
32	坏	A.口縁部径(13.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.口縁部1/5破片。G.覆土中。
33	坏	A.口縁部径(12.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.口縁部1/2破片。G.覆土中。
34	坏	A.口縁部径(11.6)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.口縁部1/2破片。G.覆土中。
35	坏	A.口縁部径(11.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－黒色、内－淡茶褐色。F.1/3破片。G.覆土中。H.体部外面に黒斑あり。
36	坏	A.口縁部径(10.4)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒、黒色粒。E.内外－淡茶褐色。F.口縁部1/3破片。G.覆土中。H.体部外面に黒斑あり。
37	坏	A.口縁部径(10.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.1/4破片。G.覆土中。H.体部外面に黒斑あり。
38	坏	A.口縁部径(10.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外－明茶褐色。F.1/4破片。G.覆土中。
39	坏	A.口縁部径(10.0)、推定高(3.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.1/3破片。G.覆土中。

9．その他の出土遺物

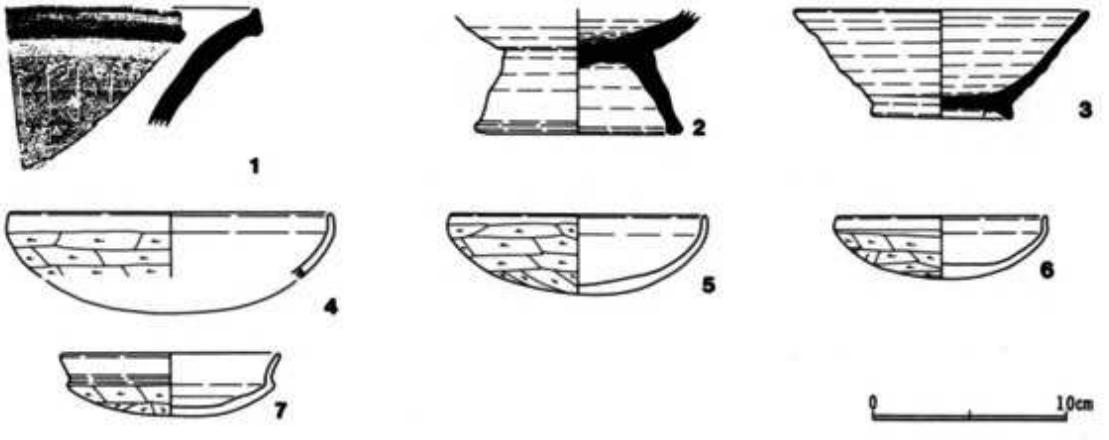


第90図　G区調査区内出土遺物

G区調査区内出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径(25.8)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。胴部外面ケズリ、内面 篦ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色、肉－淡灰褐色。F.口縁部1/4破片。G.G区調査区内。
2	甕	A.口縁部径(21.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部外面軟質刷毛状工具によるナデ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.口縁部1/5破片。G.G区調査区内。
3	椀	A.口縁部径(15.0)。B.ロクロ成形。C.体部外面回転ナデ、内面ミガキ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外－淡橙褐色、内－暗茶褐色。F.体部1/6破片。G.G区調査区内。H.体部内面は黒色処理されていない。
4	椀	A.口縁部径(16.0)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.口縁部1/6破片。G.G区調査区内。
5	高台付椀	A.高台部径(8.6)。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り後ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－明茶褐色。F.底部のみ。G.G区調査区内。

6	高台付坏	A.高台部径7.2。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外－明橙褐色。F.底部のみ。G.G区調査区内。
7	高台付椀	A.底部径6.8。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り後ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.底部のみ。G.G区調査区内。H.高台部剥落。
8	高台付鉢	B.粘土紐積み上げ後ロクロ整形。高台部貼り付け。C.高台部内外面回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.高台部1/4破片。G.G区調査区内。
9	須恵器坏	A.口縁部径12.0、器高4.0、底部径5.3。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.白色粒。E.内外－淡灰色。F.2/3。G.G区調査区内。
10	坏	A.底部径5.6。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.底部のみ。G.G区調査区内。
11	坏	A.底部径4.8。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.底部のみ。G.G区調査区内。
12	坏	A.口縁部径(11.2)、器高3.1、底部径(6.4)。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.1/4破片。G.G区調査区内。
13	須恵器甕	B.粘土紐積み上げ後叩き成形。C.胴部外面平行叩き目、内面青海波文の当道具痕を残す。D.白色粒。E.内外－暗灰色、肉－暗褐色。F.胴部破片。G.G区調査区内。

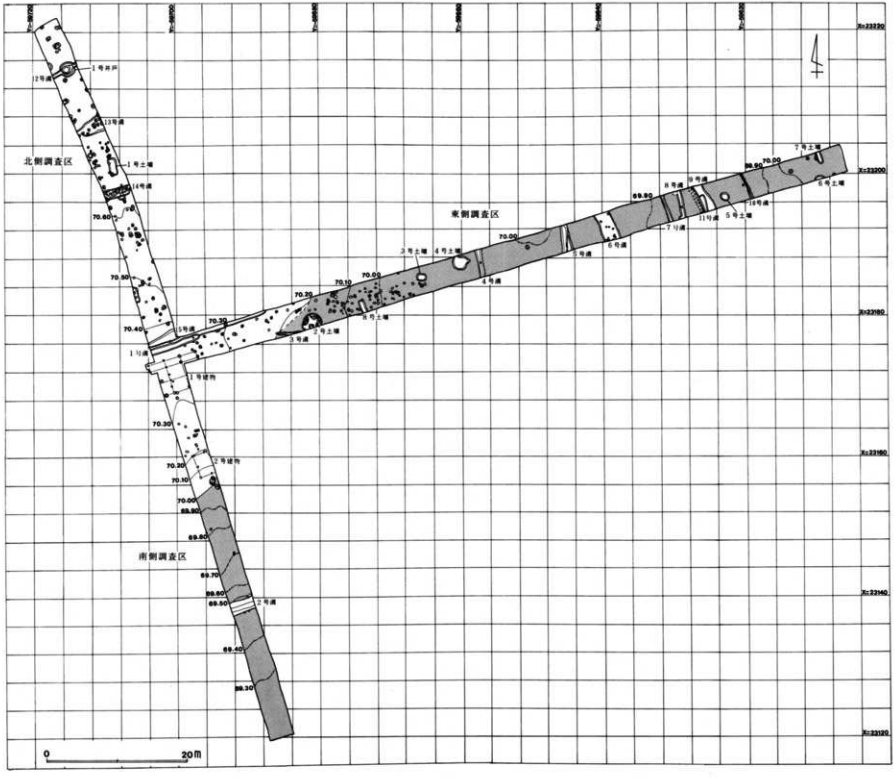


第91図　D区ピット出土遺物

D区ピット出土遺物観察表

1	須恵器甕	B.粘土紐積み上げ後ロクロ整形。C.口縁部外面回転ナデの後、振幅の大きな櫛描波状文を施す。内面回転ナデ。D.白色粒。E.内外－黒灰色、肉－暗茶褐色。F.破片。G.D区P36。
2	須恵器高台付壺	A.高台部径10.8。B.粘土紐積み上げ後ロクロ整形。高台部貼り付け。C.高台部内外面及び胴部外面回転ナデ。D.白色粒。E.外－淡灰色、内－暗灰色。F.1/2破片。G.D区P31。H.底部内面に円形の押圧痕が顕著に見られる。高台部貼り付けの底部側接合面には、複数の沈線を施す。
3	須恵器高台付坏	A.口縁部径15.2、器高5.6、高台部径7.3。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.体部及び高台部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－淡灰白色。F.2/3。G.D区P３。H.環元不良。
4	坏	A.口縁部径(16.6)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。E.内外－明茶褐色。F.1/6破片。G.D区P９。H.体部外面に黒斑あり。

5	坏	A.口縁部径(13.2)、器高4.1。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.1/3破片。G.D区P 7。
6	坏	A.口縁部径10.8、器高3.2。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.3/4破片。G.D区P39。
7	坏	A.口縁部径11.4、器高3.2。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗橙褐色。F.完形。G.D区P53。



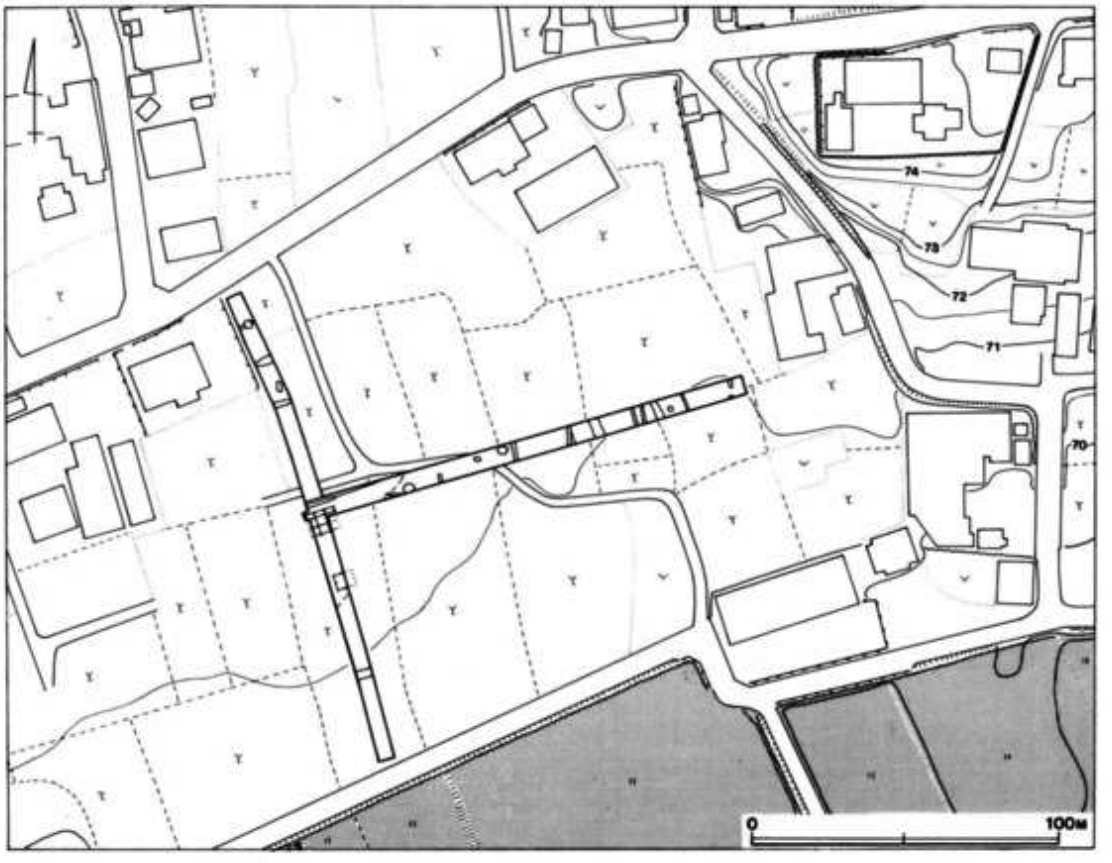
第92図　南ノ前遺跡調査区全体図

第Ⅳ章　南ノ前遺跡の発掘調査

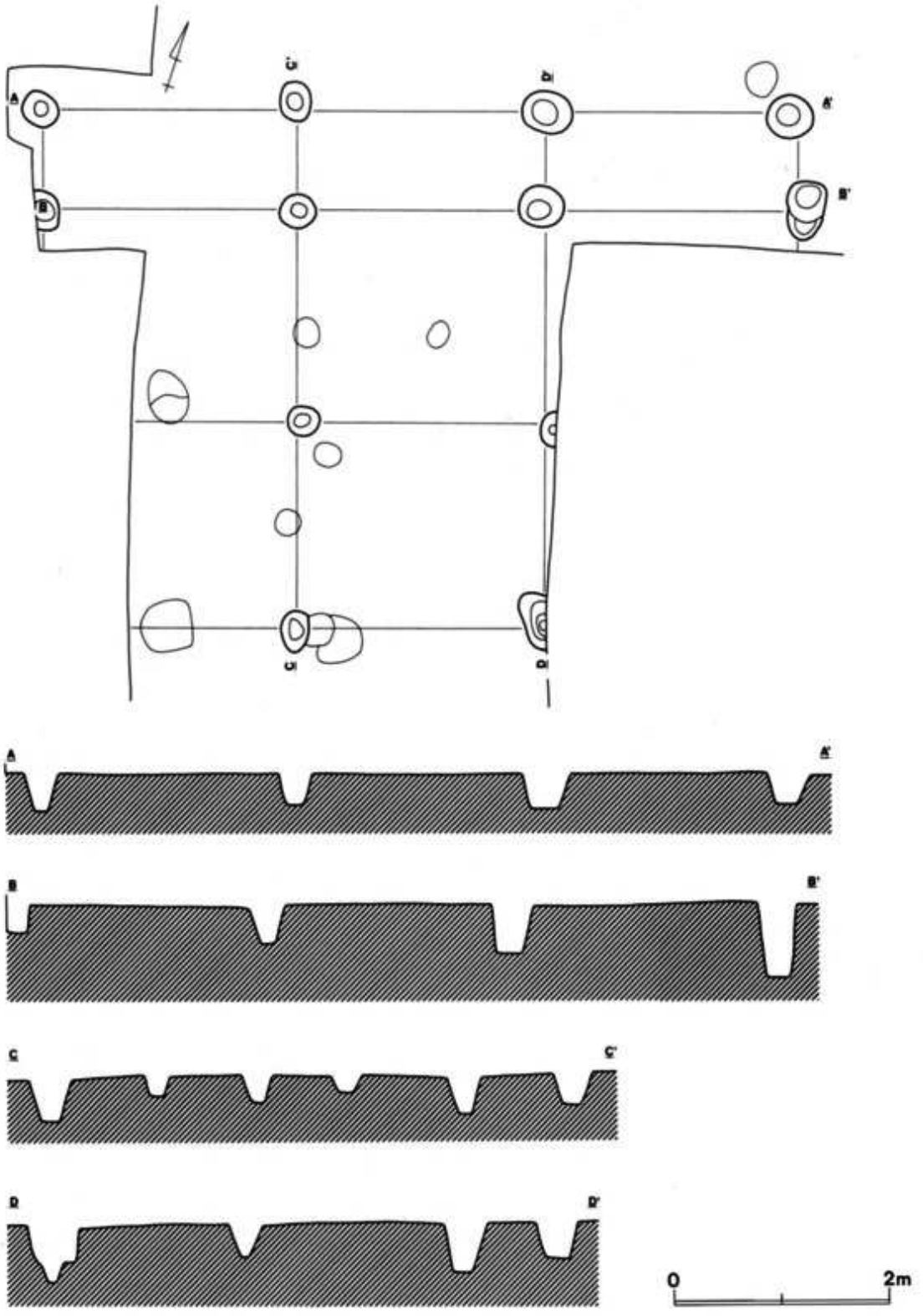
第１節　遺跡の概要

南ノ前遺跡は、大久保山(浅見山)西側斜面下の標高70mを測る低台地の南側緩斜面に位置している。遺跡の南側には小規模な谷を利用した水田が広がっており、北側は同一台地上に立地する雷電下遺跡と隣接するものと考えられる。また、この小規模な谷の奥には、児玉党の菩提寺と言われ、南北朝期の薊山合戦で焼失したという伝承のある「西光寺」と同一の小字名がある。

調査区内で検出された遺構は、掘立柱建物跡２棟・井戸跡１基・土壙８基・溝跡15条である。これらの遺構は、古代～近現代にわたるものであるが、主体は古代と中世である。古代の遺構と考えられるものは、土壙４基と溝跡３条がある。多くは10世紀代のもので、隣接する雷電下遺跡の該期集落と関係するか、あるいは小規模な集落に付随するものであろう。中世の遺構と考えられるものは、掘立柱建物跡２棟・井戸跡１基・土壙１基・溝跡５条がある。出土遺物が少ないため、厳密な時期の特定に困難なものが多いが、出土遺物や覆土の状態からは、15～16世紀を主体にすると思われる。調査範囲が狭いため明確なことは分からないが、これらは数棟の掘立柱建物跡を中心とした、一部に小規模な溝による区画を伴う一般農民層の屋敷跡ではないかと思われる。



第93図　南ノ前遺跡調査位置図



第94図　第1号掘立柱建物跡

第２節　検出された遺構と遺物

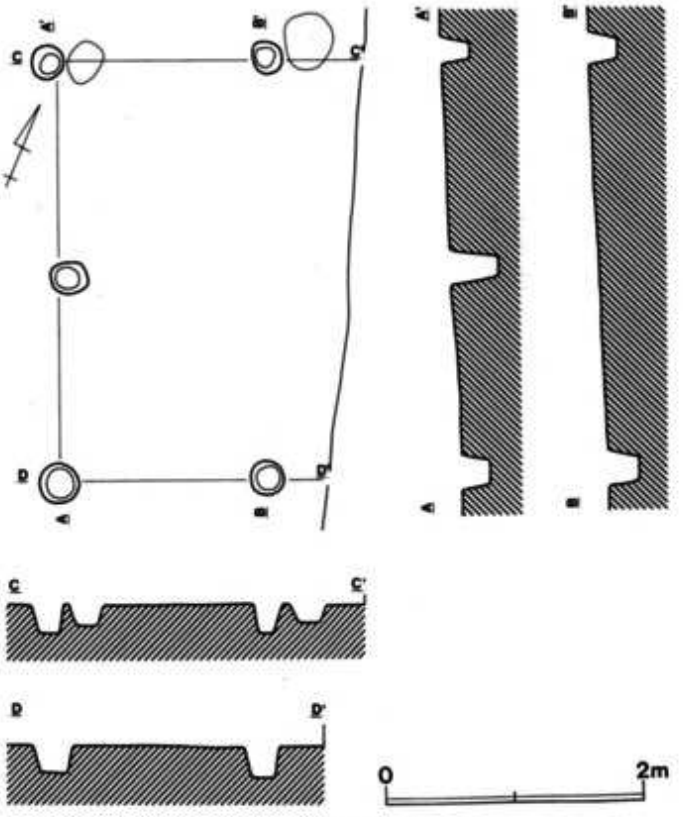
１．掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第94図）

調査区の中央部に位置し、北側には本建物跡と併走する第１号溝跡がある。建物跡の形態は、調査区内では建物の一部しか検出されていないため不明であるが、南北方向２間・東西方向３間以上の長方形を呈する総柱式の建物のようで、北側に庇か下屋を伴っている。規模は、身舎部分の梁行方向が3.80m、桁行方向は6.90m以上で、庇の幅は約半間の90cmを測る。建物跡の桁行方向は、N－73°－Eを向いており、ほぼ地形の等高線の方向に沿っている。柱通りは比較的良く、いずれの柱穴列ともほぼ直線上に配列されている。柱心間は、桁行側が１間2.30m、梁行側が１間1.90mのそれぞれ等間隔で、梁行側に比べて桁行側の１間の方が長くなっている。柱穴は、身舎部分も庇あるいは下屋部分もほぼ同じ形態で、平面形が長さ30cm～40cmの比較的規模の小さい円形や楕円形に近い形態を呈しており、確認面からの深さは30cm～45cmある。柱穴覆土は、いずれもロームブロックを含む暗褐色土であるが、B軽石の混入は明確ではない。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態や柱穴の形態から推測すると、中世以降ではないかと思われる。

第２号掘立柱建物跡（第95図）

南側調査区の北寄りに位置する。建物跡の形態は、建物跡の東側が調査区外に位置するため不明であるが、南北方向２間・東西方向が２間以上の比較的規模の小さな方形か長方形を呈する側柱式の建物のようである。規模は、南北方向が3.20m、東西方向は2.40m以上ある。建物跡の東西方向は、N－70°－Eを向いており、北側の第１号掘立柱建物跡とほぼ同じ向きで、地形の等高線に沿っている。柱心間は、南北方向が１間1.60mの等間隔で、東西方向も調査区内で検出された部分では同じ1.60mで、建物の梁行桁行ともやや規模の小さい同じ1.60mの１間幅であった可能性が高い。柱穴は、いずれも25cm～30cmの規模の小さな円形を呈し、確認面からの深さは22cm～38cmを測る。



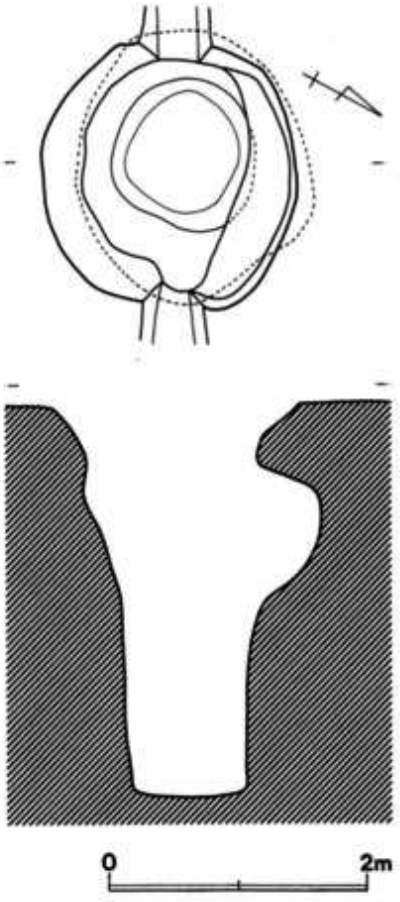
第95図　第２号掘立柱建物跡

柱穴覆土は、いずれもローム粒子を微量含む黒褐色土であるが、B軽石の混入は明確ではない。本建物跡は、遺物が何も出土していないため時期は明確ではないが、その位置や形態から北側の第1号掘立柱建物跡に付随する作業小屋や物置のような性格の建物ではないかと思われる。

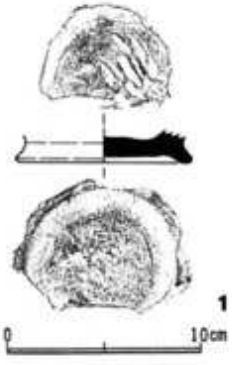
2．井　戸　跡

第1号井戸跡(第96図)

北側調査区の北端付近に位置し、遺構上面を近世後半以降の東西方向に延びる第12号溝跡によって切られている。井戸掘り方の平面形は、直径2mのほぼ円形を呈している。断面の形態は、上半は緩やかに傾斜し、中位は崩落により大きくオーバーハングしているが、下半は平面形が直径1.10mの円形を呈する筒状に直線的に深くなっている。底面は、平坦である。確認面からの深さは約3mあり、ローム層下の黄白色粘土層と、さらにその下の緑色粘土層を掘り込んでいる。覆土上半部からは比較的大きな自然石が数個程度出土したが、石組等に関係するものかは不明である。また、井戸内部には木枠の痕跡はまったく認められない。遺物は、覆土中より古代の須恵器高台付壷やロクロ成形の中世土師器皿の小破片が数片出土しただけである。本井戸跡は、出土遺物から中世後半以降と考えられるが、南側の第1号掘立柱建物跡や第2号掘立柱建物跡とは距離がやや離れており、それらによって構成される屋敷と直接関係するものかは不明である。



第96図　第1号井戸跡



第97図　第1号井戸跡
出土遺物

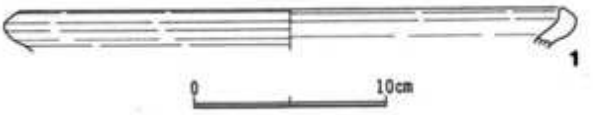
第1号井戸跡出土遺物観察表

1	須恵器 高台付壷	A.高台部径9.2。B.高台部貼り付け。C.底部外面ナデ、内面指ナデ。高台部内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外ー暗灰色。F.底部2/3。G.覆土中。H.底部内面に櫛歯状工具による刺突痕あり。底部外面に離れ砂付着。

3．土　　壙

第１号土壙(第101図)

北側調査区に位置する。平面形は、南北方向に長い長方形ぎみの形態を呈している。規模は、南北方向が2.54m、東西方向が1.10mで、確認面からの深さは11.5cmを測る。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、B軽石を含む黒褐色土を主体にしている。遺物は、覆土中から須恵質の在地産片口鉢の口縁部破片が出土しただけである。時期は、覆土の状態や出土遺物から、中世後半の14世紀後半～15世紀初頭頃と考えられる。



第98図　第１号土壙出土遺物

第１号土壙出土遺物観察表

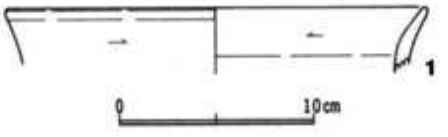
1	片口鉢	A.口縁部径(29.6)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外－暗灰色。F.口縁部小破片。G.覆土中。H.須恵質。在地産。

第２号土壙(第101図)

東側調査区の西寄りに位置し、遺構上面には黒色土の第Ⅲ層が被覆している。平面形は、比較的規模の大きな円形か楕円形を呈するようである。規模は、東西方向が2.80mあり、南北方向は1.92mまで測れる。確認面からの深さは20cmあり、底面はローム層に達している。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦であるが、壁際には不定形な小ピットが比較的多く掘られている。覆土は、焼土粒子やローム粒子を含む黒褐色土と暗褐色土である。遺物は、覆土中から羽釜や土師器皿の破片が数片出土しただけである。時期は、覆土の状態や出土遺物から見て、10世紀頃のものと考えられる。

第３号土壙(第101図)

東側調査区の中央部に位置し、遺構上面には黒色土の第Ⅲ層が被覆している。平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ東西方向に長い比較的整った長方形を呈している。規模は、東西方向が1.34m、南北方向が1.02mで、確認面からの深さは20cmを測る。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、焼土粒子や炭化粒子を含む黒色土を主体にしている。遺物は、覆土中から土師器甕や還元不良の高台付坏の破片が少量出土しただけである。時期は、出土遺物や覆土の状態から、10世紀頃のものと考えられる。



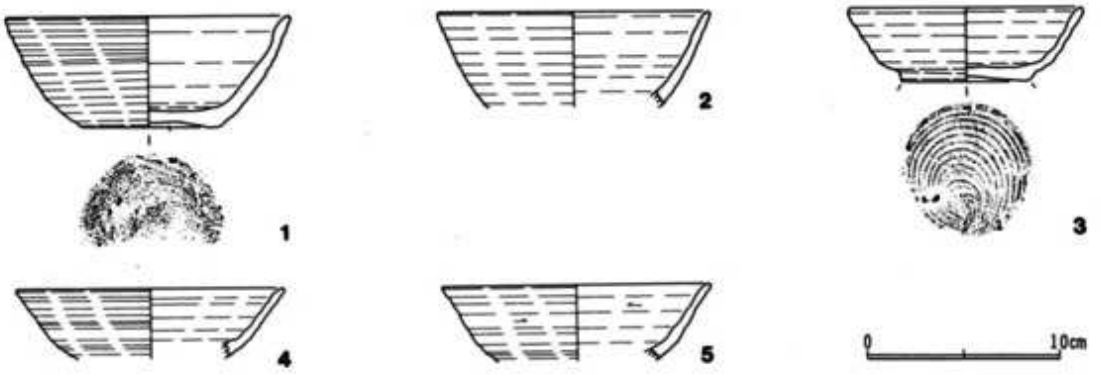
第99図　第３号土壙出土遺物

第３号土壙出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径(21.8)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.口縁部1/6破片。G.覆土中。

第４号土壙(第101図)

東側調査区の中央部に位置し、遺構上面には黒色土の第Ⅲ層が被覆している。平面形は、コーナー部の丸みが強いやや不整の長方形を呈しているが、北東側コーナー部付近を後世のピットによって一部切られている。規模は、東西方向が2.08m、南北方向が1.80mを測る。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは28cmある。底面は、広く平坦であるが、若干起伏が見られる。本土壙の底面の中央部や壁面の一部は、非常に良く焼けて広範囲に赤色化しており、その赤色化した底面上には、棒状の炭化材が多く見られる。覆土は、焼土粒子や炭化粒子を含む黒褐色土を主体にしている。遺物は、坏を主体とする比較的多くの土器片が覆土中から出土している。時期は、出土遺物より10世紀のものと考えられる。



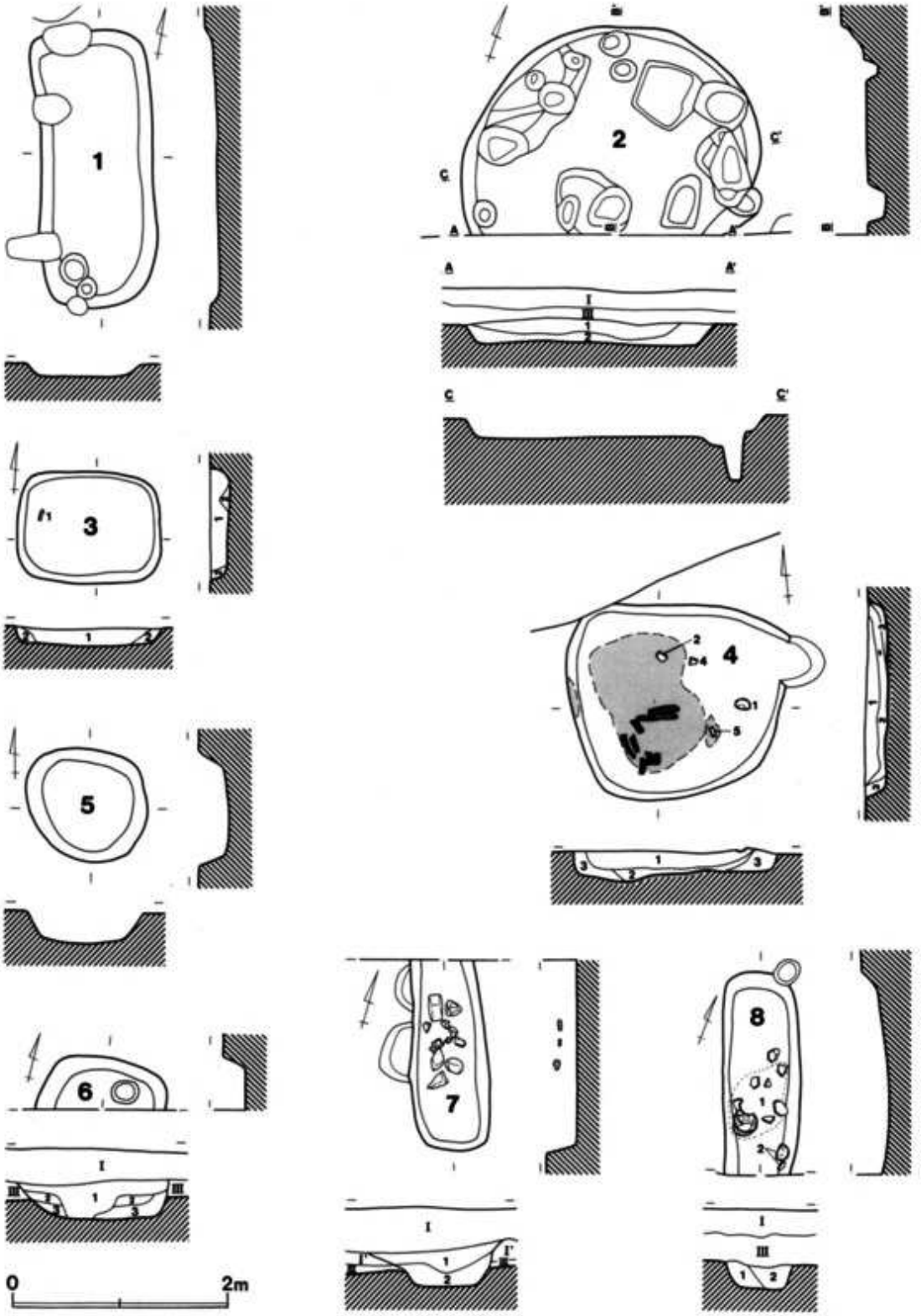
第100図　第４号土壙出土遺物

第４号土壙出土遺物観察表

1	椀	A.口縁部径(14.8)、器高5.7、底径7.4。B.ロクロ成形。C.体部内外面とも回転ナデ。底部外面回転糸切り後、外周回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.1/2。G.覆土中。
2	椀	A.口縁部径(14.2)。B.ロクロ成形。C.体部内外面とも回転ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外淡褐色。F.口縁部1/3破片。G.覆土中。
3	坏	A.口縁部径(12.0)、器高3.8、底径6.8。B.ロクロ成形。C.体部内外面とも回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.黒色粒、白色粒。E.内外－淡灰色。F.1/2。G.覆土中。H.体部内外面とも黒斑あり。
4	坏	A.口縁部径(14.0)。B.ロクロ成形。C.体部内外面とも回転ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土中。H.体部内外面とも黒斑あり。
5	坏	A.口縁部径(14.0)。B.ロクロ成形。C.体部内外面とも回転ナデ。D.白色粒。E.内外－淡褐色。F.口縁部1/4破片。G.覆土中。H.体部内外面とも黒斑あり。

第５号土壙(第101図)

東側調査区の東側寄りに位置し、黒色土の第Ⅲ層を切っている。平面形は、やや不整の円形に近い形態を呈している。規模は、東西方向が1.12m、南北方向が1.04mあり、確認面からの深さは26cmを測る。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦であるが若干丸みをもつ。覆土は、A軽石とロームブロックを含む暗褐色土を主体にしている。出土遺物はなく、時期は覆土の状態から近世後半以降と考えられる。



第101図　土　　壙

第２号土壙土層説明
第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅲ層：黒色土（Ｂ軽。石混入。）
第１層：黒褐色土層（焼土粒子･ローム粒子･ロームブロックを微量含む。粘性･しまりともない。）
第２層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、Ｂ軽石･ロームブロックを微量含む。粘性･しまりともない。）

第３号土壙土層説明
第１層：黒色土層（ローム粒子･焼土粒子･炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第２層：淡黄白色土層（淡黄白色粘土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第４号土壙土層説明
第１層：黒褐色土層（ローム粒子･焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第２層：黒褐色土層（炭化粒子を多量に、ローム粒子･焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第３層：暗褐色土層（淡黄白色粘土ブロックを均一に、焼土粒子･炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第６号土壙土層説明
第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅲ層：黒色土（Ｂ軽石混入。）
第１層：暗褐色土層（Ａ軽石を均一に、白色粘土粒子･ローム粒子を微量含む。粘性･しまりともない。）
第２層：暗褐色土層（Ａ軽石･白色粘土粒子を微量含む。粘性･しまりともない。）
第３層：黒褐色土層（白色粘土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第７号土壙土層説明
第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅰ'層：旧耕作土（Ａ軽石混入。）
第Ⅲ層：黒色土（Ｂ軽石混入。）
第１層：淡褐色土層（Ａ軽石を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性･しまりともない。）
第２層：淡褐色土層（Ａ軽石･ローム粒子を均一に含む。粘性･しまりともない。）

第８号土壙土層説明
第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅲ層：黒色土（Ｂ軽石混入。）
第１層：黒褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第２層：黒色土層（ローム粒子･焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第６号土壙（第101図）

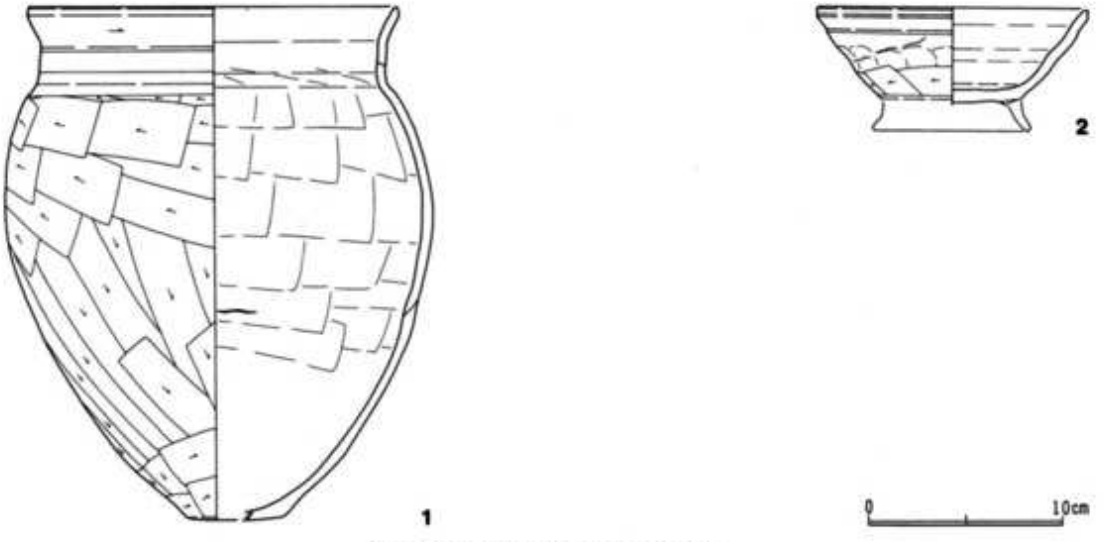
東側調査区の東端部に位置し、黒色土の第Ⅲ層を切っている。平面形は、土壙の南側半分が調査区外であるため明確ではないが、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部の丸みが強い方形か長方形を呈するものと思われる。規模は、東西方向が1.14m、南北方向は50cmまで測れる。確認面からの深さは21cmを測る。壁は内湾ぎみに緩やかに立ち上がり、底面は広く平坦で北側に直径25cmの小ピットを伴う。遺物は、何も出土しなかった。時期は、第Ⅲ層を切って掘削され、覆土中にＡ軽石を含むことから、近世後半以降と考えられる。

第７号土壙(第101図)

東側調査区の東端部に位置し、黒色土の第Ⅲ層を切っている。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、ややコーナー部が丸みをもつ南北方向に長い長方形を呈するものと思われるが、あるいは溝状の形態になる可能性もあろう。規模は、東西方向が75cm、南北方向は1.74cmまで測れる。深さは、調査区北側の断面で42cmを測る。壁は、上半は緩やかで、下半は直線的にやや傾斜して立ち上がっていたようである。底面は、広く平坦である。覆土は、A軽石を均一に含む淡褐色土を主体としており、覆土中からは粉挽臼の破片を含む比較的多くの自然石が出土している。時期は、覆土の状態から近世後半以降と考えられる。

第８号土壙(第101図)

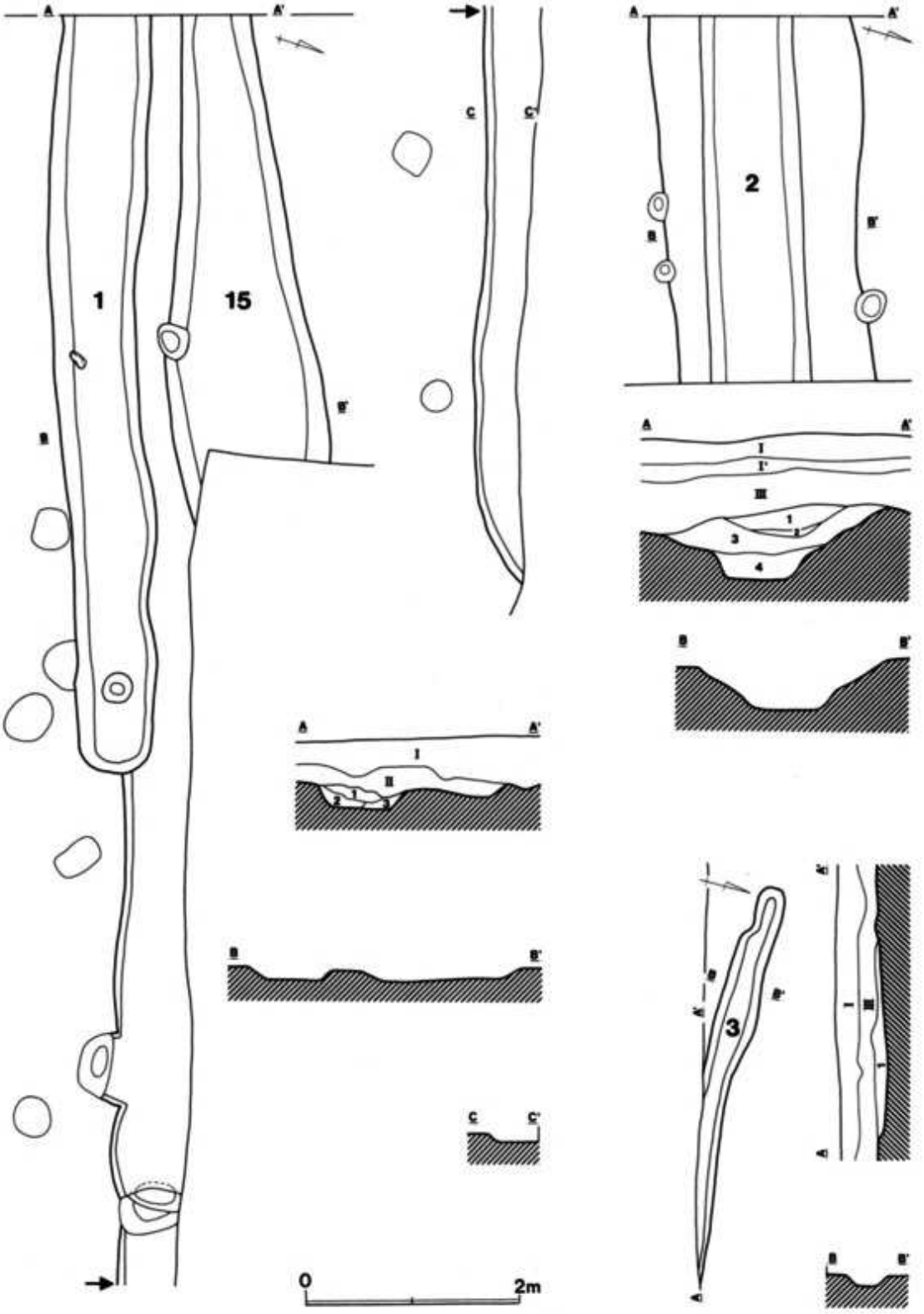
東側調査区の西寄りに位置し、遺構上面には黒色土の第Ⅲ層が被覆している。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、ややコーナー部が丸みをもつ南北方向に長い長方形を呈するものと思われるが、第７号土壙と同様に溝状の形態になる可能性もあろう。規模は、東西方向が72cm、南北方向は1.86mまで測れる。確認面からの深さは23cmを測る。壁はやや内湾ぎみに立ち上がり、底面は広く平坦であるが若干丸みをもつ。本土壙の性格は不明であるが、底面近くからは土師器甕(No１)や高台付坏(No２)の大形破片が出土している。時期は、覆土の状態や出土遺物から10世紀前半頃のものと考えられる。



第102図　第８号土壙出土遺物

第８号土壙出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径19.2、器高26.2、底径(5.0)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面丁寧なナデの後上半篦ナデ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外ー淡茶褐色、内ー暗茶褐色。F.4/5。G.底面付近。H.胴部外面に黒斑あり。
2	高台付坏	A.口縁部径14.0、残存高4.9、底径7.2。B.粘土紐巻き上げ。高台部貼り付け。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下端ケズリ、内面ヨコナデ。底部外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外ー明橙褐色。F.体部ほぼ完形。高台部剥離。G.底面付近。H.底部内面に砂付着。



第103図　第1～3・15号溝跡

4．溝　跡

第１号溝跡（第103図）

調査区中央部に位置し、遺構の北側上面を重複する近世後半以降の第15号溝跡に切られている。南側約１ｍに位置する第１号掘立柱建物跡の桁行方向とほぼ平行し、溝の東側が途切れていることから、第１号掘立柱建物跡の屋敷地に関係する区画を目的とした溝と考えられる。規模は、上幅が80cm前後のほぼ均一な幅で、確認面からの深さは10cm～15cm程度で比較的浅い。壁は緩やかに立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、ローム粒子を均一に含む黒褐色土を主体にしているが、Ｂ軽石の混入は明確ではない。遺物は比較的少なく、覆土中から土師器と灰釉椀の小破片が混入して出土しただけである。時期は、遺構に伴うと考えられる遺物がないため明確ではないが、第１号掘立柱建物跡との関係から中世以降と推測される。

第２号溝跡（第103図）

南側調査区の南側寄りに位置し、遺構上面を黒色土の第Ⅲ層が被覆している。溝の方向は、調査区中央部の第１号溝跡とほぼ同じで、地形の等高線に平行している。規模は比較的大きく、調査区西側の断面で上幅が2.10ｍを測り、ほぼ均一な幅を呈するものと思われる。確認面からの深さは、調査区内では50cm前後であるが、調査区西側の断面では最高70cmを測る。断面の形態は、逆台形の箱堀状を呈し、壁は上半が緩やかに立ち上がり、下半は直線的で傾斜が急になっている。底面は、約60cmの均一な幅で、ほぼ平坦である。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から見て中世以降のものと考えられる。

第１・15号溝跡土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅱ層：旧耕作土（Ａ軽石混入。）
第１層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性･しまりともない。）
第２層：黒褐色土層（ローム粒子･ロームブロックを微量含む。粘性･しまりともない。）
第３層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量含む。粘性･しまりともない。）

第２号溝跡土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅰ'層：現耕作土。
第Ⅲ層：黒色土（Ｂ軽石混入。）
第１層：黒褐色土層（Ｂ軽石・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第２層：黒灰色土層（鉄斑を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：黒色土層（Ｂ軽石･褐色粒子･焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：暗黄白色土層（淡黄白色粘土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３号溝跡土層説明

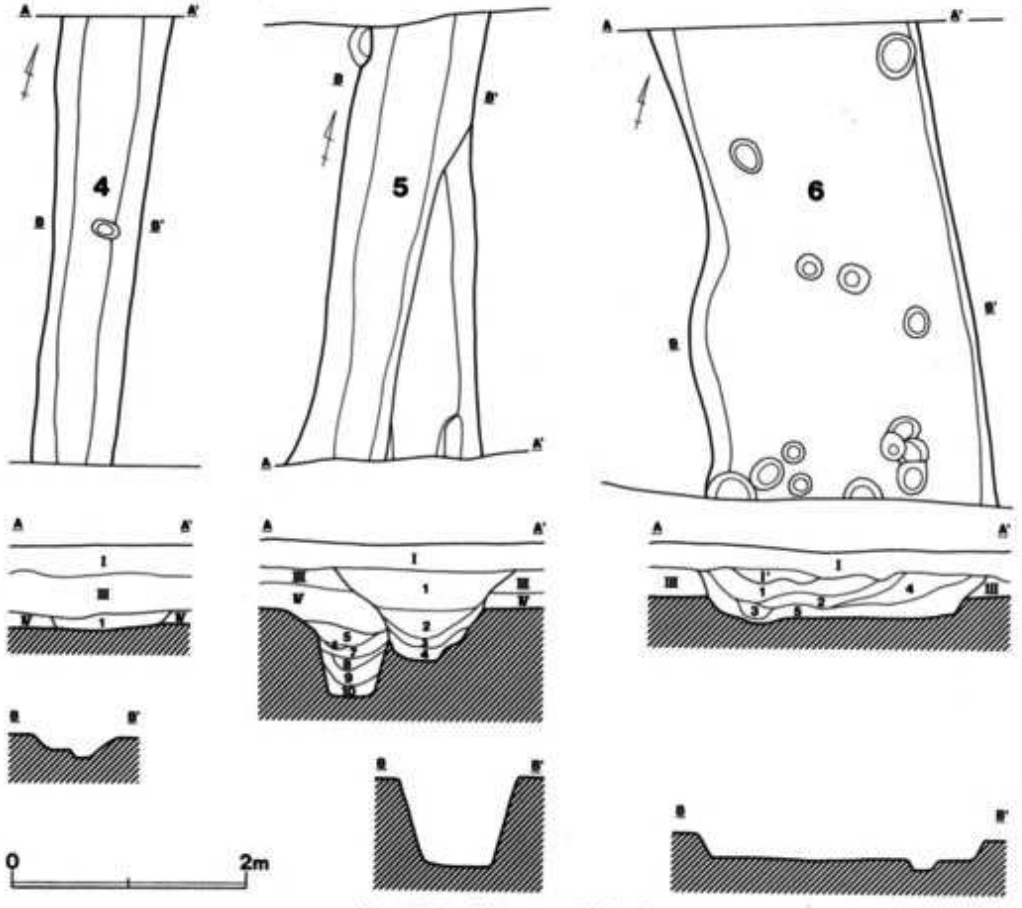
第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅲ層：黒色土（Ｂ軽石混入。）
第１層：黒褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性･しまりともない。）

第３号溝跡(第103図)

東側調査区の西側寄りに位置し、遺構上面を黒色土の第Ⅲ層が被覆している。溝の方向は、地形の等高線にほぼ直交する東西方向に向いており、西側は途切れている。規模は、上幅が35cm前後の比較的均一な幅で、確認面からの深さは10cm程度で浅い。断面の形態は、逆台形を呈している。壁は直線的で緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。覆土は、ロームブロックを含む黒褐色土を主体にしている。遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から古代のものと考えられる。

第４号溝跡(第104図)

東側調査区の中央部に位置し、遺構上面を黒色土の第Ⅲ層が被覆し、その下の暗褐色土の第Ⅳ層を切っている。溝の方向は、ほぼ直線的に南北方向を向き、地形の等高線にほぼ平行している。規模は、調査区の北側断面で上幅が１ｍを測り、確認面からの深さは最高で20cmある。断面の形態は、逆台形を呈している。壁は直線的で緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、鉄斑やローム粒子を含む黒褐色土を主体にしている。遺物は、羽釜の胴部破片が１片出土しただけである。時期は、Ｂ軽石を含む暗褐色土の第Ⅳ層を切っていることから、中世のものと考えられる。



第104図　第４～６号溝跡

鉄斑やローム粒子を含む黒褐色土を主体にしている。遺物は、羽釜の胴部破片が1片出土しただけである。時期は、B軽石を含む暗褐色土の第Ⅳ層を切っていることから、中世のものと考えられる。

第5号溝跡(第104図)

東側調査区の中央部に位置する。調査区内では2本の溝が重複しており、東側の浅い第5A号溝跡が西側の第5B号溝跡を切っている。これらの溝は、いずれも地形の等高線にほぼ平行するように、南北方向にその流路を向けているいるが、第5B号溝跡の埋没後に暗褐色土の第Ⅳ層と黒色土の第Ⅲ層が被覆し、それを切って第5A号溝跡が掘削されており、両者にはかなりの時期差が認められる。このことから、これらは同一溝の掘り返しではなく、全く別個の溝であったと考えられる。

第5A号溝跡は、調査区南側壁で上幅が1.56mあり、深さは78cmを測る。壁は、直線的で緩やかに傾斜して立ち上がる。底面は、比較的広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。時期は、

第4号溝跡土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅲ層：黒色土（B軽石混入。）
第Ⅳ層：暗褐色土（B軽石混入。）
第1層：黒褐色土層（鉄斑・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第5号溝跡土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅲ層：黒色土（B軽石混入。）
第Ⅳ層：暗褐色土（B軽石混入。）
＜第5A号溝跡＞
第1層：暗褐色土層（B軽石・鉄斑を微量含む。粘性・しまりともない。）
第2層：暗褐色土層（鉄斑を均一に、B軽石・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第3層：暗褐色土層（B軽石・鉄斑・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第4層：黒褐色土層（黄白色粘土ブロックを均一に、鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
＜第5B号溝跡＞
第5層：黒褐色土層（B軽石・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第6層：淡褐色土層（細砂層。）
第7層：暗褐色土層（黄白色粘土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第8層：暗褐色土層（黄白色粘土粒子・細砂を多量含む。粘性・しまりともない。）
第9層：黒褐色土層（黄白色粘土ブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）
第10層：黒褐色土層（黄白色粘土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第6号溝跡土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅲ層：黒色土（B軽石混入。）
第1層：暗褐色土層（A軽石を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第2層：暗茶褐色土層（A軽石・黄褐色粒子を均一に、鉄斑・ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第3層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第4層：暗褐色土層（A軽石・ローム粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第5層：黒褐色土層（鉄斑を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第Ⅲ層を切って掘削されていることから、中世以降のと考えられる。第５Ｂ号溝跡は、上幅が１ｍあり、深さは72cmを測る。壁は上半は緩やかに傾斜し、下半は直線的に急傾斜している。底面は幅40cmで平坦である。覆土中には細砂が顕著に見られ、排水路であったことが伺える。遺物は、何も出土しなかった。時期は、遺構上面に第Ⅳ層が被覆していることから、古代のものと考えられる。

第６号溝跡(第104図)

東側調査区の中央部に位置し、黒色土の第Ⅲ層を切って掘削されている。溝の方向は、直線的に南北方向を向き、地形の等高線にほぼ平行している。規模は、上幅が２ｍ～2.42mあり、深さは調査区北側断面で40cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は広く平坦であるが、小ピットが多く見られる。遺物は、覆土中から縄文時代中期の加曽利ＥⅢ式と、弥生時代中期後半～後期前半頃の土器片が数片混入して出土しただけである。時期は、覆土中にＡ軽石を含むことから、近世後半以降と考えられる。

第105図　第６号溝跡出土遺物

第６号溝跡出土遺物観察表

1	深　鉢	B.粘土紐積み上げ。C.外面は口縁部無文、沈線下の胴部に縄文(ＲＬ)を施す。内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.破片。G.覆土中。
2	深　鉢	B.粘土紐積み上げ。C.外面は縄文(ＬＲ)施文部と無文部を沈線により区画。内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－淡茶褐色、内－淡褐色。G.覆土中。
3	壺	B.粘土紐積み上げ。C.外面は縄文(ＬＲ)施文後、施文部の上端を沈線により区画。内面ミガキ。D.白色粒。E.内外－明茶褐色。F.破片。G.覆土中。
4	甕	B.粘土紐積み上げ。C.外面ケズリの後、櫛歯状工具により「ハ」の字状に施文。内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.破片。G.覆土中。H.櫛歯は細く浅い。

第７号溝跡(第107図)

東側調査区の東側寄りに位置し、黒色土の第Ⅲ層を切って掘削されている。溝の方向は、直線的に南北方向を向き、地形の等高線にほぼ平行している。規模は、上幅が最高で62cmあり、深さは調査区北側断面で26cmを測る。壁は、上半分が緩やかに傾斜し、下半は直線的に急傾斜している。底面は、比較的平坦である。覆土は、Ａ軽石を含む暗褐色土を主体にしている。遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から近世後半以降と考えられる。

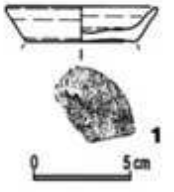
第８号溝跡(第107図)

東側調査区の東側寄りに位置し、黒色土の第Ⅲ層を切って掘削されている。溝の方向は、ほぼ直

線的に南北方向を向き、地形の等高線にほぼ平行している。規模は、上幅が65cm前後あり、深さは調査区北側断面で28cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は広くやや丸みをもっている。覆土は、西側に近接する第７号溝跡と同じく、A軽石を含む暗褐色土を主体にしている。遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から近世後半以降と考えられる。

第９号溝跡(第107図)

東側調査区の東側寄りに位置し、黒色土の第Ⅲ層を切って掘削されている。溝の方向は、地形の等高線にほぼ平行して、やや蛇行ぎみに南北方向に向いている。規模は、上幅が最高で1.64mあり、深さは比較的浅く10cm程度である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は広く比較的平坦であるが、西側の一部は溝状に一段深くなっている。覆土は、西側に近接する第７号溝跡や第８号溝跡と同じく、A軽石を含む暗褐色土を主体にしている。遺物は、覆土中から中世土師器皿の破片が出土しているが、本溝跡に伴うものではない。時期は、覆土の状態や現地表面のやや湾曲する地境の区画に一致していることから、近世後半以降の新しいものと考えられる。



第106図　第９号溝跡出土遺物

第９号溝跡出土遺物観察表

1	土師器皿	A.口縁部径(7.8)、器高1.8、底径(5.6)。B.ロクロ成形。C.内外面とも回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.1/4。G.覆土中。

第10号溝跡(第107図)

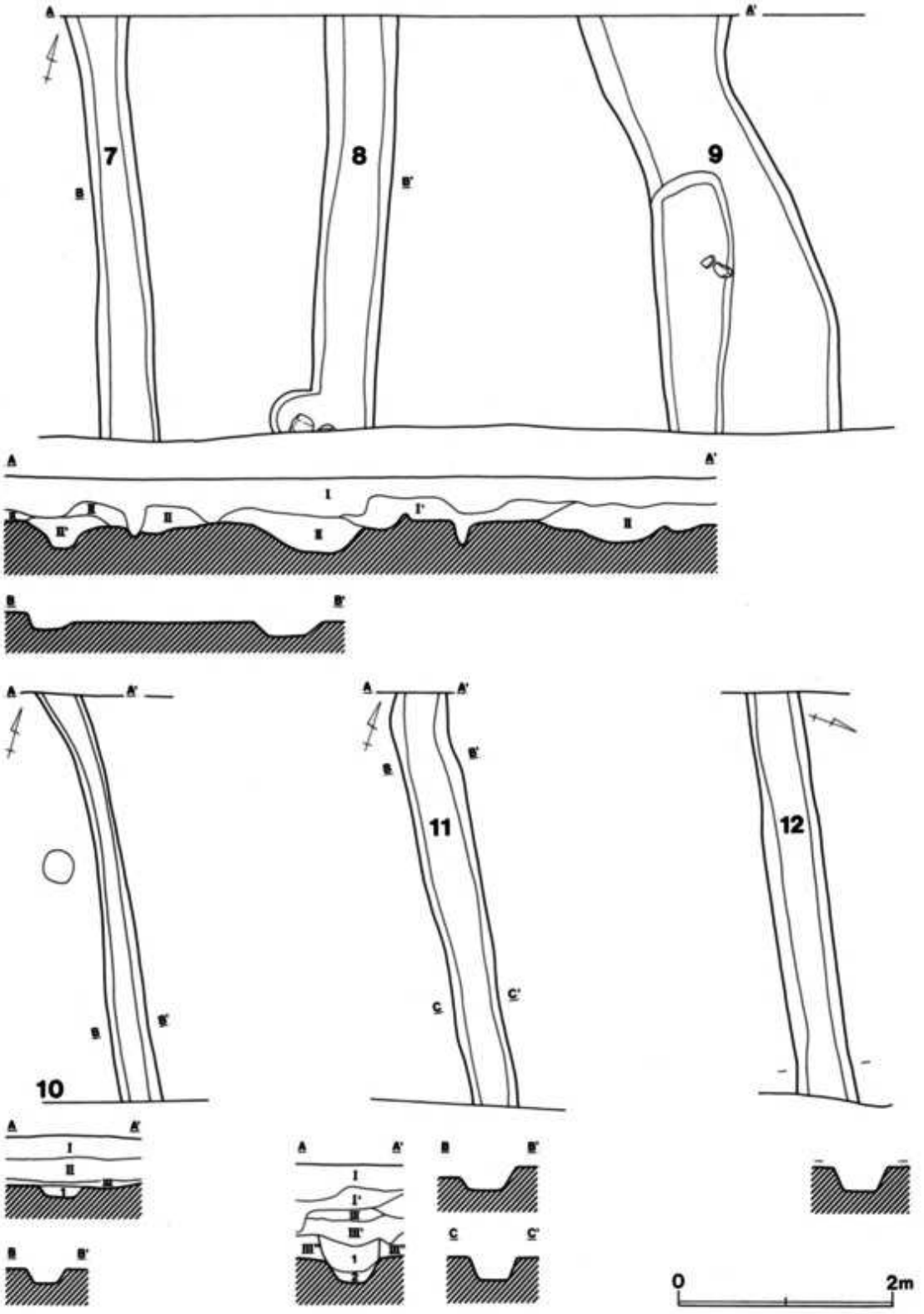
東側調査区の東側寄りに位置し、遺構上面を黒色土の第Ⅲ層が被覆している。溝の方向は、地形の等高線にほぼ平行して、直線的に南北方向を向いている。規模は、上幅が40cm程度と比較的小規模であり、深さは10cmと浅い。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。覆土は、B軽石を含む黒褐色土を主体にしている。遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から中世のものと考えられる。

第11号溝跡(第107図)

東側調査区の東側寄りに位置し、遺構上面を黒色土の第Ⅲ層が被覆している。溝の方向は、上面の第９号溝跡とほぼ同じく、地形の等高線にほぼ平行して、直線的に南北方向を向いている。規模は、上幅が54cmあり、深さは調査区北側断面で44cmを測り、ローム層下の白色粘土層を若干掘り込んでいる。壁は内湾ぎみにやや急傾斜して立ち上がり、底面は比較的平坦である。覆土は、ローム粒子や白色粘土粒子を含む黒褐色土を主体にしている。遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から古代のものと考えられる。

第12号溝跡(第107図)

北側調査区の北側寄りに位置し、重複する第１号井戸跡を切っている。溝の方向は、地形の等高



第107図　第７～12号溝跡

線にほぼ平行して、直線的に東西方向を向いている。規模は、上幅が50cmのほぼ均一な幅で、深さは15cm～20cmを測る。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、底面は比較的平坦である。覆土は、A軽石を均一に含む淡灰褐色土を主体にしている。遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から、近世後半以降と考えられる。

第13号溝跡(第108図)

北側調査区の北側寄りに位置する。溝の方向は、地形の等高線にほぼ平行して、東西方向を向いている。規模は、上幅が80cm～2.50mあり、西に向かって幅が狭くなっている。深さは、約20cmある。壁は緩やかに立ち上がり、底面は広く凹凸が顕著で、中央部にはピット状の掘り込みが多く見られる。覆土は、北側の第12号溝跡と同じく、A軽石を均一に含む淡灰褐色土を主体にしている。遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から、近世後半以降と考えられる。

第14号溝跡(第108図)

北側調査区の北側寄りに位置する。溝の方向は、地形の等高線にほぼ平行して、東西方向を向いている。規模は、上幅が1.25cm前後あるが、東端部は幅80cmと狭くなっている。深さは、15cm程度で浅い。壁は緩やかに立ち上がり、底面は広いが内部には浅いピットが多数掘削されている。覆土は、北側の第12号溝跡や第13号溝跡と同じく、A軽石を均一に含む淡灰褐色土を主体にしている。遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から、近世後半以降と考えられる。

第15号溝跡(第103図)

調査区の中央部に位置し、併走する第1号溝跡を切っている。溝の方向は、地形の等高線にほぼ平行して、東西方向を向いている。規模は、上幅が東側で1.45m・西側で66cmあり、西側に行くほど幅が狭くなっている。深さは、全体的に10cm～20cmと比較的浅い。壁は緩やかに立ち上がり、底

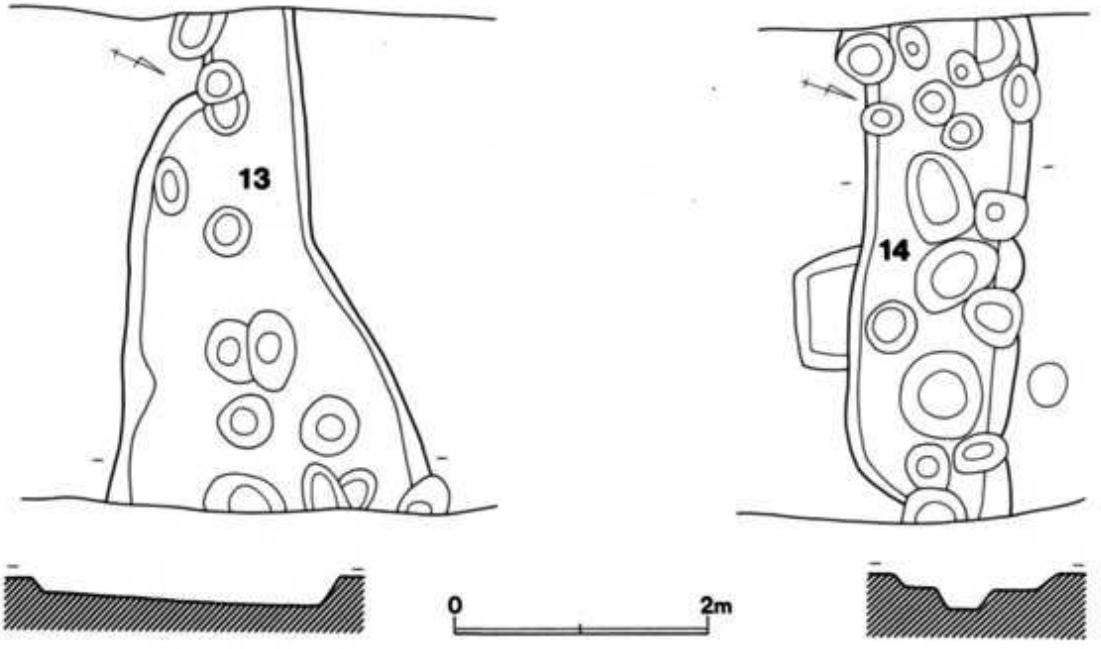
第10号溝跡土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅱ層：旧耕作土（A軽石混入。）
第Ⅲ層：黒色土（B軽石混入。）
第1層：黒褐色土層（鉄斑を均一に、B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第11号溝跡土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅰ'層：耕作土。
第Ⅱ層：旧耕作土（A軽石混入。）
第Ⅲ層：黒色土（B軽石混入。）
第Ⅲ'層：黒褐色土（鉄斑を多量含む。）
第Ⅲ"層：黒褐色土（鉄斑・白色粒子を均一に含む。）
第1層：黒褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：黒褐色土層（ローム粒子・白色粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

面は広く平坦である。覆土は、A軽石を均一に含む淡灰褐色土を主体にしている。遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態や現地表面の道に沿っていることから、近世後半以降の新しいものと考えられる。



第108図　第13・14号溝跡

5．その他の出土遺物

第109図　東側調査区黒色土(第Ⅲ層) 出土遺物

東側調査区黒色土(第Ⅲ層)出土遺物観察表

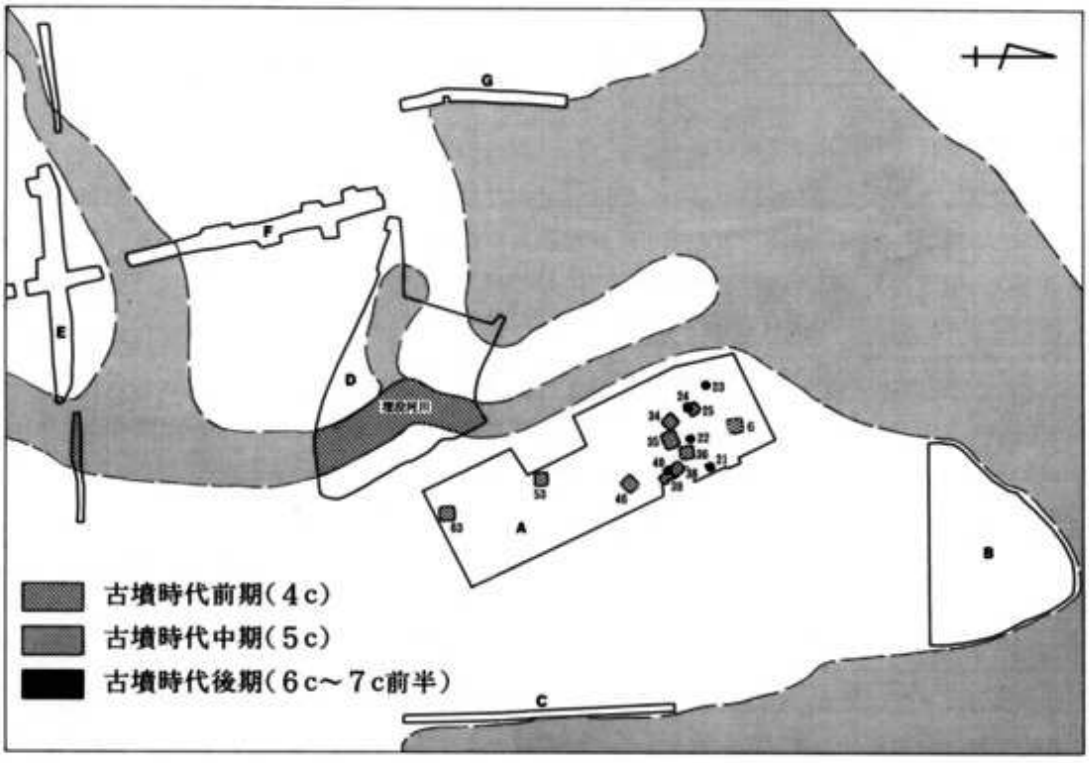
1	土師器 皿	A.口縁部径(9.0)、器高2.0、底径6.8。B.ロクロ成形。C.内外面とも回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.1/2。G.東側調査区黒色土(第Ⅲ層)内。
2	常滑窯系 甕	B.粘土紐積み上げ。C.外面ハケの後ナデ、内面ナデ。D.褐色粒、白色粒。E.外－暗茶褐色、内－淡橙褐色、肉－淡灰色。F.破片。G.北側調査区ピット内。
3	常滑窯系 甕	B.粘土紐積み上げ。C.内外面ともナデ。D.褐色粒、白色粒。E.外－暗緑色、内－暗褐色。F.破片。G.東側調査区黒色土(第Ⅲ層)内。H.外面に暗緑色釉。
4	常滑窯系 甕	B.粘土紐積み上げ。C.内外面ともナデ。D.白色粒。E.内外-黒褐色。F.破片。G.東側調査区黒色土(第Ⅲ層)内。H.外面に平行線の押印文を施す。
5	深　鉢	B.粘土紐積み上げ。C.外面縄文(RL)内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－明茶褐色、内－淡褐色。F.破片。G.東側調査区黒色土(第Ⅲ層)内。

第Ⅴ章　ま　と　め　－雷電下遺跡の古代集落の変遷－

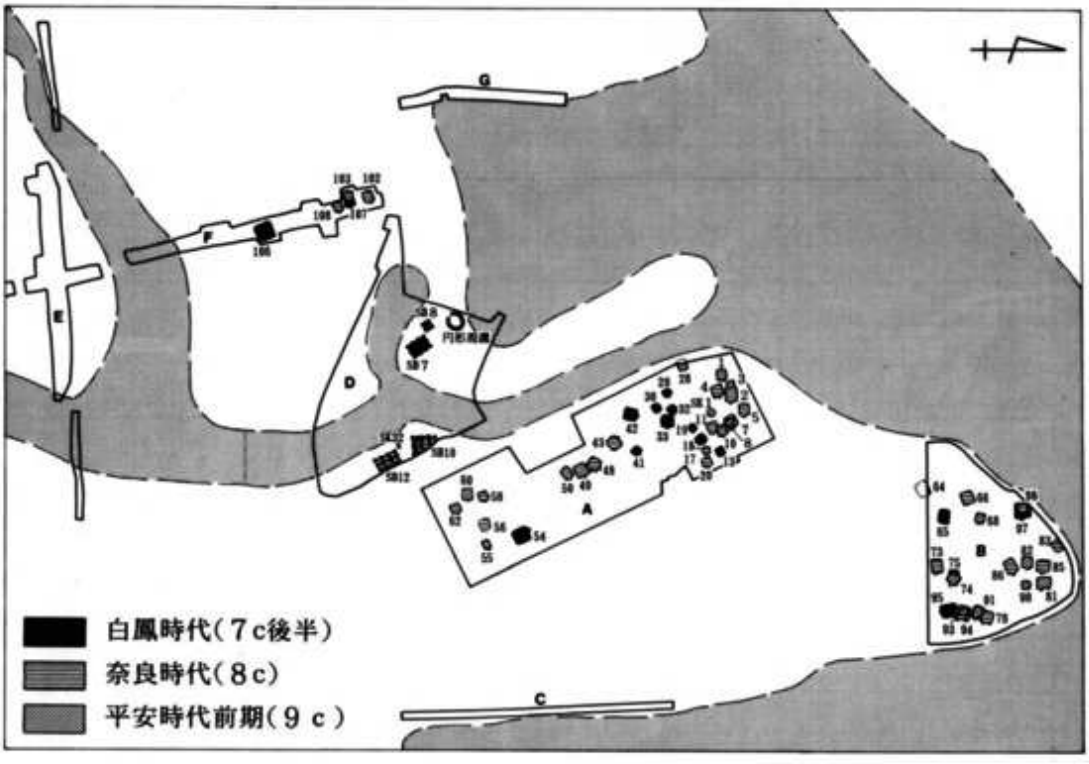
雷電下遺跡は、第Ⅲ章第１節で述べたように、これまでにＡ～Ｇの７地点の調査が行われている。各地点で検出された遺構の総数は、竪穴式住居跡109軒・掘立柱建物跡14棟・井戸跡12基・土壙70基・溝跡19条で、古墳時代前期から中世の室町時代後期までの集落や屋敷を主体にしている。Ａ地点やＢ地点では、縄文時代や弥生時代の土器片も出土しており、それらの時代にまで集落の出現が溯る可能性もあるが、現在までの調査では本遺跡で最初に集落が形成されるのは、古墳時代になってからのようである。各時代の時期的な様相については、遺跡全体からすると未だ部分的な調査が主体であるため、不明確な部分も多いが、ここでは現在までの発掘調査の成果による本遺跡の古代集落の推移を素描してまとめとしたい。

古墳時代の集落は、前期から後期の住居跡が推定も含めて15軒見られ、いずれもＡ地点に集中している。他地点の状況からすると、台地全域に集落が展開していたような様子が見られないため、各時期ともＡ地点を中心とした小規模な集落を営んでいたようである。

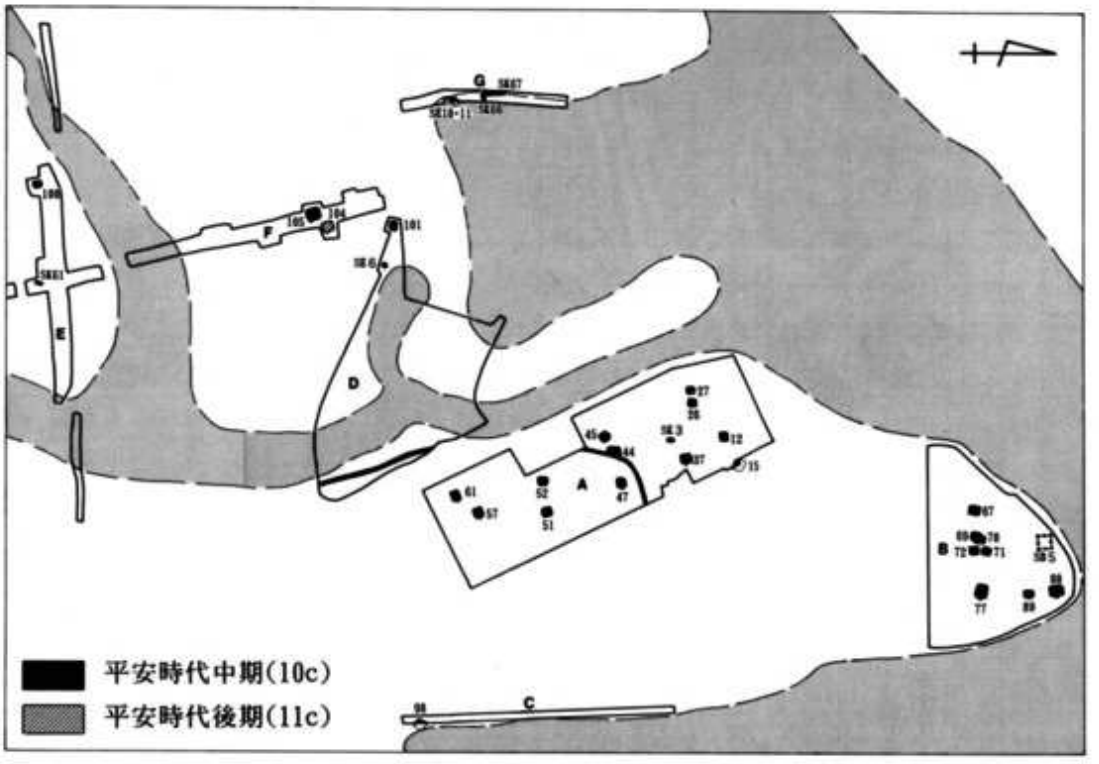
前期の集落は、第25号住居跡・第34号住居跡・第36号住居跡・第39号住居跡・第53号住居跡・第63号住居跡の６軒があり、第６号住居跡と第46号住居跡の２軒も該期に比定されている（駒宮1979、注１）。これら８軒の住居跡は、相互に重複するものはないが、住居の向きを東西方向にとるもの（第６・36・53・63号住居跡）と、北西から南東方向にとるもの（第25・34・39・46号住居跡）の二者がある。前者の４軒は相互に比較的距離を置いて散在的に配置されているのに対して、後者の４軒はＡ地点調査区内の北側にやや近接してまとまった配置をしている。これらの住居の方向が異なる二者の住居群は、その要因が微地形的な自然条件によるものとは考え難いため、時間差か集団内での何らかの差異による規制ではないかと思われるが、住居の内部構造が不明なものや、出土遺物が少なく時期が特定できない住居跡が多いため、明細は不明である。時期は、土器が出土している住居跡については、概ね前期後半（注２）を中心とする時期と思われる。これらの土器は、すでに在地化した外来系の土器を主体にしているが、第25号住居跡で弥生時代後期の吉ケ谷式の系譜を引く甕（恋河内1990）や、第36号住居跡で樽式の系譜を引く鉢（注３）などが見られることは、在地土器の伝統性の根強さを伺うことができる。在地化した外来系の土器については、第25号住居跡出土土器のように、多系統の土器が混在した状況が見られ、特に煮沸具の甕では、Ｓ字状口縁台付甕・くの字状口縁台付甕・平底甕などが１軒の住居に見られることも多い。このような系統の錯綜した状況は、当地域における該期土器の特徴の一つでもある。また、第25号住居跡では、土器の他に銅製鈴釧や鉄鏃の破片なども出土しており注目される。この前期の集落は、西側に近接するＤ地点の小規模な埋没河川の中央に断面の形態が逆台形を呈する溝を掘削し、水路としてその集水と排水機能を高めている。この埋没河川は、大久保山残丘下の湧水によって形成され、本遺跡と飯玉東遺跡の間の谷に通じるものと考えられ（第３図）、本遺跡の前期集落が残丘山裾の湧水を積極的に利用した谷田の開発を、生産の中心的な基盤にしていたことが推測されよう。また、この谷田を挟んだ北側の狭い低台地上に位置する飯玉東遺跡では、隣接するＡ地点（駒宮1979）とＢ地点（恋河内1995）で、７基の方形周溝墓が検出されている。この飯玉東遺跡の方形周溝墓群は、その向きや配列の状況から複数のグループに分け



第110図　雷電下遺跡時期別遺構配置図（1）



第111図　雷電下遺跡時期別遺構配置図（2）



第112図　雷電下遺跡時期別遺構配置図（3）

られるが、おそらく本遺跡の前期集落の家長層もここに墓域を形成し、方形周溝墓群の中の一つのグループを構成していたのではないかと思われる。

中期の集落は、第35号住居跡と第38号住居跡の２軒が考えられる(注４)。この２軒の住居跡は、Ａ地点の調査区北側で近接しており、集落はＡ地点の東側の調査区外に広がる可能性がある。いずれも遺存状態が悪く、出土遺物も少ないため、明細は不明であるが、時期は出土遺物から見て、おそらく中期前半の段階と思われる。なお、平安時代中期の第27号住居跡の覆土中からは、該期のものと思われる剣形石製模造品の破片が１点出土している。本遺跡の中期集落については、良好な資料が少ないためあまりよく分からないが、前段階の前期集落から継続して営まれていた可能性もあり、また前期に掘削されたＤ地点の小規模な自然流路を利用した水路も該期まで機能していたことが伺えることから、おそらく前期集落と同じ谷田を基盤にしていたのではないかと思われる。

後期の集落は、第21～24号住居跡と第40号住居跡の５軒がある。住居跡は相互に重複せず、Ａ地点の調査区北側に比較的まとまって分布しているが、集落はＡ地点の東側の調査区外にさらに広がる可能性がある。Ａ地点で検出された住居跡は、いずれも規模が３ｍ前後の小規模なもので、当地域の古墳時代後期集落の住居構成としてはやや特異である。第40号住居跡のようにカマドをもたないものもあるため、すべてを住居と考えることはできないであろう。時期は、６世紀末～７世紀前半を主体としているが、単一時期の集落ではなく、若干時間差があるものと思われる。この後期集落は、前段階の中期集落とは時間的に大きく断絶した新しい集落である可能性が高く、該期にはＤ地点の自然流路を利用した水路も管理されなくなってある程度埋没している。住居構成が特異な点

からすると、水田経営を基盤とした一般的な集落とは異なった役割を担う集落であったことも推測されるが、本遺跡のこれまでの集落が基盤にしていた残丘下の湧水を利用した谷田の潅漑系統が、低地部の水路から引水するような新たな水利系統に変化した可能性も考慮されよう(注5)。

白鳳時代の集落は、A地点で10軒、B地点で5軒、F地点で2軒の計17軒の住居跡があり、D地点の第7号掘立柱建物跡と第8号掘立柱建物跡も該期のものと思われる。円形周溝遺構については、出土した土器片から該期と考えたが、周辺の遺跡では古墳時代後期の集落に多く(注6)、あるいはその時期にまで溯る可能性もあろう。該期の集落は、時期的には前段階の古墳時代後期の集落から継続する可能性が高いが、古墳時代までの集落の様相とは異なり、集落が本遺跡の立地する低台地のほぼ全域に居住域を拡大して展開するようになる。この時期には、D地点のように低台地内の小規模な開析谷や自然流路などの窪地が急速に埋没する現象が見られるが、おそらくこの居住域の拡大に伴う低台地の開発が、大きな要因の一つではないかと思われる。このような低台地の比較的広範囲に及ぶ開発や、該期以降は集落が複数の住居群によって構成されるようになることから見て、本遺跡の小規模な古墳時代後期集落の独自の発展だけではなく、近隣の他集落からの編入による集落規模の拡大も考えられよう。該期のはじめには、第Ⅱ章でも述べたように低地内の集落の多くが廃絶され、低地周辺の本庄台地縁辺部や残丘斜面下の低台地上に集落が移動する現象が見られ、おそらくこのような当地域における集落の再編成と密接に関連するものと思われる。そして本遺跡の集落は、この7世紀後半の展開を基盤にして、その後も衰退することなく、11世紀の平安時代後期まで連綿と継続して営まれていることから、本集落の変遷の中でも該期を大きな画期とすることができよう。

奈良・平安時代の集落は、前段階の白鳳時代の集落から継続して、同様に低台地の全域に竪穴住居が展開している。掘立柱建物跡は、B地点とD地点の調査区東端部で検出されている。B地点では、2間×2間の束柱をもたない類似した形態の建物が4棟検出されている(注7)。時期が特定できるものはないが、第5号掘立柱建物跡については住居跡との重複関係から10世紀頃と考えられ、他の建物もおそらくそれに近時した時期と思われる。D地点の建物は、奈良時代の8世紀後半から平安時代前期の9世紀にかけて、建物の形態や向きは多少異なるものの、同一場所に何度も建てられており、集落内で何らかの特別な施設であった可能性があろう。特に第9号掘立柱建物跡や第12号掘立柱建物跡は、比較的規模の大きな長方形ぎみの柱穴掘り方をもつ総柱式の建物であり、これらの建物の性格を考える上で注目されよう。

平安時代中期の10世紀になっても集落の様相は前段階とあまり変わらないが、10世紀後半～末の遺構からは、羽口の破片(第67号土壙)・椀形の鉄滓（第11号井戸跡)・大型の鉄滓（第105号住居跡)が出土している(図版27)。遺跡全体での鉄滓の出土量は極めて少ないながら、椀形滓と大型滓はいずれも鉄分を多く含んだ重量のあるもので、近くに鍛治関係の施設が存在するか、あるいは本遺跡の集落が鍛治集団と密接な関係をもっていた可能性が考えられよう。

平安時代後期の11世紀の集落は、F地点の第104号住居跡だけであるが、A地点やB地点でも該期と思われるような土器がいくつか見られる。また、当地域の10世紀後半以降の土器編年が明確になれば、今回10世紀末とした住居跡の中にも、該期に下るものがでてくる可能性はあろう。平安時代

中期の集落に比べると、竪穴住居の数は明らかに減少し、集落規模が縮小するかのように見えるが、居住施設の主体が竪穴住居から掘立柱建物に移行しはじめる時期と考えられ、またそれに伴って宅地形態の変化も予想されることから、現状では該期集落の実態については、不明確な状況と言わざるをえないであろう。

以上、本遺跡の現在までの調査成果による集落の変遷を大雑把に概観したが、本遺跡の古墳時代までの集落は、前期から後期にかけて断絶があるものの、いずれの時期も数軒の住居からなる小規模な集落を形成していたようで、沖積低地内の自然堤防上に立地する川越田・後張遺跡や今井川越田遺跡などの大規模集落の周辺に展開する衛星的な集落の一つと見られ、主に残丘下の低台地周辺の小規模な谷田の開発を担っていたものと思われる。7世紀後半の白鳳時代以降になると、集落は居住域を低台地のほぼ全域に拡大し、比較的規模の大きな継続型集落として発展するようになる。この7世紀後半以降の本集落の展開の様相は、沖積低地を挟んで西側に対峙する本庄台地上の将監塚・古井戸遺跡などのいわゆる「計画的集落」(鈴木1991)の様相とある程度類似していると言える。しかしながら、将監塚・古井戸遺跡をはじめとする本庄台地上の多くの古代集落が、平安時代前期の9世紀後半頃から徐々に衰退し、中期の10世紀中頃以降には人々の生活の痕跡がほとんど見られなくなるのに対して、本遺跡の集落は中期の10世紀以降まで衰退することなく継続するといった差異が見られる。本遺跡に見られるこのような集落の継続性は、未だ集落の全体的な様相が不明瞭ではあるが、本遺跡の東側に近接する根田遺跡、生野山残丘の西側斜面部に立地する阿知越遺跡、鷺山残丘上に立地する鷺山南遺跡などでも類似した傾向が伺えるようで、あるいは残丘周辺に立地する古代集落の一つの特徴と言えるかもしれない。この女堀川中流域右岸の残丘周辺の古代集落と左岸の本庄台地縁辺部の古代集落に見られる平安時代前期後半以降の差異は、集落が対峙的に展開するようになる白鳳時代以前における残丘周辺と本庄台地との開発状況による伝統的な問題や、それぞれの集落の後背部にある台地平坦部と丘陵部の用益地の問題など、まずその歴史的環境や立地条件の違いを考える必要があろうが、それらについては集落の具体的な変遷過程とともに、後日改めて検討してみたい。いずれにしても、当地域の古代集落の様相を明らかにするには、両者を対等に評価しながら、総合的に検討する必要があろう。

注

(注1)　A地点の報告書では、第38号住居跡も「住居跡一覧表」で「五領期」とされている(駒宮1979)。しかしながら、図示された土器は和泉式土器と考えられ、また第39号住居跡と重複していることからも、和泉期の可能性が高いと思われる。

(注2)　ここでは、一応前期の中で庄内式(纒向2～3式、廻間Ⅰ～Ⅱ式)並行期を前半、布留式並行期(纒向4式、廻間Ⅲ式)を後半としておく。

(注3)　第36号住居跡出土の鉢(No5)は、その形態や調整手法の特徴が、前組羽根倉遺跡(柿沼他1986)第2号住居跡出土の鉢に類似しており、それよりも体部がやや開きぎみになっている点は、新しい特徴と思われる。これらの鉢は、すでに赤彩や片口は施されていないが、弥生時代後期の樽式や箱清水式の櫛描文系土器群に見られる浅鉢形の片口鉢の系譜を引くものと考えられる。また、同じ第36号住居跡から出土した幅狭の複合口縁(折り返し口縁)を呈する広口の壺(No2)についても、その形態や複合口縁部が薄く口唇部がシャープな作りであることから、真鏡寺後遺跡第36号住居跡(恋河内1991)出土土器に見られるような、弥生時代後期樽式の複合口縁を呈する甕の系譜を引く可能性もあろう。

（注４）　Ａ地点の報告書では、Ａ地点で検出された住居跡について「和泉期の抜けた空白の時期」があるとされているが、注１で述べたように第38号住居跡は出土土器から和泉期の可能性が高いと思われ、また「住居跡一覧表」で「国分」とされる第35号住居跡についても、同様に和泉期の住居跡と考えられる。

（注５）　当地域では、生野山残丘北側斜面下の低台地上に立地する城の内遺跡や、低地内の自然堤防上に立地する東牧西分遺跡と後張遺跡でも、湧水によって開析された古墳時代の小規模な埋没谷が検出されている。このうち低地内の東牧西分遺跡と後張遺跡では、前期の段階にはその湧水を利用していた痕跡が認められるが、いずれも本遺跡Ｄ地点の埋没河川（自然流路）と同じく、古墳時代の中期以降になると放置され埋没している点は注目されよう。本遺跡も含めたこれらの４遺跡は、その埋没時期が集落が廃絶されるかあるいは一時的に集落が衰退する時期ともほぼ一致しており、この時期に周辺環境の変化か開発の影響によって、湧水の枯渇や湧水点の移動などがあったのかもしれない。

（注６）　周辺の遺跡では、ミカド遺跡（坂本他1981）・新宮遺跡・浅見境北遺跡・川越田遺跡・今井川越田遺跡で検出されている。また、この他にも皀樹原・桧下遺跡では、中世とされる「円形周溝状遺構」も検出されており、注意されよう。

（注７）　雷電下遺跡のＢ地点では、６棟の掘立柱建物跡が検出されているが、第２号掘立柱建物跡と第６号掘立柱建物跡の２棟は、中世以降のものである。

＜参考文献＞

赤熊浩一（1988）『将監塚・古井戸Ⅱ　－歴史時代編Ⅱ－』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集

浅野一郎他（1980）『宥勝寺北裏遺跡』 宥勝寺北裏遺跡調査会

荒川正夫他（1980）『大久保山Ⅰ』 早稲田大学本庄校地文化財調査報告１

（1993）『大久保山Ⅱ』 早稲田大学本庄校地文化財調査報告２

（1995）『大久保山Ⅲ』 早稲田大学本庄校地文化財調査報告３

石塚和則（1986）『将監塚　－縄文時代－』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集

磯崎　一（1995）『今井川越田遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第177集

井上尚明（1986）『将監塚・古井戸Ⅰ　－古墳・歴史時代編Ⅱ－』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集

岩瀬　譲（1998）『地神・塔頭』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第193集

岩田明広（1998）『今井条里遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第192集

太田博之（1991）『本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅴ　－公卿塚古墳－』 本庄市埋蔵文化財調査報告第19集

小澤正人（1996）『大久保山Ⅳ』 早稲田大学本庄校地文化財調査報告４

柿沼幹夫（1979）『下田・諏訪』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集

柿沼幹夫他（1986）「前組羽根倉遺跡の研究」『埼玉県立博物館紀要』第12号

恋河内昭彦（1989）『共和小学校校庭遺跡』 児玉町文化財調査報告書第10集

（1990）「児玉地方の吉ケ谷式土器について」『塩谷下大塚遺跡』 児玉町文化財調査報告書第11集

（1990）『根田遺跡』 児玉町文化財調査報告書第12集

（1990）『雷電下遺跡 －Ｂ・Ｃ地点－（図版編）』 児玉町文化財調査報告書第13集

（1991）『真鏡寺後遺跡Ⅲ』 児玉町文化財調査報告書第14集

（1992）「児玉地方における弥生時代の概観」『児玉郡市における埋蔵文化財の成果と概要－平成３年度後期埋蔵文化財担当者会議資料－』 埼玉県教育局文化財保護課　児玉郡市文化財担当者会

（1993）『川越田遺跡Ⅱ』 児玉町遺跡調査会報告書第５集

（1995）『飯玉東Ⅱ・高縄田・樋越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴蒔・毛無し屋敷・石橋』　児玉町文化財調査報告書第17集

（1995）『南共和・新宮遺跡』 児玉町遺跡調査会報告書第６・７集

（1996）『辻堂遺跡Ⅰ』 児玉町文化財調査報告書第19集

（1996）『辻堂Ⅱ・南街道・宮田遺跡』 児玉町文化財調査報告書第20集

(1997)『城の内・日延・東田・浅見境北遺跡』 児玉町文化財調査報告書第23集
(1998)『向田A・向田B・壱丁田遺跡』 児玉町文化財調査報告書第27集
(1999)『日延Ⅱ・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第31集
小久保 徹 (1978)『東谷・前山2号墳・古川端』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集
駒宮史朗 (1977)『御林下遺跡』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第13集
(1978)『中堀・耕安地・久城前』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第15集
(1979)『雷電下・飯玉東』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集
埼 玉 県 (1982)『新編埼玉県史』資料編2
坂本和俊他 (1981)『金屋遺跡群』 児玉町文化財調査報告書第2集
(1986)『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県県史編さん室
篠崎 潔 (1990)『皂樹原・桧下遺跡Ⅱ』 皂樹原・桧下遺跡調査会報告書第2集
(1991)『皂樹原・桧下遺跡Ⅲ』 皂樹原・桧下遺跡調査会報告書第3集
(1992)『皂樹原・桧下遺跡Ⅳ』 皂樹原・桧下遺跡調査会報告書第4集
(1995)『真下境西・反り町・八荒神北・八荒神南遺跡』 神川町教育委員会文化財調査報告第12集
菅谷浩之 (1984)『北武蔵における古式古墳の成立』 児玉町史資料調査報告 古代第1集
菅谷浩之他 (1973)「児玉町・美里村生野山古墳群発掘調査概要」『第6回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉県考古学会 埼玉県遺跡調査会 埼玉県教育委員会
鈴木徳雄 (1981)『深町・城の内遺跡』 深町遺跡調査会
(1983)『阿知越遺跡Ⅰ』 児玉町文化財調査報告書第3集
(1984)『阿知越遺跡Ⅱ』 児玉町文化財調査報告書第4集
(1988)『中畑・塚本山古墳群』 児玉町遺跡調査会報告書第3・4集
(1989)『真下境東遺跡』 児玉町文化財調査報告書第9集
(1991)『辻ノ内・中下田・塚畠・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第15集
(1997)『将監塚東・平塚・藤塚遺跡』 児玉町文化財調査報告書第26集
瀧瀬芳之 (1997)『今井川越田遺跡Ⅲ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第191集
立石盛詞 (1982)『後張Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15集
(1983)『後張Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集
徳山寿樹 (1995)『堀向・藤塚A・柿島・内手BC・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第18集
(1996)『藤塚遺跡－B2地点の調査－』 児玉町文化財調査報告書第22集
(1997)『金佐奈遺跡 －A1地点の調査－』 児玉町文化財調査報告書第24集
(1998)『金佐奈遺跡 －A2地点の調査－』 児玉町文化財調査報告書第29集
(1998)『金佐奈遺跡Ⅰ－B地点の調査－』 児玉町文化財調査報告書第30集
利根川章彦 (1998)『御林下遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第223集
富田和夫・赤熊浩一 (1985)『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集
長谷川 勇 (1983)『二本松遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第5集1分冊
(1985)『夏目遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第5集2分冊
(1987)『社具路遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第5集3分冊
伴瀬宗一 (1996)『今井川越田遺跡Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第178集
細田 勝 (1984)『向田・権現塚・村後』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集
本 庄 市 (1976)『本庄市史』資料編
本 庄 市 (1986)『本庄市史』通史編Ⅰ
増田一裕 (1985)『本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅱ－久下東遺跡・遺構編－』 本庄市埋蔵文化財調査報告第7集
(1987)『東富田遺跡群発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第10集
(1989)『四方田・後張遺跡群発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第14集

(1989)『諏訪遺跡(B地点)・久城前遺跡(B地点)発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第15集
(1990)『諏訪・久城前・久城往来北遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第17集
(1990)『山根遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第18集
(1992)「児玉地方の旧石器時代」『児玉郡市における埋蔵文化財の成果と概要－平成3年度後期埋蔵文化財担当者会議資料－』 埼玉県教育局文化財保護課 児玉郡市文化財担当者会
(1992)『女堀川条里今井地区・前田甲遺跡発掘調査報告書－遺構編－』 本庄市埋蔵文化財調査報告第20集第1分冊
(1992)『今井諏訪遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第21集
(1995)『前田甲遺跡発掘調査報告書－遺物編－』 本庄市埋蔵文化財調査報告第20集第2分冊
(1996)『社具路遺跡第9地点発掘調査報告書』 本庄市遺跡調査会報告第5集
増田逸朗 (1977)『塚本山古墳群』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集
丸山 修 (1991)『往来北遺跡発掘調査報告書』 上里町教育委員会
宮井英一 (1989)『古井戸 －縄文時代－』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集
柳田敏司 (1964)「埼玉県児玉郡将軍塚古墳発掘調査概報」『上代文化』第34輯

写　真　図　版

図版 1

雷電下遺跡D区全景(北西より)

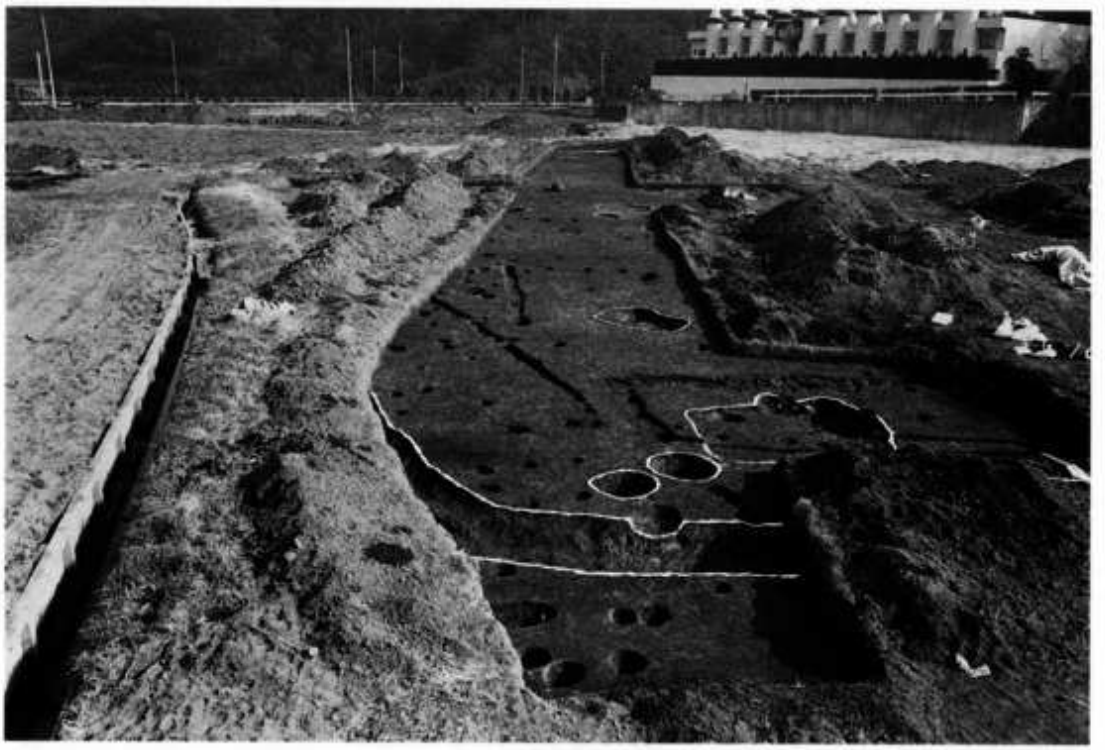
雷電下遺跡D区全景(西より)

図版 2

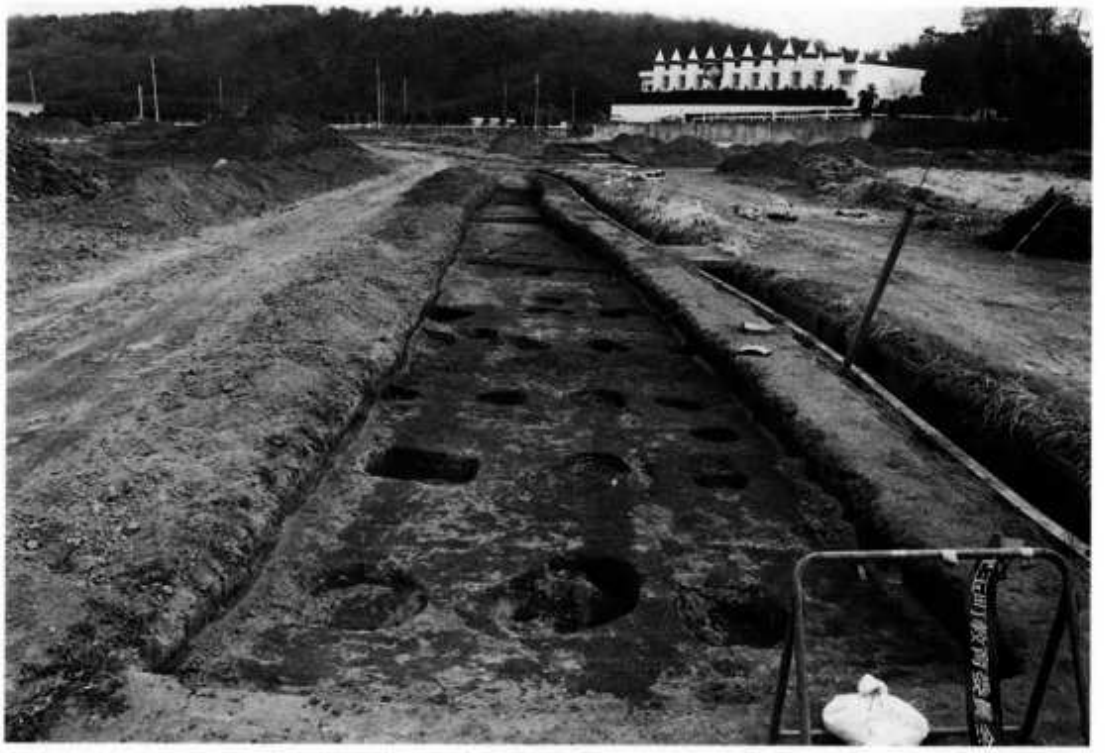
雷電下遺跡D区調査区東側

雷電下遺跡D区調査区西側拡張区

図版 3



雷電下遺跡ＥⅡ区全景(西より)



雷電下遺跡ＥⅢ区全景(西より)

図版 4

雷電下遺跡ＦＩ区全景(北より)

雷電下遺跡ＦⅡ区全景(北より)

図版5

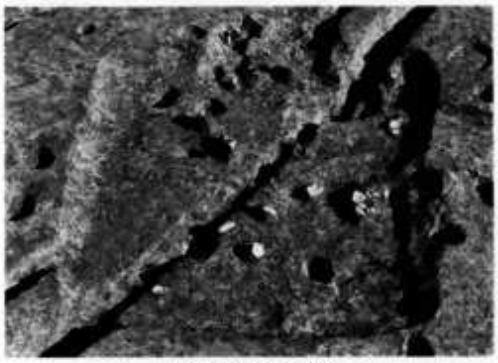
雷電下遺跡G区全景(南より)

雷電下遺跡G区全景(北より)

図版 6

第100号住居跡

第101号住居跡



第102号住居跡

第103・107号住居跡

第104号住居跡

第105・109号住居跡

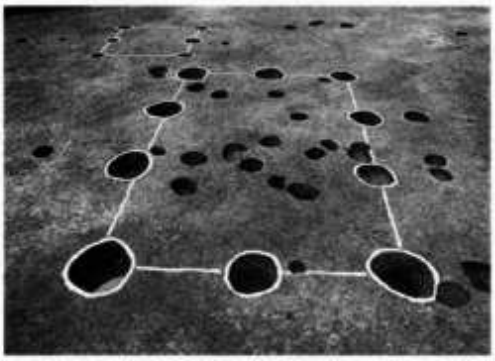
第106号住居跡

第108号住居跡

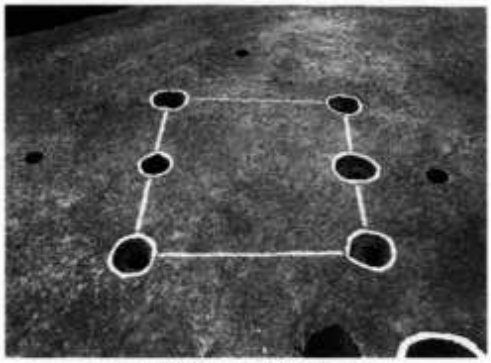
図版 7

D区東端掘立柱建物跡群

D区東端掘立柱建物跡群



第 7 号掘立柱建物跡



第 8 号掘立柱建物跡

第 9 号掘立柱建物跡

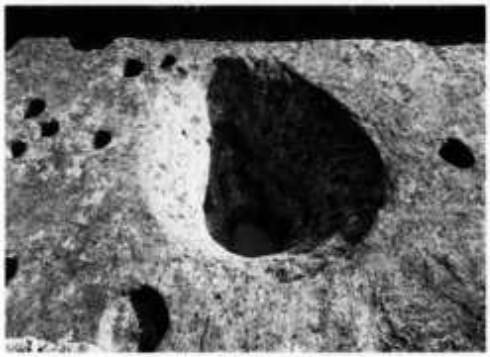
第 9 ～11号掘立柱建物跡

第12号掘立柱建物跡

第13号掘立柱建物跡

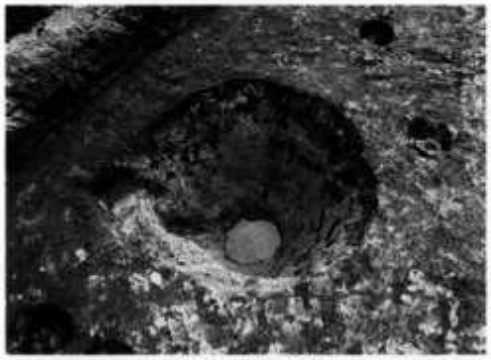
図版 8

第 6 号井戸跡



第 7 号井戸跡

第 8 号井戸跡



第 9 号井戸跡

第10・11号井戸跡

第12号井戸跡

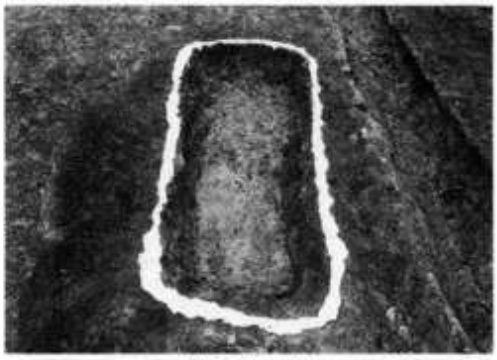
第31号土壙

第32号土壙

図版 9

第33号土壙

第34号土壙



第35号土壙

第36号土壙

第37号土壙

第38号土壙

第39号土壙

第42号土壙

図版10

第43号土壙

第44・45号土壙

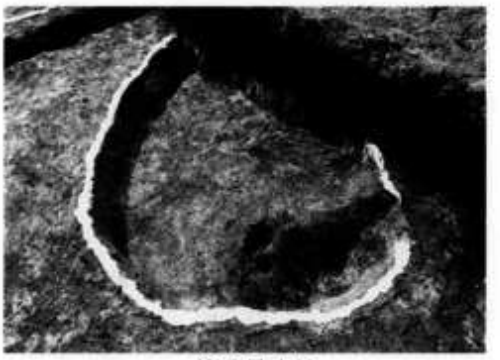
第46号土壙

第47号土壙

第48号土壙

第51・52号土壙

第53号土壙

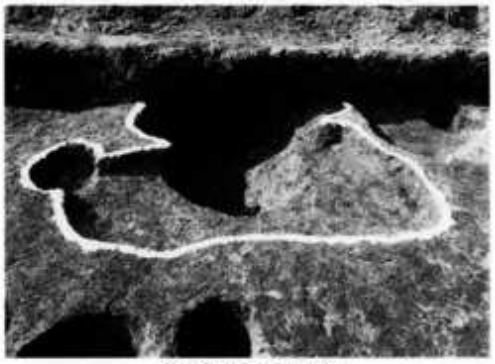


第54号土壙

図版11

第55～59号土壙

第55・56号土壙



第57・58号土壙

第59号土壙

第61～63号土壙

第60号土壙

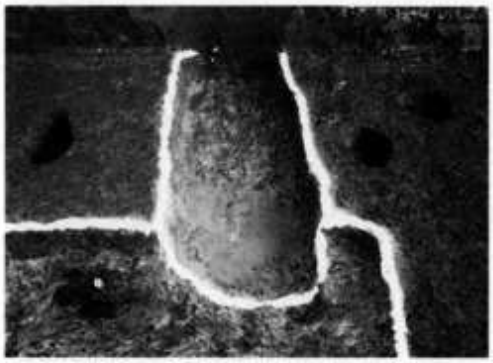
第61号土壙

第61号土壙遺物出土状態

図版12

第62号土壙

第63号土壙



第66号土壙

第66・67号土壙

第68号土壙

第69号土壙

第70号土壙

第１号円形周溝遺構

図版13

第７号溝跡

第11号溝跡（ＥⅡ区西側）

第11号溝跡（ＥⅡ区北側）

第11号溝跡（ＥⅡ区東側）

第13号溝跡

第14号溝跡

第17号溝跡

ＦⅡ区調査風景

図版14

D区埋没河川跡

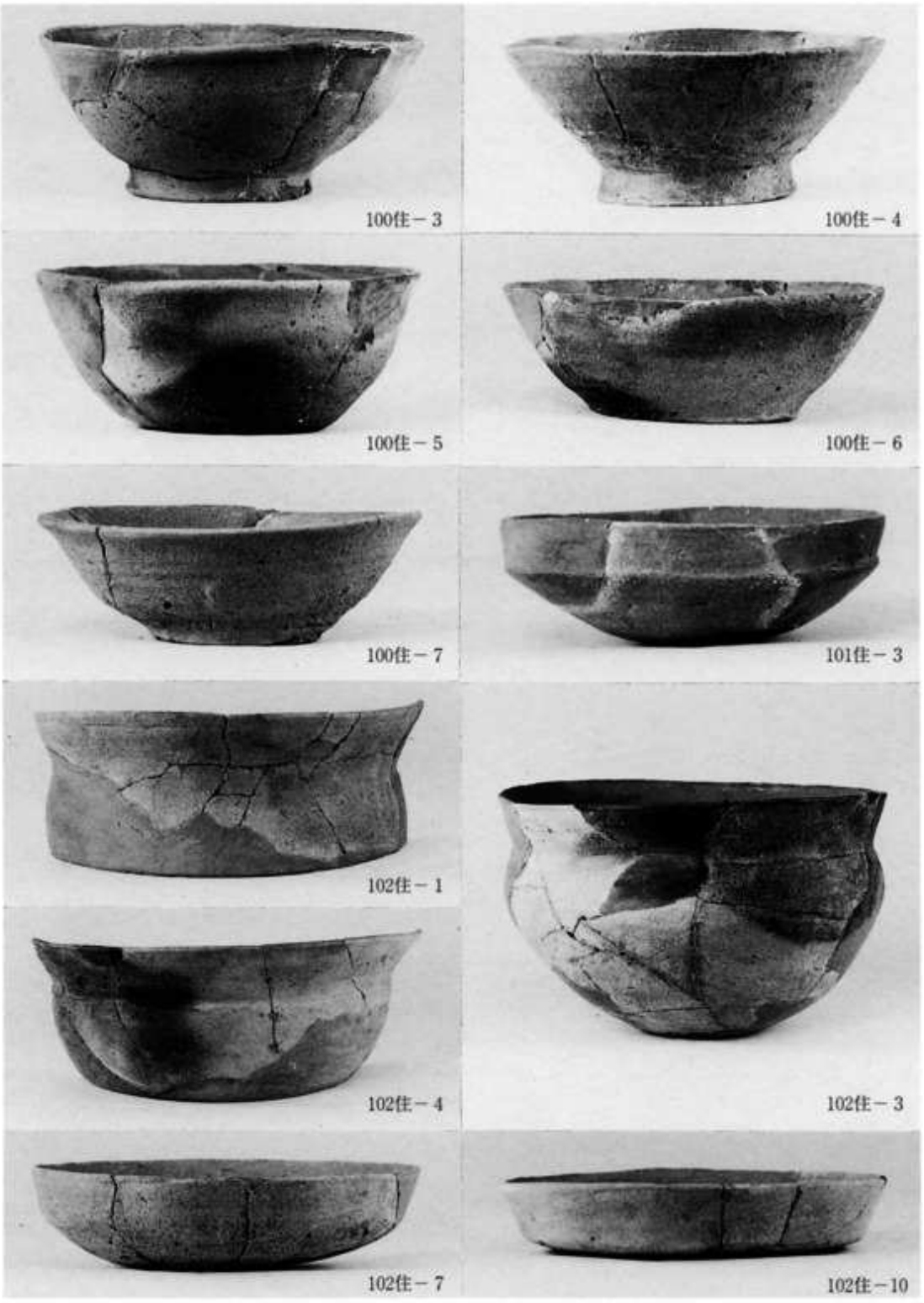
D区埋没河川跡覆土断面

D区埋没谷(東から)

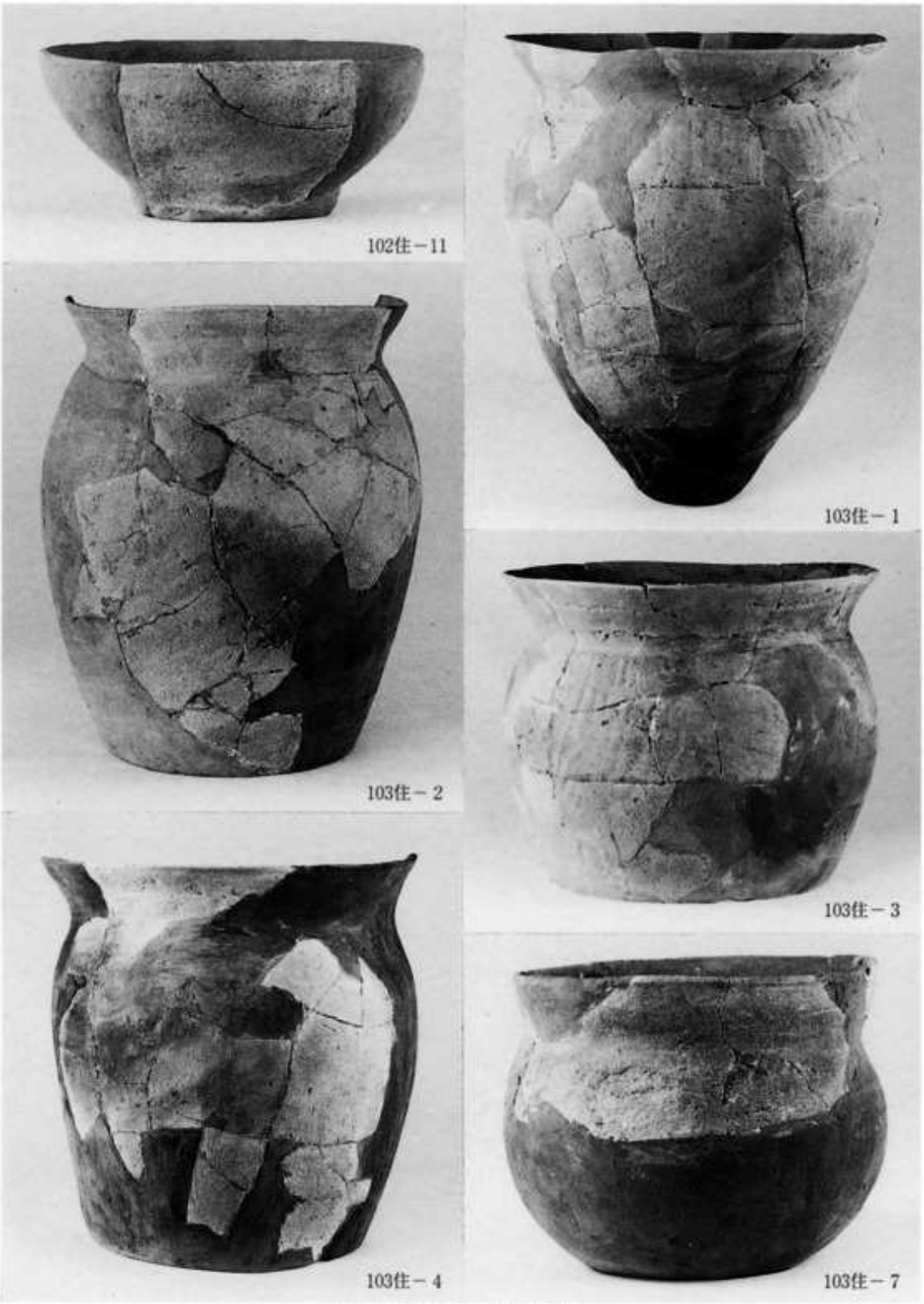
D区埋没谷(西から)

雷電下遺跡D区調査区中央部(北西より)

図版15

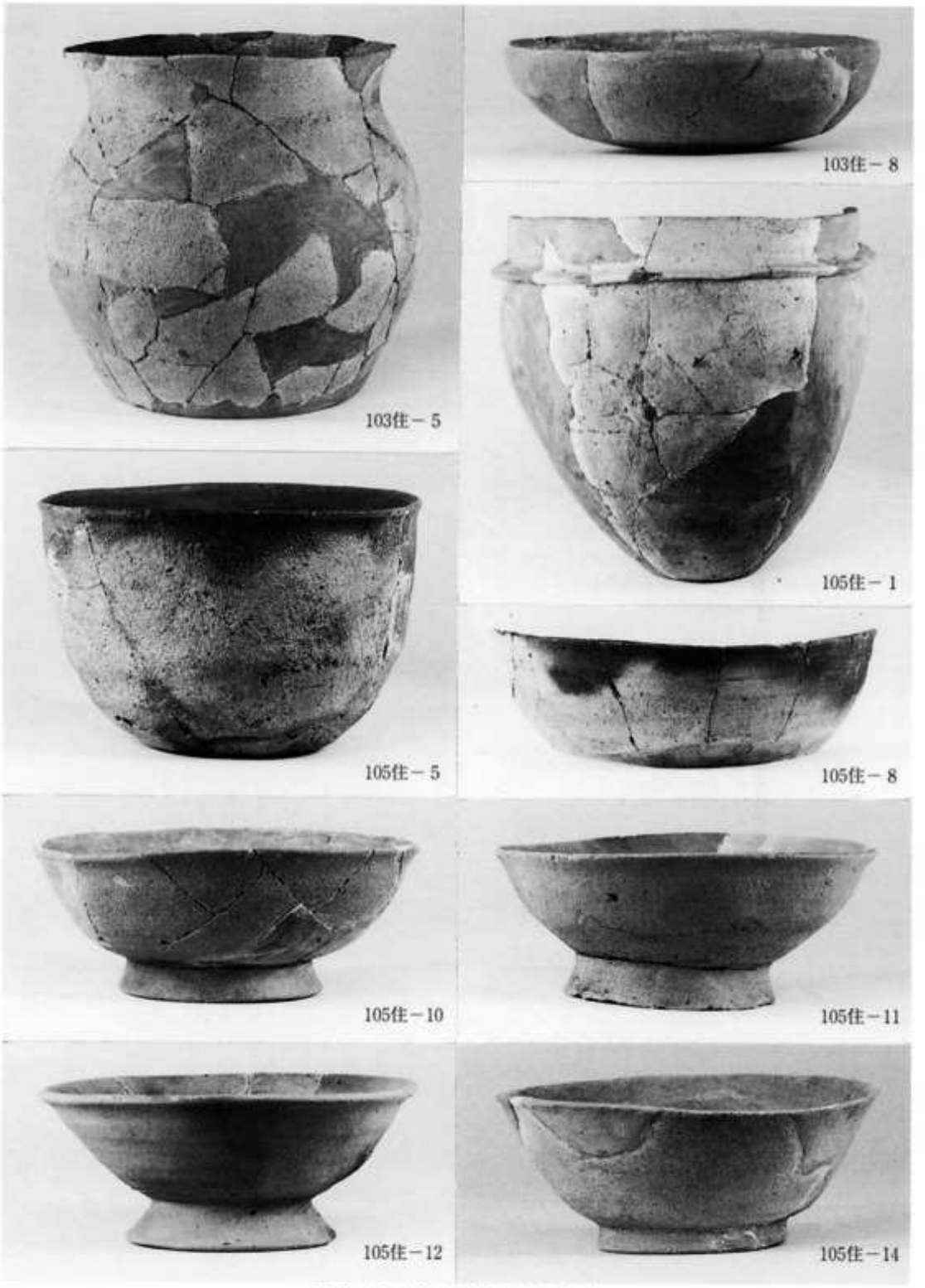


雷電下遺跡住居跡出土土器（1）

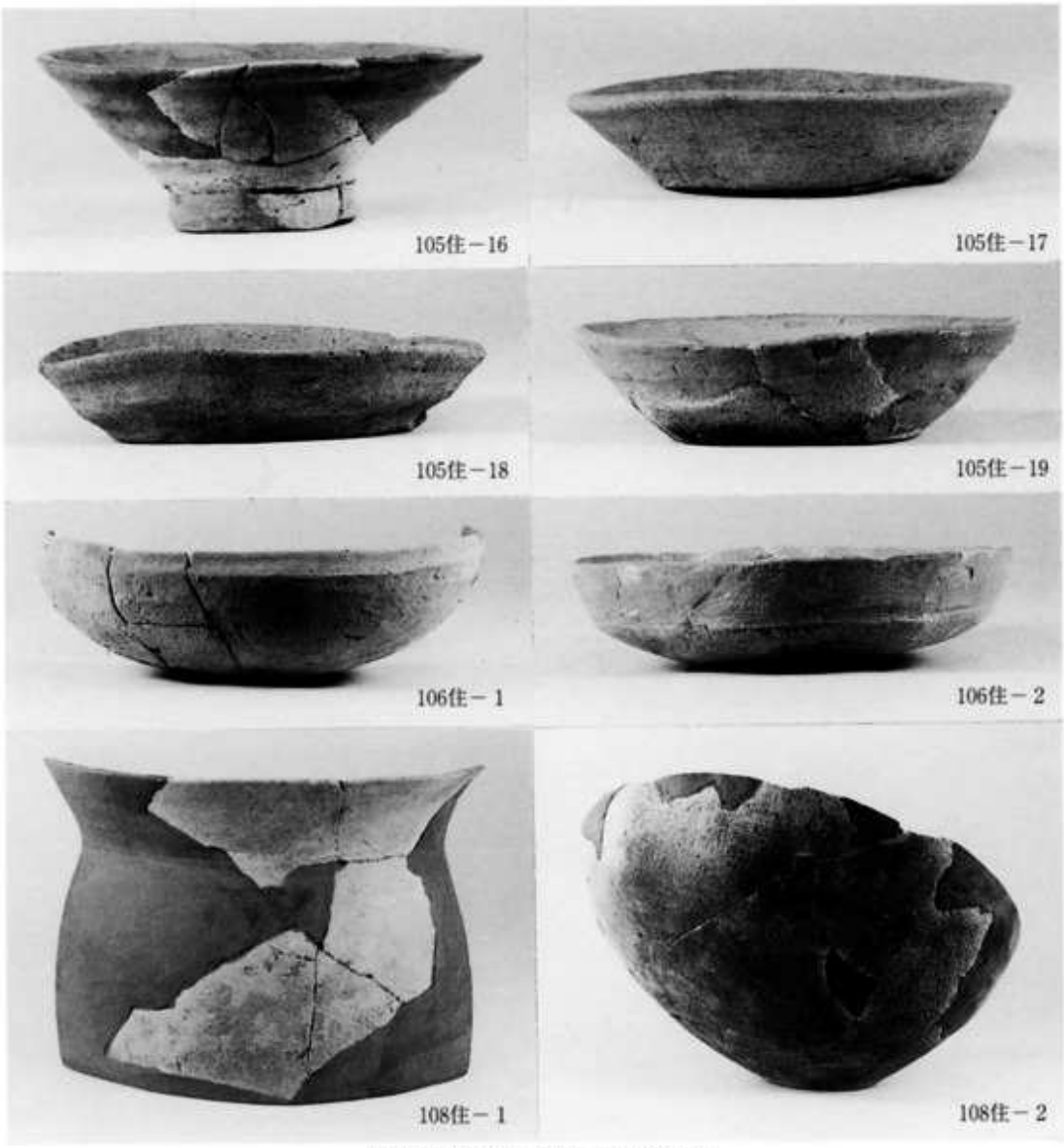


雷電下遺跡住居跡出土土器（2）

図版17

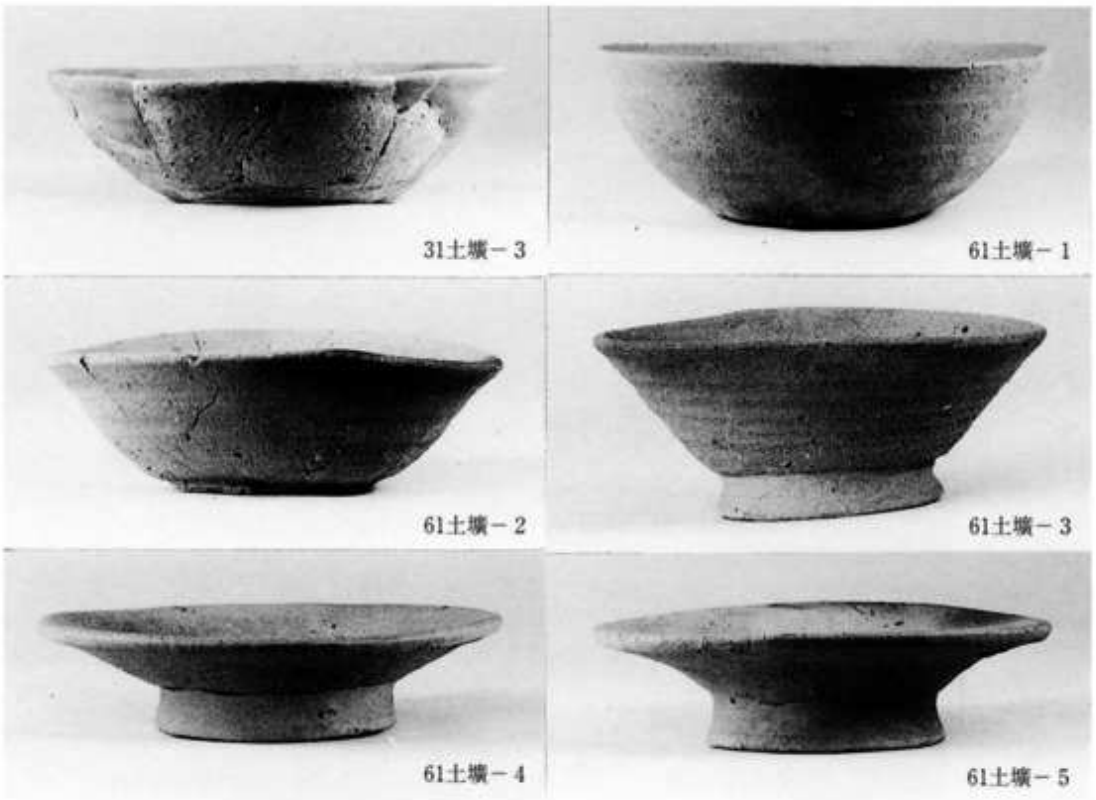


雷電下遺跡住居跡出土土器（3）



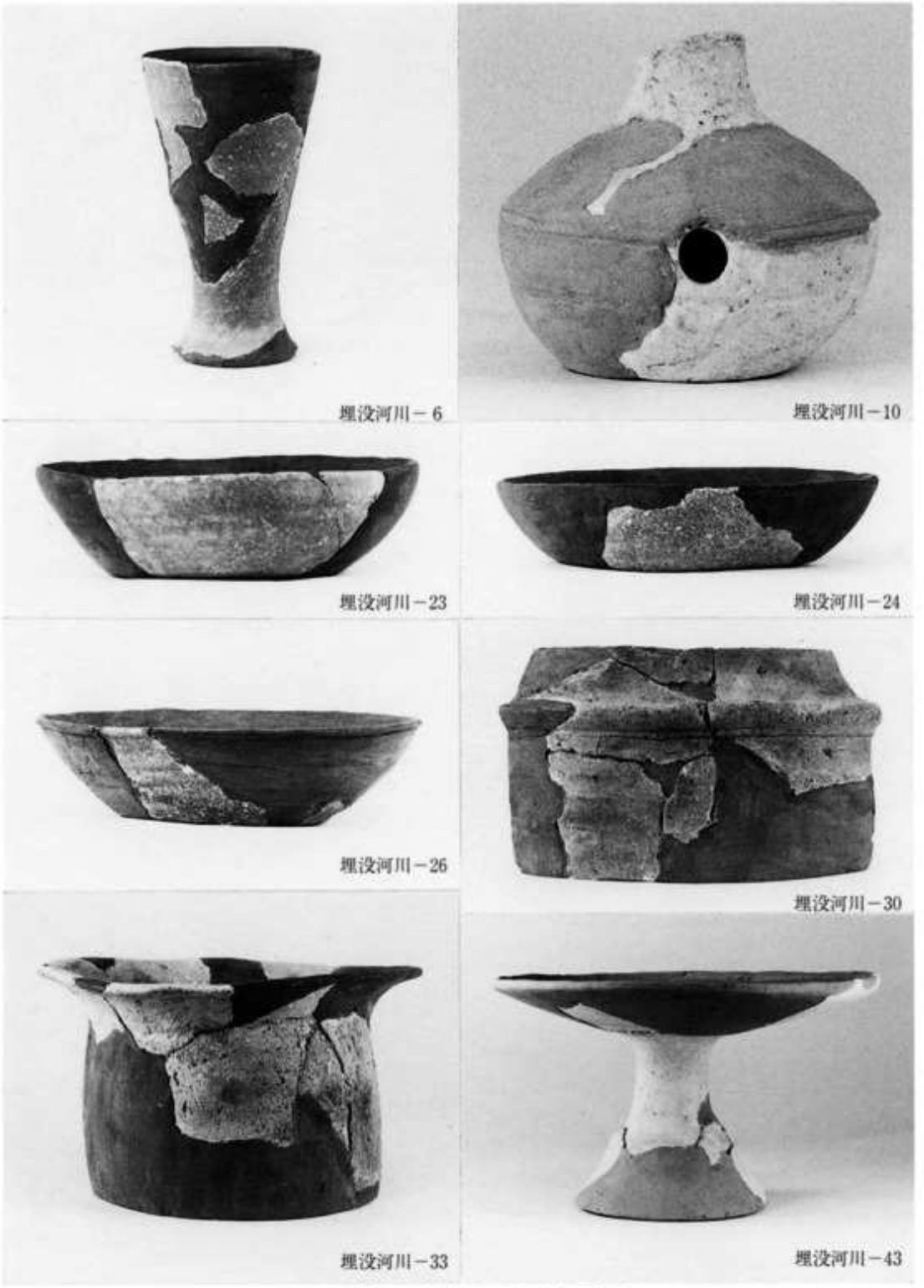
雷電下遺跡住居跡出土土器（4）

雷電下遺跡掘立柱建物跡・井戸跡出土土器

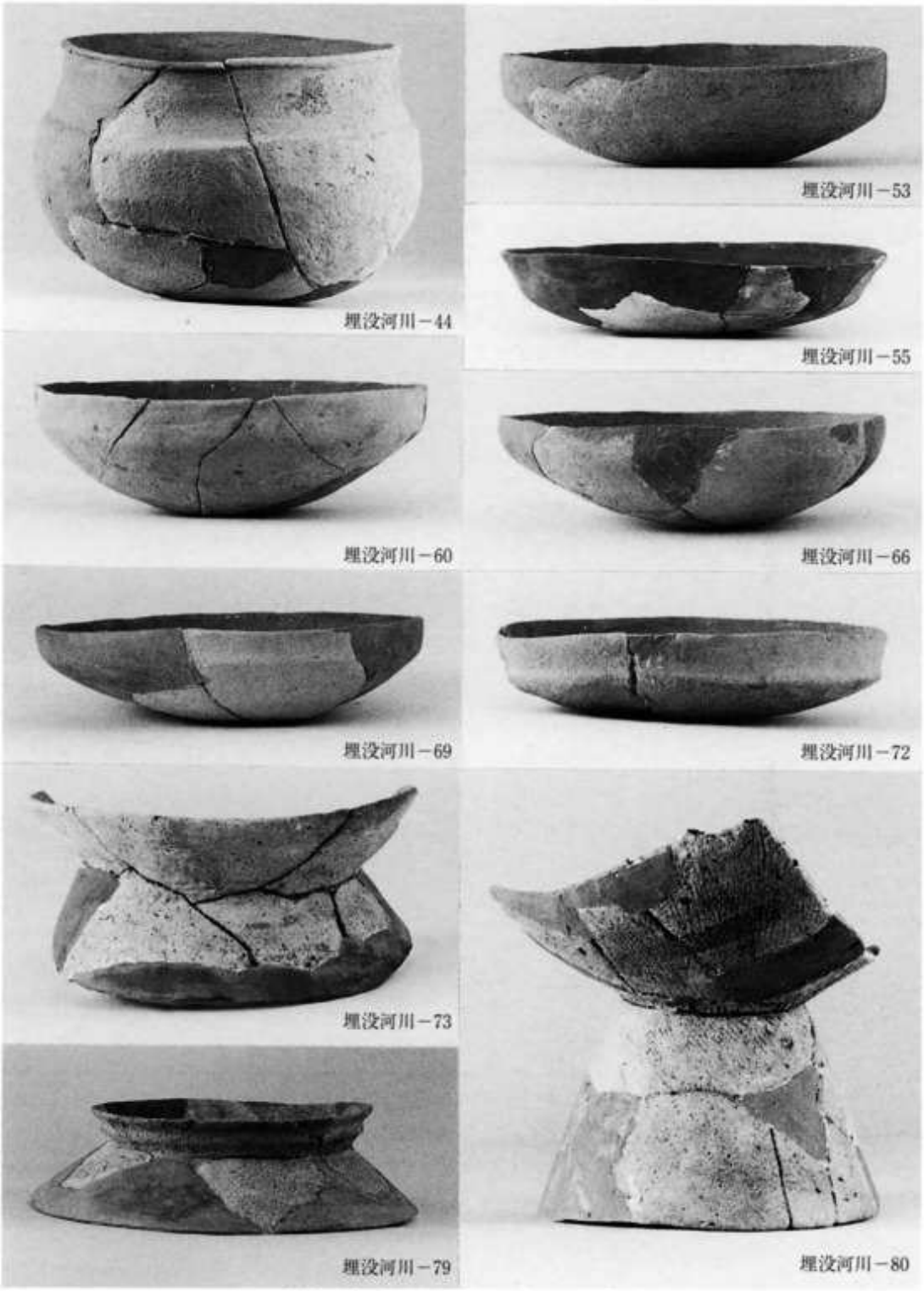


雷電下遺跡土壙出土土器

雷電下遺跡D区埋没河川出土土器（1）



雷電下遺跡D区埋没河川出土土器（2）



雷電下遺跡D区埋没河川出土土器（3）

埋没河川－81

埋没河川－82

埋没河川－84

埋没河川－89

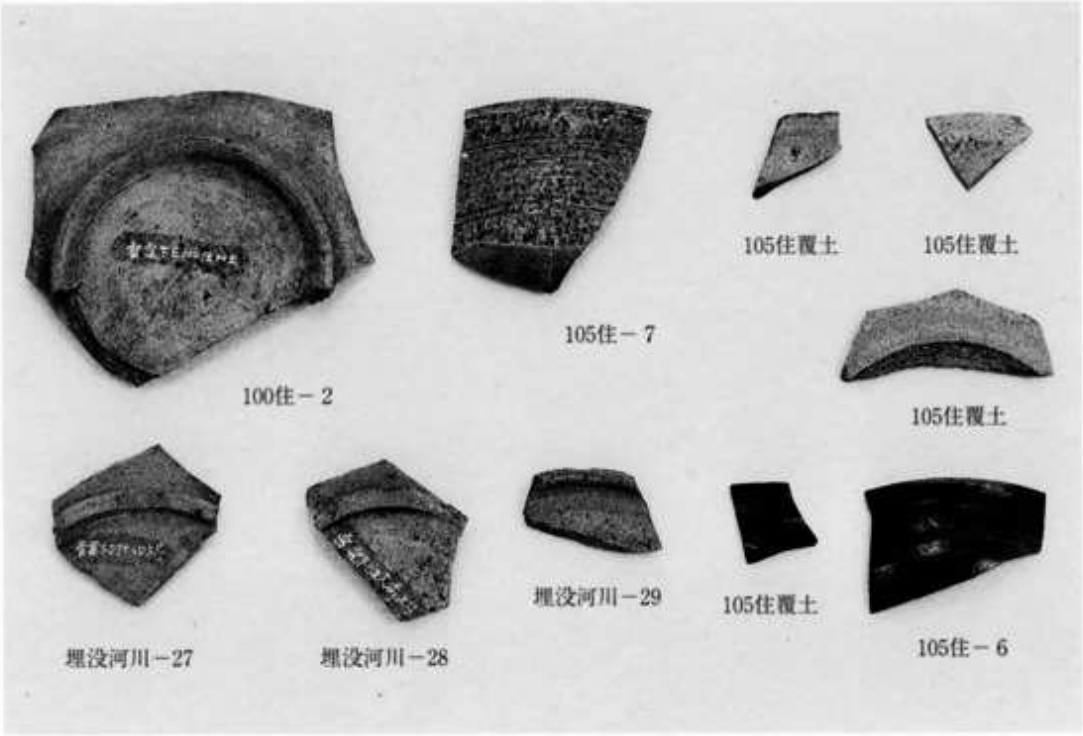
埋没河川－87

埋没河川－88

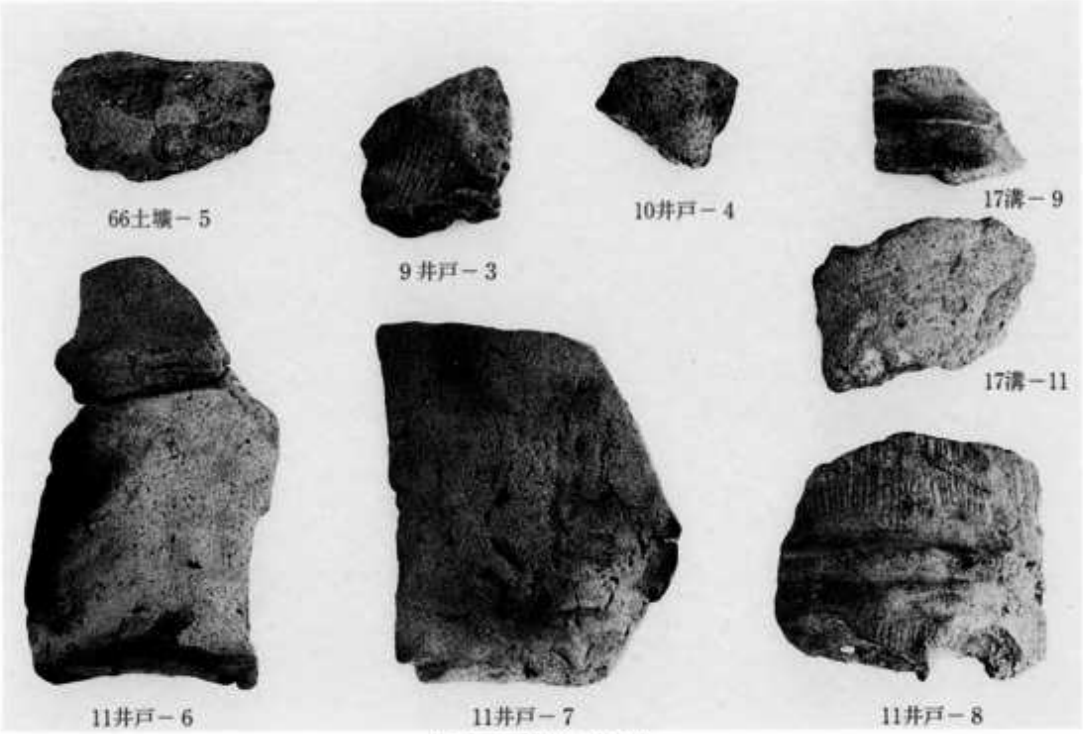
雷電下遺跡D区埋没河川出土土器（4）

図版23

雷電下遺跡D区埋没谷・ピット出土土器

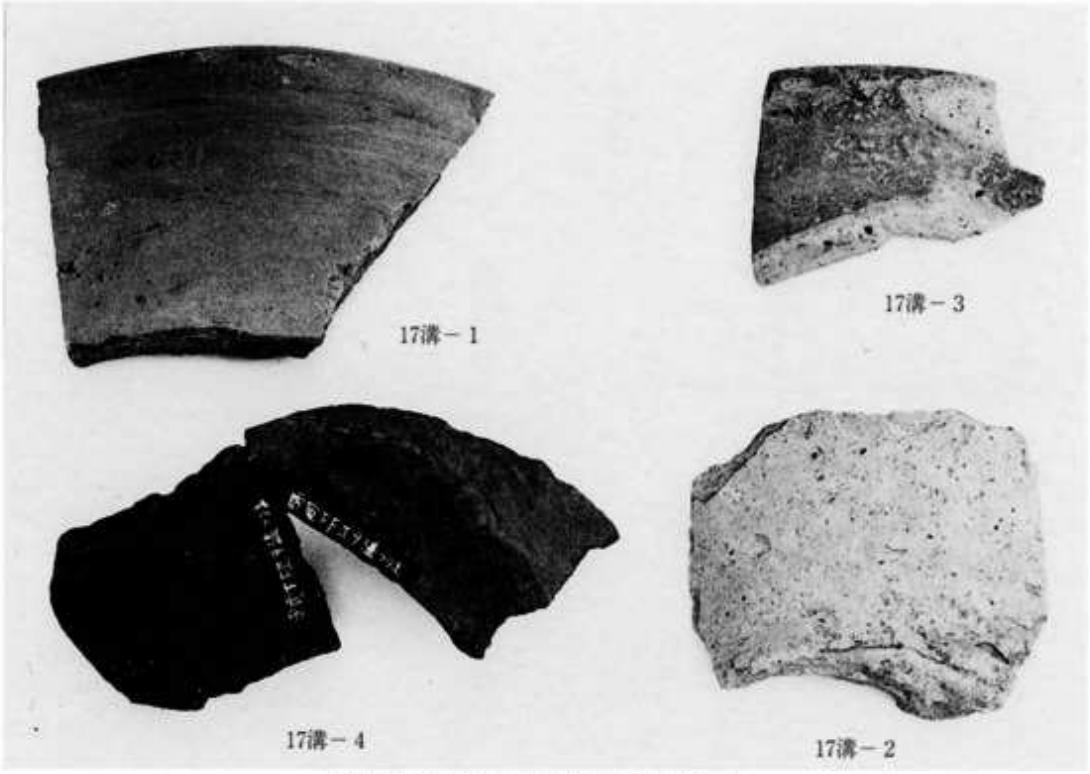


雷電下遺跡出土灰釉・緑釉陶器

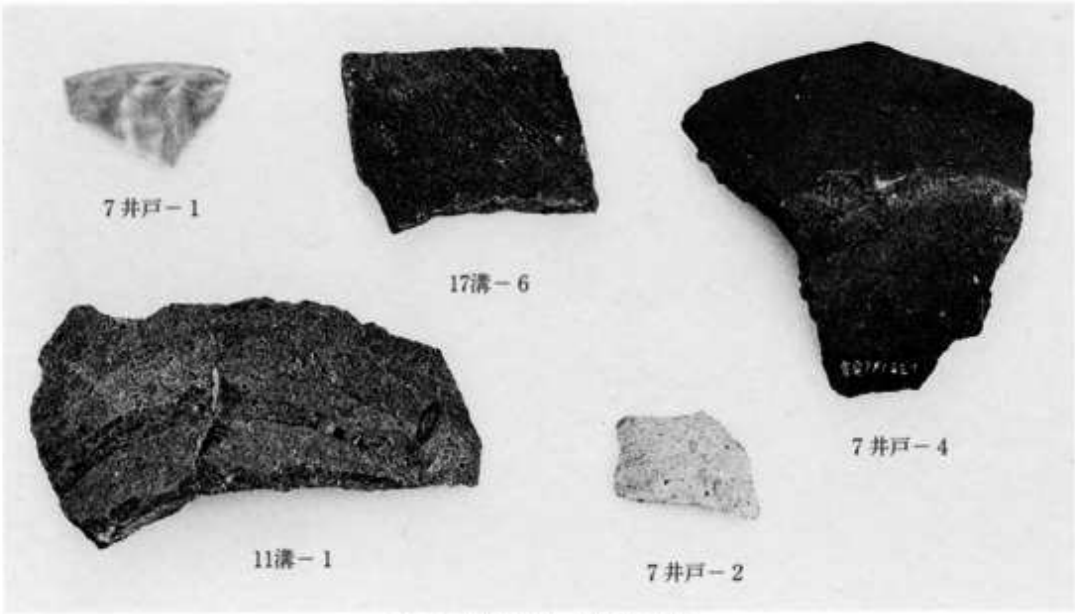


雷電下遺跡出土埴輪

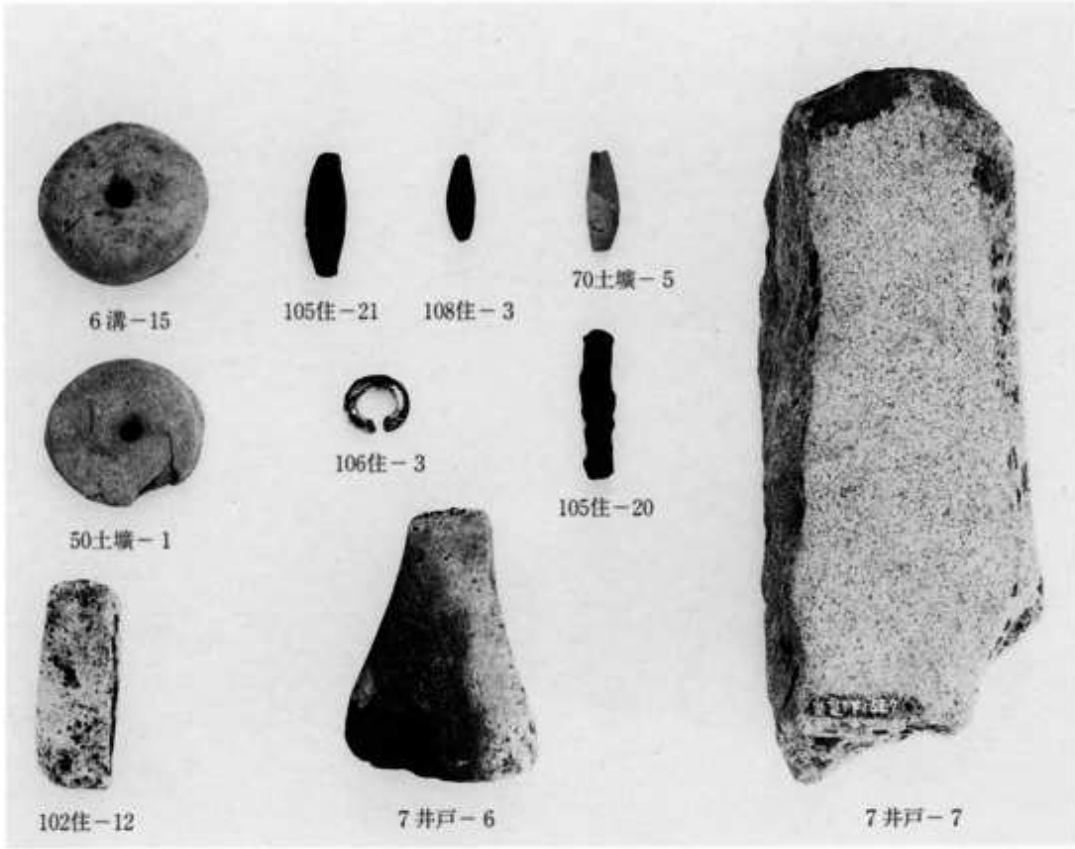
雷電下遺跡出土中世在地産土器（1）



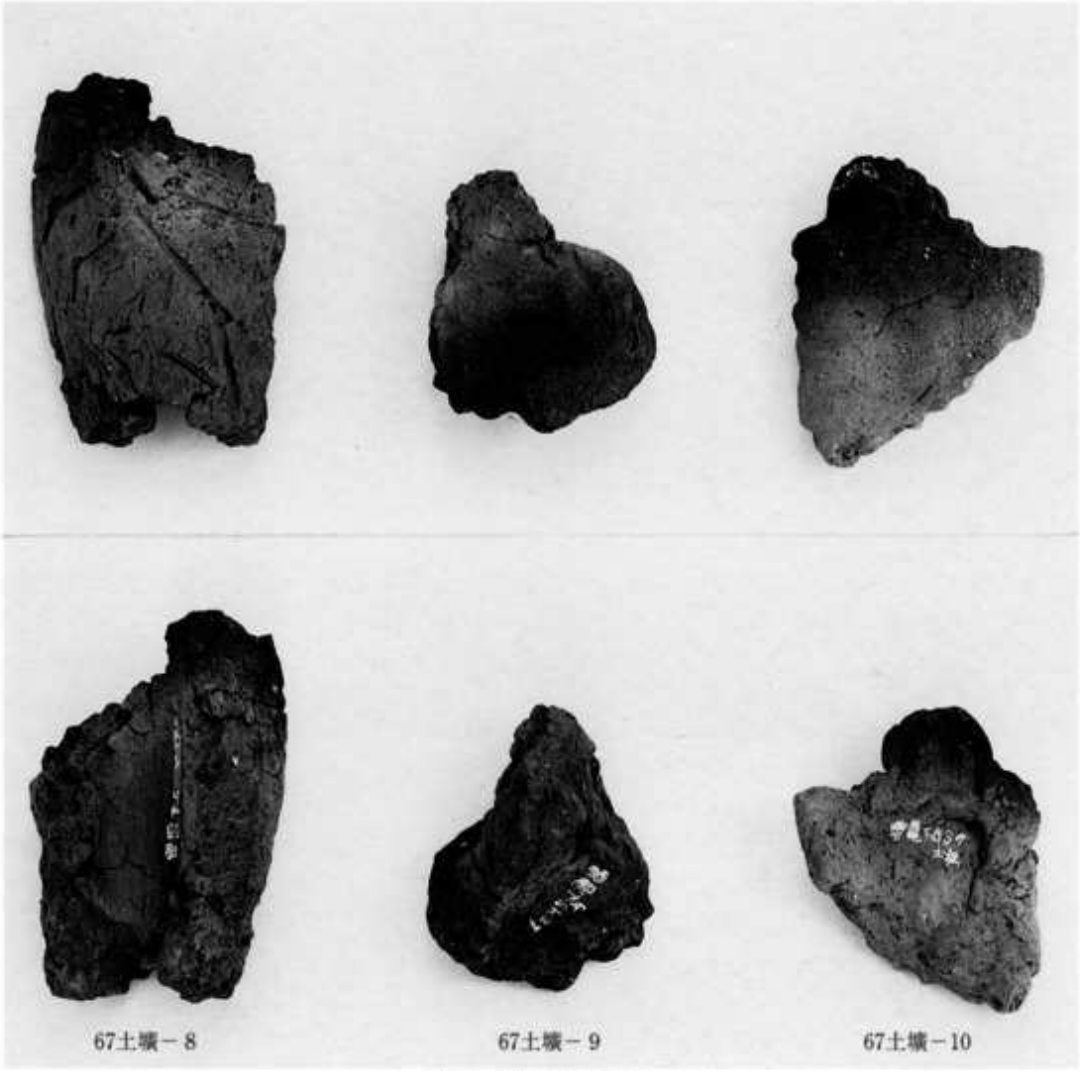
雷電下遺跡出土中世在地産土器（2）



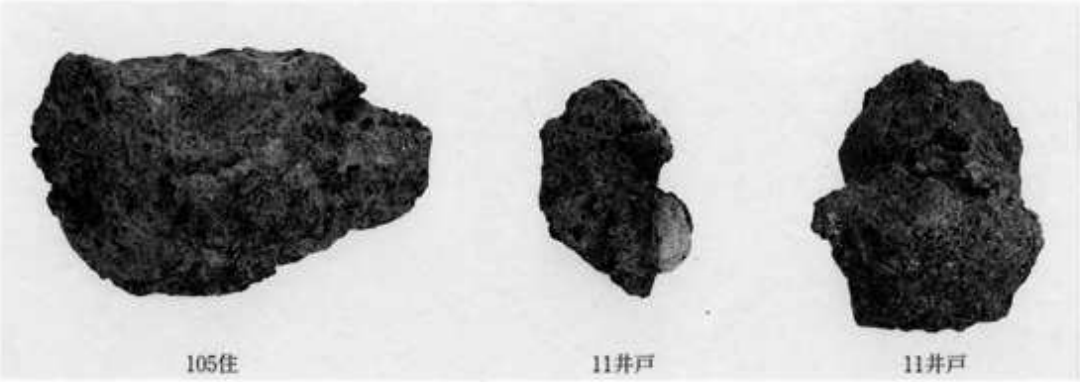
雷電下遺跡出土中世陶磁器



雷電下遺跡出土土製品・金属製品・石製品



雷電下遺跡出土羽口



雷電下遺跡出土鉄滓

南ノ前遺跡調査区遠景(北東より)

南ノ前遺跡調査区遠景(南より)

図版29

南ノ前遺跡北側調査区(北より)

南ノ前遺跡南側調査区(南より)

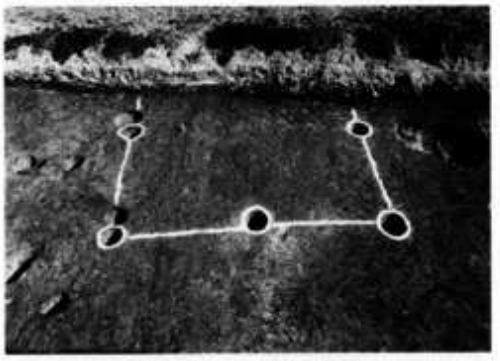
図版30

南ノ前遺跡東側調査区(西より)

南ノ前遺跡東側調査区(東より)

南ノ前遺跡東側調査区(南西より)

第1号掘立柱建物跡



第2号掘立柱建物跡

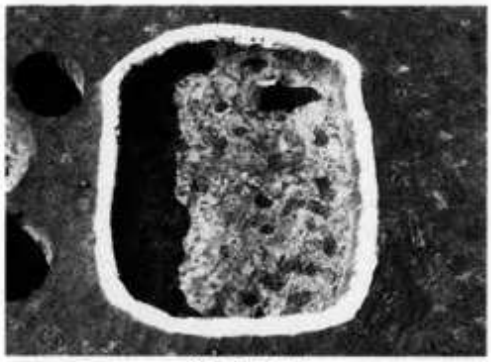
第1・2号掘立柱建物跡

第1号井戸跡

図版32

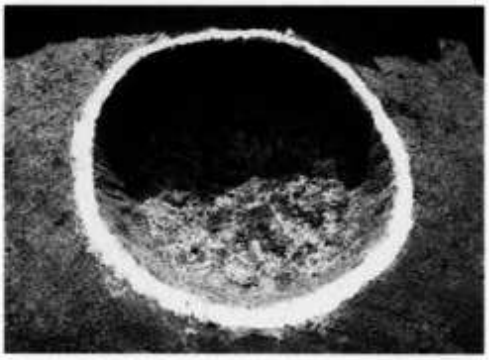
第1号土壙

第2号土壙



第3号土壙

第4号土壙



第5号土壙

第6号土壙

第7号土壙

第8号土壙

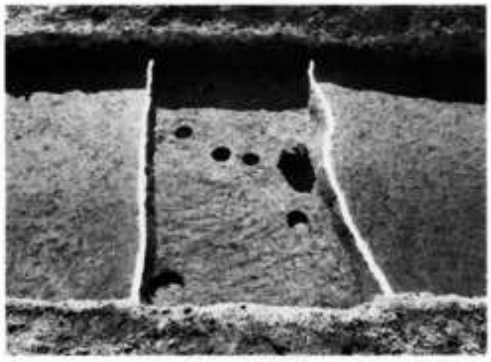
図版33

第２号溝跡

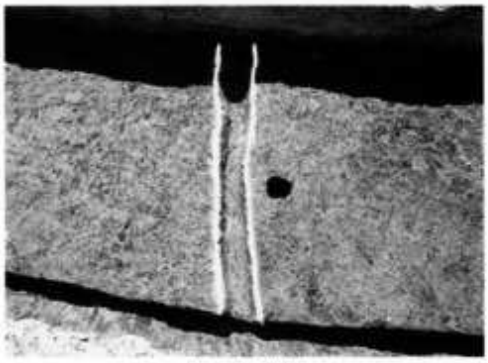
第３号溝跡

第４号溝跡

第５号溝跡



第６号溝跡

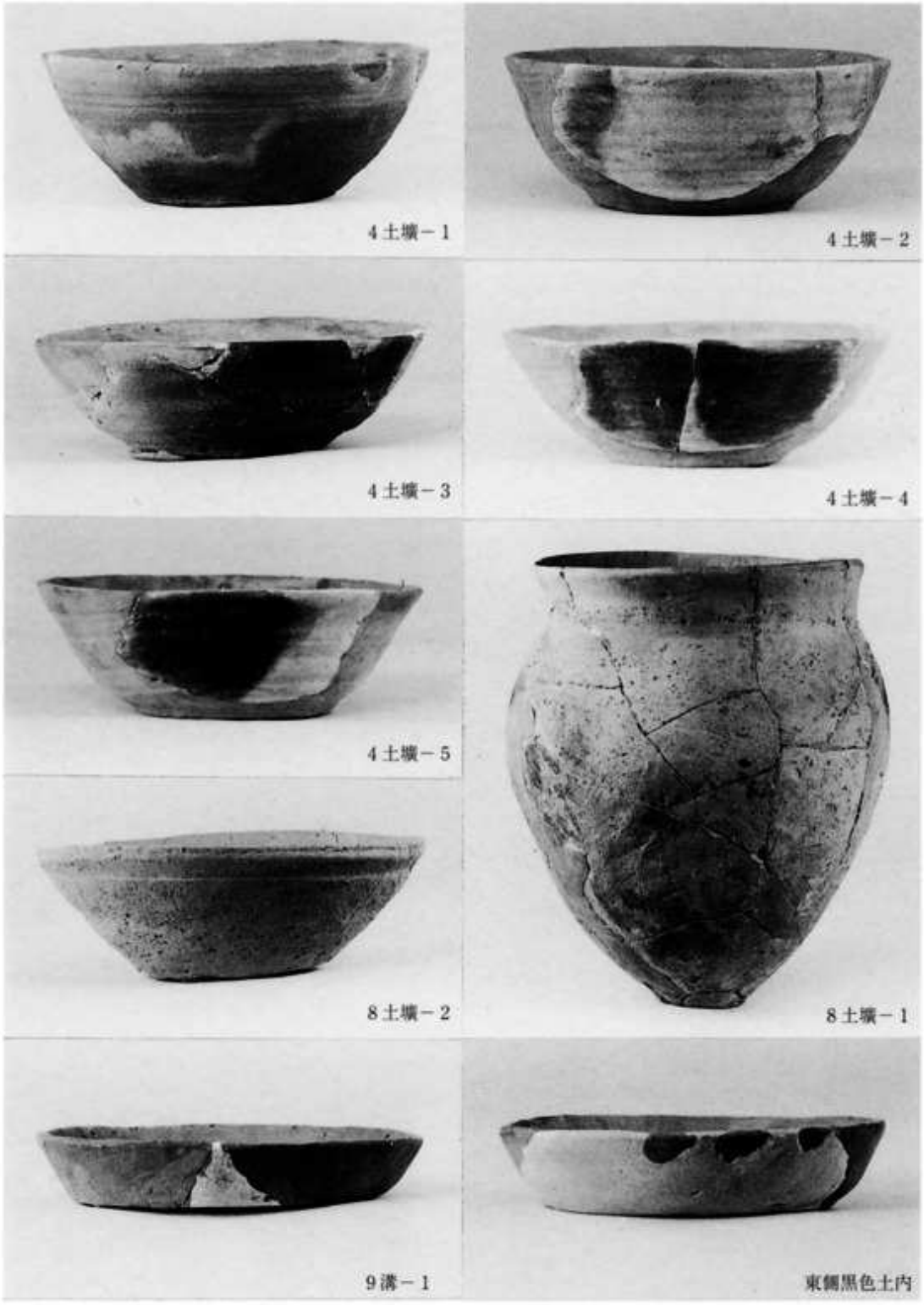


第10号溝跡

第11号溝跡

調査風景

図版34



南ノ前遺跡出土土器

報　告　書　抄　録

フリガナ	ライデンシタⅢ・ミナミノマエイセキ		
書　名	雷電下Ⅲ・南ノ前遺跡		
副書名	県営ほ場整備事業児玉南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7		
シリーズ	児玉町文化財調査報告書	巻　次	第32集
編集者	恋河内昭彦		
編集機関	児玉町教育委員会		
所在地	〒367－02　埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368番地　TEL0495(72) 1331		
発行日	1999（平成11）年3月31日		

フリガナ 所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査期間
		市町村	遺跡					
雷電下（ライデンシタ）遺跡	児玉郡児玉町大字下浅見字雷電下	113824	002	36°12′37″	139°10′12″	19940822 ～ 19950202	3760	ほ場整備
南ノ前（ミナミノマエ）遺跡	児玉郡児玉町大字下浅見字南ノ前	113824	005	36°12′25″	139°10′9″	19941117 ～ 19950202	440	ほ場整備

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
雷電下遺跡		古墳前期	河川（溝）	土師器、	
		古墳後期		土師器、須恵器、埴輪片、	
	集落	飛鳥～奈良時代	竪穴住居5、掘立柱建物3、円形周溝1、埋没谷、	土師器、須恵器、土錘、耳環、砥石、	
	集落	平安時代	竪穴住居4、掘立柱建物4、井戸3、土壙9、溝2、	土師器、須恵器、灰釉陶器、土錘、土製紡錘車、羽口、鉄器、鉄滓、	
	屋敷	中世	掘立柱建物1、井戸4、土壙11、溝5、	青磁、常滑、山茶碗、在地産土器、砥石、	
		近世	土壙1、溝1、	染付碗、	
南ノ前遺跡		縄文中期		土器片、	
		弥生・中後期		土器片、	
	集落	平安時代	土壙4、溝3、	土師器、須恵器、	
	屋敷	中世	掘立柱建物2、井戸1、土壙1、溝5、	常滑、在地産土器、	

発掘調査組織（平成6年度）

主体者　児玉町教育委員会
教育長　冨丘文雄
事務局　児玉町教育委員会社会教育課
課長　大塚　勲
課長補佐　関根安男
社会教育係　係長　清水　満
主任　鈴木徳雄
主任　田島賢二
主任　倉林美恵子
主事　徳山寿樹
主事　大熊季広
（調査担当）主事　恋河内昭彦

整理報告書刊行組織（平成10年度）

主体者　児玉町教育委員会
教育長　冨丘文雄
事務局　児玉町教育委員会社会教育課
課長　関根安男
社会教育係　主任　倉林美恵子
文化財係　係長　鈴木徳雄
主任　杉山茂俊
主任　恋河内昭彦
主事　徳山寿樹
主事　大熊季広
主事　松澤浩一

児玉町文化財調査報告書第32集

雷電下Ⅲ・南ノ前遺跡

県営ほ場整備事業児玉南部地区に伴う発掘調査報告書7

平成11年3月19日　印刷

平成11年3月31日　発行

発行者　児玉町教育委員会

埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368

印刷所　たつみ印刷株式会社

埼玉県深谷市東大沼356